琉球大学学術リポジトリ

タイ・チェンマイにおける日本人長期滞在者のライフスタイル型の移動とそのインパクト

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学 公開日: 2017-03-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Duangkaew, Sutpratana, ドゥアンケーオ, スットプラータナー メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/33727

タイ・チェンマイにおける

日本人長期滞在者のライフスタイル型の移住およびそのインパクト

LIFESTYLE MIGRATION OF JAPANESE LONGSTAYERS AND THAT IMPACT IN CHAING MAI, THAILAND

平成 27 年度

琉球大学大学院

人文社会科学研究科

博士論文

比較地域文化専攻

氏名　**SUTPRATANA　DUANGKAEW**

スットプラータナー・ドゥアンケーオ

要旨

21 世紀に入り、国際移動一つである「長期滞在」、とりわけ先進国の人々が主に定年退職後に海外（特に発展途上国）での長期滞在が顕著になりつつある。本研究では、タイ国・チェンマイ県における日本人の長期滞在の実態を明らかにするとともに、その長期滞在を支援している中間組織の役割を分析する。さらに日本人長期滞在者は現地のタイ人との交流で、どのようなインパクトを与えているかを明らかにする。

研究方法は、日本人対象者への 113 部のアンケートおよび 31 人のインタビューおよび、タイ人対象者への 129 部のアンケートおよび 51 人のインタビューの分析である。

日本人長期滞在者の異文化社会への適応は、①現地で長期滞在の経験が長いこと、②日本人のグループに参加すること、③タイ語のコミュニケーション能力を持つこと、④タイ人と交流があること、という 4 つの要素で社会関係資本を構築し、異文化社会においてスムーズな生活を送れていることである。その要素の中では「タイ人と交流があること」が最も多くの社会関係資本を構築することができ、タイ人と日本人の相互作用のために活用されていることが明らかになった。

チェンマイに滞在している日本人に対しては、日本政府・タイ政府（マクロレベル）、政府機関・組織・個人グループ（ミドルレベル）、日本人個人・タイ人個人（ミクロレベル）、の 3 つのレベルの関係性を構築するような支援が行われている。その中で、ミドルレベルの中間支援組織が最も重要であり、マクロレベルとミクロレベルの間に位置することで、政策が個人レベルに行きわたることが容易となり、また個人が政府への要求がしやすくなる。このように、中間支援組織は橋渡し型社会関係資本の機能を果たしている。

また、日本人長期滞在者の受け入れ側のチェンマイ社会に対するインパクトは、現地の経済面、社会面、文化面、教育面、生活面など良い影響を受けていると明らかになった。彼らは、生活費（家賃、食費、交通費など）で現地の経済を活性化する、タイ人と文化交流をする、タイ人学生に日本語や日本文化を教える、旅行や患者などの日本人客に関するサービスや就職が多様化する、のような事例が挙げられる。

ジャパナイゼーションが進行しているタイ社会では、タイ人回答者のほとんどが、日本製品を消費し、日本文化に関心を持ち、日本に対していい印象を持っている。チェンマイに日本人長期滞在者がいることで、タイ人は日本製品（ハート面）と日本文化（ソフト面）に関心を持つだけではなく、日本人そのものまでも受け入れるようになった。これは、21 世紀の新たなジャパナイゼーションと位置付けることができよう。

長期滞在は、先進国の人々が主に定年後にセカンドライフとして海外などで生活を送るという現象である。人気のある目的地の多くは、タイのようにより安価、暖かいところである。生活の余裕ができ、体や心が健康になり、新たな人生の行く道を探るというライフスタイル型の移住の一つの方法だと言えよう。

目次

第 1 章　課題と方法　1
1.1　課題　1
1.2　目的　3
1.3　仮説　3
1.4　研究の意義　3
1.5　研究範囲　4
1.5.1 調査地　4
1.5.2 対象者と研究方法　5
1.5.3 調査期間　7
1.6　フレームワーク　8
1.7　各章の概要　8
第 2 章　長期滞在に関わる概念と先行研究　10
2.1　グローバル化と国際人口移動　10
2.1.1 国際人口移動　11
2.2　長期滞在　15
2.2.1　長期滞在の定義　15
2.2.2　「長期滞在」という用語を使用する理由　17
2.2.3　長期滞在の特徴　17
2.3　異文化適応　20
2.4　社会関係資本　22
2.5　中間支援組織　25
2.5.1　中間支援組織　25
2.5.2　社会的ネットワーク　27
2.6　ジャパナイゼーション　28
2.7　ライフスタイル型の移動　30
2.7.1　ライフスタイル型の移動（lifestyle migration）の定義　30
2.7.2 観光と長期滞在とライフスタイルの関連性　32
2.8　先行研究　33
第 3 章　日本人の長期滞在の背景とタイ・チェンマイ県の概要　39
3.1　日本人の長期滞在の背景　39
3.1.1　人口構造の変更と価値観の変化　39
3.1.2　日本人の高齢者　41
3.1.3　日本人の長期滞在者の背景　42
3.2　チェンマイ県の概要　43
3.2.1　タイの概要　43

3.2.2　チェンマイの概要　45
3.2.3　タイ・チェンマイ：国際的な街　47
3.2.4　タイ・チェンマイ県の長期滞在の状況　50
第 4 章　チェンマイにおける日本人長期滞在の異文化社会への適応　56
4.1　アンケート調査の結果　56
4.1.1　チェンマイにおける日本人滞在者の属性などの基本的データ　56
4.1.2　日本人の長期滞在者のグループ　65
4.1.3　日本人の長期滞在者と現地の人との交流　68
4.2　インタビュー調査の結果　78
4.2.1　チェンマイにおける日本人滞在者の属性などの基本的データ　79
4.2.2　日本人長期滞在者の生活　87
4.2.3　日本人長期滞在者と現地の人との交流　91
4.3　チェンマイにおける日本人長期滞在者について　95
4.3.1　チェンマイにおける日本人長期滞在の属性　95
4.3.2　チェンマイにおける文化的適応及び社会的適応のための社会関係資本の構築と活用　97
第 5 章　長期滞在に関わる中間支援組織の役割　104
5.1　ミドルレベルにいる日本人の長期滞在に関わる中間支援組織　104
5.1.1　政府と関連がある組織　105
5.1.2　日本人グループ、タイ人グループ　106
5.1.3　民間企業　107
5.2　中間支援組織の調査　107
5.2.1　政府と関連がある組織　107
5.2.2　日本人グループ・タイ人グループ　113
5.2.3　民間企業　116
5.3　マクロレベル、ミドルレベル、ミクロレベルの関係性　118
5.3.1 マクロレベルの中の関係性　118
5.3.2 マクロレベル組織とミドルレベル組織との関係性　119
5.3.3　ミドルレベルの中の関係性　119
5.3.4　ミドルレベル組織とミクロレベルの個人の関係性　120
5.4　中間支援組織の役割　123
5.4.1　マクロレベルとミクロレベルの繋がりを構築　123
5.4.2　マクロレベルとミクロレベルの関係性の活性化　124
5.4.3　マクロレベルとミクロレベルの双方への影響　124
5.4.4　日本人長期滞在者の異文化への適応を促進　124
5.4.5　横の関係性の構築　125
5.5　中間支援組織と社会関係資本の関連性　125
第 6 章　タイ社会に対する日本人の長期滞在のインパクト　128

6.1　アンケート調査の結果　128
6.1.1　日本人との交流するタイ人について　128
6.1.2　タイ人の日本人との交流の実態　133
6.1.3　ジャパナイゼーションのインパクト　135
6.1.4　現地に対する日本人の長期滞在のインパクト　139
6.2　インタビュー調査の結果　140
6.2.1　日本人との交流するタイ人の属性　140
6.2.2　タイ人の日本人との交流の実態　143
6.2.3　ジャパナイゼーションのインパクト　154
6.2.4　現地に対する日本人長期滞在者のインパクト　156
6.3　タイ社会に対する日本人の長期滞在のインパクト　163
第 7 章　結論と課題　168
7.1　結論　168
7.1.1 異文化社会の中で適応できる日本人長期滞在者の特徴　168
7.1.2 日本人長期滞在者に対して中間支援組織の役割　169
7.1.3　チェンマイ社会における日本人長期滞在者のインパクト　170
7.1.4　新たな移動：長期滞在からライフスタイル型移動へ　171
7.1.5　チェンマイにおけるライフスタイルの満足度：その理由　171
7.1.6　ライフスタイル型の移動の再定義　172
7.2　今後の課題：世界の新たな共存・生き方の方法　174
参考文献　175
付記　184
備考　185
日本人アンケート調査　186
タイ人アンケート調査（タイ語）　195
タイ人アンケート調査（日本語）　201

第 1 章

課題と方法

1.1　課題

人やモノ、情報、資本などの国境を越えた移動が激増した結果、グローバリゼーションの進行と呼ばれるようになった。人の移動という点から見ると移住者、難民、留学生、観光客などにグローバリゼーション（以下グローバル化）が影響を与えていると思われる。

移動とは、経済をはじめさまざまな理由で元々の生活する場所から、ある期間に違う場所に行くことである。かつては、移動する理由は経済面と政治面が主であったが、グローバル化に伴って、様々な移動のパターンが現れてきた。

20 世紀末には、先進国の人々が発展途上国に移動することが統計上でも増えており、人の移動の形は変容しつつある。これまでのように、発展途上国の人々が先進国に一方向に移動するとは限らない。

先進国の人々にとって移動のパターンは、別荘やセカンドハウスを利用する際にみられる季節に伴うような移動などがある。例えば、イギリス人はよくフランスの田舎の別荘で季節的に生活する。多くのイギリス人は不動産投資によってリラックスした生活を送ることができるのである。近代、先進国の人々は、国境を越え、自分の欲求に従って、海外で生活を送ることが増えている。自らのライフスタイルを求め、また欲求を満たすために移動するようになったのである。それは、かつて見られたものとは逆の移動ということが言えるだろう。

自らのライフスタイルを探すことや生活を送るための移動は、個人の理由・目的によって、その型は様々である。例えば、ホームステイ、バックパッカー、留学生、海外赴任、そとこもり、ロングステイなどである。それらの移動は、海外で生活を送るためなのか、または観光するためなのか、さらには移住するためなのか曖昧である。

本研究では、日本人がタイで滞在するという国境を越えるロングステイ型の移動に焦点を当る。日本人は、経済、家族、健康、価値観の変化などさまざまな要因で、タイに長期滞在する。在タイ日本国大使館によると、在留届を提出した連続 90 日間以上滞在する日本人数は、1980 年 6,424 名、2000 年 21,154 名、2012 年 55,634 名のように年々増加している（在タイ日本国大使館、2015）。また、ロングステイ財団の調査によると、表 1 のようにタイは 2006 年から 2013 年にかけてロングステイ希望国のトップ 5 に入っている。

表 1　ロングステイ希望国の一覧表

位	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
1	マレシーア	マレシーア	マレシーア	マレシーア	マレシーア	マレシーア	マレシーア	マレシーア
2	オーストラリア	オーストラリア	オーストラリア	ハワイ	ハワイ	**タイ**	**タイ**	**タイ**
3	**タイ**	**タイ**	ハワイ	オーストラリア	**タイ**	ハワイ	ハワイ	ハワイ
4	ニュージーランド	ハワイ	**タイ**	**タイ**	オーストラリア	オーストラリア	オーストラリア	オーストラリア
5	ハワイ	ニュージーランド	ニュージーランド	ニュージーランド	カナダ	カナダ	ニュージーランド	ニュージーランド
6	カナダ	カナダ	カナダ	カナダ	ニュージーランド	ニュージーランド	カナダ	フィリピン
7	スペイン	フィリピン	スペイン	フィリピン	フィリピン	インドネシア	フィリピン	シンガポール
8	インドネシア	インドネシア	インドネシア	インドネシア	スペイン	フィリピン	シンガポール	アメリカ本土
9	イギリス	スペイン	フィリピン	スペイン	インドネシア	台湾	インドネシア	カナダ
10	アメリカ本土	アメリカ本土	アメリカ本土	アメリカ本土	スイス	シンガポール	台湾	インドネシア

出典：一般財団法人ロングステイ財団（2013；16）およびロングステイ財団のセミナー資料（2015 年 3 月 26 日）

2012 年度の在留邦人数の実態調査結果（都・県別在留邦人）によると、北部タイの県（チェンマイ県、チェンラーイ県、ランプーン県、パヤオ県、ランパーン県、プレー県、メーホーソン県、ウッタラディット県、ナーン県）では、長期滞在日本人数は 3,981 名である（在タイ日本国大使館、2015：在チェンマイ日本国総領事館、2015）。北部の中で一番日本人の滞在者が多いのはチェンマイ県である。

「ロングステイ（longstay）」という用語は、財団法人ロングステイ財団、マスメディア、先行研究により使用されている。「ロングステイ（longstay）」、「ロングステイヤー（longstayer）」という用語は、21 世紀における新たな「観光型」と「その観光者」という観光面でのイメージが強調されている。多くのマスメディアとロングステイに関わる組織は、「ロングステイ」という長期滞在の型は永住・移住ではなく、いつか日本に帰ると定義づけられる。しかし、実際には 3 年間、5 年間、10 年間、20 年間、終の住処とする人も少なくない。その多くが定年退職者である。

そのようなタイ国において、ジャパナイゼーションが進行しているタイのチェンマイ県は、異文化を持つ日本人を受け入れる体勢を整えつつある。グローバル化が進行し、ジャパナイゼーション現象が生じているタイ社会は、20 世紀末から長期滞在する日本人が集まり、日本人集団が形成された。チェンマイでは、タイ人と日本人は互いに交流するために、タイ側と日本側

の組織を設立し、それを社会関係資本として交流している。それらの組織はフォーマル（構造的）なものと、インフォーマル（非構造的）なものがあり、NPO・NGO を通して社会的な関係を構成しているものもある。また、組織だけでなく、個人的な関係も社会関係資本として活用され、交流につながるようになることが少なくない。

以上のように、日本人の長期滞在型の移動が顕著になりつつある時代が到来していることは明らかである。本研究では、まず、チェンマイに長期滞在する日本人の現状や移住の背景などを明らかにし、さらに長期滞在できる条件や現地への適応について社会関係資本の概念を踏まえて分析していく。そして、日本人長期滞在者に関する日本とタイの中間支援組織の役割を論じ、社会的なネットワークなどの概念について考察する。チェンマイではタイ人と日本人は互いに交流するために、タイ側と日本側の組織が設立され、交流のための社会関係資本として活用されている。さらに、個人的な関係も社会関係資本として活用され、交流につながりつつある。本研究では、このような交流について分析しつつ日本人長期滞在者によってタイの現地社会はいかなる影響を受けているかについても明らかにする。

1.2 目的

1）タイ・チェンマイ県の日本人長期滞在者はいかなる戦略・スキルを活用し、現地に適応しているか。

2）日本人長期滞在者に関する中間支援組織はいかなる役割を担っているか。

3）日本人長期滞在者によって、タイの現地社会はいかなるインパクト・影響を受けているか。

1.3 仮説

1）日本人がタイ・チェンマイ県に長期滞在することが可能になる要因は、タイ語、タイの社会と文化を理解できること、現地でタイ人とコミュニケーション面、社会面、文化面で交流できること、中間支援組織と関わることであり、それらによって、現地での適応ができることである。

2）日本人がチェンマイで適応できるためは、現地での社会関係資本をより多く持っていることが必要である。

3）政府に関する組織、NPO・NGO、日本人のグループ、長期滞在に関わるサービス業者（民間企業）という中間支援組織の支援やサービスは、ライフスタイル型の移動による日本人長期滞在者の滞在する期間・頻度と関係がある。

4）ライフスタイル移住による日本人長期滞在者によって、タイの経済面、社会面、文化面、教育面、生活面に良い影響と悪い影響が与えられる。

5）タイ人のジャパナイゼーションの影響による日本製品・日本文化の消費と日本人長期滞在者との交流にはなんらかの関係がある。日本人長期滞在者の受容にも関わる。

1.4 研究の意義

これまで、長期滞在またはロングステイの先行研究のほとんどは、主に日本人側の視点で研究されてきた。タイにおける日本人の長期滞在については、日本人研究者の多くは、タイでフィールドワークを行ってはいるが、日本人のみの調査にとどまっている。これは、チェンマイ

についての知識不足や言語の壁があるためであると考えられる。一方、タイ人研究者は、日本語が堪能ではない、通訳と共に日本人にインタビュー調査を行っているものもあるが、タイ人側の視点からの調査は多いとは言えない。以上のように、長期滞在先であるタイの現地に与えた影響についての研究は十分なされているとは言えない。そこで、本研究では日本側とタイ側の双方にアンケート調査とインタビュー調査を行い、双方の状況を把握した上で現象の実態を掴むことを試みる。

本研究により、タイ・チェンマイ県における日本人長期滞在者が、現地に適応する条件、中間支援組織の役割を明らかにすることができる。日本人の適応する条件と中間支援組織の役割の分析により、タイ社会への影響も明らかになる。そして、タイ社会に十分に適応できた日本人の戦略・スキルや受入れているタイ人を分析し、日本側、タイ側双方の実態を理解することにより、現在よりも高いレベルでウィンウィンの関係（Win-Win Relationship）を構築することができると考える。

1.5　研究範囲

この節では、調査地、対象者と研究方法、調査期間を示す。

1.5.1　調査地

調査地は、タイ・チェンマイ県である。図 1、図 2、図 3 ではタイ・チェンマイ県の位置などについて示す。

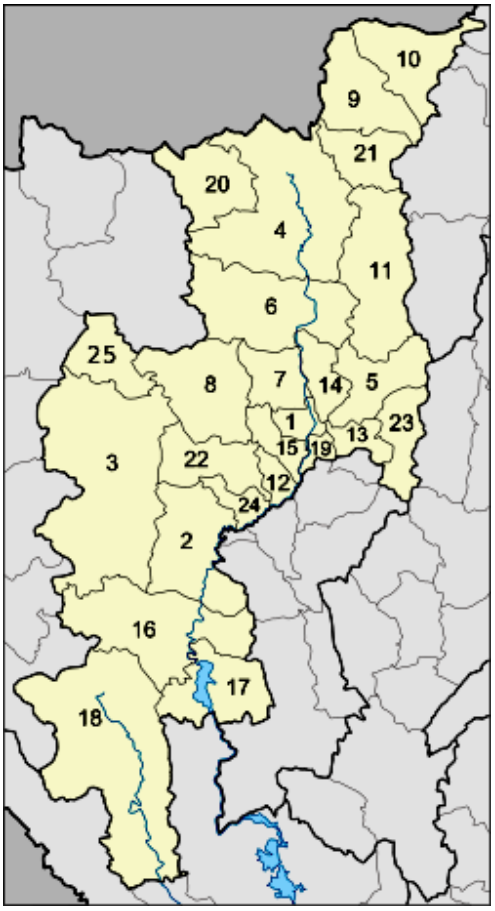
図 1　タイ国

出典：thaismile.jp（2015）

図 2　チェンマイ県

出典：Lifeevents.org（2015）

図 3　チェンマイ県の市



出典：NordNordWest（2009）

チェンマイ県は、25 郡で構成されている。

1. ムアンチェンマイ郡（チェンマイの中心）
2. チョームトーン郡
3. メーチェム郡
4. チェンダーオ郡
5. ドーイサケット郡
6. メーテーン郡
7. メーリム郡
8. サムーン郡
9. ファーン郡
10. メーアーイ郡
11. プラーオ郡
12. サンパートーン郡
13. サンカムペーン郡
14. サンサーイ郡
15. ハーンドン郡
16. ホート郡
17. ドーイタオ郡
18. オムコーイ郡
19. サーラピー郡
20. ウィエンヘーン郡
21. チャイプラーカーン郡
22. メーワーン郡
23. メーオーン郡
24. ドーイロー郡
25. カンラヤーウィワッタナー郡

1.5.2　対象者と研究方法

日本人とタイ人の対象者を以下の 4 つのグループに分ける。それぞれに対する調査方法との対応関係を表 2 に示す。

表 2　本研究の対象者と調査方法

対象者	調査方法
①チェンマイにおける日本人長期滞在者	インタビューとアンケート
②チェンマイにおける日本人長期滞在者に関わるタイ人	インタビューとアンケート
③日本人長期滞在者に関するタイ人の各組織	代表者にインタビュー
④日本人長期滞在者に関する日本人の各組織	代表者にインタビュー

出典：筆者作成

表 2 の対象者と調査方法については、以下で具体的に述べる。

対象者①　チェンマイにおける日本人長期滞在者

この対象者は、日本人長期滞在者（以下、長期滞在者とする）である。本研究の日本人長期滞在者の定義は、3ヶ月以上チェンマイ県において長期滞在している50歳以上の日本人及びその配偶者で、観光ビザ（tourist visa）、年金ビザ（non-immigrant visa-O）[1]、ロングステイビザ（non-immigrant visa-O-A）[2]のいずれかを持っている者である。本研究では仕事や留学などの目的で滞在する者は対象としない。

日本人へのアンケートは150部の予定であったが、実際に配布した部数は156部で、回収部数は117部であった。また、その中には年齢条件（50歳以上）に合わないものもあり、有効回答数は113部である。対象者の選定、配布方法は、知り合いの日本人長期滞在者に依頼し、彼らの知り合いにアンケートへの回答をお願いする機縁的サンプリング（スノーボール）による。さらに、日本語のフリーペーパーの掲示欄に載っている様々な日本人のグループと、インターネットに掲載された活動日にアンケートを配布、また、日本人がよく利用する店やレストランなどに赴き直接にアンケートを依頼した。加えて、現地にある大学のセミナーやイベントに参加して配布した。

日本人へのインタビュー調査は、2014年から2015年にかけて31人（29ケース）に実施した。アンケートの回答者に直接インタビューを依頼する、日本人の知り合いや日本人グループの代表者から紹介されるなどした。インタビュー時間は、各人1時間から2時間程度である。インタビューを行った場所は、ホテルのロビー、コンドミニアムのロビー、喫茶店、デパート、言語学校などである。

対象者②　チェンマイにおける日本人長期滞在者に関わるタイ人

この対象者は、18歳以上、チェンマイ県内に1年間以上滞在しているタイ人である。

アンケート調査の対象者は、日本人長期滞在者との交流しているタイ人、つまり、直接に日本人長期滞在者と関わるタイ人である。タイ人へのアンケートは150部の予定であったが、実際に配布した部数は147部で、有効回答数は129部であった。

対象者の選定と配布方法は、まず、日本人長期滞在者と交流活動が行われる場所、例えば、生け花クラブ、日本についてのセミナーなどに参加し、アンケートを依頼した。また、看板に日本語が記載されている店、日本人長期滞在者が住んでいる住宅の受付、日本人が集まる店のタイ人スタッフ及びオーナーにアンケートを配布した。さらに、日本人長期滞在者を通して知り合いのタイ人にも依頼した。

---

[1]在京タイ王国大使館（Royal Thai Embassy Tokyo, Japan）によると、ノンイミグラント-O（年金受給者）の申請者は日本または他国の政府の年金受給者、年金は月額 65,000 バーツ以上の受取りが確認できるもの、滞在期間90日間などという条件がある。

[2]在京タイ王国大使館（Royal Thai Embassy Tokyo, Japan）によると、ノンイミグラント O-A（ロングステイ）の申請者は申請時に満50歳以上、金融証明書（下記の3項より1項）a.英文銀行預金残高証明書原本800,000バーツ以上が確認できる証明書 b.年金証書月 65,000 バーツ以上の受給を証明できる証明書 c.銀行普通預金通帳と年金証書原本合算で800,000バーツ以上が確認できること、滞在期間は入国した日から数えて1年間などという条件がある。

インタビュー調査は、タイ人 51 人である。内訳は日本人と直接関わるタイ人 39 人、日本人と直接には関わらないタイ人 12 人である。調査期間と人数は、2010 年から 2011 年にかけて 27 人、2014 年から 2015 年にかけて 24 人である。2010 年～2011 年[3]のデータは、チェンマイ市内のニマンヘミン通りとホイケオ通りにおける日本人長期滞在者と直接関わる人へのインタビューである。2014 年～2015 年のデータは、チェンマイ市内と郊外における日本人と直接に関わる人および直接には関わらない人へのインタビュー調査である。インタビュー時間は、15 分～30 分程度で、実施した場所は、デパート、公園、大学、店、食堂などである。

対象者③　日本人長期滞在者に関するタイ人の各組織の代表者

この対象者は、日本人長期滞在者に関する各組織の代表者である。例えば、チェンマイ県観光・スポーツ事務所、タイ・ロングステイ共同センター、チェンマイ商工会議所、チェンマイ国際財団（CIF）などである。

対象者④　日本における日本人長期滞在者に関する日本人の各組織の代表者

この対象者は、日本における日本人長期滞在者に関する各組織の代表者である。例えば、ロングステイ財団、南国暮らしの会、定住者の集いの会、福祉の会などである。

1.5.3　調査期間

調査期間は、2013 年から 2015 年にかけて、チェンマイでアンケート調査及びインタビュー調査を行った。また、バンコクと東京においてロングステイに関する組織の代表者へのインタビュー調査を行った。詳しくは、以下の通りである。

①　2013 年 2 月 25 日から 3 月 14 日にかけて、東京にある 4 つの組織の代表者にインタビューを実施した。

②　2013 年 8 月 23 日から 9 月 24 日にかけて、チェンマイ県におけるアンケート調査とインタビューを実行した。日本人 113 部、タイ人 129 部を回収した。加えて、6 つの組織の代表者にインタビューを実施した。

③　2014 年 3 月 13 日から 18 日にかけて、東京にある 2 つの組織の代表者にインタビューを実施した。

④　2014 年 9 月 1 日から 24 日にかけて、チェンマイにおける長期滞在している日本人 21 人とタイ人 17 人にインタビュー調査を行った。

⑤　2015 年 2 月 10 日から 28 日にかけて、チェンマイにおける長期滞在している日本人 8 人とタイ人 8 人にインタビュー調査を行った。

⑥　2015 年 3 月 26 日に、東京にあける日本のロングステイ財団と東京支店タイ政府観光庁のタイ・チェンマイロングステイセミナーに参加し、補足の調査を行った。

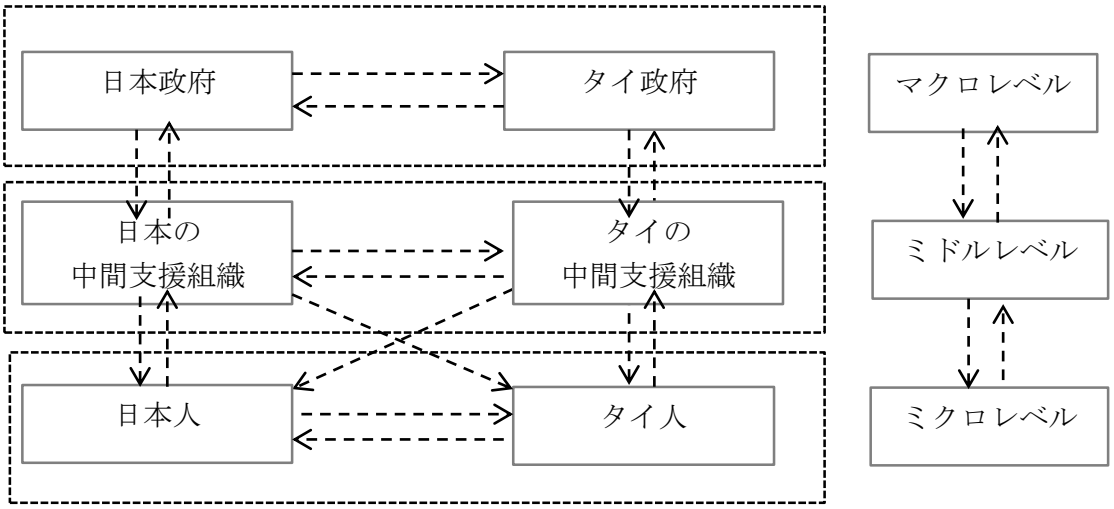
⑦　2015 年 11 月 21 日に、東京ビッグサイトにおける「ロングステイフェア 2015」に参加した。

[3] 2012 年に提出した修士論文（Duangkaew、2012）においても、日本人とタイ人の調査を行ったが、最終的にはタイ人のデータを使用しなかった。

1.6 節　フレームワーク

本研究全体のフレームワークを以下の図 4 ように示す。

図 4　本研究全体のフレームワーク



※マクロレベル:　中央政府
※ミドルレベル:　現地に直接関連する組織
※ミクロレベル:　個人の日本人とタイ人
※ - - - - - - - →　:　社会関係資本（Social Capital）を示す

このフレームワークは、研究の目的に沿って構築されている。目的 1 では、タイ・チェンマイ県において日本人長期滞在者が現地に適応することについて、ミクロレベルとミドルレベルの範囲で明らかにする。目的 2 では、日本人長期滞在者に関する中間支援組織の役割について、ミドルレベルに焦点を当て、ミクロレベルとマクロレベルの関係性を明らかにしていく。目的 3 では、日本人長期滞在者による、タイの現地社会への影響について、ミクロレベルであるタイ・チェンマイの人々、ミドルレベルであるチェンマイ県、マクロレベルであるタイ社会の範囲で明らかにしていく。

1.7 節　各章の概要

グローバル化が進行する中で、人の移動に対する研究が注目されてきている。そして人々の国家・国境を超えた人の移動は、国際的な相互作用を生み出すことになる。国際的な移動を研究するためには、送り出す側と受け入れる側双方における様々な状況を理解しなければならない。本研究は、タイにおける日本人の長期滞在型における移動とそのインパクトというテーマであり、チェンマイ県に滞在している長期滞在者を研究対象の中心とする。

本研究は、7 章から構成される。

第 1 章では、上述のように本研究の課題、目的、仮説、意義そして研究範囲を論じる。

第 2 章では、本研究の主な概念である、グローバル化と国際人口移動、長期滞在型、異文化適応、社会関係資本、中間支援組織、ジャパナイゼーション、ライフスタイル型の移動について論じ、さらに日本人のロングステイ・長期滞在についての関連する先行研究を整理する。

第 3 章では、長期滞在の背景とタイ・チェンマイ県の概況を論じる。

第 4 章では、チェンマイにおける日本人長期滞者の異文化社会への適応を論じる。チェンマイ県に長期滞在している日本人はどのような生活を送っているのか、タイ人とタイ社会に溶け込むためにどのような適応をしているのか、異文化社会における適応が成功しているといえる人は、どのような人なのかなどを異文化適応と社会関係資本の概念で分析する。第 4 章から第 6 章においては、筆者によるフィールドワーク、アンケート調査およびインタビュー調査、参与観察のデータを用いて分析する。

第 5 章では、長期滞在に関する中間支援組織の役割、特にチェンマイ県の長期滞在を支援している日本の中間支援組織とタイの中間支援組織の役割を分析する。

第 6 章では、長期滞在が現地社会にもたらすインパクトについて論じる。

第 7 章では結論と今後の課題を挙げる。

第 2 章

長期滞在に関わる概念と先行研究

本章では、本研究での中心的な課題である「長期滞在」についてまず論じる。そのため、長期滞在に関わる概念と先行研究を挙げ、その概念と長期滞在との関連および長期滞在の実態を論じる。さらにグローバル化の中で、長期滞在の現象が一般的な観光や他の移動現象とは異なる点を論じていく。

本研究では、タイ・チェンマイ県における日本人長期滞在者の異文化適応について、現地の人々との交流活動の調査から論じるが、その方法として、社会関係資本概念を用い、タイ人との相互作用の実態などを分析していく。

また、チェンマイにおける日本人の長期滞在を促進・支援するために、マクロレベルの機関、ミドルレベルの組織、ミクロレベルの個人が関わっている。本研究では、支援政策・方針を作成する政府（マクロレベル）、政府に関わる組織、日本人のグループとタイ人のグループ、民間企業という日本人長期滞在者を支援している 3 つの組織（ミドルレベル）、日本人とタイ人という個人（ミクロレベル）、という大きな 3 つのレベルでの相互作用や関係性を社会的ネットワークと社会関係資本の視点で分析していく。

そして、タイ社会の中で生活を送っている日本人は、日本人のライフスタイル型の移動とジャパナイゼーションによって影響が受けているタイ社会に対して、どのようなタイ社会、文化が現地の人々に影響を与えているか考察していく。

本章では、2.1 グローバル化と国際人口移動、2.2 長期滞在、2.3 異文化適応、2.4 社会関係資本、2.5 中間支援組織、2.6 ジャパナイゼーション、2.7 ライフスタイル型の移動、の 7 つの概念を以下のように論じ、さらに日本人のロングステイ、長期滞在についての関連する先行研究を概観する。

2.1　グローバル化と国際人口移動

グローバル化は、地球規模で見られる複合的なプロセスであり、経済的、政治的、社会的、文化的など様々な側面でグローバル化の現象を発生させている。本研究では、グローバル化に関して人の移動および社会・文化への影響という二つの側面を重視する。グローバル化に関するコーエンとケネディ、ヒュー・マッカイ、アルジュン・アパデュライなどの研究から、グローバル化について以下のように論じていく。

コーエンとケネディによれば、グローバル化は 6 つの変化をもたらした。（1）電話、飛行機、電子メディアなどの新たなテクノロジーによる空間と時間の概念の変化、（2）文化的交流の増大、（3）世界のすべての人びとが直面している問題の共通性、（4）相互連関と相互依存の増大、（5）次第に強力になるトランスナショナルなアクターや組織のネットワーク、（6）グローバル化に関わるあらゆる次元の同調化、である（コーエン他、2003; 45-58）。このように、コーエンとケネディはグローバル化の中で、多くの移民が海外へ渡るなど人の移動の増加が顕著になり、それと共に文化的交流も増大しつつであると論じている。

アレン・カックレインとキャシー・ペインによると、グローバル化は、（1）社会的諸関係の拡張：社会における文化・経済・政治の過程が国民国家の境界線を越えて拡張し続けており、ある場所で起こったことや決定がほかに重大な影響を及ぼしているとされる。このように社会的諸関係が拡張するなかで、人びとが幅広い連結ネットワークに組み込まれるようになり、個々の決定がグローバルに影響を与えることになる。例えば、個人の消費決定が積み重なって、今日のグローバルな環境問題に連なったとする論者もいる。（2）フローの強化：社会的諸関係の拡張は、国民国家を超えた相互作用と相互連関係のフローおよびネットワークの強化と結びついている。例えば、アメリカ合衆国は、なお、電子フローの中心に位置しているが、コミュニケーション・ネットワークが世界中に普及すると、他所の出来事とは隔絶していた人びとも、領域的空間を異にしつつも社会空間を共有しうることになる。（3）相互浸透の深化：グローバルな相互作用の規模が広がり、強度が強まるなかで、ローカルなものとグローバルなものとの相互関係からなる地理状況も変化している。（4）グローバルなインフラストラクチャー：情報とコミュニケーションによって、グローバル市場の成長を支える相互作用のインフラストラクチャーが整えられるという大きな現象が発生している、と論じた(カックレイン他、2006; 19-21）。

グローバルな文化フローについては、アルジュン・アパデュライによれば、次の 5 次元からなる。（1）エスノスケープ「民族の地景」については、旅行者、移民、難民、外国人労働者などといった移動する集団や個人が、世界の本質な特徴をなしており、国家の政治に、これでにない規模で影響をおよぼしているようである。家族、友人関係、労働や余暇から、子供の誕生や居住といった世代を超えるものにいたるまで、比較的安定した共同体やネットワークが存在していることである。（2）メディアスケープ「メディアの地景」は二つ分類されている。第一は、情報を生産し配信する電子的能力の配分である。現在、この能力を利用する利害団体は、公的、私的を問わず、世界中で増加している。第二は、メディアによって創造される、世界についてのイメージである。（3）テクノスケープ「技術の地景」については、かつてに流動を阻んできた多様な境界を越えて高速移動しているが、現在では、多くの国々が多国籍企業の起源となっている。（4）ファイナンスケープ「資本の地景」については、通貨市場や国債市場、商品投機は、巨大資金を目にも止まらぬ速度で国家へと流出入させており、しかも利率や期間のごくわずかな違いによって莫大な含み益を生み出している。（5）イデオスケープ「観念の地景」については、自由や福祉、権利、主権、代表、そして民主主義というもっとも大きな概念を要素に成り立っている（アパデュライ、2007；69）。

次に、グローバルがもたらした国際人口移動について論じる。社会・文化への影響は 2.6 ジャパナイゼーションで詳述する。

2.1.1 国際人口移動

かつては、人々にとって生まれた場所と生活する場所は同じ場所だということが一般的であったが、グローバル化によって、モノ、カネ、ヒト、情報は大量で迅速に越境するようになった。「人の移動」の状態をみると、グローバル化は人間の生活の価値観にまで強く影響を与えたことがわかる。

移動する者は、移民である。しかし、移民が含有する意味は多様である。近藤敦によると、広義の移民は、生まれた国以外の国に住んでいる人をさす。また、自国から逃れてきた人を意味する難民も、広義の移民に含まれる。一方、狭義の移民は、自発的な意志で新たな国に移り住む人をさす。さらに、最狭義の移民は、アメリカなどの伝統的な移民受け入れ国での法律用語のように、永住を目的として入国時に永住許可を認められる外国人だけをさす。英語の場合、Immigrants（入国移住者）、Emigrants（国外移住者）、Migrants（移民）という語が移民を表す。Immigrants は入国移住者を移民と呼び、Emigrants は国外に移住した本人を移民と呼ぶ。そして、Migrants は入国移住者と国外移住者の両者をあわせて移民と呼ぶのである（近藤、2009; 20-23）。

近年、「人の移動」については、目的、滞在期間、ビザの種類、スキルなどによって、移民、難民、永住者、留学生、旅人、バックパッカー、国際結婚者、エリート、労働者、そとこもり、ロングステイヤーのように様々な言い方で呼ばれている。また、「人の移動」によって、本人そのものに影響を与えるだけではなく、受け入れる社会にも影響が少なくない。「人の移動」の現象は、一般的なことになりつつある。

国際人口移動の理論について、ローエル・ジェンニセンによれば、以下のように概括できる。新古典派経済理論（neoclassical economic theory）は、移動の最古の理論である。この理論によれば、地域間の賃金の差が労働移動の主な理由である。これにより、労働者が低賃金国から高賃金国へ移動するのである。国際移動は開発移民受入国でのプル要因によって主に引き起こされるという。次に、二重労働市場の理論（dual labor market theory）によれば、労働市場のセグメントは、生産ラインの労働者と熟練労働者に区別される。 また、労働移動の新しい経済学（the new economics of labor migration）によれば、労働者が受入国で稼げる収入を家族に送金し、貧しい送出国における経済にプラスの影響を与える。さらに、送出国の社会にいる家族の所得の違いに対する意識が移動を決定する重要な要因となる。この理論は、相対的剥奪理論（relative deprivation theory）という。世界システム論（the world-system theory）によれば、先進国と発展途上国の貿易が、結果的に発展途上国の生活状況を悪化させ、それが人の移動をもたらすという。ネットワーク理論（network theory）によれば、移動ネットワークが出発地と目的地の地域で（移住）集団間の対人結合を形成することができる。移民のネットワークは、同じ民族の潜在的な移住者を助けることができるという。制度理論（institutional theory）によれば、国際人口移動が大規模に発生するようになると合法、違法の組織が生まれ、移動そのものが制度化される（Jennissen、2007; 411-436）。

本研究において、長期滞在とは、人の移動の一つのパターンであるとする。長期滞在の枠組みを議論する前に、一般の移動とその要因についての議論を以下にまとめる。

ラッセル・キングは、移動を広義的な意味で、ある場所から他の場所に移動することであると説明した。飢餓、貧困、不景気、内戦、災害のために移動が促され、他の場所に長期に滞在することになる。そして、その移動パターンを、強制・承諾、暫定・永住、合法・非合法、国内・海外などに分けている（キング、 2010; 11）。

アンソニー・ギデンズによれば、移動 （migration）とは、自国から他の場所に暮らすというものである。現代世界の中で、送り出し国も受け入れ国も双方の経済、政治、文化などの影響

を与え合っている。移動する要因は、プッシュ＝プルモデルで説明している（Giddens、2012; 656-666）。

水上徹男はハンマー（Hammar、1991; 185）を参照し、経済格差と人口増加の要因が結びついてグローバルな人の移動が発生するという論旨を立てた。例えば、経済的に貧困な南から富める北への移動が起こるという基本的な枠組を設定している。プッシュ＝プルモデル（Push-Pull model）のスキームの中では、プッシュ要因（push factor）として出身国（送出国）における生活環境があり、プル要因（pull factor）としての目的地に対する認識や社会事情が分析される。プッシュの原因としては、主に低い生活水準、貧困、人口過剰、失業率の高さや政治的抑圧など、押し出し国のネガティブな状況が捉えられる場合が多い。逆に、プル要因は、労働力の需要とそれに伴う出身国と比較した時の高賃金や居住地の提供などの経済・社会要因、政治的な自由があげられる（水上、1996; 20-22）。

次に、具体的に人の移動の統計をみよう。国際連合（UN）の統計によると、国際移動人口数は 1990 年に 154,000,000 人、2000 年 175,000,000 人、2013 年には 232,000,000 人（世界人口の 3.2%）である。表 3 のように国際移動人口の数は、年々上昇している。

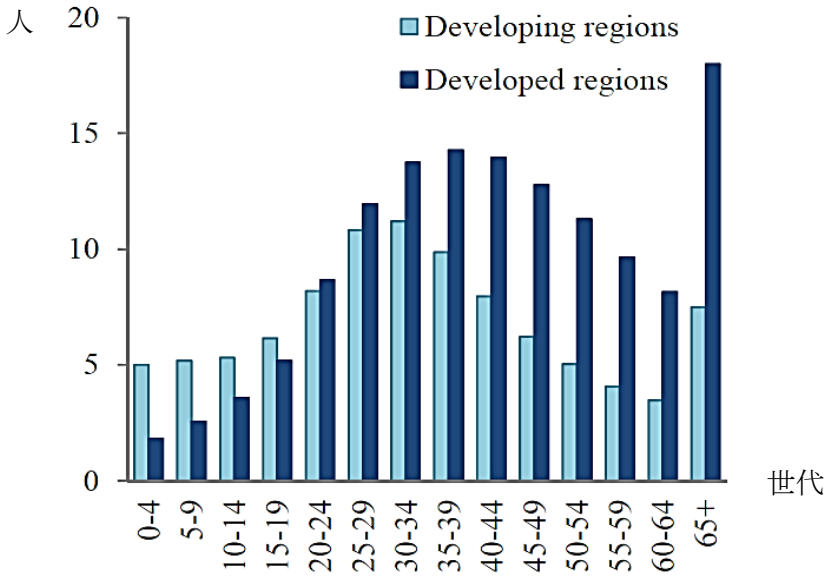
表 3　地域別国際移動人口

地域	**移動人口数（単位：100 万人）**			
	1990	**2000**	**2010**	**2013**
世界	154.2	174.5	220.7	231.5
先進国	82.3	103.4	129.7	135.6
発展途上国	71.9	71.1	91.0	95.9
アフリカ	15.6	15.6	17.1	18.6
アジア	49.9	50.4	67.8	70.8
ヨーロッパ	49.0	56.2	69.2	72.4
LAC（ラテンとカリビアン）	7.1	6.5	8.1	8.5
北アメリカ	27.8	40.4	51.2	53.1
オセアニア	4.7	5.4	7.3	7.9

出典：国際連合、経済社会局（United Nations, Department of Economic and Social Affairs ）（2013）

2013 年には、先進国からの送り出しの移動者数は 135,600,000 人で、発展途上国からの送り出しの移動者数は 95,900,000 人である。また、国際移動人口を見ると、世代によって移動人口の傾向が変わる。図 5 に示すように、20 代から先進国からの国際移動人口が、発展途上国からの移動より上回っている。65 歳以上の国際移動人口は、先進国からの移動が顕著になる（United Nations、2013）。

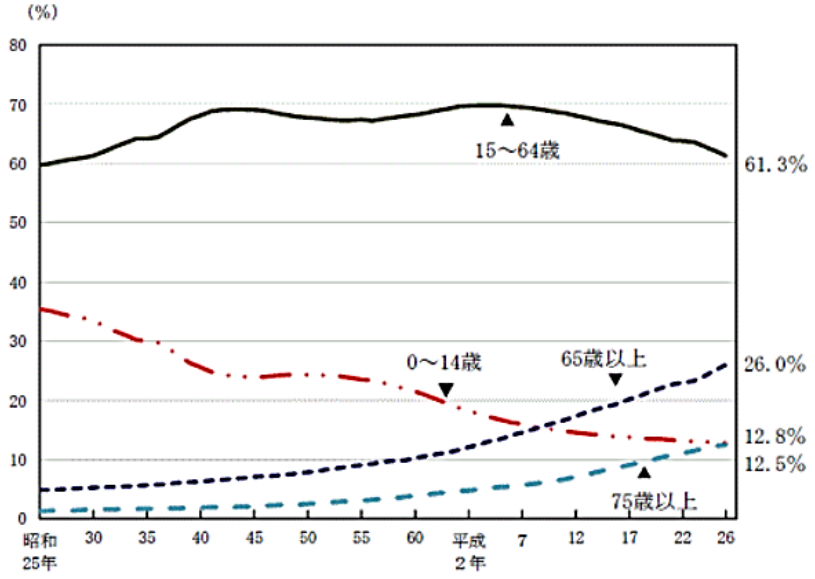
図 5　先進国、発展途上国の世代別国際移動人口（100 万人あたり）



出典：国際連合経済社会局
（United Nations, Department of Economic and Social Affairs ）(2013)

2014 年の日本の人口は、127,083,000 人である。図 6 に示すように 65 歳以上の人口は、33,000,000 人で、全人口の 26%となり、過去最高となっている。さらに 75 歳以上人口の割合は 12.5%となり、初めて 8 人に 1 人が 75 歳以上人口となっている （総務省統計局、2014）。

図 6　年齢 3 区分別人口の割合の推移
（昭和 25 年（西暦 1950 年）～平成 26 年（西暦 2014 年））



出典：総務省統計局（2014）

また、日タイ国際交流推進機構によれば、2014 年度の日本の高齢者（65 歳以上）の数は、約 33,000,000 人で、男性 14,250,000 人、女性 18,750,000 人である。高齢者の中でも、健康な高齢者約 7,000,000 人は長期で海外に滞在することを希望している。また、一人暮らしの高齢者は 6,000,000 人おり、彼らは年金の金額、円安、一人暮らしに対する不安が大きい（特定非営利活動法人日タイ国際交流推進機構 （JTIRO）、2014）。このような人口構造の変化によって、高齢者の夫婦の世帯及び高齢者一人の世帯の数が増えつつある。

人口構造の変化やグローバル化などにより、日本人の定年後の価値観や行動様式は変化している。グローバル化の時代では、人々は簡単に移動することができ、より多くのデータにアクセスできる。人の移動については、本来は発展途上国からの移動者がずっと多かったが、前述のように現在では、先進国からのほうが上回っている。また、移動の目的も、経済や政治の影響によるものではなく、就職、結婚、留学といった新たな理由、及び複数の理由で、国境を越えている。このように現代の移動には、新たな移動方向と増加した人数の規模、また重複した移動理由という特徴がみられる。

かつては、日本人は定年後になると、ハウスケアや子どもと孫の世話などをしていたが、現在は海外観光など自分自身のために自由に時間を過ごすようになった。ロングステイまたは長期滞在というのは、このような状況の現在に著しくみられる現象である （Duangkaew、2012）。

2.2 長期滞在

ここでは、長期滞在の定義、「長期滞在」という用語を使用する理由、長期滞在の特徴という順で論じていく。

2.2.1 長期滞在の定義

長期滞在の定義については、組織によって、期間、目的、活動など内容が異なり、以下のように多様である。

一般財団法人ロングステイ財団（日本）の「ロングステイ」の定義は、以下の 5 つの要件から成る。

(1) 比較的長期にわたる滞在である。2 週間以上の長期滞在型で余暇である。「移住」や「永住」ではない。
(2) 海外に「居住施設」を保有、または賃借する。生活に必要な設備が整っている「住まい」を保有もしくは賃借する。
(3) 余暇を目的とする。自由時間の活用を目的とし、豊かな時間を過ごし、現地の人々との交流活動などをする。
(4) 「旅」よりも「生活」を目指す。異日常空間での日常体験を目指す。
(5) 生活資金の源泉は日本にある。生活の資源は日本で発生する年金、預金利子、配当、賃貸収入であり、現地での労働収入を必要としない。

要するに、「ロングステイ」とは生活の源泉を日本に置きながら海外の 1 ヵ所に比較的長く滞在し、その国の文化や生活に触れ、現地社会への貢献を通じて国際親善に寄与する海外余暇を総称したもの（一般財団法人ロングステイ財団、2015）である。

JTB 総合研究所によれば、長期滞在（ロングステイ）とは、同じ場所に長期滞在し、日常生活を通じて現地の人や文化、習慣に触れることを楽しむ観光の一形態である。滞在期間の定義は特になく、2 週間程度の滞在を指すこともある。もともとは生活費の安さなどから海外での長期滞在が注目され、新しい観光スタイルとして定着してきたと定義している（JTB 総合研究所、2012）。

近畿日本ツーリスト株式会社（KNT）によると、ロングステイとは、生活の源泉を日本に置きながら海外の一か所に比較的長く滞在し、その国の文化や生活に触れ、現地社会への貢献を通じて国際親善に寄与する海外余暇を総称したものである（近畿日本ツーリスト、2015）。

日タイ・ロングステイ＆ビジネス・ネットワーク（Long Stay Network of Japan-Thailand : LJT）によると、ロングステイは「グローバル人生」を体験することである。海外ロングステイは「人生のグローバル体験」というものである。リタイア後の人生をより充実した意義あるものにしたいと願う日本人シニアに、異文化体験を通して、新しい人生の価値観を発見してもらうというものである。（日タイ・ロングステイ＆ビジネス・ネットワーク、2015）。

ロングステイクラブ（Long Stay Club: LSC）の「Long Stay」とは、観光主体のステイであり、一つの都市に滞在しながら近郊の観光を楽しむ形態のステイや、1 ヵ所に長く滞在するではなく、数週間に宿をかえての旅行＆滞在型ステイを取り上げる（ロングステイクラブ、2010; 4）。

ロングステイについて研究している小野真由美は、日本語の用語「ロングステイ」として知られている長期滞在の観光は、人々が目的地に生活が送る経験のため長期滞在する新しいタイプの国内または国際観光であるとしている。長期滞在の観光は、国内の観光地だけでなく、国外のものを含む。しかし、一般的に長期的に海外に滞在する日本人のアウトバウンド観光について使用されていると定義している（Ono、2010）。

ニュージーランドロングステイ情報センターによれば、ロングステイとは、短期間にめまぐるしく観光スポットを巡るのではなく、1 つの場所に長く留まり、現地の生活や文化をゆったり楽しむという「生活型滞在余暇」というスタイルのことを示している（ニュージーランドロングステイ情報センター、2005）。

タイ国政府観光庁によれば、ロングステイとは、定年退職後の余暇である。多くの人々は、海外旅行、のんびりすること、あくまでも収入の基盤を日本に残し、暮らすように旅をする。つまり、ロングステイは、まさにそうした余暇を過ごすというものである。永住、移住、就職の目的ではない。対象となる外国人は、アメリカ、ヨーロッパ（特にスカンジナビア）、日本からの人々に限定する。また、長期滞在者としては、体調回復のために治療を受ける人、50 歳以上の定年退職した人、留学生、スポーツマンの 4 つのカテゴリーを定めている（タイ国政府観光庁、2015）。

上述のように、ロングステイは、主に定年退職後に海外で余暇を過ごすことと概括できる。さらに、ロングステイまたは長期滞在は、二つの意味を持つと思われる。一つ目の意味は、海外に長期に観光すること、二つ目の意味は、観光より生活を送ることである。

前出の日本の組織もタイの組織もロングステイは観光なのか生活を送ることなのかをはっきり区別できない状況にある。本研究では、ロングステイではなく、長期滞在という用語を使用するが、その理由は、以下に述べる。

2.2.2 「長期滞在」という用語を使用する理由

「ロングステイ（longstay）」という用語は、財団法人ロングステイ財団、マスメディアにより使用されている。「ロングステイ（longstay）」、「ロングステイヤー（longstayer）」という用語は、21 世紀における新たな「観光の型」と「観光する人」という観光面でのイメージが強調されている。

タイのマスメディアも先行研究も「ลองสเตย์（ロングステイ）」という用語を使い、観光の一つの形態としている。また、日本とタイにおける多くの組織は、「ロングステイ」という長期滞在の型は永住・移住ではなく、いつか日本に帰ると定義しているが、実際には 5 年間、10 年間、20 年間、ついには息を引き取るまでいる人も少なくない。20 年間ロングステイをするという実態を考えると、ロングステイとは移住・永住なのか曖昧で、どちらかと断定することはできない。そこで、本論文では、ロングステイ、移住・永住という用語ではなく「長期滞在」と「長期滞在者」を使用する。

2.2.3 長期滞在の特徴

長期滞在の特徴を説明する前に、観光と移住について簡潔に触れる。

岩田隆一によれば、「観光」という言葉は明治時代に作られた新しい日本語である。当初、外国または自国の文化財などを観るという意味で、勉学的な意味合いであったが、現代では「楽しみを目的とする旅行」に変化した（岩田、2002; 10）。

神崎宣武は、観光とは一般的にいえば、非日常の行動様式で、転地して日常から一時的に離脱することであり、日頃の憂さを晴らし、心身をリフレッシュさせる「癒し」の行動様式なのであるとしている（神崎、2011; 5）。

一方、移住とは、曽文星によれば人がある程度の長期間にわたって新しい土地で生活することを目的にして、ある土地から他の土地へ移動することである（曽、1996; 9）。

「長期滞在」は「観光」の一つの形態か、または 21 世紀の新たな「移住」の一つの形態か、ここでは断定することはしない。長期滞在を移動の領域に含めるか、または観光の領域に含めるかは研究者、組織、マスメディアのそれぞれが強調する目的によって議論が分かれる。ここでは、短期の観光と長期滞在と定住の基本的に差異を、表 4 に示す。

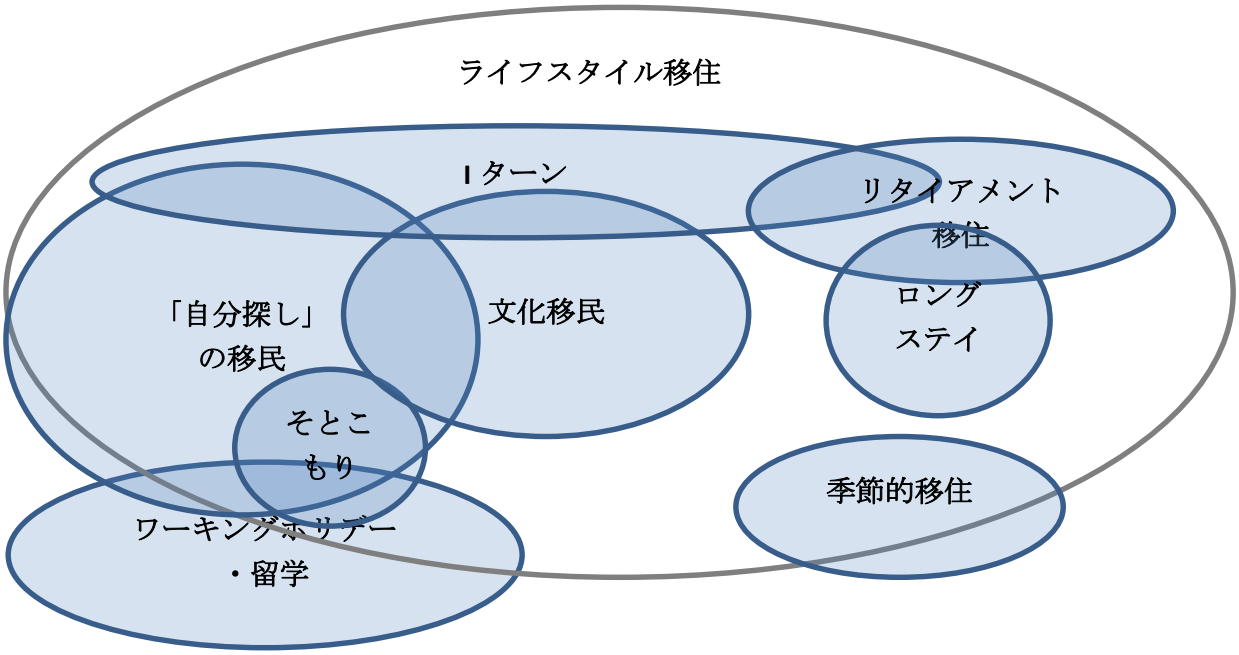
表 4　短期の観光と長期滞在と定住の基本的な差異

項目	短期の観光	長期滞在	移住・定住
人数	主に団体パッケージツアー	個人、夫婦、家族	個人、家族
期間	短期	2 週間程度以上の滞在	永住
言語	観光会話	日常会話	日常会話
仕事	休暇をとる	仕事をしない	仕事をする
ビザ	観光ビザ、ビザ無	長期滞在向けのビザ	永住権、長期滞在向けのビザ、配偶者ビザなど
目的	観光する	観光するより生活を送る	生活を送る

出典：一般財団法人ロングステイ財団(2015)および白井義男（2012）を引用して筆者作成

また、「長期滞在」は類似した海外渡航の形態と比較して論じることで、その特徴を理解することができる。ここでは、先行研究として後述するオーストラリアにライフスタイル移住する日本人について研究している長友淳のライフスタイル移住の概念と既存の移住カテゴリーを図 7 に示す。それによると、「ロングステイ」、「ワーキングホリデー」、「そとこもり」、「自分探し」、「親子留学」、「文化移民」、「自分探しの移民」、「海外生活への憧れ」、「理想のライフスタイルを享受する手段」、「リタイアメント移住」、「季節的移住」の概念を整理した。図 7 のように「ロングステイ」は、「リタイアメント移住」の一部と「ライフスタイル移住」のすべて入っていると認識されている（長友、2013）。

図 7 ライフスタイル移住の概念と既存の移住カテゴリー



出典：長友淳（2013; 17）

「長期滞在」という用語は、どこかで長く滞在していることを示す。ここでは、日本人が海外に長期間で滞在する理由・目的が様々ある。表 5 のように、永住者、留学、シーズンステイ、ホームステイ、医療観光、ワーキングホリデー、そとこもり、ウェルネスツーリズム、ロングステイ体験ツアー、バックパッカーなどが挙げられる。

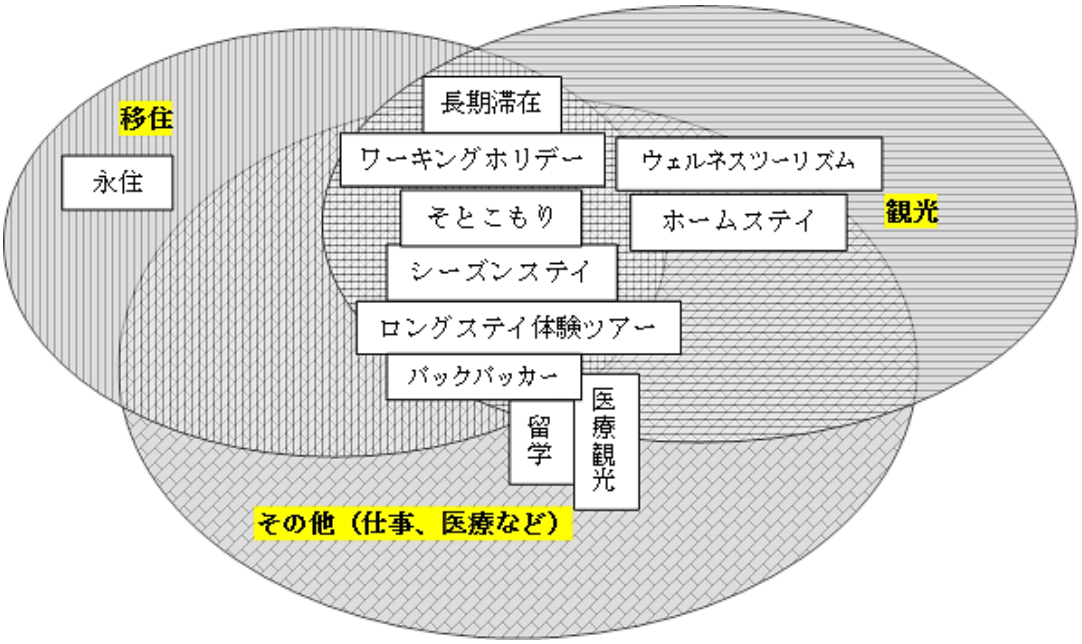
表 5　長期滞在の特徴

観光・移動の形態	内容
永住者	ある土地に移り、生涯その地で生活する者である。
留学	自国以外の国に在留して学術・技芸を学ぶことである。長期間留まって、外国において学ぶ場合に用いられる。
シーズンステイ（Season stay）	特定の季節に限定した滞在型の移住スタイルである。
ホームステイ（Home stay）	留学生などが、その国の一般家庭に寄宿し生活体験をすることである。受け入れる家庭のことをホスト、その家族をホストファミリーと呼ぶ。
医療観光（Medical tourism）	居住国とは異なる国や地域を訪ねて医療サービス（診断や治療など）をうけることである。
ワーキングホリデー（Working Holiday）	青年（18 歳から 25 歳または 30 歳）が異なった文化(相手国)の中で休暇を楽しみながら、その間の滞在資金を補うために一定の就労をすることである。
そとこもり	日本から物価の安いアジアへと行き、海外の街で引きこもる現象である。
ウェルネスツーリズム（Wellness Tourism）	ウェルネス観光は自分の健康と幸福を向上させることである。
ロングステイ体験ツアー	ロングステイを実際に体験するツアー。期間はたいだい 5～30 日間くらいで、ツアーの内容は居住施設、食べ物、病院、現地の文化を紹介し、見学することである。
バックパッカー（backpacker）	長期間、最低限の予算で、海外を個人旅行する旅行者のことを指して使われてきた用語である。この旅行者はバックパックを背負って移動する者が多い。

出典：筆者作成

それぞれの観光・移動の種類は、様々な対象者の年齢と目的で異なるが、それらに共通するポイントは、海外にある程度の期間留まることである。表 5 で挙げられたものを「観光」「移住」「その他」の 3 つの領域に分けて、長友淳による図 7 を参考に図 8 のように表す。

図 8　長期滞在と移住、観光などの関係



出典：長友淳（2013; 17）に参考して作成

図 8 によると、「長期滞在」は観光または移住なのか曖昧なことが理解できる。日本人の長期滞在を支援する組織およびタイ政府にとっては、長期滞在は観光の一つの形態であろうが、実際の生活の形態などから、本研究では観光でも移住でもなく移動の一つであるとして分析する。そのため、チェンマイを事例としてフィールドワーク調査を行い、日本人長期滞在者についての実態を論じる。

2.3　異文化適応

ここでは、長期滞在を移動として分析するために、適応の概念、とりわけ異文化適応について論じておく。

今田高俊の「適応」の項によると、適応は英語で adaptation; adjustment という語である。意味は、個人またはシステムが環境条件の変化に対応して、自らの行動や構造を変化させて、自己を存続あるいは発展させることである。一般的には、不均衡や緊張を解消する状態のことである。社会学では主として、パーソナリティとしての個人の適応と集団ないし社会の適応との二つが問題にされる。マートンは、個人の適応に関する類型を逸脱行動の観点から体系化した。彼は、社会によって奨励される文化的目標とこれを実現するための制度的手段とを受け入れるにあって、①同調、②革新、③儀礼主義、④逃避主義、⑤反抗という 5 つの可能な類型があるとしている。また、パーソンズによると、社会進化の方向として「一般化された適応能力」の増大をあげるとしている。適応の問題については、ほかに心理的な適応と性能学的適応とがあるが、多くの場合、個人または社会と環境との関係が調和的となることに、適応の本質が求められている（今田、1993; 1033）。

さらに、適応という言葉は意味が広く、物理学的、心理的、文化的、などを様々な視点によって定義がある。

アマラ・ポンサーピットは、生物学的適応と文化的適応を、以下のようにまとめた。生物学的適応とは、多くの場合、生息地の周りの環境に適応することができることである。歴史的に見ると、（1）ある環境の中で人と動物が合理的な関係を築くこと（2）人または動物が環境に適応すること（3）環境を人または動物に合わせて変えること、である。一方、文化的適応とは、物質および非物質文化の中における文化、人々の考え方、信念、ライフスタイル、社会のメンバーの行動に関するものである。人間の生活は、グループ単位での行動である。社会的文化的変容は、個人より、社会グループの変化に従って起こる。また、文化的遺産は、グループ単位で、ある世代から次の世代に継承されるため、文化的適応が社会のグループの変化の一例となる。文化の変化は、環境と人の相互作用によって発生する。この変化には、人間が重要であり、人間がその変化を管理できるとしている（Pongsapich、2000; 16-18）。

秋山剛は、異文化間メンタルヘルスの現在の研究の中で、対象群を①観光者群、②一時滞在者群、③定住者群（①観光者群は、異文化渡航に強い動機づけを持っていないが、身体的要因（疲労、時差）、言語の障壁などがストレス要因になっている。②一時滞在者群は、本国への帰国を予定して渡航しており、本国文化への同一性が基本的には保持されている。だが、留学や就労など自己の同一性に大きな影響を及ぼす生活を数年間外国で行うことを選択している。また、生育歴上にみられる本国文化への疎隔感や自己実現の挫折などの心理的葛藤が渡航動機に関連している場合もある。③定住者群のうち、難民群では、渡航は政治的迫害や極度の経済的困窮など外部状況に強制されたものであり、不安性障害がみられる。滞在国への文化的な同化または生活水準の向上を目指していることが多い。）、の 3 つに大別する。3 つの対象群の適応については、短期適応と長期適応の 2 つに区別した。短期適応は通常カルチャーショックと呼ばれる。一方、長期適応に対して、海外に長く生活する人、家族がいて、友達、教育、仕事ができる人は現地に適応できると言える。しかし、自文化の中で形成されているもので、それをそのまま異文化経験の理解のために用いると、それが不適応要因になる。渡航後のストレス要因は、身体的要因（疲労や時差がある）、文化構造の違いから来るストレス（認知的枠組みの変化・適応によって乗り越えられる）、異文化でのストレス要因（言語の障壁、いわゆる、「本当にはこころが通じ合わない」）、文化的同一性に関するストレス（本国文化の喪失、異文化受容、同一性の再確立の挫折）である。異文化受容については、適応能力の高いものは異文化受容を果たしメンタルヘルスの問題は生じないが、能力の低いものでは異文化受容に無理があり、強い異文化接触がメンタルヘルスの問題に結びつきやすいと論じた（秋山、1998; 14-22）。

箕口雅博らは、『移住と適応―中国帰国者の適応過程と援助体制に関する研究』で、適応状況を考察するため、社会、家族、個人という 3 つの側面に分けた。1 つ目は社会の面で、言語・日常生活・仕事・学業対人関係、2 つ目は家族の面で、機能・関係・満足度・問題、3 つ目は、個人の面で生活ストレス・心理状況・民族同一性・文化受容である。個人の背景や能力によって異文化適応のレベルは異なる。個人レベルの適応を理解するためには、心理学的な研究が必要だと考えられるとしている（箕口他、1996; 37-38）。

本研究では、日本人長期滞在者とタイ人を調査するため、人間の文化的適応に焦点を当てる。

グローバル化の流れの中で日本人は国境を越え、タイという海外に移動し長期滞在を行っている。日本とタイは地理的には同じアジアに位置するが、言語面は当然として社会的、文化的差異は大きい。移動の結果として異文化の中で生活することは、困難な場合もある。そこで、日本人長期滞在者はどのように言語的、社会的、文化的に適応しているのかがタイ人と共存するためのキーワードとなる。

そのため、課題は、異文化適応と異文化不適応の定義である。上述のようにここでの異文化適応とは、「不均衡や緊張を解消する状態のこと」、「生息地の周りの環境に適応すること」、「異文化でのストレスが生じないこと」のことである。言い換えると、日本人長期滞在者が、チェンマイでの生活の環境、とりわけ現地の人々との相互作用において精神的ストレスが溜まらないことと定義する。一方異文化不適応とは、異文化適応の逆でチェンマイでの生活の中でストレスが生じ、解消できない状態と定義する。

2.4 社会関係資本

社会関係資本の研究者は、パットナム、リンなどが著名であり、研究者によって、社会関係資本もしくはソーシャル・キャピタルという用語が用いられる。本研究では、社会関係資本という用語を用いる。

古典的理論では、商品の生産と消費の過程において資本家と労働者の間に結ばれる社会関係から資本が生み出されるというのがマルクスの分析である。商品の生産には労働、土地、地代、材料が必要となる。こういった要素はそれぞれが生産者に価値をもたらす。商品は、市場価値を生み出すのである（リン、2008; 4-9）。

一般的に「資本」といえば、金銭や物や労働という目に見える投資をイメージすることが多いが、目に見えない文化や社会の面なども資本として考えることが必要である。社会の全体は物的な資本、人間資本、文化的資本、社会的関係資本であり、「資本」の意味が広がる。以下のように「社会関係資本」の概念が示される（Romratanapun、2005; 14）。

ロバート・パットナムは社会関係資本の様々な論点を提示しているが、ここでは本研究で用いる 3 つの側面についてまず論じておく。一つ目は、社会関係資本には個人的側面と集合的側面、いわば私的な顔と公的な顔があることである。パットナムによれば、「個人は自らの利益に資するようにつながりを形成する。仕事探しに精を出すものがよく使う戦略の一つは『コネ作り』であるが、それはほとんどの人間が何を知っているかではなく、誰を知っているかということによって職を見つけるからである。すなわちそれは社会関係資本であって、人的資本ではない」と論じた（パットナム、2006；15）。二つ目は、結束型と橋渡し型の社会関係資本である。パットナムは「社会関係資本の形成の多様性のあらゆる次元の中で、最も重要なものはおそらく、『橋渡し型』（あるいは包含型）と、『結束型』（あるいは排他型）の区別でろう。社会関係資本の形態の中には、メンバーの選択やあるいは必要性によって、内向きの指向を持ち、排他的なアイデンティティと等質な集団を強化していくものがある。結束強化型の社会関係資本の例としては、民族ごとの友愛組織や、教会を基盤にした女性読書会、洒落たカントリークラブなどがある。一方で外向きで、様々な社会的亀裂をまたいで人々を包含するネットワークもあり、橋渡し型の中では公民権運動、青年組織、世界教会主義の宗教組織などがある」と主張している（パットナム、2006；19）。三つ目は、社会関係資本にはフォーマルなものと

インフォーマルなものがあるということである。パットナムは米国人とコミュニティとのつながりを例に挙げて、フォーマルな部分とインフォーマルな部分があると論じた。フォーマルな部分の例は、政党、市民組織、教会、労働組合などが挙げられ、これよりずっと頻繁なのは、人々の取り結ぶインフォーマルなつながり、すなわち仕事のあとに連れ立って飲みに行ったり、夕食時に馴染みの人とコーヒーを飲む、隣近所とのうわさ話、家に友人を招いてテレビを見る、暑い夏の夕方にバーベキューを共にする、書店の読書グループに集う、毎日出会うジョギング仲間に単にうなずくといったことであるという例を挙げた（同；106）。

アンソニー・ギデンズはパットナムを引用しながら社会関係資本には、有用な社会的ネットワーク、相互の義務感と信頼感、効果的な行動を定める規範の理解、さらに一般的には、人々が効果的に活動できるような社会的資源が含まれると論じた。また、ギデンズは社会関係資本として、2 つの種類があることに同意し、① 結束型社会関係資本 （bonding social capital）は、排他的アイデンティティを強化し、同質的集団を増大させる。すなわち、ホモジーニアス・グループ（homogeneous groups）である。②橋渡し型社会関係資本（bridging social capital）は、社会的裂け目を横断して人々を一体化させる。人々を一体化させる潜在力は、たとえば、白人と黒人の間での公民権運動という事例があると論じた（Giddens、2012; 815-818）。

安田雪によれば、社会関係資本とは、人々が相互に築く「関係」に内在する力であり、個々人に還元できない、社会的なつながりによって生まれる強みと定義される。これは「有る」ことが問題ではなく、「無い」ことが問題となる。安田は、社会関係資本は「私財」としての側面と「公共財」としての側面を切り分けて論じている。さらには経済、医療・保険、防犯、教育、途上国支援、社会サービス、まちづくりなど多様な領域に効果があると述べている（安田、2013; 52-57）。また、結束型と橋渡し型という 2 つの社会関係資本について以下のように論じている。結束型社会関係資本は、内部志向、協調型である。情報や価値観が同質で安定的な人間関係から営まれる。その反面、排他的傾向が強く、集団になじまない人間を追放していまうことさえある。結束型はより多くの人と直接的に連結し、自分の仲間内で多くのつながりがある状態、つまり周囲の人々と顕密な関係をもっていることを力の源泉とみなす考え方である。直接結合している相手の数と、その相手同士が互いに連結しているかどうか、関係の量がそのまま社会関係資本の量になる。一方、橋渡し型社会関係資本は、関係の重複を嫌う。仲間内より外部志向、互いに面識のない人々の結節点として機能する。橋渡し型は、集め型で多様な人種、文化的背景をもった人々と関わらざるをえないという多様性も担保されている。橋渡し型は直接、自分が他人と繋がるのは良いのだが、自分が直接繋がっている人同士に関係がない状態の方が望ましいと考える。自分から見て友達の友達が友達でない状態、つまり自分が、直接つらなる人たちの橋渡しをしている状態から、最大のネットワークの効用が得られると考える。自分が直接つらなっている人の数と、その直接つながっている相手同士が「つながっていない程度」に応じて、社会関係資本の分量が決まるとしている（安田、2013; 67-68）。

ストール・ダイエットリンドもパットナムを引用しながら、社会関係資本について次のようにまとめている。社会関係資本は、比較的簡単に構築できる。橋渡し型社会関係資本を構築するために、多様なメンバーシップを持つグループに参加することでできる。しかし、社会関係資本を構築するためには、必ずしも正式な組織に加入することが必要はない。集団行動の問題を解決するために役立つという目的なのである。個々人のレベルは、同じような興味を持つ

人々とたむろすることで社会関係資本を構築できる。また、結束型社会関係資本は、排他的なアイデンティティと均質なグループを強化する傾向がある。また、パットナムはイタリアの社会関係資本の研究の中で、水平方向（horizontal）と垂直方向（vertical）の社会関係資本について論じていた。縦の関係では、相互関係と互恵の経験を構築することができない。その理由は、メンバーがグループに対して忠誠心や責任感を持たないからである。逆に、横の関係では、相互に等しく、非階層的な関係であるため、グループ内で協力関係や信頼関係が築かれ、それが社会関係に転移するようになる（Dietlind、2001; 121）。

さらに、ナン・リンは社会関係資本を「人々が何らかの行為を行うためにアクセスし活用する社会ネットワークに埋め込まれた資源」と定義している。社会関係資本の機能は、一般的に情報、影響力、信用証明、補強の 4 つである。第一の機能は、情報の流れを促進する効果である。社会的紐帯は、そういったつながりがなければ手に入らないような機会や選択肢に関する有用な情報を諸個人にもたらしてくれる。第二に、社会的紐帯は、行為者も含め、雇用や昇進といった決定の際に重要な役割を担う。例えば、組織の採用担当者などに影響を及ぼすこともある。第三に、社会的紐帯、すなわち諸個人の知人関係は、その人が社会的ネットワークや社会関係を通じて利用できる資源を表すものであり、個人の信用証明とみなされている。最後に、社会関係はアイデンティティと承認を強化すると考えられる。人は似たような関心や資源を共有する社会集団のメンバーとして存在価値を認められると、情緒的なサポートだけでなく、特定の資源への公的権利を得ることができる。このような補強は、メンタルヘルスの維持と資源的資本や人的資本といった個人的形式の資本では説明できない道具的行為と表出的行為において機能するのかということが前述した 4 つの要素から説明できるかもしれない。また、社会関係資本として個人がアクセスし活用できる資源には、個人的資源と関係的資源の二つがある。個人的資源とは、個人が有する資源であり、関係的資源とは個々人の社会的な繋がりによってアクセスできる資源である。その資源は他者の所有物（彼らの個人的資源）または他者の社会的地位（彼らの地位的資源）に帰属したものであるとしている（リン、2008; 25-27）。

ウォラヴット・ロムラッタナパンによると、社会関係資本に関わる当事者は 3 つのグループに分けられるという。グループ 1 は、個人である。それらの間の社会的関係のシステムを構築し、その関係の性質が社会関係資本になる。グループ 2 は、組織、コミュニティを含む。ネットワークのような社会的な関係を構築し、社会関係資本になる。グループ 3 は、公的組織や民間企業という外部の機関である。個人、機関、コミュニティの間の関係を促進するため、それらに互いに社会関係資本を生じさせる。3 つのグループは、それぞれの役割を果たす。個人、機関、コミュニティは、どれも直接に社会的な関係の構築を行い、そこで生じた社会的な関係が、社会関係資本である。一方、外部の機関においても関係性が構築される。また、ロムラッタナパンは社会関係資本がグループ・組織と互いに協力、支援すれば、それらの関係を保つことができると考えるとしている（Romratanapun、2005; 15-16）。

金光淳によれば、ソーシャル・キャピタルとは、社会的ネットワーク構築の努力を通して獲得され、個人や集団にリターン、ベネフィットをもたらすように創発的な関係資産である。ソーシャル・キャピタル論の最も基本的な理論は、社会的関係、もしくは社会ネットワークへの投資行為による、何らかのリターンの取得という過程としてとらえることができると論じた（金光、2006; 238）。

稲葉陽二によれば、人々が他人に対して抱く「信頼」、それに「情けは人の為ならず」「お互い様」「持ちつ持たれつ」といった言葉に象徴される。おおざっぱに言えば、これらの社会関係資本によって、集団としての協調性や、「ご近所の底力」といった、市場では評価しにくい価値が生み出されると定義している（稲葉、2011; 1）。

上述のように、社会関係資本について整理した。本研究では、社会関係資本の理論を用いて、フィールドワーク調査の結果を分析する。社会関係資本の理論は、第 4 章で個人レベルもしくはミクロレベルとしての社会関係資本として、第 5 章で組織レベルもしくはマクロレベルの視点を論じていく。そして、結束型社会関係資本と橋渡し型社会関係資本の 2 つのタイプの社会関係資本を用いて、フィールドワーク調査の結果を分析する。第 4 章では、ミクロレベルを中心に調査結果を分析する。個人レベルでは、異文化社会であるチェンマイにおいてどのような日本人長期滞在者が適応しているか、彼らの特徴を社会関係資本を用いて分析していく。また、第 5 章では、チェンマイにおける日本人の長期滞在の支援や促進のため、日本とタイ・チェンマイ側双方の組織レベル（マクロレベル、ミドルレベル、ミクロレベル（第 5 章で詳述する）と個人レベルの連携・連帯が橋渡し型社会関係資本、結束型社会関係資本という社会関係資本としてどのような役割を果たしているかを考察する。

2.5　中間支援組織

この節は、中間支援組織とそれを支える社会的ネットワークについて論じる。まず、中間支援組織の定義をまとめて、社会的ネットワーク論を整理していく。

2.5.1　中間支援組織

まず、中間支援組織（intermediary organization）という用語は、中間と組織を組み合わせたものである。中間とは、仲介の役割をする。組織は、あくまでも成員、規則、組織的の目的を達成されるものである。

メレディス・ホーニックの教育システムの中での中間組織についての研究結果によれば、中間組織の特徴は以下の 5 つであるという。一つ目は、異なるレベル行政組織間や、学区と学校の間に機能している。二つ目は、それぞれの中間組織の構成が多様である。三つ目は、立地する場所が活動地域内であったり、地域外であったりする。四つ目には、ある中間組織が単独で一つの管轄区域を持つ、他の中間組織と共に管轄区域を持つなどする。最後に、資金源がそれぞれの中間組織で異なるという。公的な資金源を持っているものもあれば、民間の資金源を持っているものもある。また公と民の両方から資金提供を受けるものもあれば、独自の資金源を持つものもあるとしている（Honig、2004; 68）。

支援とは、今田高俊によれば、何らかの意図を持った他者の行為に対する働きかけであり、その意図を理解しつつ、行為の質を維持・改善する一連のアクションのことをいい、最終的に他者のエンパワーメントをはかる（ことがらをなす力をつける）ことであるという。支援の構成要素は、①他者への働きかけ、②他者の意図の理解、③行為の質の維持・改善、④エンパワーメント（ことがらをなす力をつけること）の 4 つである。また、支援のタイプについては、物（お金を含む）による支援、人による支援、情報（データ）による支援が区別されるし、こ

れらの資源を用いた支援とは異なり、心の支え、精神的な支援というケースもあるとしている（今田、2000; 11-12）。さらに、管理に代わる支援への発想転換は、「私」と対置された「公」の存在を前提とする市民的公共性の概念に代わって、私的行為の中に公共性の契機を組み込む根拠を提供する。（今田、2000; 24）。

内閣府は『新しい公共支援事業の実施に関するガイドライン』の中で、中間支援組織の用語を定義する。中間支援組織とは、市民、NPO、企業、行政などの間に立って様々な活動を支援する組織であり、市民などの主体で設立された、NPO などへのコンサルテーションや情報提供などの支援や資源の仲介、政策提言などを行う組織を言う（内閣府、2011; 1）。

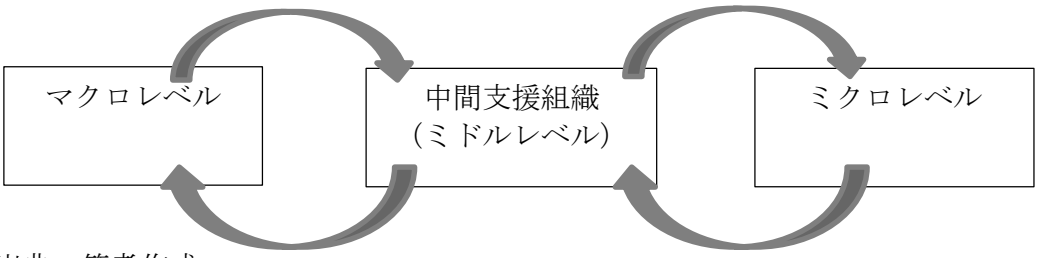
青木孝弘によれば、日本では、1990 年代に NPO 法制化を目指す国民的運動の最中、当時主導的立場にあった日本ネットワーカーズ会議（1995 年）や市民フォーラム 21（1996 年）、日本 NPO センター（1997 年）など NPO 先進国である英米の調査研究を行い、その報告書の中で中間支援組織の必要性が強調されたことが契機となって、全国に急速に普及拡大した。青木は内閣府（2002）を引用し、中間支援組織については、必ずしも明確に規定されてた定義があるわけではないが、中間支援組織に期待される機能として情報提供、資源や技術の仲介、人材育成、マネジメント能力の向上支援、ネットワーク・コーディネート、評価、価値創出の 7 つの機能が抽出された。青木は、中間支援組織による取り組みをマクロとミクロの二つのアプローチに分類して整理し、マクロ的アプローチは、財務統計調査を活用してセクター全体のプレゼンスを高めるアドボカシー[4]機能であり、他方、ミクロ的アプローチは、評価ツールを活用して個々の事業者のパフォーマンスを高める、ボトムアップ型のマネジメント支援機能ともいえる（青木、2015; 23-25, 34）。

三矢勝司、吉村輝彦、秀島栄三の「まち学習プログラムによる多次元的ネットワーク形成における中間支援組織の役割」によれば、日本では、1995 年以降、市町村が設置して運営を民間に託す、公設民営型の中間支援組織の設置と運用が急速に広まった。中間支援組織は「資金や技術、ネットワークや情報といった各種の活動に役立つ資源を適切なタイミングで市民やまちづくり組織に提供することを通じて、まちづくりの主体形成を促す」存在であり、まちづくり活動の活性化やネットワーク形成に役立つとされるためである。中間支援組織が、人材を集積し、ネットワークの多様性を広げ、つながりを演出するプログラムを実施し、多次元的ネットワーク形成を促進する上で有効な取り組みが明らかになれば、コミュニティ再生に向けて汎用性の高い解決策の一つとなりうる（三矢、吉村、秀島、2014; 1155-1156）。

本研究が扱うチェンマイの日本人長期滞在者に関わる日本側とタイ側の組織は多数ある。政府機関というマクロレベルと個人というミクロレベルの間に重要な主役を果たしているのは、中間支援組織である。チェンマイにおける日本人長期滞在者を下支える組織・機関は、マクロレベル（政府機関）、ミドルレベル（中間支援組織）、ミクロレベル（個人）の 3 つに分類される。その繋がりは、図 9 に示す通りである。

[4]日本では、「政策提言」や「権利擁護」などの意味で用いられる。

図 9　マクロレベル、中間支援組織、ミクロレベルの繋がり



出典：筆者作成

上述の各レベルの間を埋めるために、ネットワークが必要となる。そのネットワークは、ミクロレベル、ミドルレベル、マクロレベルの間を繋ぐことができる。

2.5.2　社会的ネットワーク

ネットワークという用語は、野沢慎司によれば、人類学や社会学で使われてきたが、バーンズやボットのパイオニア的研究にさかのぼる。親戚、友人、職場仲間など多様な契機で作られた個人間の紐帯が網目状に連鎖して多様な構造をアプローチよりも有利な位置を占めているというのが初期ネットワーク研究であった（野沢、2009; 164-165）。

野沢は、ネットワークについて次のように述べている。人々は、家族という同居している世帯メンバー、また居住地の近接した相手だけが自分の重要なコミュニティのメンバーであるわけではない。現代では、血縁と地縁に限らない多様な人間関係のネットワークが構築されている。そして、どのようなネットワークをもっているかが、個人の仕事先やその帰結に影響を与えている。したがって、どこにどのように住みたいかという人生上の重要な選択に対しても直接・間接の影響を及ぼしていると推測される（野沢、2009; 116 ）。

藤崎宏子 によると、社会的ネットワークとは、集団や組織などの範域に限定されない人間関係の広がりをとらえるためにつくられた概念である。また、年代によって社会的ネットワークが異なって、中間期においては、特徴的な社会活動の多様さゆえに、友人関係も領域別に分化した一面的関係となりやすく、それらは多くのばあい個人の主要な役割に「融合（他の役割関係を契機として友人関係が形成され、以降も本来の役割関係と友人関係とが分かちがたく結びついている）」している。したがって多様な役割関係に対応した多様な友人関係が形成されてはいるが、役割移行にともなう友人関係の変動もまた大きい。一方、高齢期には、個人の中心的な役割からの離脱が進む。友人関係が従来の中心的役割の「代理（友人関係が主要な役割にもとづく社会関係の代替物として機能する）」や「補助（友人関係と他の役割遂行とが共利共生の関係にある）」をすることもある。したがって高齢期の友人関係は、中年期にくらべてより他面的な関係に発展しやすく、個人と社会の統合点としても、また個人の自己イメージの維持にとってもいっそう重要なものとなるのである。「高齢期」という特定のライフコース上の段階について考察するにあたり、中間期から高齢期にかけての役割移行、高齢期における依存性の増大、ネットワーク自体の弱体化などの諸条件に留意するとしている（藤崎、1998: 17-19）。

ネットワーク（network) は、スティット・アパカロによればいくつかの次元をリンクして関係を結んでいるのである。これは、人間の相互作用、水や電気の共有やシステムなどの公共のネットワークなどを見ることができる。物理的で相互にリンクした構造であり、関係のパターンが様々ある（Apakaro、2004; 5-6）。

また、アパカロによれば、ソーシャルネットワーク（social network）とは、個々のレベル、個人と団体、団体とネットワークを含む人間社会での関係を指す。通信、知識の交換、協力活動、依存性のようなものに関連する行動との関係によって、様々な構造や形を成している。ネットワークそのものは、文化的、共生的であり、相互学習のプロセスから生まれる。ネットワークとグループの定義は、以下の通りである。グループは、同じアイデアを持つ人や類以の経験を経った人で構成されている。一方、ネットワークは、個々の持っているアイディアが異なってもネットワークを構成できる。ネットワークのメンバーが共通の目標を達成するための行動をしている。また、グループの方は個々に関連付られている固有のものであり、より密接に集まる。ネットワークの方は共通の目的を持っているが、自分のアイデンティティを失っていない（Apakaro、2004; 58-59）

スティト・アパカロによれば、ネットワークは、役割や種類によって分類できる。役割については、以下のように 3 つに分類できる。一つ目は、活動などのネットワークである。地域レベルでのプロセスまたは共通の問題点に焦点を当てる。例えば、主婦ネットワークである。二つ目は、支援機能のネットワークである。例えば、ナーン県にある愛するネットワークなどの活動である。三つ目は、資金やコンサルティングを推進する機能のネットワーク、例えば、研究支援機関などである。また、種類で分類すると、内務省コミュニティ開発局などの公的機関、産業協議会や輸出業者協会などの非営利団体（NPO）、YMCA などの民間部門、ローカルな漁民のネットワークなどの市民ネットワークの 4 つに分けられる。（Apakaro、2004; 105）

中間支援組織は、様々に分類できる。中間支援組織の目的は、ビジネスの支援、ボランティア活動の支援、生活の支援、スポーツ活動の支援などそれぞれで異なっている。また、政府、民間、もしくは中間支援組織の会費など支援金の源が異なり、役割や種類によって他の組織（マクロレベル、中間支援組織、ミクロレベル）のネットワークの構築の方法も異なっている。中間支援組織の役割が果たされると、個人、グループ、組織という各レベルの繋がりが生み出され、社会面、文化面、経済面に大きな影響が及ぶと考えられる。

本研究は、社会関係資本の理論に基いて社会的ネットワークを論じていく。社会ネットワーク分析は、組織と個人、組織と組織の関係を研究する組織論的な方向性をもつ。チェンマイの長期滞在を支援する日本の中間支援組織とタイの中間支援組織が、いくつか設立されており、それらの中間支援組織の背景、目的、活動、役割などについて、第 5 章で分析する。

2.6　ジャパナイゼーション

上述に述べたグローバル化はヒト、モノ、カネ、情報などのグルーバルレベルにフローしている。ジャパナイゼーション（Japanization）も、グローバル化の一つの付随現象である。

グローバル化につれて世界規模でヨーロッパ、アメリカ、日本などの商品や文化が広がっている。ヒュー・マッカイは、文化のグローバル化による「文化帝国主義」の概念を概括し、これは構造的分析であり、二つの概念を軸としているとした。すなわち、西洋とアメリカの支配

的文化が少数文化の多様性を圧倒し、均質化する過程であり、これはまたアメリカなどの西洋諸国の経済的利益にかなった戦略でもあるとしている（マッカイ、2006; 72）。

本研究では、タイにおける日本の影響をジャパナイゼーションの概念を用い、アタジャック・サタヤーヌラックと鈴木規之の研究を引用しながら論じていく。

ジャパナイゼーションは、第二次世界大戦以前に、日本が大東亜共栄圏を形成するため、アジアを侵略した際に生じたものに端を発する。その後、日本製品・商品というモノの形でアジア各地に浸透していった。東南アジアの中で最も日本の影響を受けたともいわれているタイにおいては、日本からの電気製品（モノ）、日本企業の従業員（ヒト）、投資（カネ）がタイ社会へと流入してきた。1960 年代以降、トヨタを代表する大手の日系企業がタイへと進出してきた。その際、タイ政府は、産業投資奨励法を制定し、投資委員会（BOI）を設立した。それゆえ、タイ人の生活は、日本製品・商品が溢れるようにはなったが、それがモノとでしか関係性がない日本に対しての反感を生み出し、タイにおいて日本製品不買運動を引き起こすきっかけにもなった。1980 年代からは、日本の J-pop やアニメなどポップカルチャーがタイ人の若者の心を掴み日本ブームを引き起こした。この年代からは日本政府は、タイ人学生や研究者に対し奨学金を援助し、ソフトの面においても日本の影響を強めるように努めた。つまり、モノだけではなく、文化や社会貢献の面においても 2 国間において新たな関係性が構築されるようになったのである（Attachank、2005; 鈴木、2011）。

タイの日本研究者であるアタジャック・サタヤーヌラックによれば、日本の影響はアセアンに単に貿易相手国ではなく、アセアンの国々で部品や製品の生産ラインを建設し、それをアセアンの中に流通するとしている。また、タイでは大学生への奨学金支援、タイ日文化センターの設立、日本企業の就職募集などを日本政府から得られるのである。それらのゆえにタイ人は日本に対していい印象を付けられると思われる（Attachank、2005：166-182）。

タイ研究者である鈴木規之によると、タイにおけるジャパナイゼーションは物質的側面から非物質的側面へ、言い換えすれば生活様式から価値観へと影響の側面が広がり、都市の富裕の若者を中心に J ポップのファンやコスプレなどが流入しつつある（鈴木、2011: 33）。このようにタイ人は、日本の製品と文化的な製品を消費をするようになりつつある。そして、日本の影響はタイの経済のみならず、文化、社会というタイ人の生活の側面までも及んでいると考えらる。

このような消費の状況は、ジョン・トムリンソンの「文化帝国主義」[5]言説の影響をもって分析できる。トムリンソンによれば、西洋先進国、特にアメリカの資本主義文化の世界中への広がりを、メディア文化、消費分化などの枠組みでとらえ、文化のグローバル化について論じている。トムリンソン自身はグローバル化が単なるアメリカ化ではないと批判的に論じているように、タイの消費行動は日本の「文化帝国主義」の領域に入っているわけではない。

しかしながらタイと日本の両国の状況を見た場合、平等な相互関係とは言えない。ウォーラーステイン（I. Wallerstein）の世界システム論の視点に立てば、中心から周辺に文化的にもヘゲ

[5] 「『文化帝国主義』は、文化的支配に役立つものとしての経済的な力と、経済的支配に役立つものとしての文化的力という二つの対照的な定義は、その奥にもっと大きい知的・政治的な隔たり内包している」（トムリンソン、1993; 16）。

モニーが強まる傾向にあると分析できる。日本とタイの事例では、日本が中心でタイは周辺であり、タイ社会に中に日本のモノ、カネ、ヒトの影響を日常生活の中で見かけることがしばしばあったとしても、日本においてタイの影響を見かけることは稀である。

本研究では、タイ社会におけるジャパナイゼーションの新たな潮流について考察する。現在まで、タイ人は、日本のモノ（トヨタ自動車、抹茶のお菓子）、ヒト（日本企業の従業員、単身赴任）、カネ（投資）から直接的もしくは間接的に何らかの影響を受けてきた。20 世紀末には長期滞在という新たな人的移動が始まり、観光目的ではなくタイ社会の中で生活を送る日本人も増えてきた。また長期滞在ビザを得て、タイに滞在している日本人の高齢者は、タイ人の若者や中高年齢層と相互関係を構築できる傾向が見られる。世代、年代が違えど関係性を比較的容易に構築することができるのはこれまで蓄積されてきたジャパナイゼーションの影響が関係していると思われる。

アマラ・ポンサーピットによれば、文化変容とは、異なる文化を持つ人々の二つのグループ間の社会的相互作用により、文化が変容していくことである。しかし、等しくない力を持つ社会的、文化的な相互作用の場合には、あるグループは他のグループの文化を受け入れる可能性が高い（Pongsapich、2000; 18-19）。

その結果、タイ人の日本人に対する親近感の高さが、日本人高齢者のタイ社会への適応をより容易にしているのではないだろうか。そのことはまた、日本人高齢者がタイを長期滞在の場所として選択する要因の一つになると考えられる。この分析は、第 6 章で行う。

2.7　ライフスタイル型の移動

本節では、ライフスタイル型の移動の定義と長期滞在とライフスタイル型の移動の関連性の 2 つの点について論じる。

2.7.1　ライフスタイル型の移動（lifestyle migration）の定義

ライフスタイルは、英語の「Lifestyle」からきている。嵯峨座晴夫 によれば、ライフスタイルとは、個人・集団に特有の生き方である。個人に特有な生き方から始まって集団（社会）の生活様式まで含むことになると説明されている。戦後、マーケッティングの分野でライフスタイルという用語が盛んに用いられるようになった。心理学的なアプローチでは、個々の消費者の生活に関わるものの欲求と関連する。一方、社会学的な研究において、個人が社会階層や社会集団において形成された共通の生活行動を意味することが多い。いわゆる、文化としてのライフスタイルである（嵯峨座、1999; 2-3）。

高田昭彦によれば、「ライフスタイル」とはある社会あるいは集団の成員が共有する生活の様式・営み方であり、しかもその個人の生き方をトータルに規定するようになった認識と行動の枠組を指す。前半は、マックス・ヴェーバーが成層構造を非経済的要因によって説明しようとする人々によって重視された。その後、社会経済的変数のもつ文化的拘束力の弱化に伴い、ライフスタイルは選考を共有する人々の集合を記述する概念として再規定され、人々の行動や嗜好を規定するにあたって社会経済的地位と同格の独立変数と見なされるようになってきている。さらに、近年、単なる生活様式 （way of life） ではなく、それ自体で個人のアイデンティティを決定する価値を示すものという意味が付加される。企業のマーケティング戦略の基礎と

なる消費者行動論などでキー概念になるとともに、個人の生活諸関係にも導入されている（高田、1990; 899-900）。

また、森岡清志 によれば「ライフスタイル（life-style）は以下のようにまとめられている。現代のライフスタイル論は、財の選択的消費を伴う生活行動が、諸個人の社会経済的属性によっては、充分に説明されなくなった事態を背景として成立している。消費者行動、政治行動、余暇行動などを被説明変数とするとき、ライフスタイルは社会経済的地位と同格の独立変数としての位置を与えられるようになった。かつてヴェーバーは経済秩序の次元で人々に配分される階級的地位とは別に、社会的秩序の次元で配分される身分的地位なる概念を提示し、これを特定の生活態度に表現される財の消費の原則に従って成層化される地位と規定したことがある。現代のライフスタイル概念は、この源流を継承・拡張させ、ザブロツキーや井関利明、松本康らによって種々の規定が試みられている。それらをまとめ、ここではライフスタイルを、生活財に対する個人の選考のパターンと定義しておこう。このライフスタイルは生活構造が文化システムと接触する部分を概念化したものである（森岡、1993; 1457）。

川崎賢一によれば、ライフスタイルとは、「個人や集団の生活におけるマナーあるいは様式」という。言い換えれば、「私らしいやり方・生き方・生活の仕方」のことである。ライフスタイルの構成要素には、いくつかある。まずは、消費行動論的には、パーソナリティ、プロダクト、セッティングの 3 つが重要である。つまり、どのような人か、どのような商品か、その商品が置かれたり使われたりする文脈である。しかし、社会学的には、これだけではなく、パーソナリティにプラスして、文化資本や文化階層、集団的アイデンティティなどをその構成要素として追加する必要があるとしている（川崎、2006; 34）。

嵯峨座晴夫 の高齢者のライフスタイルの研究によれば、高齢者のライフスタイルの生活の次元は、①生活行動（活動）②生活時間　③生活意識の 3 つに分けられるとされている。嵯峨座の研究では、経済活動、家計と資産、健康、介護、学習・社会参加活動が取り上げられている（嵯峨座、1999; 18）。

また、総務庁統計局の「社会生活基本調査」のデータを利用して、高齢者の生活時間と生活行動の特徴を主に「3 次活動」が中心であるとしている。この調査では、20 種類の活動を以下の 3 区分にまとめている。1 次活動は、睡眠、食事、見の周りの用事など生理的に必要な活動である。2 次活動は、仕事、通勤、通学、家事、介護、育児、買い物など社会生活を行う上で義務的な性格の強いのである。3 次活動は、1 次活動、2 次活動以外で各人が自由に使える時間における活動、つまり、一般に余暇活動に当たる（総務庁統計局、2013；13）。

このように、ライフスタイルとは、個人または集団の生き方、生活の仕方である。主な生活活動は、生理的な活動、社会的な活動、余暇活動の 3 つである。その上で、ライフスタイル型の移動について論じることとする。

ウィリアムズ、キング、ウォーンズ、パターソンによると、ヨーロッパの人々が定年退職後の国際移動の人数増加の主な要因は、①長寿の増加と早期退職で定年退職した人数が増えたこと[6]、②所得と富の蓄積が増加したこと、③仕事や観光での国際移動によって外国の知識や経験

[6]1950 年代から 1960 年代の間に欧州男性の平均は、45 年働いて、残りの時間が 10～15 年あった。今日の人々は、35～40 年働いて、残りの時間が 20～25 年であるため、国際移動を含む退職戦略となった 。

を持つものが増加したことである。これらの要因により、退職後にセカンドライフとして外国の新しい社会でレクリエーション活動などを始める者が増加した（Williams, King, Warnes and Patterson、2000; 17-19）。

ベンソンとオライリーによれば、ライフスタイル型の移動では、移動者はスローライフ（slow life）を望むという。そして移動先の選定においては、スローライフが可能となる、物価、気候、健康、コミュニティの関係性という要素を重視するという。移動者各人は異なる目的を持っても、個人の生活と仕事あるいは生活の性質と自由さのバランスを考えるという点で、共通点がある。社会変化とともに、一般的な観光をはじめ、人々が持つ価値観も変わりつつある。ライフスタイル型の移動は、短期滞在やセカンドホーム、定年退職して滞在するなどの形をとるとしており、雑誌、ウェブサイトなどのメディアにおいて、数多くの事例が掲載されているとしている（Benson and O'Reilly、2009; 609-625）。

長友淳はミケイラ・ベンソンを参照し、ライフスタイル移住者（lifestyle migrants）を「経済的理由あるいは仕事や政治的な理由など伝統的に主流であった移住理由からではなく、より広範な意味での生活の質を重視して移住する者」と定義している。人々は、「自分探し」「海外への憧れ」「自己実現」「海外体験」など様々な理由で、海外に暮らすようになった。ライフスタイル型の移住は、経済的に移住の必要性を必ずしも有しない中間層が、移住・移動している点に特徴がある（長友、2013; 10）。

このように、ライフスタイル型の移動は、対象者や目的によってライフスタイル型の移動の意味・定義が異なる。日本人長期滞在者は、長期滞在という観光を出発点としてライフスタイル型の移動の現象になりつつある。また、海外に滞在している途中で目的や期間が変更されることがあるため、観光、短期滞在、長期滞在、移住としてはっきり区別することはできない。長期滞在の現象は複雑であいまいなため、集団レベルおよび個人レベルのフィールドワーク調査が必要となる。途中で現地の人と結婚したり、日本より高い水準の生活が送れることや日本社会から逃れたいことなどが要因となってチェンマイに移住することを決めて、個人化したライフスタイル型の移動になる傾向がうかがえる。

本研究では、チェンマイでの主に定年退職後における日本人の長期滞在に焦点を当てる。第7章においてチェンマイにおける日本人のライフスタイル型の移動について考察する。

2.7.2 観光と長期滞在とライフスタイルの関連性

次に、長期滞在とライフスタイルの関連性を述べている先行研究を挙げる。

ウィリアムズ、キング、ウォーンズ、パターソンは、観光と退職移住者の関係があると論じ、その関係とは、アメニティ領域の周りに住居すること、新規および巡回ライフスタイルの進化、家族や友情のネットワークになる重要な友人・親戚訪問（Visiting friends and relatives）という3つである（Williams, King,Warnes and Patterson、2000; 22）。

東南アジアにおける日本人のライフスタイル移動/観光について論じている小野真由美によれば、日本人リタイヤーにとって、ロングステイと国際リタイアメント移住は、経済的、地理的に人気のあるライフスタイルとして選択されている。マレーシアでの日本人のロングステイと

タイ・バンコクでの日本人のそとこもりの事例を挙げ、観光より生き方に関わる戦略であるとまとめている（Ono、2009）。

人々の国際移動には、様々な側面が見られるが、主なものは経済面と社会・文化面である。まず、経済面であるが、生産年齢に達すると、仕事を持つことが必要であり、家族のために稼がなければならない。年金受給者は、年金で生活しなければならないので、節約し、物価が安く十分に満足する商品とサービスを求められる海外に移動する。二つ目は、社会・文化の面である。生産年齢にある人は、自由、個人の生活と仕事ライフのバランス、ジェンダーの平等（特に女性）を追求している。年金受給者は、暖かい気候、趣味、勉強、活動、生活を目的に移動する。

日本人長期滞在者は、長期滞在という観光を出発点としてライフスタイル型の移動の現象になりつつある。また、海外に滞在している途中で目的や期間が変更されることがあるため、この移動を観光、短期滞在、長期滞在、移住としてはっきり区別することができない。長期滞在の現象は複雑であいまいなため、集団レベルおよび個人レベルのフィールドワーク調査が必要となる。

2.8　先行研究

本節では、日本人のロングステイ、長期滞在についての関連する先行研究を整理する。まず、タイの長期滞在について先行研究を整理する。

タマサート大学の研究とコンサルティング機関（Thammsat University Research and Consultancy Institute）は、タイの長期滞在の発展および支援、とりわけ 50 歳以上の外国人観光客の長期滞在も促進する方法を研究した。長期滞在の観光者になる前に、滞在地を観光してきたことがある人が多く、その後満足感があって再びもどってくる傾向がある。このような高齢者の観光客は高い購買力を持ち、長期的に観光する人たちなので、タイ観光に対していい影響があるであろう。また、ヨーロッパや日本などと比較すると、タイでは、気候、物価、様々な活動などの面が利点あるが、そのための準備の不足や言語の能力の問題という欠点がある。外国人対象者のニーズを満たすため、マーケティングやプロモーション戦略を作成することが必要あることを明らかにした（Thammsat University Research and Consultancy Institute、2002）。

ドゥアンジャイ・ロータナワーニットは、日本政府の長期滞在の支援について研究し、以下のようにまとめた。日本政府の海外における長期滞在の支援は、2 つの時期に分けられる。初めは、1986～1989 年に日本が好景気で円高であった時期で、定年退職後に海外に移住・永住することを支援する政策である。もう一つの時期は、海外に移住・永住ではなく、一時的に海外での生活体験のような長期滞在を支援政策に変更になった 1992 年から現在である。しかし、1989 年以降の景気低迷のため、日本人は必死に働くことより、楽しい人生を送るという考え方に変わり始めた。それにより、日本政府の長期滞在の支援政策の目標と日本人の考え方に齟齬が生じた。にもかかわらず日本政府と関連企業は、その後も 20 年間、外国での高齢者の長期滞在を奨励しているが、毎年海外に行く日本人の数は低迷し、受け入れ国が人数と経済面の利益を期待することはできなくなった。タイの場合、実際、日本人長期滞在者（定年退職者）のほとんどは、バンコクとバンコク周辺より、タイ北部地域に長期滞在する。そして、長期滞在の

支援政策は、バンコクとその周辺の過多な不動産問題を解決できていない（Lortanavanit、2004）。

プラトゥアン・ホンサラナゴンのチェンマイ県における日本人受給者向けの活動の研究は、以下のようにまとめられる。チェンマイでの日本人の増加の主な要因としては、日本の高齢化社会、家庭の構造変容、日本の年金制度の変化が考えられる。海外に長期的な観光をすれば、セカンドライフを楽しめること、新たな人生の目的（生きがい）を持てること、結婚生活の関係性を再考する、外国の生活経験などができることなどを考える人が多い。一方、チェンマイの方には、タイの中に有名な観光地、ユニークなラーンナー文化、宿泊施設、病院、ゴルフのサービス、インフラストラクチャーなどが充実しているのである。物理的なものは備えているが、日本人と現地の人の隙間を埋める活動はあまりない。その問題を解決するため、タイ政府がメインになって、タイ料理などタイ文化を有料で勉強できる施設を設立することを示唆した（Hongsranagon、2005）。

高橋由典は、2005 年にバンコクとチェンマイ在住の日本人長期滞在者の実態調査を行った結果を、以下のようにまとめた。バンコクとチェンマイにおける長期滞在団体に所属している日本人長期滞在者のみを対象としてアンケート調査を行い、バンコクでは 28 部、チェンマイでは 57 部の有効回答があった。また、バンコク在住 8 人、チェンマイ在住 3 人にインタビュー調査を行った。日本人長期滞在者が、観光、スポーツ、語学、社会貢献など様々な活動に対して積極的にチャレンジしていたこと、バンコクとチェンマイの長期滞在者団体は、長期滞在の初心者へのアドバイス、様々な活動、社会貢献活動まで行い、これが日タイ間の草の根レベルの国際交流が日本人長期滞在を通して進展していると研究結果ではまとめられている（高橋、2008）。

河原雅子は、タイ・チェンマイにおける日本人長期滞在者と地域間の交渉や交流の状況を分析した。チェンマイに長期滞在するため、インフラストラクチャーとシニア長期滞在者の協会が不可欠であること、日本人の長期滞在者は、日本語と日本文化というプロパティ（財産）を使用して地域社会との関係を構築していることを明らかにした（河原、2010）。

パットナリー・スィスパオーラーンとナッタポン・アッサラットは、タイ国とタイ人に向けた長期滞在中の日本人高齢者の行動と意識を質的調査により研究した。目的は、タイ国とタイ人への長期滞在中の日本人高齢者の期待を明らかにすることで、心理的距離や文化的疎外の概念を使用している。研究方法は、バンコク都、チェンマイ県、ホアヒン市（プラチュップキーリーカン県）において長期滞在している日本人 22 人へのインタビュー調査である。結果としては、滞在期間が 1 年間未満の日本人の多くは、タイ人がフレンドリーなことに好感を持っている。滞在期間が 2〜5 年間の日本人は、カルチャーショックを感じ、タイに長期滞在することを再考し始める。そして、滞在期間 5 年間を越えた日本人は、文化の違いの感覚をすべて排除できないが、タイの人の考え方を理解し、ローカルとの結合を開始すると結論づけている。また、長期滞在を促進するために、ローカル（地元）の人々と共存もしくは日常的生活を送ること、例えば、伝統的活動を一緒にすることや日本人の側がタイ人に専門知識を伝達することなどが必要だとを示唆している（Srisuphaolarn and Assarat、2012）。

ワーラット・マッタヤマブルットは、チェンマイにおける日本人年金受給者の長期滞在の観光マーケティング戦略について研究した。342 部のアンケート調査による結果から、日本人年

金受給者の長期滞在観光客のための観光マーケティングは、製品およびサービスの開発、長期滞在の観光のネットワーキング、人材開発、価格、友達から友達へ（Friend-To-Friend）[7]、政府との連携という観点から考慮されるべきだと結論した（Madhyamapurush 、2013）。

スワンナー・ブアカオとナーリー・ウィラキットは、タイ・プーケット県における長期滞在の観光者の地域社会へのインパクトの研究のため、プーケットのラワイ町とチャンタレー町に住んでいるタイ人にアンケート調査を行った。その結果、ラワイ町とチャンタレー町に対して、経済的側面の効果を示しているが、社会文化と環境の側面では悪い影響はなかった。このラワイ町とチャンタレー町における研究結果は、二つの町が互いに連携・支援をして、経済面の効果をもたらすことにさらに焦点を当てるべきだと示唆している（Buakhao and Weerakit、2013）。

ワライポーン・カーンジャナカールンとティラット・パンヨーは、チェンマイにおける日本人長期滞在者が滞在する期間を延長する決定する要因を研究した。調査方法は日本人 100 人、チェンマイに住んでいるおよび日本人長期滞在者と相互作用の関係にあるタイ人 30 人へのアンケート調査である。日本人対象者の属性は、74%が男性、65 歳以上が 66%、結婚している人が 83%、月に 30,000 バーツ以上の収入のある人が 86%、東京の住民が 20%である。日本人回答者の半分弱は、チェンマイに永住したいので滞在する期間を延長したいと考えているが、「永住」するかまだ決定していない人もいる。以下のように、「永住」の決定に影響を及ぼす 3 つの要因をまとめた。一つ目は、年齢、収入、配偶者の有無、チェンマイでの滞在期間、現在の宿泊先という個人の属性である。二つ目は、気候、物価、地理、現地の人々の優しさという経済、社会、文化、の要因である。日本人グループのメンバーになることは、チェンマイに滞在する期間の延長にあまり関係がなかった。しかし、新しい知り合いと友達になることは、チェンマイに滞在する期間を延長したいと考えることと関係性がある。また、タイ人との活動は、日本人のチェンマイに滞在する期間の延長と関係が見られなかった。理由としては、タイ人との活動やイベントの多くが在チェンマイ日本国総領事館による推し進められているからである。一方、ある日本人長期滞在者は、ボランティア活動するなどチェンマイ社会と関係性を構築する。一方、タイ人回答者は、60%が女性、66.6%が 40～60 歳、63.4%が学士以上の最終学歴、50%が自営業である。結果としては、56.6%がタイ人と日本人の友人から日本人長期滞在者を紹介してもらったことで、彼らの知り合いになった。日本人長期滞在者との活動は、63.4%が懇談会、スポーツ、日本語の習得である。日本人長期滞在者に対する印象は、73.3%が非常に良いというものであった（Kanjanakaroon and Panyo、2014）。

以上のように、タイの日本人長期滞在についての先行研究をまとめた。タイでの日本人長期滞在については、バンコク、プーケット、チェンマイなどで研究されているが、とりわけチェンマイでの研究は数多く、タイ人の研究者も日本人研究者も、チェンマイでの日本人長期滞在者を多く研究している。先行研究では、日本人の長期滞在の要因、日本人長期滞在者の海外体験、長期滞在中の日常生活、長期滞在による経済・観光の進展、長期滞在の目的地での生活や活動の実態、現地の人と交流などに焦点を当てた調査を行っている。しかし、先行研究の多くは、日本人側の調査に偏っており、日本人とタイ人の双方を調査する研究が少ないのが現状である。

[7]口コミを利用し、低コストで顧客の獲得を図るバイラル・マーケティング方法である。

次に、タイ以外の長期滞在について先行研究を概観していく。

ウィリアムズ、キング、ウォーンズ、パターソンは、南ヨーロッパにおける観光と国際退職移住を研究した。南ヨーロッパは、気候がよく、アウトドア・ライフスタイルが可能で、宿泊設備と物価のコストが比較的低いため、定年退職者に魅力的である。かつての退職移住は、ほとんど国内で、U ターン（地元に戻る）、家族のメンバーと一緒に暮らす、魅力的環境を求めることなどが主な理由であるが、20 世紀末から国際移住が増えている。国際退職移住の形態は、シーズンステイ、セカンドホーム所有、長期滞在の観光など多様である。この研究対象者は定年退職したイギリス人で、2,980 部のアンケート調査を行っている。明らかになった点は、観光と国際移退職移住の関係である。かつての観光の経験により、定年退職した後で新たなライフスタイルを海外求めることが促されるのである。特に、家族のメンバーや友人というネットワークがある場所を国際退職移住の目的地として決定する可能性が高くなると論じている（Williams, King, Warnes and Patterson、2000）。

篠崎美鶴は、日本からニュージーランドに季節的移住をしている 30 人の定年退職者にインタビュー調査を行った。この調査では、個人の背景をライフコース、社会経済的要因、親族、日常生活の 4 つの側面に焦点を当てて分析している。ライフコースの側面では、日本人対象者の多くが海外での仕事の経験を持っていた。例えば、ある会社員はニュージーランドへの出張があり、ニュージーランドでゴルフ会員権や自動車を持っており、現地に友人もいる。それにより定年退職後にニュージーランドで生活を送ることが容易になる。社会経済的側面では、夫の大多数は、少なくとも学士号を保有し、大企業や公共機関で採用されたホワイトカラーだった。定年退職後も、年金、利子所得などの退職所得を持っている。また、両国のいずれかで住宅を所有している。このような経済的な余裕があるため、海外に滞在することが選択できる。親族の側面では、日本人定年退職者のほとんどが、子育てや親の介護の義務から解放されているが、これらの義務から逃れるための口実として、海外に定年退職後に滞在する例もある。彼らは、これらの責任を全うし、海外に移動することができる。ライフスタイルの側面では、良好な健康とアクティブなライフスタイルを豊かにする。日本人定年退職者は、様々な趣味を持っており、ゴルフやテニスが最も一般的である。ニュージーランド永住権を持つ人は、日本の社会だけでなく、ニュージーランドの社会に関わる趣味を加える。季節的または一時的に滞在する人にとっては、趣味が一番の滞在理由になっている（篠崎、2006）。

長友淳はオーストラリアにおける日本人永住権保持者および 3 年以上の長期滞在者の合計 35 人にインタビュー調査を実施した。調査の結果は、オーストラリアへの日本人移民の主な移住の理由として、仕事と余暇のバランス、90 年代以降のライフスタイル選択の柔軟性、ジェンダーの不均衡性、職場内の人間関係や上下間の慣行、日本社会における余暇・教育・住環境の 5 つを指摘している。また、時間的拘束や人間関係、ジェンダー役割などの日本の社会生活や規範からの退避傾向が移住決定の要素として存在することが明らかになった。さらに、オーストラリアでは、日本より余暇や人間関係があるため、これらも移住の決定との間接的な関連性も見られた（長友、2007）。

小野真由美は、マレーシアにおける長期滞在の観光と国際定年退職後の移動（International Retirement Migration: IRM）の関係性を分析した。長期滞在の観光は、一般的な観光でなく、海外生活の経験を試みることである。日本人長期滞在者は、マレーシア政府が作成した MM2H

（My Second Home Programme）という外国人の長期滞在を支援するプログラムに参加し、マレーシアでセカンドホームの方が自由で楽しく質のよい生活が送れるとしている。また、長期滞在の観光と IRM の共通点は、日本の景気、国際移動・移住、家族構造、個人の安定性への経済的管理など日本社会の変容や経済成長が反映されていることである。受け入れ国に対しては、経済の成長、高齢者介護のための雇用増加などいい影響がもたらされる。それにもかかわらず、海外に長期滞在の観光と IRM は、年金難民、国際ホームレスのようなものだという批判的な意見もあると論じた（Ono、2008）。

前述の長友淳は、その後『日本人社会を「逃れる」オーストラリアへのライフスタイル移住』を著し、オーストラリアへの日本人移住者について、①移住プロセス（なぜ・どのように移住するのか）②定住プロセス（移住後どのように定住していくのか、移住後のライフスタイル）、③移住先社会における社会的・文化的相互作用（現地日本人社会との関係性や移住先社会や日本への帰属意識）の 3 点を中心に論じている。対象者は、永住権保持者及び 3 年以上長期滞在している男女（男性 14 名、女性 17 人＝31 人）である。年代によって 8 グループに分類することができる。内訳としては①オーストラリア軍人と結婚する女性、②国際結婚、③セミリタイアメント、④ワーク・ライフ・バランスに関心が深い 20－30 代の者、⑤現地企業で雇用されている日本人、⑥リタイアメント移住者、⑦留学生、⑧ワーキングホリデーの滞在者であり、①－④は永住者、⑤－⑧は長期滞在者である。エスニック組織の日本人クラブ、Japan Club of Queenland （JCQ）と Japanese Club of Brisbane（JCB）を通して、スノーボール・サンプリングを行い、質的調査を行った。長友によれば、ライフスタイル移住は、経済的に移住の必要性を必ずしも有しない中間層が移住の必然性を有しないまま移住・移動している点に特徴がある。現在の日本人移住者らが、移住後にオーストラリアで形成しているエスニック・コミュニティの現状や現在進行形の事象について、以下の 3 つの点について論じている。①ライフスタイルや価値観との関連では、現地の日本人コミュニティが、従来のエスニック・コミュニティの典型的特徴である人口の地理的集中ではなく脱領域化されている。②日本人移住者の帰属意識や日本社会との関連性について、彼らの多くはオーストラリア市民権取得を目指さず日本国籍を保持しているが、理想の人生や生活スタイルをオーストラリアで追求する。③近年日本人コミュニティ内で顕在化している日本人シングルマザーについて、社会福祉や子供の情操などの現実的要素と日本社会に存在するシングルマザーに対するスティグマや家父長制的イデオロギーに関する心理的要素の双方が、彼女たちの主体的選択としてのオーストラリア残留に繋がっている、と明らかにした。また、「ロングステイ」も「リタイアメント移住」もすべて「ライフスタイル移住」の中に入っていると分類した（長友、2013）。

サティ・ハミン・サタパ、タライベック・ムサエヴェ、ナツエ・ヒエダ、ノルマリス・アムザーの研究では、マレーシアにおける定年退職した日本人に関連した 2 つの問題を明らかしている。一つ目は、使用言語である。日本人長期滞在者の大半は、マレーシアとの非公式と正式な相互作用の双方のために英語を使用する。それは、現地の人々との異文化間のコミュニケーションを促進するであろうが、現地の言語（マレー語）を学ぶための動機付けがされていない。二つ目は、宿泊先である。日本人長期滞在者の多くが日本人同士のエージェント、あるいは自分自身で「LITTLE　JAPAN」（日本人が多く集まるエリア）に滞在することを選択する。このような言語と宿泊先の選択により、日本人長期滞在者はマレーシアに永住・移住することより

も定年退職後の楽しい生活を送ることを優先して考えていると論じ、また MM2H（マレーシア政府の長期滞在支援プログラム）は、日本人長期滞在者の与える経済的利益にのみ焦点を当て、平等や異文化などの点を考慮していないと論じている（Stapa, Musaev, Hieda and Amzah、2013）。

以上のように、マレーシア、ニュージーランド、オーストラリアなどにおける日本人長期滞在の事例を挙げた。これらの先行研究は、観光や国際定年退職後の移動（IRM）の定義を考察し、海外に長期滞在する個人の経験や背景、現地の日本人長期滞在者の実態や状況、現地の社会や現地の人々との交流などについて分析している。また、これらの先行研究からタイと他の長期滞在地の共通点と相違点が明らかになる。共通点としては、温暖な気候やよりよい生活できる場所に移動する傾向が高いこと、相違点は、受け入れ国の長期滞在に関する法律・条件、社会的文化的条件によって長期滞在の内容が変わっていくことである。

このように、日本人長期滞在者のは、様々な側面から研究されている。ビザの条件、長期滞在者の人数などはつねに変化しているため、本研究では新たなデータを用い、先行研究の調査項目を引用しながら、タイ・チェンマイにおける日本人長期滞在者の調査項目を検討する。加えて、海外との共通点と相違点をふまえながら、チェンマイの日本人長期滞在者の特徴を論じる。

そして、これまでチェンマイの長期滞在者の研究では取り上げられていない社会関係資本の視点から、異文化適応ができるといえる日本人の特徴、長期滞在に関する中間支援組織について送り出し側と受け入れ側の双方の調査から考察する。さらに、中心–周縁の関係性としてとらえられる長期滞在の受け入れ国タイのジャパナイゼーション現象とつなげて、タイ社会に対する日本人長期滞在のインパクトを明らかにしていく。

第 3 章

日本人の長期滞在の背景とタイ・チェンマイ県の概要

第 3 章では、人口構造や価値観などの日本社会の変動によって、定年退職後などに海外へ長期滞在することが選択肢の一つとして加えられたことから、自由な生活が送れる時代になってきたことを指摘した。本章では、長期滞在の背景となった日本社会とタイ社会の状況と基本的なデータについて考察する。

3.1　日本人の長期滞在の背景

本節では、3 つの項目を扱う。まず、人口構造の変化と価値観の変化および日本人の高齢者について論じ、さらに日本人の長期滞在者の背景について論じる。

3.1.1　人口構造の変化と価値観の変化

3.1.1.1 人口構造の変化と定年後の危機感

国連の定義では、総人口のうち 65 歳以上が占める割合が 20%を超えると「超高齢者社会」（Super Aged Society）とするとされている。近年の日本の人口構造について見ると、超高齢化時代を迎え、死亡率が出生率を上回るようになっており、大きく変化していると言えよう。高齢化の要因には、所得水準の上昇、医療技術の進歩、社会保障制度の整備・充実といった事象が挙げられる。少子・高齢化が進み、人口規模の減少がさらに大きくなると、経済成長率にも影響を与えることになる。その理由は、人口減少が労働投入量だけではなく、貯蓄率や資本貯蓄にも少なからず影響するからである（中本、 2009: 28-32）。日本が少子高齢化社会になったのには、二つの要因が背景にある。一つは少子化社会の進行であり、二つには急速なテンポで進む高齢化社会の存在である。

2015 年現在、日本では 22%強が高齢者となっている。2012 年には団塊世代の第一弾が 65 歳となって、年金の満額受給世代に入る。その後、現役世代の減少とも相俟って、2030 年には 65 歳以上人口は 31.8%にまで上昇すると予測されている。3 分の 1 が 65 歳以上ということは、高齢者が増えるだけでなく、国全体としてそのような高齢者らを支える人口が大幅に減るということでもある（野尻、2010; 16-17）。

2010 年の平均寿命は厚生労働省の発表によれば、男性 79 歳、女性 86 歳となっており、日本は世界一の長寿大国である（大竹、2013; 20）。

世帯の構造については、厚生労働省が発表している「国民生活基礎調査の概況」という調査がある。65 歳以上の単身世帯の数は、1989 年の 159.2 万世帯から 2008 年には 435.2 万世帯にまで急激に拡大している。この 20 年間でその数は 3 倍弱、実人数にして 276 万人（世帯）の増加となっている。また、1 人ではないが、高齢者の夫婦のみで生活している世帯は 29.7%であり、独居と高齢者夫婦のみの世帯を合わせると、高齢者のいる世帯の半分が高齢者だけで住んでいるというのが現状である（大竹、2013; 44）。

井上英夫によれば、高齢者医療保障の実態については、人口の高齢化は他国にみられないスピードで進み、2020 年には 65 歳以上人口が 25%を超える超高齢社会となる。とくに 75 歳以上の後期高齢者の増加が急であり、虚弱や寝たきり・認知症の高齢者数は、井上が『平成 7 年版構成白書』を引用し、1993 年には約 200 万人であるものが、2025 年には 520 万人、なかでも介護を必要とする認知症の高齢者数は 10 万人から 40 万人へ増大すると推計され、こうした中で、社会的コストとりわけ財政負担は増大すると論じた。したがって、高齢期生活に関しては、国民の 89.2%が不安を感じているが、不安の内容で最も大きいのが自分や配偶者の病気や介護に関するものである。また、日本の高齢者は介護費用にも興味深い調査結果がみられる。介護の場所により介護費用が異なり、病院では年間 116 万円（年間総収入比平均値 20.6%）、施設では 77 万円（同 14.1%）、自宅では 52 万円（11.4%）であり、全体の 4 割の介護者が負担を感じている。さらに、医療費の動向を見ると、患者負担の増大という傾向がある。高齢者の医療費に占める患者負担は 1983 年の 1.6%から 1992 年には 3.9%に増えている。こうした状況では、入院した場合の医療費などの家計への圧迫は大きなものとならざるをえない。東京都の調査では、圧迫を感じている人は 70%に上っているとまとめている（井上、1995; 27-30）。

また、今後の生活にも不安感を持っている高齢者が多い。日本人高齢者は定年後約 30 年間ほど生活を送らなければならない。大竹のり子は高齢者無職世帯の 1 か月の収入と支出の平均について、『総務省・家計調査報告（平成 21 年）』を引用して以下のようにまとめている（大竹、2013; 21-22）。

夫婦：収入　約 22 万 4000 円

（公的年金など約 20 万 8000 円、その他約 1 万 6000 円）

支出約 26 万 6000 円

（税金など約 3 万 1000 円、食費約 5 万 8000 円、光熱費 1 万 9000 円、保健・医療費約 1 万 5000 円、教養娯楽費約 2 万 8000 円、住居費約 1 万 5000 円、その他）

合計で 毎月赤字約 4 万 2000 円

シングル：収入約 12 万 1000 円

（公的年金など約 11 万 2000 円、その他約 9000 円）

支出約 15 万 2000 円

（税金など約 1 万 1000 円、食費約 3 万円、光熱費 1 万 1000 円、保健・医療費約 9000 円、教養娯楽費約 2 万円、住居費約 1 万 3000 円、その他）

合計で毎月赤字：約 3 万 1000 円

また、野尻哲史は、2010 年 4 月にフィデリティ退職・投資教育研究レポート[8]を引用し、「退職後の生活で大きな支出はなにか」の質問に対して、医療費 67.7%、食費 31.7%、税金・社会保険料 31.1%、介護費 28.9%、光熱費 19.2%、家賃 13.7%、交際費・レジャー費 13.0%、住宅ローン 12.6%、子・孫などの養育費 7.7%、子・孫などに残したいので使えない 2.7%との回答があったとしている（野尻、2010; 26）。

[8] フィデリティ退職・投資教育研究では「サラリーマン 1 万人アンケート」を実施した。サラリーマンとはいっても、会社員のみならず公務員なども対象に含め、合計 1 万 976 人からインターネットで回答があった。

少子高齢化、世帯構造の変化、寿命などの人口変化によって、医療、介護、年金などの社会福祉が影響を受けている。人口構造の変化に応じて、高齢者を支える労働力人口の負担が増えている。そこで、日本政府は社会福祉制度、特に年金制度と健康保険制度、介護保険制度を改革している。改革された健康保険制度の下では高齢者が負担する割合が上がる。加えて、年金の受給額が減少し、病気になった場合の自己負担分が増えるため、人によってはこの状況に適応できない。今後は日常生活が困難になる人、将来のことが不安になる人が出てきて、海外生活希望者が増えることになると考えられる。

3.1.1.2 日本人の旅行：日本人旅行者と東南アジア買春旅行

岩田隆一によれば 1965 年から 1985 年頃までの日本人男性の東南アジア旅行は、主に招待（接待）旅行や社員旅行で、旅行目的は買春というのが公然の秘密であった。1960～70 年代の日本は高度経済成長の只中にあった。国民の消費意欲も旺盛で、メーカーは販売拡大のために小売店、代理店、問屋など流通企業の招待（接待）旅行を盛んにおこなった。国内旅行の招待に馴れきった店主にとって、自由化されたばかりの海外旅行は魅力あるインセンティブであった。招待旅行主催者のメーカーにとっても小売店の店主に喜んでもらえれば、売り上げが伸びる。招待客は、ある一定の量なり金額を売り上げた店の経営者の場合が多かった。店主は長い間店を空けることができないため、目的地は韓国、台湾、香港、タイ、フィリピンなどの近隣諸国で 3 泊 4 日程度の旅行が大方であった。また、招待客の大方は中年男性であった。現地では、夕食後、大型バスで男性日本人旅行客がソープランドに乗り着ける。ひな壇にはネグリジェに番号札を付けた女性が並んでいる。好みの女性の番号を伝え、お金を払う。ホテルに連れ帰ることもできる。このような買春目的の海外旅行は 1960 年代から 80 年前半までタイ、韓国、台湾、フィリピンをはじめアジア全域で行われた。当時のアジアの経済状況は貧困の一言であった。日本だけが高度経済成長の中にあった。まだアジア各国の経済力は弱く、輸出品も農産物中心に、人々は貧しかった。売春は重要な外貨獲得手段であったのも事実である。1980 年代中頃から、東南アジア旅行の主役の座を団体で漁色に夢中だった男性に取って代わったのが、パッケージ・ツアーで旅行する女性だった。70 年代に急成長した個人客対象のパッケージ・ツアーが 80 年代には成熟期を迎えた。パッケージ・ツアーは女性も安心して参加できる。80 年代には女性の海外旅行者数が急増した。80 年に 115 万人だった女性旅行者が 89 年には 369 万人と 3.2 倍になった。同時期の男性の伸び率は 2.1 倍であった。女性客の増加で東南アジアのイメージも旅行目的も大きく変化した。グルメ、ショッピング、高級リゾート・ライフと多様化していった。女性旅行客は安さだけを好んだのではなく、アジアの物価水準で比較するとかなり割高であっても、良いものであれば積極的に購入していった。その一つがアジアの高級ホテルでの滞在である。当然買春目的の団体客はお断りのホテル群である。これらのホテルに注目したのも女性であったという。（岩田、2002; 36-39）。

3.1.2　日本人の高齢者

藤崎宏子は、高齢者の生き方について以下のように論じた。高齢期は、ライフコースの最終ステージを生きる人々の、日常生活の営みや心情を描くことが焦点となる。この期は、成人期に保持していた様々な社会的役割からの離脱過程とみなされる。雇用労働者として就労してい

たものは「定年」になる。子供の成長とともに親役割や主婦役割が形骸化する。また、高齢者は、まさに「高齢」であるがゆえに、さまざまな社会的役割を保持していた。そして、労働者から完全に引退したのちも、長年の「経験」や「知恵」が後続世代から尊重された。地域社会の中では、「長老」として欠くことのできないメンバーとして重んじられた。「元気老人」たちが望んでいる社会参加のための条件づくりは、経済、身辺、精神という「自立」の三側面である（藤崎、1998; 2-7）。

また、藤崎は、定年退職前と定年退職後の生活に対しての考え方や生き方を、以下のようにまとめた。 退職前の準備としては、ハード面では「経済」「住宅」「健康」が、ソフト面では「趣味」「人間関係」そして「心の準備」が重要であるという認識がほぼ共通にみられた。しかし実際の準備という点においては、ハード面に比べてソフト面の方が困難であるようだ。年長者は、退職前に、ハード・ソフト両面にわたって周到な準備をしていても、退職直後の精神的落ち込みが多くの場合避けがたい。したがって、「定年退職」という出来事は、少なくともその時点においては、ライフコース上の転機として不運続性のほうがより強く意識されている。しかし、その後の時間の経過のなかで、それぞれに「打ち込めるもの」や「趣味」をみつけだし、現在の生活を充実していると感じているものが多い。現在の「人間関係」のうち、友人については、仕事関係の友人の減少や絆の弱まりなどが指摘され、ほぼ全員が現役時代のままではないと感じている。しかし退職後、あらたな友人関係をつくりだしているものも多く、そのさい「趣味」を共有できることが友人になるための必須条件であると共通に認識されている。夫婦関係については、大部分のものがかってにくらべてその重要性を強く意識している。ただし友人とは異なり現在本人が打ち込んでいる「趣味」を妻と共有しているものはほとんどおらず、そのことが夫婦関係にとって重要だという認識も弱い。「趣味」については「生きがい」ということばで語られることがあっても、「人間関係」についてはそのような意味づけを与えているものはみられなかった（藤崎、1998; 82-83）。

3.1.3　日本人の長期滞在者の背景

本研究では、20 世紀末に顕著になった海外への新たな旅行・移動による長期滞在を焦点に研究するが、ここでは日本人の長期滞在の歴史的背景を論じていきたい。

佐藤雅明によれば、1635 年に武家諸法度が改められ、参勤交代が確立した。大名・小名は 1 年の交代、また 1 年ののち参勤するように命じられた。そのため、地方の人が、江戸（現在の東京）に第二の家を構える、または単身赴任するという考え方が普及していたこともある。長期滞在のため、地方の人が都市での生活を活性化をしようとする。しかし、その時代の大名・小名たちにとって、地方の暮らしだけでなく、都市に暮らすという旅先があると考えられる。地方の人は、都市では都市の要素を受け入れて暮らすか地方（非都市）の要素のまま暮らすかという選択ができる。したがって、このような参勤交代による江戸への移動は現在の長期滞在の暮らし方にもつながるものである（ 佐藤、2009）。

長期滞在型避暑リゾートが広めた軽井沢の事例として、大澤は次の 2 つの要素を挙げている。第一に避暑のために軽井沢を訪れる人々による「軽井沢避暑団」という自治的共同体が 1922 年に設立されたことである。団の目的は、善良な風俗を守り、清潔な環境を築くことであり、時間と約束を守ること、うそを言わないことなどが励行された。第二は、楽しみのために自然に

目をむけることを重視したことである。この地で農業の大きな転換のきっかけをつくり、自然に従う人々の支援にも熱心であった。それらは、軽井沢で現実を忘れさせる旅行ではなく、暮らしそのものであると考えられる（大澤、2008; 134-135）。

日本政府は、1986 年以降海外への長期滞在に関するプロジェクトを開始した。1986～1989 年には、日本は好景気で、日本政府は定年退職した人に海外への移住という選択肢を提供していた。移住の支援のため、シルバー・コロンビア計画 92（Silver Columbia 92）という計画が立てられた。退職した人を、スペイン、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドなどに移住することを選択させるものである。この計画の目的は、円高で海外に余裕がある生活を送ることと海外に不動産投資をすることの 2 つが主であった。しかし、結局は計画のままで頓挫してしまった。その後、海外に滞在する需要は続いた。1990 年代や団塊世代の退職が近づいていた 2000 年代前半にもマスコミで「ロングステイ」が取り上げられた。「ロングステイ」は移住ではなく、一年の大半を海外で過ごそうというものである。同時にロングステイ財団が設立され、日本人のロングステイまたは長期滞在を支援する役割を担った。1990 代から日本が不景気になって、終身雇用などの社会構造が変化し、日本人の価値観も変化した。後期の長期滞在のプロジェクトは、海外での生活体験をする、日本より物価が安い海外でより余裕のある生活を送ることなどを目的とした。目的地は、ハワイ、北アメリカ、ヨーロッパ、アジアの国々などであった（野尻、 2010: Lortanavanit、 2004）。

3.2　チェンマイ県の概要

3.2.1　タイの概要

3.2.1.1 タイ王国の概要

タイ王国の基本データは、タイ国政府観光庁のハンドブック『タイ　ゴールデン・ワンダーランド』とタイ政府観光庁のハンドアウト『タイ王国の概要－タイ・ロングステイ』とロングステイ財団の本『ロングステイのすすめ』をまとめて以下の表に示す。

表 6　タイ王国の基本データ

項目	内容
地理	東南アジアの中心に位置し、ミャンマー（ビルマ）、ラオス、カンボジア、マレーシアと国境を接している。
面積	約 513,115km^2（日本の約 1.4 倍）
人口	約 6,500 万人（2013 年 7 月現在）
民族構成	タイ族約 85%、中華系 10%、山岳部にはそれぞれの文化や言語を持った少数民族が暮らしている。（モン・クメール系、マレー系、ラオス系、インド系）
首都	バンコク（英語名は Bangkok）
気候	バンコクから南が熱帯モンスーン気候、北が熱帯サバンナ気候
季節	乾季（11 月～3 月）、夏季（4 月～5 月）、雨季（6 月中旬～10 月）

時差	2 時間（タイは日本より 2 時間遅れ）
言語	タイ語。また地方によって方言があり、山岳部の少数民族は独自の言語を使用。
宗教	仏教（上座部仏教）95%、イスラム教 3.8%、キリスト教 0.8%、ヒンズー教 0.1%、その他 0.6%
通貨	単位：バーツ
国民一人当たりの GDP	5,678US$（2012 年）
ハンバーガー、ビックマックの値段	89 バーツ（279 円）（2013 年 7 月現在） （日本では 320 円）
日本企業数	1,371 社（2012 年現在）

出典：タイ国政府観光庁（n.d.）とロングステイ財団（2013、p.2-5）より筆者作成

3.2.1.2 タイの国内移動

タイ国内を移動する者は、交通やインフラストラクチャーが整っている地域、発展している地域、工場がある地域など就職ができる場所に多く移動する傾向がある。統計局によると、2000 年の人口と世帯の調査結果は、転入率と転出率を合わせた数字ではバンコクの率が最も高い。バンコクの住民は約 635 万人だが、移動した人は 526,373 人である。バンコクは、タイの首都で経済の中心であり、政府機関、民間企業及び教育機関が多い。表 7 のように、バンコクの転入率、転出率、増減率が高い。

表 7　2000 年のタイの地域別転入率、転出率、増減率（千人あたり）

地域	転入率	転出率	増減率
バンコク[9]	82.6	64.1	18.5
中部	85.3	39.7	45.6
北部	29.7	32.4	-2.7
東北部	20.1	35.5	-15.4
南部	40.2	31.5	8.7

出典：タイ国家統計局、人口と世帯センサス（2000 年度）

バンコクに移動する理由は、就職、家族の移動のため、教育などの順である。

3.2.1.3 タイと日本の関係

1) 人数

日本政府の外務省によれば、2014 年にタイに滞在している日本人数は、64,285 人（法務省、2014）であり、2015 年に日本に滞在しているタイ人数は、44,175 人（法務省、2015）である。

[9] バンコクは中部の中にあるが、表 7 の中部はバンコクを除いたデータである。

2) 経済

日本企業は、積極的に 1980 年代にタイに移動している。2013 年には 1,500 社以上の日本企業が、バンコクにおける日本人商工会議所に登録されている。タイのすべての直接投資の 61%で第 1 位である。

3) 貿易額

表 8　タイと日本の貿易額　　（単位：10 億円）

	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
タイから日本へ	26,651	30,093	30,515	20,697	29,937	29,885	34,889	35,072	33,198
日本からタイへ	19,625	21,536	21,522	14,952	18,400	19,532	18,857	21,503	22,995

出典：Ministry of Foreign Affairs of Japan（2015）

3.2.2　チェンマイ県の概要

3.2.2.1 基本データ

チェンマイは古い歴史と伝統・文化を有するバンコクの次にタイ第二の都市で、バンコクの北方 696 キロメートルに位置する北部上部の県である。北部はミャンマーの国境に繋がっている。面積　20,107.057 km^2 でタイの一番高い山であるドイインタノン山（2,565 メートル）がある。森林の領域 69.92%、住宅領域など 17.26%、農業の領域 12.82%である。人口は 1,675,279 人、人口密度 82.16 人 /km^2（チェンマイ県庁、2014）、気候は最高気温の平均 31.8 度、最低気温の平均 20.1 度、年平均気温は 25.4 度でバンコクに比べて冷涼である。季節は、雨季 5 月の半ば～10 月に毎日雨が降る。各所で洪水が発生することがあり、乾季 11 月～2 月半ばの平均気温は約 23 度で、山間部では冷え込みが厳しく、チェンマイ市内でも 12～1 月の早朝は 10 度近くまで下がることがある。しかしながら、日中の気温が 30 度を超えることもあるので寒暖の差が厳しい。夏季 2 月半ば～5 月の半ばに最も暑く、日中戸外では気温が 40 度を超える日もある（チェンマイ県庁、2014：在チェンマイ日本国総領事館、2015）。

3.2.2.2 歴史

チェンマイ（「新しい城壁都市」の意味）の歴史はバンコクよりもかなり古く、ラーンナー（「100 万の水田」の意味」）王国の首都として、マンラーイ王により 1296 年 4 月 12 日建造された。しかし、16 世紀半ばにラーンナー・タイ王国はビルマに敗北し、以降 200 年余の間、ビルマ勢力の支配下に置かれた。18 世紀終わりにトンブリー王朝のタークシン王によるビルマ軍撃退に伴ってその属国となる。次に、トンブリー王朝に取って代わった現ラッタナコーシン王朝の下で属国としての地位に置かれた。その時代まではチェンマイは自律的な統治形態が認められていたが、同王朝ラーマ 5 世王の治世下で地方行政改革が進められ、政治的には 1894 年に完全に現王朝に統合されるに至った。そして、立憲革命後の 1933 年にチェンマイ県となった。2016 年にチェンマイは 720 年になる。現在、バンコクに次ぐタイの第 2 の都市とされている。（遠藤、2009; 244）：チェンマイ県庁、2014）。

3.2.2.3 経済

経済的には、バンコクから鉄道が 1922 年にチェンマイまで開通したことに伴いバンコクとの結びつきが決定的に強まり、バンコクの華人商人との取引関係や人的ネットワークをてこにチェンマイでも華人商人が経済の主導権を握るようになった。さらに、サリット政権（1959～1963 年）以降の地域経済開発の下で、幹線道路網とチェンマイ国際空港の建設・整備、中央行政機構の出先機関の集中的機能と行政適機能の両面で北部における中心性を高めた。

1980 年代終わりから 1990 年代半ばにかけてバンコク首都圏を中心に起こった投資ブームは地方都市にも波及ぼし、とりわけチェンマイ市では高層コンドミニアム、高級ホテル、デパートなどが林立した。また、1985 年にチェンマイ市郊外（隣接するラムプーン県内）に工業団地が建設されたのをはじめ、主に幹線道路沿いに電子産業や食品加工業などの工場が建設されるようになった。このように近年、北部ではチェンマイ市にますます都市機能が集積し、それにともなってチェンマイ市及びその周辺では、交通渋滞、水質汚濁、ゴミ問題、地価高騰、歴史・文化遺産や景観の破壊など様々な都市問題も発生している（遠藤、2009; 244）。次に、チェンマイ県の県民総生産額は、1,320 億 9,800 万バーツであり、タイの国内総生産（GDP）の約 1.46％を占める。その内訳は、第 1 次産業 17.48％、第 2 次産業 11.85％、第 3 次産業 70.66％となっており、農業を中心とする第 1 次産業が趨勢的に減少している。その一方で、チェンマイ市は有名な観光都市であるため、観光業を中心とした第 3 次産業の比率が高くなっている（在チェンマイ日本国総領事、2015）。

3.2.2.4 観光

チェンマイは観光関連産業が発達している。チェンマイはバンコクを中心とする現王朝とは別系統の歴史を持ち、芸術、寺院・仏塔、料理、服飾などの面において、タイとビルマ（ミャンマー）の要素が融合した独自の文化を作り上げてきた。それらがチェンマイの重要な観光資源となっている。木彫り、銀細工、絵傘、絹織物、少数民族の織物などの工芸品も豊富である。市内のチャーンクラーン路で開かれるナイトバザールには毎晩多くの観光客が訪れる。市外にも観光地は多く、東方郊外のサンカムペーン郡には工芸品の製造・販売店が集まり、北方郊外のメーリム郡にはメー・サー滝や象のキャンプ場、蘭園などが点在する。西方郊外のドーイ・ステープからはチェンマイ市内を一望できる。県南部にはタイ最高峰のインタノン山がそびえる。山岳地帯の少数民族の村には、欧米人を中心に多くのトレッキング・ツアー客が訪れる（遠藤、2009; 245）。チェンマイ県は、世界有数の観光地である。チェンマイ県の有名な観光地は、自然的、仏教などの宗教と歴史的、クリエイションとアドベンチャーの 3 つのテーマである。また、チェンマイ花祭り、旧正月（水かけ祭り）、ロイクラトン（イーペン）祭りなど大イベントが毎年行われている（チェンマイ県庁、2015）。

3.2.2.5 インフラストラクチャーおよび施設

チェンマイにおける総教育施設は、1,146 か所、うちに国立大学及び私立大学は 12 か所、インターネショーンナール・スクールは 8 か所ある。治療施設は 43 か所ある。交通機関は、バンコクへ道路、鉄道、航空路線が整備されている。電気設備へのアクセス率は 98.73％、（全国 99.20％）水道へのアクセス率は、17.97％（全国 20.41％）である（チェンマイ県庁、2015）。

また、日本人の代表としてチェンマイの印象を語る、2004 年から在チェンマイ日本国総領事を務めた篠原勝弘は、「21 年ぶりのチェンマイ訪問で、チェンマイの急激な変化には驚かされた。市の外周から郊外に向けて放射線状に何本もの高速道路が走り、これを三重に環状線が交差するという、大都市並の道路交通網が敷かれている。これとは対照的に周囲を城門に囲まれた旧市街は名刹古寺が数多くあり、古い民家も数多く残っており、昔の面影を偲ばせます。中心部の京都風の古都のイメージと、近郊のモダンなイメージが共存している都市だ」と総領事の報道・広報のメニューに掲載されている（外務省、2014）。

3.2.3 タイ・チェンマイ：国際的な街

3.2.3.1 総領事館と領事館

チェンマイには世界 19 か国の領事館（総領事館を含む）と名誉領事館がある。総領事館がある国は、日本、アメリカ、中国である。領事館がある国は、インドである。名誉総領事館がある国は、バングラデシュである。名誉領事館がある国は、ドイツ、イタリア、オーストラリア、オーストリア、フィリピン、スウェーデン、ペルー、韓国、イギリス、チェコ、フランス、フィンランド、スイス、カナダである（チェンマイ県庁、2014）。

3.2.3.2 国際空港

チェンマイ県の国際空港の規模は、スワンナプーム国際空港、ドンムアン空港に次いで全国第 3 位である。国内線会社は、8 社で、国際線会社は、18 社である（チェンマイ県庁、2014）。

3.2.3.3 外国人観光客数

観光・スポーツ省観光局によれば、2014 年度タイに訪れた観光客の国籍は、中国、マレーシア、ロシア、ラオス、日本、イギリス、オーストラリア、韓国、インド、ドイツの順である。外国人観光客数は、表 9 の通りである（観光・スポーツ省観光局、2014; 4）。

表 9 2007 年～2014 年の外国人観光客数

年	観光客の数（人）	減増率（%）
2007	14,464,288	+4.65
2008	14,584,220	+0.83
2009	14,149,841	-2.98
2010	15,936,400	+12.63
2011	19,230,470	+20.67
2012	22,353,903	+16.24
2013	26,546,725	+18.76
2014（1 月～4 月）	8,620,644	-4.91

出典：観光・スポーツ省観光局（Ministry of Tourism and Sport, Department of Tourism）、2014: 8）

3.2.3.4 民族構成

チェンマイ県における山地民族全体の数は、229,382 人であり、うち少数民族の数は 72,791 人である。13 族の中で山地民族は 7 族、モン族、ヤオ族、ラフ族、リス族、アカ族、カレン族、ルワ族からなる。少数民族は 5 族、パロン、タイヤイ、タイルー、チーン・ホー、その他からなる（チェンマイ県庁、2014）。

一般的に、移民の移動は、経済や政治問題を動機として他の場所に移動する。タイ国・チェンマイ県の中で現在でも依然としてコミュニティや伝統的な文化を維持している移民は、中国人とインド人である。また、20 世紀末以降チェンマイに滞在しているアメリカ人、韓国人、日本人などの増加が顕著である。

1）華僑華人

かつて、タイに移民した華人の多くは、中国の南部、広東省、福建省、海南省からである。治安が悪い、飢饉、商売のためなどの理由で、タイなどに他の国に移動した。ランナー王国（現在はタイ国チェンマイ県）への華人移住者の移住経路は、陸路と海路である。バンコクとチェンマイの鉄道を整備したラーマ 5 世（1868～1910 年）の時代に、チェンマイに移住する中国人の数がピークになった。現在、チェンマイには中華街、中華の神社、中華スタイルの建物があり、また旧正月のような伝統的な文化も見られる。チェンマイの経済面や社会面に与えた影響が少なくない。2011 年には中華系タイ人の数はおよそ 80 万人で、タイの総人口の 14%ほどいる（National Statistical Office (Thailand)、2011; 8）。

また、王柳欄は、北タイに滞在している雲南系ムスリムについて研究し、雲南系ムスリムのタイへの移住を 3 つの時期の時期に整理した。第 1 期は、19 世紀後半から 20 世紀前半における雲南系ムスリム商人がタイへ定着した。第 2 期は、1949 年前後の国共内戦と中華人民共和国成立にともなう政治情勢の不安定化と社会的混乱を避けた移住である。第 3 期は、中国国境が閉鎖したのちに生じたビルマからの再移住者や文化大革命中の密出国者による小規模な移住である。その結果、北タイ（チェンマイを含む）には、漢人とムスリムの混住する華人社会が形成されたのである。北タイ人口のうち、ムスリム人口の割合は約 1.53%であり、モスク数は 37 箇所に留まる。北タイのムスリム社会は、雲南系ムスリム、同地に住むインド・パキスタン系ムスリムが構成メンバーである（王、2012; 321-322）。

2）インド人

大規模なインド人移民は、植民地主義の結果として 19 世紀と 20 世紀前半のみに発生した。自由な移民システムで、インド人の商人、事務員、官僚や専門家が移動した。独立後、1970 年代以降から移民数がふたたび増えて、ミャンマー、マレーシア、シンガポール、タイ、インドネシア、ブルネイなどへの移動を続けた（Ministry of External Affairs、 2004）。現在チェンマイにおけるインド人は約 2,000 人（400 世帯）である（チェンマイ・ムスリム、2010）。

チェンマイにおけるインド人の研究者のマニット・カナトーは、チェンマイ市内におけるムスリム教徒インド人の入植について研究を行った。1757 年にムスリムインド人が初めてチェンマイ市内にあるチャンクラン通りの辺りに居住したという。その後、他の場所に広がっていった。1857 年に、シーク教徒インド人が、商売の目的でチェンマイのワローロット市場に定住した。同年、ヒンドゥー教徒のインド人が、ワットケット寺の辺りに定住し農業を始めた。このように 18 世紀後半からインド人はチェンマイに定住してきたことが明らかになった。また、研

究結果によると、インドを出国した理由は、インドで稼ぐことが難しくなったためである。チェンマイでの生活は、同じ宗教を信仰しているインド人同士が同じエリアに住んでいるという（Kanato、1993）。

3）アメリカ人

ラッタナー・ブーンマタヤーの西洋人の（タイ人）妻の研究は、タイの東北地方にあるロイエット県の女性と西洋人との国際結婚について考察したものである。具体的には、国際結婚がタイ人女性にどのような価値観の変容をもたらしたのか、また現地の社会でどのように位置づけられているのかをグローバリゼーションとローカライゼーションの関係性という視点からインタビュー調査により分析したものである。国際結婚は、ハイブリット文化（cultural hybridity）の事例の一つである。研究結果は、それらの西洋人がおおむね定年世代以上で、離婚や配偶者との死別で、一緒に暮らす相手がいないこと、タイ人の女性は結婚経験があり、前のタイ人の夫の子供を育てている者もいる。経済的にサポートできる者が必要であるが、双方の必要が満たされるのである。ある女性は西洋に暮らすが、お寺にお供え物をする、地元の学校やお寺に寄付する、両親を世話するなどタイの伝統的な文化を実践している。グローバル化がローカルのものを失わせるわけではない。ただし、その環境・場所に合わせることがある（Boonmathya、2005）。

タイを訪れたアメリカ人観光客の半分以上は 50 代と 60 代であり、チェンマイは定年退職したアメリカ人にとってトップ 6 に入る人気のある目的地であるとフォックスニュースで報道されたことがある。タイ政府観光庁のヨーロッパ、アフリカ、中東アジア、アメリカのマーケティング担当者によれば、彼らはチェンマイの文化・習慣、自然的な環境、水準的な医療施設、適切な物価という魅力にはまると主張した。彼らは、タイ料理の作り方を習ったり、建築や美術の伝統的なものを巡ったりするなど定年退職後のリラックスした生活をチェンマイで送るという（Manager Online、2015）。

4）韓国人

ウィラチャイ・パンシェブはプッシュ要因とプル要因の概念でチェンマイにおける韓国人の移動について研究を行った。チェンマイの韓国人会で登録した 90 日間連続でチェンマイに長期滞在している韓国人を対象として、アンケート調査を行っている。対象者の多くが女性、31－40 歳、結婚中、大学卒、キリスト教信徒という結果となった。対象者は 5 年間以上チェンマイに住み、現地で就職せずに、韓国で稼ぐ夫から送金を受けている。国際学校での子供の教育のため、より物価が安いという主なプル要因でチェンマイに今後も続けて住みたいと考えているという。日本人との比較では、その特徴が大きく異なるとされている（Phanseub、 2011）。

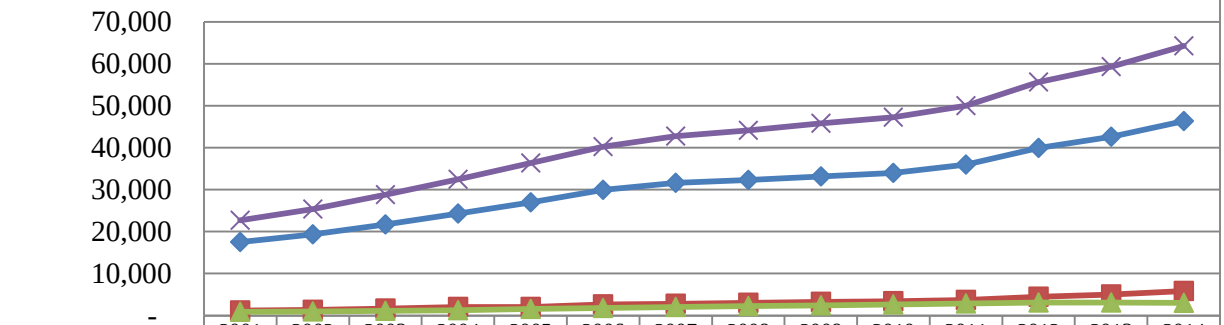
City Research Unit, Faculty of Architecture and planning, Thammasat university (2001)「チェンマイ：外国人の最後の家」の報告では、チェンマイ県に長期滞在している韓国人の多くは母子であり、チェンマイのインターナショナル学校で子供を教育するために滞在している。そして、母子の活動する場所もインターナショナル学校が多い。

5）日本人

タイ国内に居住する日本人が多い上位 3 県は、バンコク、チョンブリ県、チェンマイ県である。バンコクは、タイ国の首都かつ国の政治や経済の中心であり、日系企業が多数ある。チョンブリ県は、バンコクから約 80 キロメートル離れ、工業団地の中に日系企業が多数ある。95%

の日系企業がバンコク、アユタヤ県、ラーヨン県、チョンブリ県に集中しているため、主に壮年期の人が就業を目的として滞在している。一方、チェンマイ県は、バンコクから北へ約 700 キロメートル離れており、工業団地ゾーンがまったくないが、チェンマイ県の市内から約 25 キロメートル離れたランプーン県では北部工業団地（Northern Region Industrial Estate）があり、日本人の出張者や就職者が少なくない。しかしバンコクやチョンブリ県とは、数や規模がまったく異なる。特徴的なのは、チェンマイに渡航して来た日本人は、定年退職した者など中高年・高齢者層の数が多い。次のグラフ 1 は 2001 年から 2014 年にかけてバンコク、チョンブリ県、チェンマイ県に滞在している日本人の数の増加を示す。

図 10　バンコク、チョンブリ県、チェンマイ県に滞在している日本人[10]数（2001 年～ 2014 年）



	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
バンコク	17,481	19,343	21,728	24,260	26,991	29,919	31,616	32,283	33,152	33,967	35,935	39,949	42,577	46,367
チョンブリ県	1,163	1,372	1,655	2,063	2,063	2,615	2,812	2,996	3,264	3,403	3,695	4,486	5,024	5,814
チェンマイ県	885	934	1,074	1,234	1,543	1,761	1,997	2,284	2,442	2,651	2,854	3,061	3,109	3,018
全国	22,731	25,329	28,776	32,442	36,327	40,249	42,736	44,114	45,805	47,251	49,983	55,634	59,270	64,285

出典：在タイ日本国大使館、 2015 年のデータを元に、筆者がグラフを作成。

渡航してタイ・チェンマイ県に居住する日本人の移動動向を見ると、他の先進国の人々と同様、開発途上国に定年後生活するために移動する傾向がある。この移動パターンは、昔のような景気悪い国の人々がより良い経済の国に移動するのとは異なっている。

3.2.4　タイ・チェンマイ県の長期滞在の状況

3.2.4.1　タイの長期滞在の背景

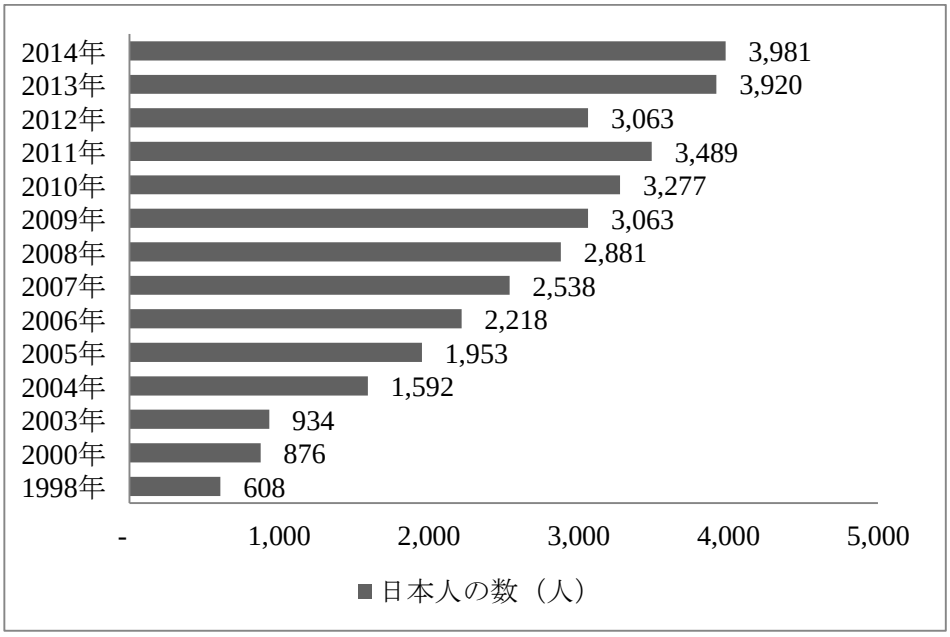
10　「長期滞在者・永住者及び職業別在留日本人数」長期滞在者の項目は 6 種類あり、①民間企業関係者及びその家族 ②報道関係及びその家族 ③自由業関係者及びその家族 ④留学生・研究者等及びその家族 ⑤政府関係者及びその家族 ⑥その他、である。

タイ側の日本人の長期滞在の背景と状況は以下のようになっている。タイの第 4 次国家経済社会開発計画（1977 年～1981 年）によって、タイの地方発展の推進のため 1983 年からタイ工業団地公社（Industrial Estate Authority of Thailand: IEAT）が北部ランプーン県に北部工業団地を設置した。また、この年、日本政府は円高のため生産拠点をアジアに移転するという方針を示した。その方針を受けて IEAT は工業団地の企業家に課税について好条件を提示した。資本奨励政策により、工業団地にある工場が数年の法人所得税の免除、機械や原材料の輸入税の減免を許可されたのである。その結果、日本の企業は 1985 年に開設したランプーン県にある北部工業団地に出資して生産を始めた。このため、ランプーン県に隣接するチェンマイ県に日本人が仕事として滞在するようになった（Industrial Estate Authority of Thailand、2011）。

観光産業の状況はどのような状況だろうか。1987 年にタイ政府観光局はアメージングタイランド（Amazing Thailand）というキャンペーンを発表した。また、この年、先進工業国の為替レート変動で大きな影響があった。タイの第 6 次国家経済社会開発計画（1987 年－1991 年）の目標と実際の観光客の人数を比べると、310 万～320 万人（10-13％）増えている。観光により外貨を獲得するため、タイの政府は観光産業を支援し続ける方針を取っている。1998 年にはアメージングタイランド（Amazing Thailand）1998-1999 年のキャンペーンを行い、外国人の観光客に対して自然の豊かなチェンマイ県をアピールし、一年中、観光客を呼び込むことに成功した。彼らがチェンマイに訪れる最初の目的は短期の観光であるが、自国の経済、社会、環境などの要因を踏まえて二度目にチェンマイを訪れる際はもう少し長く滞在するようになるという。

2001 年 6 月 26 日、内閣府のソムサック・テースティン大臣は長期滞在の観光を支える方針を立て、推進委員会を設立した。このことにより観光局が中心となり長期滞在する外国人の支援をすることになったのである（Tourism Authority of Thailand Newsroom、2015）。またこの年、株式会社タイロングステイマネジメント（TLM）が設立された。当初は政府と民間の双方で運営され、段階を踏み少しずつ民間に委託される予定であった。この会社は 2005-2007 年の間に Long Stay City Project のプロジェクトの中で長期滞在を支援した。2005 年 10 月 17－20 日には日本で最初のキャンペーンを行った。Long Stay City Project で推奨されたのは空港があり、交通の便がよく、病院など医療施設が充実しているタイ国内の 5 県、チェンマイ県、カンジャナブリ県、プラチュアキリカーン県のホアヒン市、スコータイ県、ノーンカイ県であった（The Chiangmai Chamber of Commerce、2007）。中でも、チェンマイは人気がある地域の一つであった。在チェンマイ日本国総領事館の 2014 年 10 月 1 日のデータによると、北部タイの中ではチェンマイ県、チェンラーイ県、ランプーン県、パヤオ県、ランパーン県、プレー県、メーホーソン県、ウッタラディット県、ナーン県の順で日本人の滞在者が多い。図 11 に 1998、2000、2003～2014 年の北部 9 県の在留邦人人数を示す。

図 11　1998、2000、2003～2014 年の北部 9 県の在留邦人人数



出典：チェンマイ商工会議所（The Chiangmai Chamber of Commerce）（2007）と在チェンマイ日本国総領事館（2015）のデータを元に著者作成

タイ政府は、政府観光庁（Tourism Authority of Thailand）が中心となり、観光産業を外貨獲得のため最も重要な政策の一つとして採択した。そしてこれまでの短期滞在の観光客のみならず長期滞在の観光客も誘致した。これは、これまで注目してこなかった長期滞在型観光が大きな経済的利益を得る機会だと認識したためである。定年を迎えた先進国の人々は、自分の政府から年金を受給し、タイで趣味やレジャーの活動、医療を受けるなどのニーズが多かったことから、タイ政府は長期滞在を促進する方針を設定したのである。

1998 年にタイ政府は、退職年齢の日本人をはじめ長期滞在のためのビザを提案した。2001 年に年金ビザ（Non Immigrant Visa O (Pension)）とロングステイビザ（Non Immigrant Visa O-A）の 2 種類を実施した。当年にロングステイタイランドマネジメント株式会社（Thai Longstay Management Co.,Ltd.: TLM）というワンストップサービスを行う企業設を立した。2002 年タイ国政府観光庁は、より長期滞在の観光を促進するため、支援の方針を作成し、30 日間以上滞在する観光者、特に冬の季節、50 歳以上定年退職者、留学生、暖かい気候を利用して練習を続けるスポーツ選手という 4 つの対象者を初めて設けた（Department of Tourism, 2014）。

2002 年 12 月にチェンマイで定年した日本人が集まって「チェンマイ・ロングステイ・ライフの会（Chiang Mai Long stay Life Club: CLL）」を設立した。チェンマイまたは隣の県に滞在している日本人同士の情報交換や運営業務、スポーツなどのグループのサークルの活動への参加などが主な目的である（Chiang Mai Long stay Life Club、2014）。2012 年に 10 周年の挨拶で CLL 会長は、今までの CLL 会の役割に対して、グループのメンバーが互いに交流・活動ができ、さらに他の日本人のグループとタイ人のグループに協力することもできたと述べた。また 2006 年 1 月に在チェンマイ日本国総領事の篠原勝弘は、次のようにチェンマイにおける日本人の長期滞在の状況を報じた。

「親日的で比較的治安が良く、バンコクに比べて気候も穏やかなチェンマイはこれまでも高齢者の長期滞在先として隠れた人気がありましたが、最近、日本国内でチェンマイ長期滞在者の生活がテレビや雑誌などでたびたび紹介されたせいか、ここ数年、日本からの長期滞在者は増える一方です。中には日本国内の家を処分し、退職金をそのまま持って当地に移住を決意される方もおります。タイの政府もこうした日本からの長期滞在者を歓迎しており、入国査証や滞在許可証に便宜を図ったりしています。その点では滞在先として安全度が高いと言えましょう」（外務省、2014）。

また、ロングステイ財団の調査によると、2006 年～2013 年において、タイは日本人の長期滞在の希望国トップ 5 に入っている（ロングステイ財団、2014）。現地にあるチェンマイの商工会議所長のコーンプラサートによると、2012 年、チェンマイに長期滞在している日本人は約 3 千名で、年々10%増えつつあり、年に 600 万人の日本人が定年退職する状況からすると、重要な市場であると発言した。現地の組織は日本人の長期滞在者に関する増加状態に対応するように、日本の介護サービス分野の民間企業と連携をして行動している。さらに、タイと日本と中国の資本で、日本人の高齢者向けの医療科学パークという巨大なプロジェクトが提案されている。2014 年度に在チェンマイ日本国総領事官に在留届を提出した連続 90 日間以上滞在する日本人数は 3,981 人である。将来的には、チェンマイの民間企業は、長期滞在に対応するため、チェンマイ県を特別なゾーンにしたいと考えるようになり、日本とチェンマイの間の直行便運行や、3 年間の長期滞在ビザを発行することなどができるように提言している（The Chiangmai Chamber of Commerce、2011）。

3.2.4.2 チェンマイの日本人に人気のエリア

1990 年後半からは仕事以外の理由で長期滞在するためタイを訪れる日本人が増えた。そのため、日本人のグループや活動、及び日本語の看板などが頻繁に見られるようになった。筆者にとってはチェンマイ市における長期滞在の日本人の存在は、視覚として認識できるものと視覚としては認識できないが日本人のグループ活動によって明らかになるものとがある。

視覚として認識できるものとは、チェンマイ市内の日本人に人気なゾーンには日本語通訳、不動産、会員制の日本語書籍のレンタル、ゴルフ予約、ビザサポート、タイ語学校、日本料理や材料、マッサージなどの日本人向けサービス分野の日本語の看板やメニューが見られ、その増加は顕著である。特に、ニマンヘミンゾーン、ホイケオ通り、チャーンクラーンエリア、チャーンプアック通り、ワットゲートエリアという地域について、以下で記述する。

1) ニマンヘミンゾーン

このゾーンは山の峰が見えるように自然に恵まれた場所に近く、天候が穏やかなことが多い。このゾーンはチェンマイの中で一番物価が高い。外国人とタイ人の観光客がよく遊びに来る。アーティスティックなデザインを特徴とする店が多くある。喫茶店、スウィーツショップ、スパ、居酒屋、ナイトクラブがあり、昼夜を通して町の中をゆっくり歩いて楽しむことができる。このゾーンには長期滞在するのに必要な設備が充実している。交通の便がよく、病院、デパート、スーパー、市場、商店、その他長期滞在をサポートする企業・機関に近くとても便利である。都会的でありながら、現地の人とともに現地の文化も併せ持つライフスタイルを味わうこ

とができる。店によっては日本人の観光客のために日本語の看板、メニュー、お勧め商品のサービスがある。また、滞在している日本人たちは、外出する際にはこのゾーンを集合場所として設定することが多い。このゾーンはチェンマイで一番物価が高いと言われていが、日本人の独身の男性と夫婦暮らしの人々にとって人気のあるゾーンである。宿泊先としては、ヒルサイド2、カンタリー・ヒルズ・ホテル、ピピプレスなどがある。

また、2009年にニマンヘミンでは、ラック・ニマン（ニマンヘミンを愛する）というグループが設立された。商務省は各県の商業ゾーンの企業をグループ化することを支援しており、チェンマイ県では、ニマンヘミンゾーンが選ばれた。ニマンヘミンにある企業と住民150件を登録し、レストランや買い物、サービス向けの地図を作成した。ラック・ニマンの目的はニマンヘミンの人々の声を聞くこと、政府からの連絡を受けやすくすること、ニマンヘミンゾーンの人々の協力を高めること、というものである。しかし、ビジネスのオーナーの多くはバンコクの人なので、協力しているという感覚がまだ少ないとの声もある。

2) ホイケオ通り

ホイケオ通りはチェンマイの濠から有名なお寺までを結ぶラインであり、道路の両側のコミュニティには様々な高い建物や設備があって、生活するのに困らない。家賃は高いものから安いものまであって周りにはタイ人が多い。近くには、病院、デパート、スーパー、レストラン、ホテル、マーサージ屋、ゴルフ店、日本人ロングステイクラブ（Chiang Mai Longstay Life Club: CLL）がある。これらの施設では日本語によるサービスを受けることが可能である。独身男性と夫婦で滞在している人々は主にホイケオ通りの周辺に滞在している。ニマンヘミンゾーンにも近く交通の便が良い。それだけではなく、長期滞在のための体験ツアーで訪れている日本人は、ここにある宿を利用する。人気の宿泊先は、ヒルサイド4、ナコンピンコンドミニアム、ホイケオレジデント、ランナー2、ランナー3である。

3) チャーンプアック通り

宿泊できる場所が多くあり必要な設備も揃っている。病院、スーパー、市場、レストラン、バスターミナルが近くにある。ニマンヘミンゾーンとホイケオ通りより、宿泊や商品の値段が安い。家賃はそれほど高価ではなく、日本人ばかりの宿に興味のない人などがこのエリアを選ぶ。このエリアでも日本語の看板を目にすることができる。宿泊先としてはボアンブアマンション、パシフィックマンションなどが挙げられる。

4) チャーンクラーンエリア

このエリアではナイトバザール、日本語のカラオケ、ソープランド、ホテル、日本語の看板などを目にすることができる。また、チェンマイに初めて訪れるほとんどの日本人たちの宿泊場所となる。このエリアに一時的に滞在し、情報を集めて他のエリアに引っ越す場合が多い。引っ越し先としてはホイケオ通りやニマンヘミンゾーンである。日本人の独身男性は一緒に話したり飲んだりする友達を探すこともある。

5) ワットゲートエリア

ランプーン県の北部工業団地にある会社に勤めている日本人の住宅エリアとなっている。

図 12　チェンマイにおける日本人の人気があるエリア

出典：　Map Of Thailand.org より、筆者加筆

第 4 章

チェンマイにおける日本人長期滞在者の異文化社会への適応

第 4 章では、チェンマイにおける日本人長期滞在者について論じる。フィールドワークや調査の結果に基づいて、チェンマイに長期滞在している日本人の実態を明らかにする。

本章は、4.1 アンケート調査の結果、4.2 インタビュー調査の結果、4.3、チェンマイにおける日本人長期滞在者について、という 3 節からなる。4.1 と 4.2 では、チェンマイにおける日本人対象者の属性などの基本的データ、チェンマイでの日本人長期滞在者の生活、日本人長期滞在者のグループ、日本人長期滞在者と現地の人との交流についてアンケート調査とインタビュー調査から分析する。4.3 ではフィールドワーク調査で得られたデータに基いて、チェンマイにおける日本人長期滞在者について、社会関係資本や異文化適応の視点から分析する。

4.1　アンケート調査の結果

本研究では、アンケート調査を 2013 年 8～9 月に実施した。日本人へのアンケートは 113 部である（調査方法について、第 1 章の対象者を参照のこと）。日本人向けのアンケートの質問は、以下の 4 つの項目である。

Ⅰ　日本人対象者の属性などの基本的項目について（Face Sheet 項目）
Ⅱ　長期滞在の背景について
Ⅲ　長期滞在のための適応について
Ⅳ　現地の設備・環境と満足度について

4.1.1　チェンマイにおける日本人滞在者の属性などの基本的データ

ここでは、アンケート調査の「Ⅰ日本人対象者の属性などの基本的項目について」と「Ⅱ長期滞在の背景について」という質問項目に基づいて論じていく。また対象者は 113 人だが、アンケートの項目によって欠損値がある。

日本人対象者の属性については、性別、年齢、出身都道府県、チェンマイでの滞在期間、ビザの種類、配偶者の有無、日本の家族及び住居の存在、最終学歴、チェンマイに長期滞在する前の最後の仕事、現在の収入、収入の金額、英語とタイ語の言語能力、海外渡航の経験、長期滞在のための居住地、一ヶ月の支出、という項目を尋ねた。

4.1.1.1　性別

調査対象者の性別は表 10 の通りである。男性 77.9%（88 人）、女性 22.1%（25 人）である。

表 10 性別

	実数（人）	比率（%）
男性	88	77.9
女性	25	22.1
合計	113	100

4.1.1.2 年齢

調査対象者の年齢の内訳は表 11 の通りである。最高齢は 87 歳で、最年少は 54 歳である。平均年齢は 67.9 歳である。60 代の対象者が最も多く 61.6%（69 人）、次いで 70 代 32.1%（36 人）、80 代が 3.6%（4 人）、50 代が 2.7%（3 人）である。

表 11 2013 年当時の年齢

年代	実数（人）	比率（%）
50～59代	3	2.7
60～69代	69	61.6
70～79代	36	32.1
80～89代	4	3.6
合計	112	100

4.1.1.3 出身都道府県

調査対象者の出身地の内訳は表 12 の通りである。東京都 20.6%（21 人）、千葉県 8.8%（9 人）、兵庫県 7.8%（8 人）である。地方別では場合、関東地方 38.2%（39 人）、近畿地方 24.5%（25 人）、中部地方 11.8%（12 人）、九州地方 6.9%（7 人）、四国地方 5.9%（6 人）、北海道 4.9%（5 人）、東北地方 3.9%（4 人）、中国地方 2.9%（3 人）、沖縄 1 %（1 人）である。

表 12 出身地

地方	実数（人）	比率（%）
関東	39	38.2
近畿	25	24.5
中部	12	11.8
九州	7	6.9
四国	6	5.9
北海道	5	4.9
東北	4	3.9
中国	3	2.9
沖縄	1	1
合計	102	100

4.1.1.4 滞在期間

調査対象者の滞在期間は表13の通りである。最長は20年、最短は3ヶ月である（3ヶ月未満の滞在期間に対してこの調査に含めていない）。3ヶ月～3年未満は28.2%（31人）、3年～6年未

満は26.3%（29人）、6年～9年未満は19.1%（21人）、9年～12年未満は18.2%（20人）、12年～15年未満は6.4%（7人）、15年～18年未満は0.9%（1人）、18年以上は0.9%（1人）である。

表13　滞在期間

滞在期間	実数（人）	比率（%）
3ヵ月～3年未満	31	28.2
3年～6年未満	29	26.3
6年～9年未満	21	19.1
9年～12年未満	20	18.2
12年～15年未満	7	6.4
15年～18年未満	1	0.9
18年以上	1	0.9
合計	110	100

4.1.1.5　ビザの種類

調査対象者のビザの種類の内訳は表14の通りである。ロングステイビザ56.6%（64人）、年金ビザ32.7%（37人）、他のビザ8.8%（10人）、ビザ無し1.8%（2人）である。

表14　ビザの種類

ビザの種類	実数（人）	比率（%）
ロングステイビザ	64	56.6
年金ビザ	37	32.7
他のビザ	10	8.8
ビザ無し	2	1.8
合計	113	100

4.1.1.6　配偶者の有無

調査対象者の配偶者の有無の詳細は表15の通りである。配偶者がいる者は69.9%（79人）である。離別したは10.6%（12人）、死別したは9.7%（11人）、未婚は9.7%（11人）である。

表15　配偶者の有無

配偶者の有無	実数（人）	比率（%）
配偶者がいる者	79	70.0
離別した者	12	10.6
死別した者	11	9.7
未婚	11	9.7
合計	113	100

4.1.1.7　日本の家族及び住居

調査対象者の家族及び住居について状況は表16の通りである。日本には家族も住居もある者が61.1%（69人）、日本には家族がいるが住居がない者が15.9%（18人）、日本には家族はいないが住居がある者が14.2%(16人)、日本には家族も住居もない者が8.8%（10人）である。

表16　日本の家族及び住居

日本の家族及び住居の存在	実数（人）	比率（%）
日本には家族も住居もある	69	61.1
日本には家族がいるが住居がない	18	15.9
日本には家族はいないが住居がある	16	14.2
日本には家族も住居もない	10	8.8
合計	113	100

4.1.1.8　最終学歴

調査対象者の最終学歴は表17の通りである。「短期大学・大学」51.4%（57人）、「高校・専門学校」37.8%（42人）、「大学院」と「中学生」のいずれも5.4%（6人）である。

表17　最終学歴

最終学歴	実数（人）	比率（%）
短期大学・大学	57	51.4
高校・専門学校	42	37.8
大学院	6	5.4
中学生	6	5.4
合計	111	100

4.1.1.9　タイに来る前の仕事

調査対象者がタイに来る直前までしていた仕事は表18の通りである。「会社員」51.8%（57人）、「自営業」17.2%（19人）、「公務員」10.9%（12人）、「主婦」6.4%（7人）、「派遣・パート・フリーランス」6.4%（7人）、その他7.3%（8人）である。

表18 タイに来る前の仕事

タイに来る前の仕事	実数（人）	比率（%）
会社員	57	51.8
自営業	19	17.2
公務員	12	10.9
主婦	7	6.4
派遣・パート・フリーランス	7	6.4
その他	8	7.3
合計	110	100

4.1.1.10　収入源

調査対象者の調査時の収入源は表19の通りである。「年金」と回答した者は94.5%（104人）である。厚生年金を受給している者は46.4%（51人）、共済年金を受給している者は10.0%（11人）、国民年金を受給している者は7.3%（8人）、受給されていない者は5.5%（6人）である。また、2種類の年金をもらっている者も少なくない。厚生年金と国民年金19.1%（21人）、共済年金と厚生年金8.2%（9人）、共済年金と国民年金3.6%（4人）である。

表19　収入源

収入源	実数（人）	比率（%）
年金	104	94.5
厚生年金	51	46.4
共済年金	11	10.0
国民年金	8	7.3
厚生年金と国民年金	21	19.1
共済年金と厚生年金	9	8.2
共済年金と国民年金	4	3.6
受給なし	6	5.5
合計	110	100

また、年金以外の収入は「利子収入」10人、「自営業などからの収入」3人、「家族からの援助」1人、「その他」16人である。

4.1.1.11 収入額

調査対象者の収入額は表20の通りである。「月に100,000円以下」を受給している者が最も多く、21.7%（23人）である。次いで「月に150,000－199,999円」と「月に200,000－249,999円」がいずれも19.8%(21人)、「月に250,000－299,999円」14.2%(15人)、「月に300,000円以上」13.2%（14人）、「月に100,000－149,999円」11.3%（12人）である。

表20 収入額

収入額	実数（人）	比率（%）
月に100,000円以下	23	21.7
月に100,000～149,999円	12	11.3
月に150,000～199,999円	21	19.8
月に200,000～249,999円	21	19.8
月に250,000～299,999円	15	14.2
月に300,000円以上	14	13.2
合計	106	100

4.1.1.12 外国語運用能力

調査対象者の外国語運用能力は表20の通りである。「英語を話す」、「英語を読む」、「タイ語を話す」、「タイ語を読む」に対して、「とてもよくできる」と回答した者はいずれも一人しかない。英語の場合は、話すことと読むことが「少ししかできない」と回答した者が多い。タイ語の場合は、タイ語を話すことは「少ししかできない」と回答した者が多い。さらに、タイ語を読むことは「全くできない」と回答した者が多い。

表21 外国語運用能力

NO	外国語	とても よくできる	よくできる	まあまあ できる	少ししか できない	全く できない	合計
1	英語を話す	1.0% (1 人)	8.0% (8 人)	17.0% (17 人)	56.0% (56 人)	18.0% (18 人)	100% (100 人)
2	英語を読む	1.0% (1 人)	11.2% (11 人)	24.5% (24 人)	43.9% (43 人)	19.4% (19 人)	100% (98 人)
3	タイ語を話す	1.0% (1 人)	1.0% (1 人)	14.0% (14 人)	55.0% (55 人)	29.0% (29 人)	100% (100 人)
4	タイ語を読む	1.0% (1 人)	1.0% (1 人)	10.3% (10 人)	18.6% (18 人)	69.1% (67 人)	100% (97 人)

4.1.1.13　海外渡航の経験

調査対象者の中でタイに長期滞在する以前に海外に渡航した経験がある者は81.7%（89人）である。

4.1.1.14　長期滞在の居住地

調査対象者の調査当時の居住地は表22の通りである。74.1%（83人）の対象者はチェンマイ市内に住んでおり、24.1%（27人）はチェンマイ市以外に住んでいる。1.8%（2人）はチェンマイ県以外に住んでいる。なお、居住地の詳細は表23の通りである。

表22　調査当時の居住地

地域	実数（人）	比率（%）
チェンマイ市内	83	74.1
チェンマイ市以外	27	24.1
チェンマイ県以外	2	1.8
合計	112	100

表 23　日本人対象者の滞在地域

地域	実数（人）	比率（%）
ニマンヘミンゾーン	6	5.4
ホイケオ通り	26	23.2
チャーンクラーンエリア	2	1.8
チャーンプアック通り	21	18.7
チェンマイ市内の他の場所	28	25
チェンマイ市内以外	29	25.9
合計	112	100

4.1.1.15　居住形態

調査対象者の中で、一軒家、アパートメント、コンドミニアムに住んでいると回答した者はいずれも30%弱である。

4.1.1.16　一ヶ月の支出

調査対象者の一ヶ月の支出額については表24の通りである。なお、1バーツは約3円として換算している。50,000バーツ以上と回答した者は27.0%（30人）で、40,000～49,999バーツが20.7%（23人）、30,000～39,999バーツが16.2%（18人）、20,000～29,999バーツが21.6%（24人）、10,000～19,999バーツが11.7%（13人）、10,000バーツ未満と回答した者は2.7%（3人）である。

表24　一ヶ月の支出（1バーツ=約3円〈調査当時〉）

	実数（人）	比率（%）
10,000バーツ未満	3	2.7
10,000～19,999バーツ	13	11.7
20,000～29,999バーツ	24	21.6
30,000～39,999バーツ	18	16.2
40,000～49,999バーツ	23	20.7
50,000バーツ以上	30	27.0
合計	111	100

アンケート調査によると、チェンマイの日本人長期滞在者の属性は、以下のようにまとめられる。対象者の多くは、男性、60代、関東地方の出身、3か月以上3年未満の滞在期間、ロングステイビザ、配偶者がいる、日本には家族も住居もある、短期大学・大学卒、退職直前の職業は会社員、厚生年金を受給、現在収入額は一人100,000円以下、会話・読解ともタイ語より英語の方ができる、チェンマイ市内に滞在中、支出は月に20,000～29,999バーツであり、これが典型的なチェンマイにおける日本人長期滞在者である。

4.1.1.17　長期滞在の背景

調査対象者の中で「タイに長期滞在する前に他の国に長期滞在したことがある」と回答した者は 25.2%（28 人）である。

4.1.1.18 長期滞在の同居者

調査対象者が長期滞在で同居している者の詳細は表 25 の通りである。「日本人の配偶者と」39.3%（44 人）、「一人で長期滞在」35.7%、「タイ人の配偶者と」17.9%（20 人）、「タイ人異性と」5.4%（6 人）である。男性は「一人で長期滞在」が 39.1%（34 人）、女性は「日本人の配偶者と」68.0%（17 人）が最も多い。また、配偶者の有無と性別の関係性を見ると、男性は、「日本人の配偶者と」31.0%（27 人）、「タイ人の配偶者と共に長期滞在」が 21.8%（19 人）と「タイ人異性と共に長期滞在」が 6.9%（6 人）である。女性は、「日本人の配偶者と」68.0%（17 人）が最も多く、「タイ人の配偶者と」はわずか 1 人である。

表 26 は、対象者の性別と長期滞在の同居者の関係である。

表 25　長期滞在の同居者

同居者	実数（人）	比率（%）
日本人の配偶者	44	39.3
なし（一人で長期滞在）	40	35.7
タイ人の配偶者	20	17.9
タイ人異性	6	5.4
その他	2	1.8
合計	112	100

表 26「性別」 及び「長期滞在の同居者」

長期滞在の同居者		日本人の配偶者と長期滞在	タイ人の配偶者と長期滞在	タイ人異性と長期滞在	一人で長期滞在	その他	合計
性別	男性	31.0% (27 人)	21.8% (19 人)	6.9% (6 人)	39.1% (34 人)	1.0% (1 人)	100% (87 人)
	女性	68.0% (17 人)	4.0% (1 人)	0.0% (0 人)	24.0% (6 人)	4.0% (1 人)	100% (25 人)
合計		39.3% (44 人)	17.9% (20 人)	5.4% (6 人)	35.7% (40 人)	1.8% (2 人)	100% (112 人)

4.1.1.19 日本人の長期滞在の決定要因

調査対象者の日本人が定年後チェンマイに長期滞在することに決めた理由（プッシュ要因）は以下の通りである。複数回答で回答の上位から、「日本は寒すぎる」、「日本は物価が高い」、「日本のわずらわしさから逃れたい」、「健康のため」、「他の文化に興味がある」という要因が見られた。

4.1.1.20 タイ人の長期滞在の決定要因

調査対象者のタイ人がチェンマイに長期滞在することに決めた理由（プッシュ要因）は表 27 の通りである。対象者は、重要な順に 1 位から 5 位まで対象者に順位を付けた。1 位は 5 点、2 位は 4 点、3 位は 3 点、4 位は 2 点、5 位は 1 点として点数化すると、点数が高い順に「①物価が安い」（96 回答 408 点）、「②気候がいい」（86 回答 336 点）、「③住まいの環境が良い」（39 回答 107 点）、「④タイ人がフレンドリー」（39 回答 80 点）、「⑤家族や配偶者の希望」（21 回答 77 点）、「⑥スポーツ・レジャー施設が充実されている」（22 回答 64 点）、「⑦タイ・チェンマイの文化に興味がある」（21 回答 59 点）、「⑧料理がおいしい」（21 回答 58 点）、「⑨海外に長期滞在してみたい」（18 回答 57 点）、「⑩医療施設・技術」（18 回答 44 点）、「⑪日本語で生活できる」（19 回答 43 点）、「⑫日本から近く便利」（19 回答 33 点）、「⑬現地の人と付き合いたい」（11 回答 27 点）、「⑭スパ・マッサージが充実している」（11 回答 26 点）、「⑮その他」（6 回答 24 点）となる。この結果から、チェンマイの生活環境だけでなく、タイ人との対人関係もチェンマイでの長期滞在の重要な理由であることが明らかになった。

表 27　チェンマイに長期滞在しているタイ側の理由

順	長期滞在している理由
1	物価が安い
2	気候がいい
3	住まいの環境が良い
4	タイ人がフレンドリー
5	家族や配偶者の希望

（1 位は 5 点、2 位は 4 点、3 位は 3 点、4 位は 2 点、5 位は 1 点として点数化）

4.1.1.21　チェンマイに長期滞在を決めた情報

対象者がチェンマイでの長期滞在を決めるために参考にした情報について調査した結果は表 28 の通りである。

「チェンマイに旅行してから」58.0%（65 人）、「テレビ、本、パンフレット」21.4%（24 人）、「その他」18.8%（21 人）である。「その他」の中に自分の配偶者、友達が滞在しているという理由が目立つ。「ロングステイについて支援している日本にある組織からの情報」と「ロングステイについて支援しているタイ・チェンマイにある組織からの情報」はそれぞれ 12.5%（15 人）と 5.4%（6 人）が答えている。

表 28　チェンマイに長期滞在を決めた情報

情報源	実数（人）	比率（%）
チェンマイに旅行して得たもの	65	58.0
テレビ、本、パンフレット	24	21.4
その他	21	18.8
合計	110	100

以上、日本人対象者の長期滞在の背景について論じた。対象者の多くは以下のような共通した背景がある。タイに長期滞在する前に他の国に長期滞在したことがある、現在日本人配偶者と共にチェンマイに長期滞在している、タイ・チェンマイに長期滞在の主な理由は物価が安い、少なくとも 1 回チェンマイに旅行してからここに長期滞在を決めたなどである。

4.1.2　日本人の長期滞在者のグループ

4.1.2.1　グループへの参加

チェンマイにはいくつかの長期滞在者が所属するグループがある。表 29 は対象者が参加しているグループ数を示している。調査当時、日本人のグループに参加している者は、79.3%（88 人）で、参加してない者は、20.7%（23 人）である。参加しているグループの数は、1 つのグループ 48.6%（54 人）、2 つのグループ 21.6%（24 人）、3 つのグループ 8.1%（9 人）、4 つのグループ 0.9%（1 人）である。

また、表 30 はグループの参加人数の内訳である。複数回答可とした。チェンマイ・ロングステイ・ライフクラブ（以下、CLL 会とする）33.3%(43 人）、定住者の集いの会 28.7%（37 人）、福祉の会 8.5%（11 人）、南国暮らしの会 7.8%（10 人）、チェンマイソフトボールクラブ 5.4%（7 人）、バトミントン 3.8%（5 人）、ゴルフ同好会、チェンマイ日本人会、卓球がいずれも 3.1%（4 人）、バンコクにあるタイ国日本人会、テニス、囲碁、チェンマイマラソン走ろう会のいずれも 0.8%（1 人）である。

表 29　日本人が参加しているグループ数

グループの数	実数（人）	比率（%）
1	54	48.7
2	24	21.6
3	9	8.1
4	1	0.9
参加していない	23	20.7
合計	111	100

表 30　日本人が参加しているグループ（複数回答可）　　（N=88）

グループ名	実数（人）	比率（%）
CLL 会	43	38.7
定住者の集いの会	37	33.3
福祉の会	11	10.0
南国暮らしの会	10	9.0
その他	20	18.0

4.1.2.2　グループへの参加時期

グループに参加していると回答した 108 名の対象者のうち、最初から参加している者が半数以上（67 人）であり、最初から参加していなかったが、現在参加している者は、23.1%（25 人）である。

4.1.2.3 グループへの参加理由

対象者が日本人対象者がグループに参加した理由の内訳は表 31 の通りである。「現地の情報を手に入れたいから」72 人、「一緒に活動・レジャーをしたいから」39 人、「友達を作りたいから」26 人、「困ったときに手伝ってほしいから」20 人、「グループのために貢献したいから」14 人、「現地の人と交流できるから」9 人、「生きがいを求めて」8 人、「誘われたから」8 人、「その他」4 人、「さびしいから」3 人、「グループに参加すると割引などの特典があるから」3 人）、「何かのグループに参加しないと不安だから」2 人ということである。

表 31　グループへの参加理由（複数回答）（N=109）

順位	グループに参加している理由
1	現地の情報を手に入れたいから
2	一緒に活動・レジャーをしたいから
3	友達を作りたいから
4	困ったときに手伝ってほしいから
5	グループのために貢献したいから
6	現地の人と交流できるから
7	生きがいを求めて / 誘われたから
8	その他
9	さびしいから / グループに参加すると割引などの特典があるから
10	何かのグループに参加しないと不安だから

また、日本人のグループに参加してからタイ人との交流のチャンスの機会について調査したところ、参加者 84 人中、「増えている」と回答した者は 40.5%（34 人）であり、「増えてない」と回答した者は 59.5%（50 人）である。

4.1.2.4 グループへ不参加の理由

グループに参加していない回答者 23 名に複数回答可で理由を聞いたところ、その回答は表 32 の通りであった。「自力でやりたいから」12 人、「プライベートでの日本人の仲間がいるから」9 人、「日本人のグループに参加したくないから」7 人、「タイ人の友達がいるから」6 人、「活動が大変だった・大変そうだから」6 人、「その他」2 人、「タイ人のグループに参加しているから」1 人、「健康に問題があるから」1 人の順である。

表 32　グループに不参加の理由（複数回答）

順位	日本人のグループに参加していない理由
1	自分でやりたいから
2	プライベートでの日本人の仲間がいるから
3	日本人のグループに参加したくないから
4	タイ人の友達がいるから / 活動が大変だった・大変そうだから
5	その他
6	タイ人のグループに参加しているから / 健康に問題があるから

以上のように日本人対象者の 8 割は、日本人グループのメンバーになっている。1 グループに参加している者が最も多いが、最大 4 グループに参加している者もいる。また、そのグループに参加した理由で最も多いものは、「現地の情報を手に入れたいから」である。日本人グループに入るとタイ人との交流のチャンスが増えると思っている者は 4 割である。一方、日本人対象者の 2 割は日本人グループに参加していなかった。その理由は、「自分でやりたいから」という理由が最も多いことが明らかになった。

4.1.3 日本人長期滞在者と現地の人との交流

この節では、アンケートの「Ⅲ長期滞在のための適応について」の質問に基づいて論じる。

4.1.3 .1　長期滞在の予定期間

調査対象者 108 名にどのくらいチェンマイに長期滞在するつもりかを調査したところ、その回答は以下の通りであった。「生涯」37.0%（40 人）、「まだ決めていない」26.9%（29 人）、「健康状況による」22.2%（24 人）、「n 年間」（何年間滞在するかはっきり決めた者）13.0%（14 人）、「経済状況による」0.9%（1 人）の順である。

4.1.3 .2　長期滞在するための適応の度合い

チェンマイに長期滞在するための適応の度合いについて、言語や情報というコミュニケーション面、社会面、文化面の 3 つの行動に分類した。以下のように「よくする」と「ときどきする」内容と「あまりしない」と「全くしない」内容に分けて論じていく。

表 33　長期滞在するための適応の度合い

項目	「よくする」「ときどきする」	「あまりしない」「全くしない」	合計
コミュニケーション面			
タイ・チェンマイの事情が載っている フリーペーパー、インターネットを読む	82.2%（83 人）	17.8%（18 人）	100%（101 人）
日本人のグループに入って情報を得る	81.9%（86 人）	18.1%（19 人）	100%（105 人）
タイ人と話すため英語を勉強する	20.2%（18 人）	79.8%（71 人）	100%（89 人）
タイ人と話すためタイ語を勉強する	58.6%（58 人）	41.4%（41 人）	100%（99 人）
タイ語の番組を見る	26.1%（23 人）	73.9%（65 人）	100%（88 人）
タイ・チェンマイの事情をメールやブログで発信する	27.5%（25 人）	72.5%（66 人）	100%（91 人）
社会面			
タイ人の友達を作る	58.2%（57 人）	41.8%（41 人）	100%（98 人）
タイと日本との交流イベントに参加する	55.7%（54 人）	44.3%（43 人）	100%（97 人）
タイ語が話せる日本人がいるグループに参加する	25.8%（24 人）	74.2%（69 人）	100%（93 人）
タイ人がいるグループに参加する	23.2%（22 人）	76.8%（73 人）	100%（95 人）
タイ人の生活の仕方をマネする	19.1%（18 人）	80.9%（76 人）	100%（94 人）
タイで自動車やオートバイの運転をする	67.0%（67 人）	33.0%（33 人）	100%（100 人）

文化面			
タイ式の挨拶をする	79.8% （79 人）	20.2% （20 人）	100% （99 人）
家でタイ料理を作る、食べる	44.4% （44 人）	55.6% （55 人）	100% （99 人）
タイの服装をする	20.6% （20 人）	79.4% （77 人）	100% （97 人）
タイのスポーツをする	4.1% （4 人）	95.9% （93 人）	100% （97 人）
スプーンとフォークまたは直接、手でタイ料理を食べる	50.5% （50 人）	49.5% （49 人）	100% （99 人）
タイ人の性格と考え方を理解する	72.3% （73 人）	27.7% （28 人）	100% （101 人）

表 33 に示すように、「よくする」と「ときどきする」の回答数の方が多い項目は、コミュニケーション面、社会面、文化面それぞれ以下のようになっている。コミュニケーション面では「タイ・チェンマイの事情が載っているフリーペーパー、インターネットを読む」、「日本人のグループに入って情報を得る」、「タイ人と話すためタイ語を勉強する」である。社会面では、「タイ人の友達を作る」、「タイと日本との交流イベントに参加する」、「タイで自動車やオートバイの運転をする」である。文化面では、「タイ式の挨拶をする」、「スプーンとフォークまたは直接、手でタイ料理を食べる」、「タイ人の性格と考え方を理解する」である。一方、「あまりしない」と「全くしない」の回答数の方が多い項目が、コミュニケーション面では、「タイ人と話すため英語を勉強する」、「タイ語の番組を見る」、「タイ・チェンマイの事情をメールやブログで自分でも発信する」である。社会面では、「タイ語が話せる日本人がいるグループに参加する」、「タイ人がいるグループに参加する」、「タイ人の生活の仕方をマネする」である。文化面では、「家でタイ料理を作る、食べる」、「タイの服装をする」、「タイのスポーツをする」である。「よくする」「ときどきする」の多い項目は、日本人長期滞在者にとって手軽で容易に行える行動があり、「あまりしない」「全くしない」の項目は手間がかかり困難な行動がある。

4.1.3.3 長期滞在に適応できない理由

調査対象者 97 名に複数回答可で、長期滞在に適応できない理由を尋ねたところ、その回答は表 34 の通りであった。「言葉の障壁」70 人、「タイの法律が分からない」27 人、「タイ人との交流の仕方が分からない」26 人、「タイと日本の文化が違いすぎる」21 人、「友達ができない」21 人、「生活するための情報が足りない」13 人、「実際に暮らしてみたら予想と違った」13 人、「健康の問題」12 人、「その他」8 人（「タイ料理が食べられない」など）、「気候の差」5 人、の順で回答が多かった。

表 34　適応できない理由

順位	適応できない理由
1	言葉の障壁がある
2	タイの法律が分からない
3	タイ人との交流の仕方が分からない
4	タイと日本の文化が違いすぎる
4	友達ができない
5	生活するための情報が足りない
5	実際に暮らしてみたら予想と違った
6	健康の問題がある
7	その他
8	気候の差がある

4.1.3.4　困ったときに頼る相手

対象者 109 名に困った時に頼るのは誰かを尋ねたところ、その回答は以下の通りであった。「日本人の友達」19.3%（21 人）、「配偶者」13.8%（15 人）、「タイ人の友達」6.4%（7 人）、「自分で解決する」10.6%（12 人）、「日本総領事」1.8%（2 人）、「その他」1.8%（2 人）である。また、2 つ以上と回答した者は、45.9%（50 人）である。

4.1.3.5 タイ人との交流

対象者 101 名に長期滞在してからのタイ人との交流について尋ねたところ、その回答は以下の通りであった。長期滞在してから、タイ人と交流することが、「よくできた」18.8%（19 人）、「まあまあできた」45.5%（46 人）、「あまりできなかった」25.7%（26 人）、「まったくできていない」9.9%（10 人）である。

4.1.3.6 現地住民との具体的な交流内容

チェンマイの現地の住民との交流内容について、コミュニケーション面、社会面、文化面の 3 つの面から分類した。その内訳は表 35 の通りである。

コミュニケーション面の中に、「よくする」と「ときどきする」の回答数の方が多い項目は「タイ人と日本語で話す」であり、他の項目（「タイ人と英語で話す」、「タイ人とタイ語で話す」、「タイ人と交流したいので英語を勉強する」、「タイ人と交流したいのでタイ語を勉強する」、「タイ人に日本語を紹介したり教えたりする」）は「あまりしない」と「全くしない」の回答数の方が多い。

社会面の中に、「よくする」と「ときどきする」の回答数の方が多い項目は「困ったときにタイ人に手助けを頼む」、「タイ人に手伝ってもらったことがある」であり、同率は、「タイ人がたくさんいるお店に行く」であり、他の項目（「タイ人がたくさんいる住宅に住む」、「タイ人とトラブルになったことがある」、「タイ人のためにボランティア活動をする」）は「あまりしない」と「全くしない」の回答数の方が多い。

文化面の中に、「よくする」と「ときどきする」の回答数の方が多い項目は「タイ人と食事する」であり、他の項目（「タイ人の家に行く」、「タイ人の友人[11]の家族と会う」、「タイ人とスポーツをする」、「タイ人にタイ料理、踊りなどタイの文化を習う」、「タイ人に茶道、生け花、剣道など日本の文化を紹介したり教えたりする」）は「あまりしない」と「全くしない」の回答数の方が多い。

表 35　現地住民との交流内容と頻度

項目	「よくする」 「ときどきする」	「あまりしない」 「全くしない」	合計
コミュニケーション面			
タイ人と日本語で話す	53.4% (47 人)	46.6% (41 人)	100% (88 人)
タイ人と英語で話す	46.6% (41 人)	53.4% (47 人)	100% (88 人)
タイ人とタイ語で話す	47.8% (43 人)	52.2% (47 人)	100% (90 人)
タイ人と交流したいので英語を勉強する	16.0% (12 人)	84.0% (63 人)	100% (75 人)
タイ人と交流したいのでタイ語を勉強する	44.8% (39 人)	55.2% (48 人)	100% (87 人)
タイ人に日本語を紹介したり教えたりする	35.2% (31 人)	64.8% (57 人)	100% (88 人)
社会面			
タイ人がたくさんいるお店に行く	50.0% (45 人)	50.0% (45 人)	100% (90 人)
タイ人がたくさんいる住宅に住む	38.6% (34 人)	61.4% (54 人)	100% (88 人)
困ったときにタイ人に手助けを頼む	52.3% (46 人)	47.7% (42 人)	100% (88 人)
タイ人に手伝ってもらったことがある	57.3% (51 人)	42.7% (38 人)	100% (89 人)
タイ人とトラブルになったことがある	10.1% (9 人)	89.9% (80 人)	100% (89 人)
タイ人のためにボランティア活動をする	43.5% (40 人)	56.5% (52 人)	100% (92 人)
文化面			
タイ人と食事する	60.4%	39.6%	100%

[11]本研究での「顔見知り」、「知り合い」、「友人」の定義は以下の通りである。「顔見知り」は、日常生活の中でよく会うが、名前は知らず、関係性が特にない者を指す。「知り合い」は、日常生活の中でよく会う人で、名前や連絡先などある程度個人情報を知っている。また、ある場面で互いに関係性が構築されているという関係である。「友人」は、日常生活の中でよく会う人で、名前や連絡先などの個人情報をある程度知っている。互いに関係性が構築されており、友人としての認識がある、一緒によく活動をする、困った時に手伝いを求める、相談に乗れるといった者を指す。

	(58 人)	(38 人)	(96 人)
タイ人の家に行く	39.4% (37 人)	60.6% (57 人)	100% (94 人)
タイ人の友人の家族と会う	36.3% (33 人)	63.7% (58 人)	100% (91 人)
タイ人とスポーツをする	25.0% (23 人)	75.0% (69 人)	100% (92 人)
タイ人に料理、踊りなどタイの文化を習う	10.0% (9 人)	90.0% (81 人)	100% (90 人)
タイ人に茶道、生け花、剣道など日本の文化を紹介したり教えたりする	9.9% (9 人)	90.1% (82 人)	100% (91 人)

さらに、チェンマイの長期滞在者でチェンマイを離れた知り合いはいるかについて尋ねたところ、過半数の 59 人がそういう人を何人か知っていると回答した。その理由は、健康の問題、他の国に滞在、高齢、家族の事情、タイ人の女性との問題の順で多かった。

また、タイ人とうまく交流できているとした対象者は、その理由について以下の通り回答した。「タイ語が話せるから」、「タイ人が日本語を話せるから」、「タイ人が日本人によくしてくれるから」の順である。一方、タイ人ともっと交流したいのに、なかなかうまくできない場合も見られた。その理由で最も多かったのは、「言葉の問題があるから」、「タイ人は日本語が話せないから」、「日本人の友達がいるから」の順である。

日本人長期滞在と現地の人との交流の項目に関しては、以下のように論じられる。日本人対象者は、4 割近く「生涯」チェンマイに長期滞在するつもりである。日本人対象者がチェンマイに長期滞在するために適応の度合いが高いことを示す行動（「よくする」と「ときどきする」の割合が半分以上）は、「タイ・チェンマイの事情が載っているフリーペーパー、インターネットを読む」、「日本人のグループに入って情報を得る」、「タイ人と話すためタイ語を勉強する」、「タイ人の友達を作る」、「タイと日本との交流イベントに参加する」、「タイで自動車やオートバイの運転をする」、「タイ式の挨拶をする」、「スプーンとフォークまたは直接、手でタイ料理を食べる」、「タイ人の性格と考え方を理解する」と回答した。一方、適応の度合いが低い行動（「あまりしない」と「全くしない」の割合が半分以上）は、「タイ人と話すため英語を勉強する」、「タイ語の番組を見る」、「タイ・チェンマイの事情をメールやブログで自分でも発信する」、「タイ語が話せる日本人がいるグループに参加する」、「タイ人がいるグループに参加する」、「タイ人の生活の仕方をマネする」、「家でタイ料理を作る、食べる」、「タイの服装をする」、「タイのスポーツをする」である。より容易な行動を行うことで、長期滞在への適応のステップとしていることがわかる。困難な行動を行える日本人長期滞在者は適応の度合いが高いと考えられる。また、対象者はタイ人との交流について、「できる」（「よくできた」と「まあまあできた」の割合が半分以上）64.3%と回答した。加えて、タイ人との具体的なの交流内容（「よくする」と「ときどきする」の割合が半分以上）は、「タイ人と日本語で話す」、「タイ人がたくさんいるお店に行く」、「困ったときにタイ人に手助けを頼む」、「タイ人に手伝ってもらったことがある」、「タイ人と食事する」という項目が挙げられた。彼らがタイ人とうまく交流できる理由は、一位「タイ語が話せるから」、二

位「タイ人が日本語を話せるから」、すなわち、言語面のコミュニケーションがその要因となっており、タイ社会に適応するためには言語面の努力が必要となっている。

以上のアンケート調査の結果から明らかになったことは、以下の通りである。

まず、回答者の性別であるが、回答者の 8 割弱は、男性である。調査の際に、個人的な機縁及び日本人のグループを通してアンケートを依頼したが、日本人のグループの中でメンバーの多くは男性だった。女性は配偶者と共に参加する場合が多く、夫婦の場合、男性が回答する場合が多かったためである。また、女性の一人暮らしは男性と比べると少ない。2012 年度在チェンマイ日本国総領事館によると、タイ北部に 90 日間以上在留する日本人数は、男性 2,597 名、女性 1,270 名（計 3,867 名）である。財団法人ロングステイ財団のロングステイ調査統計 2012 年度によると、ロングステイ希望国ベスト 20 の結果は、女性より男性の方が 2 倍多く、マレーシアやフィリピンも同様の傾向があり、本研究の調査結果と同様の傾向を示している。

上述のように男性の対象者（N=88）は、「タイ人の配偶者と共に長期滞在 21.8%（18 人）」と「タイ人異性の方と共に長期滞在 6.9%（6 人）」であり、女性の対象者（N=25）は、「タイ人の配偶者と共に長期滞在 4%（1 人）」である。この結果により、男性の日本人長期滞在者は、タイ人の配偶者及びタイ人の女性と共に長期滞在している事例が少なくない。また、「現在誰と共に長期滞在しているか」ということが日本人のグループへの参加状況と関係性があることが明らかとなった。データからは、チェンマイに滞在してから日本人グループに参加した者が日本人の配偶者と共に長期滞在している者 6 割で最も高いと明らかになった。タイ人の配偶者およびタイ人異性と共に長期滞在している者は、最初から日本人グループのメンバーにならなかったが、何年間後に日本人グループに参加するようになったことがわかった。その理由は、タイ人と付き合ってから滞在期間の予定をさらに延長することになったことや、タイに生活の拠点を移すことに決めたことである。詳細は表 36 の通りである。

表 36　「現在誰かと共に長期滞在している」と「日本人グループの参加」の関係

	前：参加 今：参加	前：参加 今：参加しない	前：参加しない 今：参加	前：参加しない 今：参加しない	合計
日本人の配偶者と	61.9% (26 人)	9.5% (4 人)	14.3% (6 人)	14.3% (6 人)	100% (42 人)
タイ人の配偶者と	45.0% (9 人)	5.0% (1 人)	45.0% (9 人)	5.0% (1 人)	100% (20 人)
タイ人異性と	33.3% (2 人)	-	50.0% (3 人)	16.7% (1 人)	100% (6 人)
一人で	59.5% (22 人)	2.7% (1 人)	16.2% (6 人)	21.6% (8 人)	100% (37 人)
その他	-	50.0% (1 人)	50.0% (1 人)	-	100% (2 人)
合計	51.1% (59 人)	6.5% (7 人)	23.4% (25 人)	15.0% (16 人)	100% (107 人)

本研究の対象者の 6 割は、60 代である。この年代が最もチェンマイに長期滞在していることになる。60 代前半の対象者は、定年退職して仕事から開放されて年金を受給し始め、好健康を

維持している者が多い。つまり時間、お金、健康の 3 つの自由を享受することができる。このような自由さが、他の年代より海外で生活を送ることを決定する重要な要素であると考えられる。

また、チェンマイに長期滞在する期間については、以下の表のように、男性の対象者の多くが、チェンマイに「生涯」滞在するつもりだと回答し、女性の対象者とは異なっている。

表 37　「性別」と「チェンマイに長期滞在する期間」

これからどのくらいチェンマイに長期滞在するつもりか								合計
期間		n 年間※	生涯	健康状態による	経済状態による	まだ決めていない	条件 2 つ以上	
性別	男性	10.6% (9 人)	43.5% (37 人)	23.5% (20 人)	1.2% (1 人)	12.9% (11 人)	8.2% (7 人)	100% (85 人)
	女性	21.7% (5 人)	13.0% (3 人)	17.4% (4 人)	0.0% (0 人)	30.4% (7 人)	17.4% (4 人)	21.3% (23 人)
合計		13.0% (14 人)	37.0% (40 人)	22.2% (24 人)	0.9% (1 人)	16.7% (18 人)	10.2% (11 人)	100.0 (108 人)

（※n は滞在を希望する年数である。平均 6.2 年、最短で 1 年、最長で 10 年である。）

次に、チェンマイでの滞在期間とタイ人との交流について対照してみると、チェンマイにより長く滞在することとタイ人との交流の度合いには関係があることがわかった。その詳細は表 38 の通りである。

表 38　チェンマイでの滞在期間とタイ人との交流の関係

交流の度合い / 滞在期間	「よくできた」「まあまあできた」	「あまりできなかった」「全くできていない」	合計
3 か月以上～3 年未満	54.2% (13 人)	45.8% (11 人)	100% (24 人)
3 年～6 年未満	74.1% (20 人)	25.9% (7 人)	100% (27 人)
6 年～9 年未満	61.9% (13 人)	38.1% (8 人)	100% (21 人)
9 年～12 年未満	72.2% (13 人)	27.8% (5 人)	100% (18 人)
12 年～15 年未満	57.1% (4 人)	14.3% (1 人)	100% (7 人)
15 年～18 年未満	50.0% (1 人)	50.0% (1 人)	100% (1 人)
18 年以上	50.0% (1 人)	50.0% (1 人)	100% (1 人)
合計	65.6% (65 人)	34.3% (34 人)	100% (99 人)

表 38 のように、3 か月以上～3 年未満の長期滞在者はタイ人との交流において交流できる者とできない者の割合があまり変わらないが 3 年～6 年未満、9 年～12 年未満、12 年～15 年未満では交流できた者ができなかった者を大きく上回っていることが明らかになった。このことにより、3 年間以上、チェンマイに長期滞在すれば、タイ人との交流できる者の割合が増える傾向があると言える。

加えて、チェンマイにより長く滞在することと、タイ人と交流するためタイ語を学習することには関係があることもわかった。表 39 は長期滞在の期間とタイ人と交流するためのタイ語学習についての頻度の関係である 3 か月以上～6 年未満の期間はタイ人と交流するためタイ語を勉強することが半分以上「あまりしない」と「全くしない」と回答した。しかし、滞在期間 6 年間以上になると、6 割以上タイ人と交流するためタイ語の勉強を「よくする」と「ときどきする」と回答した。

表 39　長期滞在期間とタイ語学習の関係

タイ語学習 / 滞在期間	「よくする」「ときどきする」	「あまりしない」「全くしない」	合計
3 か月以上～3 年未満	44.0% (11 人)	56.0% (14 人)	100% (25 人)
3 年～6 年未満	44.0% (11 人)	56.0% (14 人)	100% (25 人)
6 年～9 年未満	80.0% (12 人)	20.0% (3 人)	100% (15 人)
9 年～12 年未満	61.6% (8 人)	38.4% (5 人)	100% (13 人)
12 年～15 年未満	66.7% (4 人)	33.3% (2 人)	100% (6 人)
15 年～18 年未満	-	-	-
18 年以上	100% (1 人)	-	100% (1 人)
合計	55.3% (47 人)	47.7% (38 人)	100% (85 人)

また、「現在あなたは日本人のグループに参加していますか」と「長期滞在してから、あなた自身はタイ人と交流することができましたか」という問いによって、日本人グループへの入会とタイ人との交流の関係について調査した結果は表 40 の通りである。この結果から日本人のグループに参加している者の方が、長期滞在してからタイ人と交流することができたという傾向がみられる。

表 40　日本人グループへの参加とタイ人との交流の度合いの関係

タイ人との交流の度合い / グループへの参加		長期滞在してタイ人と交流できたか				合計
		よくできた	まあまあできた	あまりできなかった	全くできていない	
グループへの参加	参加している	19.2% (15人)	48.7% (38人)	24.4% (19人)	7.7% (6人)	100% (78人)
	参加していない	17.4% (4人)	34.8% (8人)	30.4% (7人)	17.4% (4人)	100% (23人)
合計		18.8% (19人)	45.5% (46人)	25.7% (26人)	9.9% (10人)	100% (101人)

また、「日本とチェンマイのどちらの生活に満足していますか」と「長期滞在してから、あなた自身はタイ人と交流することができましたか」という問いに対する回答は表 41 の通りである。「チェンマイの方に満足している」と回答した者の方が、よりタイ人と交流することができたという傾向がみられる。

表 41　生活の満足度とタイ人との交流の度合いの関係

タイ人との交流 / 生活の満足度	よくできた	まあまあできた	あまりできなかった	全くできていない	合計
日本の方に満足	14.3% （1人)	28.6% （2人)	42.9% （3人)	14.3% （1人)	100% （7人)
チェンマイの方に満足	26.8% （15人）	44.6% （25人）	21.4% （12人）	7.1% （4人）	100% （56人）
両方とも同じくらい	8.6% （3人）	51.4% （18人）	31.4% （11人）	8.6% （3人）	100% （35人）
両方とも不満	0% （0人）	0% （0人）	0% （0人）	100% （1人）	100% （1人）
合計	19.2% （19人）	45.5% （45人）	26.3% （26人）	9.1% （9人）	100% （99人）

次に、タイ人とのコミュニケーションに注目してみよう。日本人対象者は、タイ人とのコミュニケーションの際、英語、タイ語、日本語の順で利用していることが明らかになった。彼らはいずれの言語でもタイ人とのコミュニケーションについて、《「よくする」と「ときどきする」》としつつ、タイ人と交流《「よくできた」と「まあまあできた」》とする者が、言語のいずれもタイ人と《「あまりしない」と「全くしない」》で、タイ人と交流《「あまりできなかった」と「全くできていない」》者より割合が高い。つまり、タイ人とコミュニケーションをすれば、タイ人との交流が高くなると言えよう。詳細は表 42 の通りである。

表 42　タイ人とのコミュニケーションの度合いと言語能力の関係

使用言語	交流 / 使用	「よくできた」「まあまあできた」	「あまりできなかった」「全くできていない」	合計
日本語	「よくする」「ときどきする」	44.7% (17 人)	55.3% (21 人)	100% (38 人)
	「あまりしない」「全くしない」	73.8% (31 人)	26.2% (11 人)	100% (42 人)
英語	「よくする」「ときどきする」	50.0% (22 人)	50.0% (22 人)	100% (44 人
	「あまりしない」「全くしない」	73.0% (27 人)	27.0% (10 人)	100% (37 人)
タイ語	「よくする」「ときどきする」	44.2% (19 人)	55.8% (24 人)	100% (43 人)
	「あまりしない」「全くしない」	87.2% (34 人)	12.8% (5 人)	100% (39 人)

日本人の言語能力について見ると、英語よりタイ語を学んでいることがわかる。それは、チェンマイで生活するためにはタイ語の方が役に立つ、タイ人と交流したい場合英語よりタイ語の方が便利、英語を勉強しても現地のタイ人はあまり英語が話せないという理由が考えられる。また、日本人長期滞在者は、自分がタイ語を勉強するよりもタイ人から日本語で話しかけてほしいと考えている者がいる。また、タイ人と最も身近に関わる、すなわちタイ人の配偶者または異性の方と共に長期滞在している者の中で、タイ人との交流することが《「よくできた」及び「まあまあできた」》と回答した者が 7 割以上である。これは、日本人の配偶者と共に長期滞在している者と一人で長期滞在している者より上回っていることが明らかになった。その詳細は表 43 の通りである。

表 43　長期滞在の同居者とタイ人との交流の関係

タイ人との交流 / 長期滞在の同居者	よくできた	まあまあできた	あまりできなかった	全くできていない	合計
日本人の配偶者	15.0% (6 人)	47.5% (19 人)	27.5% (11 人)	10.0% (4 人)	100% (40 人)
タイ人の配偶者	22.2% (4 人)	55.6% (10 人)	22.2% (4 人)	-	100% (18 人)
タイ人異性	20.0% (1 人)	60.0% (3 人)	20.0% (1 人)	-	100% (5 人)
一人で	22.2% (8 人)	38.9% (14 人)	25.0% (9 人)	13.9% (5 人)	100% (36 人)
その他	-	-	100% (1 人)	-	100% (1 人)
合計	19.0% (19 人)	46.0% (46 人)	26.0% (26 人)	9.0% (9 人)	100% (100 人)

4.2 インタビュー調査結果

本研究では、アンケート調査に加えてインタビュー調査を 2014 年～2015 年に実施した。インタビュー調査については、2 回実施した。1 回目は 2014 年 9 月の間に日本人対象者 23 人、2 回目は 2015 年 2 月に日本人対象者 8 人、合計で 31 人（29 ケース）にインタビューを行った。対象者の内 2 人は、2013 年にアンケート調査を行った際の対象者であった。対象者の多くは、現地にある日本人グループのメンバーに依頼して紹介された者であった。他の対象者は、チェンマイの語学学校などで知り合った日本人長期滞在者などである。インタビューを依頼する際は、電子メールアドレスや電話番号を入手し、日時と場所について決めた。インタビュー時間は 1 時間程度であり、インタビューの場所は、喫茶店、ホテルのロビー、本人の部屋、語学学校の校内などである。また、インタビューが始まる前に、調査の目的や質問の背景などを説明し、本人から許可を取って録音した。

インタビューの協力者を特定するのを防ぐため、仮名を使用する。最初のアルファベット J は Japanese（日本人）を意味し、その後に、01、02、03…029 のように、番号をつけて、以下の表のように整理した。

表 44　日本人対象者のインタビュー調査日時

ケース名	性	インタビュー日（年・月・日）	インタビュー時間
J01	男女	2014・09・01	11:30-12:30
J02	男	2014・09・01	09:15-10:15
J03	男	2014・09・03	11:00-12:00
J04	男	2014・09・04	12:00-13:30
J05	男	2014・09・04	14:30-15:30
J06	男	2014・09・05	16:00-17:00
J07	男	2014・09・05	17:30-18:30
J08	男	2014・09・08	11:00-12:00
J09	男	2014・09・09	13:00-14:00
J10	男女	2014・09・09	14:00-15:00
J11	女	2014・09・15	14:00-15:05
J12	男	2014・09・21	13:15-14:15
J13	男	2014・09・21	14:30-15:20
J14	女	2014・09・22	11:00-12:00
J15	女	2014・09・22	09:30-10:30
J16	男	2014・09・22	14:30-16:00
J17	女	2014・09・23	15:00-16:00
J18	女	2014・09・23	09:30-10:30
J19	女	2014・09・23	11:00-12:00
J20	女	2014・09・23	13:00-14:00
J21	男	2014・09・25	10:30-11:30
J22	女	2015・02・23	10:40-12:00
J23	男	2015・02・23	13:00-14:30
J24	男	2015・02・23	15:30-16:30

J25	男	2015・02・23	17:00-18:00
J26	男	2015・02・24	09:30-10:30
J27	女	2015・02・24	16:00-17:15
J28	男	2015・02・25	16:00-17:30
J29	男	2015・02・26	09:40-10:40

インタビューの内容は、アンケート調査の項目と同様であるが、以下の 4 つの項目の中で I 以外は回答者の自由回答である。

Ⅰ　日本人対象者の属性などの基本的項目について（Face Sheet 項目）
Ⅱ　長期滞在の背景について
Ⅲ　長期滞在のための適応について
Ⅳ　現地の設備・環境と満足度について

4.2.1　チェンマイにおける日本人滞在者の属性などの基本的データ

ここでは、アンケート調査の質問項目と同じように I 日本人対象者の属性などの基本的項目について、Ⅱ長期滞在の背景について、という 2 つの項目に分けて論じていく。

4.2.1.1　性別

インタビュー調査を受けた対象者は 31 人である。男性 64.5%（20 人）で、女性 35.5%（11 人）、またその中に、夫婦 2 組が含まれている。詳細は表 45 の通りである。

表 45　性別

性別	実数（人）	比率（%）
男性	20	64.5
女性	11	35.5
合計	31	100

4.2.1.2　年齢

インタビュー調査は 2014 年と 2015 年、2 回に分けて実施したため、調査時に得たデータに基づくが、最高齢は 77 歳で、最も若い人は 53 歳である。平均年齢は 67.5 歳である。60 代 61.3%（19 人）、70 代 32.2%（10 人）、50 代 6.5%（2 人）である。詳細は表 46 の通りである。

表 46　年齢（2013 年現在）

年代	実数（人）	比率（%）
50～59代	2	6.5
60～69代	19	61.3
70～79代	10	32.2
合計	31	100

4.2.1.3 出身地

対象者の出身地の内訳は表 47 の通りである。関東地方 47.8%（15 人）、近畿地方 21.7%（6 人）、中部地方 17.4%（6 人）、九州地方 8.7%（3 人）、四国地方 4.4%（1 人）である。

表 47 出身地

出身地	実数（人）	比率（%）
関東	15	48.4
近畿	6	19.4
中部	6	19.4
九州	3	9.6
四国	1	3.2
合計	31	100

4.2.1.4 ビザの種類

対象者のビザの種類の内訳は表 48 の通りである。
ロングステイビザ 74.2%（23 人）、年金ビザ 19.3%（6 人）、その他 6.5%（2 人）（ビジネスビザ 1 人とその配偶者 1 人）である。

表 48 ビザの種類

ビザの種類	実数（人）	比率（%）
ロングステイビザ	23	74.2
年金ビザ	6	19.3
他のビザ	2	6.5
合計	31	100

4.2.1.5 滞在期間

対象者の滞在期間の内訳は表 49 の通りである。本研究のインタビュー調査は 2014 年と 2015 年、2 回を分けて実施したため、調査時に得たデータに基づいているが、最長は 18 年、最短は 1 年 4 ヶ月である。3 ヶ月以上 3 年未満は 17.4%（5 人）、3 年以上 6 年未満は 34.8%（10 人）、6 年から 9 年未満は 30.4%（8 人）、9 年から 12 年未満は 13.0%（4 人）、12 年から 15 年未満は %（3 人）、 15 年以上は 4.4%（1 人）である。

表49　滞在期間

滞在期間	実数（人）	比率（%）
3ヵ月～3年未満	5	16.1
3年～6年未満	10	32.3
6年～9年未満	8	25.8
9年～12年未満	4	12.9
12年～15年未満	3	9.7
15年以上	1	3.2
合計	31	100

4.2.1.6　家族形態

対象者の調査時の家族形態は表 50 の通りである。配偶者と共に滞在　35.5%（11 人）（この中に、日本人の配偶者 63.6%（7 人）(夫婦 1 組を含む)で、タイ人の配偶者 36.4%（4 人））、家族のメンバーと共に滞在 16.1%（5 人）、一人で滞在 48.4%（15 人）である。一人で滞在する理由は、配偶者が日本にいるため 40.0%（6 人）、離婚 26.7%（4 人）、死別 20.0%（3 人）、未婚　13.3%（2 人）である。

表 50　長期滞在の同居者

誰と共に長期滞在	実数（人）	比率（%）
日本人の配偶者と	7	22.6
タイ人の配偶者と	4	12.9
家族のメンバーと	5	16.1
一人で長期滞在	15	48.4
合計	31	100

4.2.1.7　現在の収入の金額

「月に 100,000 円以下」3.2%（1 人）「月に 100,000－149,999 円」12.9%（4 人）である。「月に 150,000－199,999 円」6.5%(2 人)、「月に 200,000－249,999 円」16.1%(5 人)、「月に 250,000－299,999 円」12.9%（4 人）「月に 300,000 円以上」9.7%（3 人）、「まだ受給していない」6.5%(2 人)、「一部しか受給していない」12.9%（4 人）、無回答 19.3%（6 人）　。

表51　収入の金額

金額	実数（人）	比率（%）
月に100,000円以下	1	3.2
月に100,000～149,999円	4	12.9
月に150,000～199,999円	2	6.5
月に200,000～249,999円	5	16.1
月に250,000～299,999円	4	12.9
月に300,000円以上	3	9.7
まだ受給していない	2	6.5
一部しか受給していない	4	12.9
無回答	6	19.3
合計	31	100.0

4.2.1.8　外国語運用能力

大方の対象者は英語を読むことができる。半分の対象者は英語を話すことができる。一方、3分の 1 の対象者はタイ語を話すことができるが、タイ語を読むことができる対象者はごくわずかである。

インタビュー調査の日本人対象者には、以下の共通した背景がある。対象者の多くは、男性、60 代、関東地方の出身、ロングステイビザ、3 年間以上 6 年未満の滞在期間、現在一人で滞在、家庭の収入金額月に 200,000～249,999 円、タイ語より英語の方が読め、話せるという日本人対象者である。アンケート調査の対象者とほぼ同様の属性だが、滞在期間が 3 年未満という短い人は少ない。

4.2.1.9　長期滞在の背景

対象者は、全員チェンマイに長期滞在する前に、観光やツアーでチェンマイに訪問したことがある。また、チェンマイに滞在することを決める前に、実際に現地で住宅、病院、デパート、環境など確認してから、決めるという方法をとる者が少なくない。定年後、チェンマイに長期滞在することに決めた理由は、次の 11 の要因が挙げられる。複数の要因を述べた者もいる。回答者数の多いものから順に論じる。

（1）物価

日本より物価が安い所、受給された年金や貯金で暮らせる所、同じ金額でも、より価値のある商品とサービスを受けられる所に滞在することを望む対象者が多い。以下のように事例が挙げられる。

J01（夫婦）「物価の条件がよい」

J02「チェンマイでは、私の受給している年金で生活できる。家賃、光熱費、日本番組の契約の合計で月に 30,000 バーツで十分暮らせる。しかし、月に 150,000 円の年金では日本では暮らせない」

J05「タイのゴルフ代が安いため。私は毎日ゴルフをしたい」

J06「私は年金で生活できる場所を探していたから」

J09「チェンマイは、バンコクより空気がいいし、物価もよい」

J10（夫婦）「日本ではインフラストラクチャーが充実していて便利な生活ができたが、チェンマイは日本より物価が安いから、ここに滞在にしている」

J11「5 年前にバンコクで洪水になったとき、航空券が安かったチェンマイで 10 日間暮らしてみて、年金などで暮らせると分かってチェンマイに滞在することに決めた」

J12「最初は、チェンマイに長期滞在しようと思っていなかった。娘がニュージーランドで働いているので、3 ヵ月ニュージーランドに滞在してみたが、日本より 1.5 倍物価が高くて、月に 400,000 円かかってしまった」

J13「日本では、つまらない、暇な時間が多い。また暮らすためにたくさんお金を使う。私はお金がないので、アメリカに滞在できない。東南アジアなら滞在できる」

J14「旦那はチェンマイが住みやすいと言う。物価が安いし、週に 3 回ゴルフをプレーできるし」

J16「チェンマイは物価が安い。日本で 100,000 円を使うよりチェンマイで使いたい」

J19「日本にいてもタイにいても、同じ年金で生活を送るので、チェンマイの暮らしの方が、日本に暮らすことより（経済的に）楽だ」

J21「経済の面を考えると、チェンマイのほうが楽に住めるが、日本ではお金がすぐなくなる」

J26「物価が安いし、街のサイズがコンパクトで、チェンマイは住みやすいと思う。今、私はチェンマイで月に 300,000 円を使っている。円安の影響でバーツに両替した年金の金額が減ってくると、ラオス、カンボジアに行くかもしれない。

（2） 気候

チェンマイは日本と比較すると温暖な気候である。特に 10 月から 3 月の間は、日本は寒い季節になり、高齢者はアウトドアの活動ができず、骨や関節が痛み体調を崩しやすいこともある。そのため、暖かいチェンマイに移動することを決めたという者が多い。屋外で活動や運動をすることで、体調が回復する、健康を維持するなどできるのである。以下のように事例が挙げられる。

J02「冬に日本にいると、外であまり遊べない」

J03「チェンマイの気候がいい。あまり寒くない。夏の季節は東京の暑さと変わらない。しかし、チェンマイは 3 月空気が悪い（スモッグ問題）」

J04「チェンマイの利点は暖かい気候…」

J05「チェンマイの冬は寒くない。日本の秋に似ている」

J07「日本の冬が好きじゃない。チェンマイの気候がいいし、暖かい…」

J08「タイに来る理由は暖かいから…」

J09「チェンマイはバンコクより気候がいい」

J10「チェンマイに長期滞在する理由は、40年前にバンコクに旅行してとても気に入ってバンコクで暮らしたかったが、家族の事情ですぐ来られなかった。定年後、バンコクに来て東京みたいに人が多い、暑い、生活を送ることに向いていないと思ったので…」

J12「バンコクの暑さが好きじゃない。チェンマイの方がいい」

J13「チェンマイに旅行した時に、チェンマイがちょっと田舎だし、バンコクより涼しいと思った」

J15「冬だけど、寒くないところで好き」

J16「チェンマイの気候がいい。4 月はとても暑くてあまりよくないが、平均的に気候がいい、温かい…」

（3）自由な生活

チェンマイでの長期滞在により、自由に自分の生き方と活動を決めることができ、またゆっくりとのんびりとした生活ができるとする対象者がいる。例えば、スポーツ、写真撮影、タイ語の勉強、ボランティア活動などをしている。以下のように事例が挙げられる。

J20「私はずっと卓球をやっているので、チェンマイに来る前にチェンマイの卓球できるところを○○会に問い合わせた」

J22「私は旦那がタイに出張した時に一緒に行って、タイが好きになった。日本よりチェンマイに暮らしたい。私は日本語教育を学んだことがあるので、金曜日の夜と土曜日にブラジる者、フィリピン人、中国人、インド人、インドネシア人などに外国人に無償で教えていた。2003年にチェンマイの山の方にある日本人の日本語教師から連絡があった。その人が体調があまりよくなくなって、手伝ってくれる者がほしいと言われて、有給休暇を取ってチェンマイに初めて来た。その後、チェンマイに来てボランティア活動を続けている」

J29「私はトンボと蝶を撮影することが好きで、国内を全て回った。次いで、香港などの海外に行くようになったが、香港は中国の一部に戻ってから虫を捕まえることが禁止になった。それから、友達からチェンマイのことを紹介してもらった。チェンマイには新しい虫がたくさんいることなどが長所だ」

（4）環境

寺院や濠などの物的環境や森林などの自然環境、町全体がコンパクトであり、街並みが都会と田舎の中間であるといった雰囲気に関心を持つ者が多い。以下のように事例が挙げられる。

J09「2006年に海外に滞在したかったので、その1、2年前からチェンマイに4回行った。その時、チェンマイの自動車の数が少ない、住みやすい街、コンパクトなサイズ（小さい街だが、便利な生活できる）」

J12「バンコクでは騒がしくてうるさい。チェンマイに来て700年の濠に関心があった」

J14「住んでいる所がきれいで、メヤやセントラルフェスティバルの新しいデパートができて、ショッピングができる。」

J15「私はアジアが好きだ。15年前から東南アジアが好き。特に手工芸品、例えば、バティック染め、マンゴスチン石鹸、ココナッツ油などだ。大都市で暑いバンコクも好きだ。チェンマイはのんびりで、田舎っぽくて日本人が多い」

J19「チェンマイの対象者が優しくて、また都会と田舎の両方があって、インフラストラクチャーも整っていて生活することには困らないので、旦那は定年になってチェンマイに長期滞在

していた。バンコクの方はお店や人が多くて東京のような街で物価も高く、あまり日本と変わらないから…」

（5）現地の対象者の性格

対象者は、特に外国人に対して愛想がよく、タイ社会の規範が柔軟であることに、関心を持ち、また安心感を持つ者が多い。以下のように事例が挙げられる。

J16「チェンマイの人はきちんとできない。間違ってもマイ・ペン・ライ（大丈夫）、時間が遅れても問題がない。タイ人が最ものん気。タイのルールはあまり厳しくないので、ストレスがない、ほっとする」

J17「60 年間日本にいたので、定年後は海外で暮らしたい。生活するためのストレスがないため。日本にいるとストレスが溜まる。ヨーロッパとアメリカにあまり行かない理由は文化的な違い。アジアだと米食文化があってあまり変わらない。また日本料理の調味料が買えるので、日本の生活とあまり変わらない。…日本よりチェンマイの方が住みやすい、タイ人が優しい」

J18「タイ人の男は、妻と子供に優しい。この点がとてもいいこと。それは、タイ人の子はあまり親に抵抗しないが、日本人の子は抵抗する」

J21「ツアーと共にチェンマイに来た時に、チェンマイの女性は、〜チャオという。それは柔らかい言い方で、次いでまた自分でチェンマイに旅行した」

J28「他の国はあまり自由だと感じない。タイは住みやすい、ビザを申請することも簡単」

（6）日本人からの情報

対象者の中には、日本人から紹介された、また日本人のグループや日本人がたくさんいるという理由から滞在している者が見られる。以下のように事例が挙げられる。

J06「チェンマイに来たことがある友達から聞いた。私は自然が好きなので、海も山も好きだが、プーケットでは観光客がたくさんいるので」

J07「ここには、日本人がたくさんいる。私は友達が多く、ゴルフやレストランの情報をよく教えてもらった」

J14「日本人グループに参加している。そのメンバーと共にタイ語を勉強、カードゲームをプレーする、コーラスをする、I-pad の使い方を勉強する。旦那の方はゴルフと書き物をやる」

J19「長期滞在する 2、3 年前からその計画を始めた。東京で開催しているロングステイフェアを見に行った。その時、ロングステイ財団の委員に相談に乗ってもらい、最終的には、チェンマイとバンコクに長期滞在することを決めた」

J20「最初はマレーシアのクアラルンプールに長期滞在したかった。でも私は車の運転ができない。その後、ロングステイの本を買って、本の後ろの方に〇〇会の連絡先が掲載されていたので、そこに連絡して、女性一人だとクアラルンプールよりチェンマイを選んだ方がいいとアドバイスを得た」

（7）チェンマイの食生活

チェンマイには、料理や果物が豊かで、タイ料理、果物、日本の食材、他国の料理と様々な種類がある。また、外食するための食堂やレストランがたくさんある。以下のように事例が挙げられる。

J15「毎週日曜日に JJ マーケットで無農薬野菜を買う…食事は朝と晩は日本料理で、昼ご飯はタイ料理を食べる。好きな料理はカオソイや唐辛子無しソムタムだ」

J26「タイを選択した理由は、タイと日本の間に言葉以外にあまり壁がないから。中東アジアだと、寒い時はとても寒くて、暑い時はとても暑くて、日本料理はなく、イスラム教などで全然日本と異なる」

（8）文化

対象者の中には、アジアの文化、特にタイの文化に関心を持ち、観光に興味を持つ者がいる。以下のように事例が挙げられる。

J08「アジアが好きで、フィリピン、カンボジア、ベトナムなどに旅行した」

J11「昔、アジア全体にバックパッカーとして回った」

（9）家庭事情

対象者の中には、家庭の事情によってチェンマイに滞在する者も見られる。家族のメンバーが同居したい場合もあれば、別居したい場合もある。以下のように事例が挙げられる。

J10（妻）「実は私はここに来たくなかった。私も旦那も病気があるので、一人が日本にいて、もう一人がタイにいるとお金がかかり、また医療のためのお金も問題になるので、同居をしなければならない。」

J18「子育てや孫育てのため」

J23「妻は東京で暮らしたい。私と共に暮らしたくないと言われた。妻はチェンマイに来なくてもよいと私も思っている」

J25「私は旅人だと思う。妻が日本にいる。妻はヨーロッパの方が好きで、暑さと辛い料理が好きじゃない。もし妻がタイに来たら、私に愛人がいるかどうかが分かる。離れてみれば、夫婦のリフレッシュになるかもしれない」

（10）タイ人との婚姻

対象者の中には、タイ人と結婚したために滞在する者もいる。以下のように事例が挙げられる。

J08「タイ人の妻と結婚して、一人子供がいる。タイに移住するつもりだ」

J24「日本人の妻がいたが、子供がいなかった。チェンマイに来る前に妻と離婚した。タイ人と結婚したい。結婚できたらタイに移住したい。正直、優しくて仕事にまじめな人なら、30～40歳で元旦那との子供がいても、結婚した経験があっても大丈夫だ。」

J27「60年以上タイ人の友達と連絡を取っている。彼はチェンマイにいるので、チェンマイに長期滞在している。チェンマイの生活では彼と相談して、困ることがない」

（11）その他の理由

その他には例えば、J1（夫婦）のように「日本で起こった災害の影響から逃れるため」という理由で移住を決めたという事例もある。

上述のように、インタビュー調査対象者がチェンマイに長期滞在することに決めた理由は、日本より暖かい、安い物価、自由な生活、現地の人の性格、街の環境、アジア文化への関心、家族のメンバーとの同居、現地の人との交際などが挙げられた。この結果は、アンケート調査対象者の結果と、経済面の「物価が安い」、社会面の「現地の人と付き合いたい」、環境面の「気候がいい、住まいの環境が良い」などの点が一致している。次いで、チェンマイでの日本人長期滞在者の生活実態について論じていく。

4.2.2　日本人長期滞在者の生活

総務庁統計局の「社会生活基本調査」によると、基本的な社会生活は生理的な活動、社会的な活動、余暇活動に分類されている。チェンマイに日本人長期滞在者は、生活のために食事、宿泊、交通などの生理的な活動の事例、コミュニケーションの言葉（言語）、家事、買い物、グループのミーティングなど社会的な活動の事例、ゴルフ、旅行、読書、フィットネスなどの余暇活動を行っている。チェンマイにおける日本人長期滞在者の生活といっても多岐にわたるため、生活の中で重要な食事、乗り物、言葉（言語）、趣味の活動という 4 項目に絞って論じる。

第一は、生活に不可欠な食事である。

日本人対象者は、台所があるところで生活をする者が見られる。夫婦で移住している場合は大抵、妻の方が食事を作る。一人暮らし男性の場合は、自炊することもあるようだ。例えば、味噌汁、納豆、漬物、日本米、生卵といった材料を購入し、簡単に作れるものを調理するという。以下のように事例が挙げられる。

J09「タイ人の配偶者に煮物やカレーの作り方を教えて作ってもらう。たまに、辛くないタイ料理を食べる」

J10（夫婦）「タイの材料を使って自分（妻）で日本料理を作る。タイ料理は作らない」

J14（妻）「日本料理を作る。タイ料理は作らない」

J28「三食とも自分で日本料理を作る。作る料理は、例えば、味噌汁、焼き魚、唐揚げ、オニオンサラダである。食材は、毎日ローカル市場、時々リムピンスーパーマーケットで購入する」

味噌、醤油、納豆などの日本料理の調味料と材料は、リムピンスーパーマーケットなどで日本からの輸入品を購入する。肉と野菜もデパートで売っているものを購入する者が多い。理由としては、ローカル市場より値段が高くても衛生、安全、品質が信頼できるためである。以下のように事例が挙げられる。

J12「いつも日本料理を食べる。昼食は予算は 100 バーツで日本料理店へ食事に行く。夕食は、ローカル市場、ビックシー（BIG C）、マクロ（Makro）などの大手の SC（ショッピングセンター）で日本米や野菜の漬物を買って、部屋で食事する」

J22「トップス（Tops）スーパーマーケットで日本の調味料、野菜、肉を購入する。ローカル市場の方がかなり値段が安いが、スーパーマーケットの方が安心感がある」

J24「主に自分で料理を作る。リムピンスーパーマーケットで納豆、カレー粉、白菜などを買って料理を作る」

本研究の調査によると、朝食は大方の対象者が自宅で食べている。米、味噌汁、パン、サラダ、コーヒーのような和風、または洋風のスタイルである。昼食は外でとることが多い。日本人グループとの活動後、共に食事する、ゴルフのプレー後、外で食事するということもある。

街での観察から判明した人気店は、ボタン、寿司次郎、スマイリー、のぼる、むらき食堂などであり、このような日本料理店やタイ料理店で食事する者が多い。これらの料理店は、タイ人オーナー、日本人オーナー、タイ人の配偶者等の経営で、手軽な値段でゆっくりできる場所

であるため日本人がよく利用すると思われる。デパートに入っているようなタイ人向けの日本料理店は利用しないという回答も得られた。また、1〜2 人で食事する場合は、ホテルのブッフェ、屋台、日本料理、タイ料理、チェンマイの郷土料理、洋食などいろいろな料理を食べることもあるという。タイ料理を食べる機会が最も多いのは昼食である。夕食は、外食をするか自宅で食べることになる。自宅での場合は日本料理を食べる。外食をする場合は、タイ料理、日本料理、西洋料理になる。男性はグループで食事しながらビールを飲む人が多い。女性の場合は不安のため夜になるとあまり外に出かけないように気を付けている者が多い。よく食べる料理の種類で分類すると、日本人対象者は、日本料理、タイ料理、日本料理とタイ料理両方を食べる対象者という 3 グループに分けられる。

（1） 日本料理を主に食べる対象者

J06「日本人に人気のある食堂によく食事しに行く」

J08「よく外で日本食、特に焼き魚を食べに行く」

J19「朝食は自分で日本料理を作る。昼食はゴルフをプレーした後に、ゴルフ場で食事をする。夕食は、材料を買って自分で作る、もしくは外食をする。外食する場合、大方日本料理店で食べる」

（2）タイ料理を主に食べる対象者

J03「タイ人の妻と共にタイ料理とチェンマイ郷土料理をよく食べる」

J15「昼食と夕食に日本料理を自分で作る。昼は外食する。カウソイ、ソムタムなどタイ料理が好き」

J29「蝶を撮影する後に、近くの店でタイ料理を食べる。日本料理の場合は自分で作る。その時にリムピンスーパーマーケットやトップスでみりん、醤油などを購入する」

（3）日本料理とタイ料理両方を食べる対象者

J13「自分で料理を作らないので、安い店で日本料理もタイ料理も食べる。タイ人は高い日本料理を食べるが、私は、50-100 バーツの料理を食べる」

第二は、乗り物である。生活の中で移動する時に、対象者は、様々な乗り物を利用している。利用者数は、多い順に、二輪車、自動車、公共交通機関、自転車である。

二輪車（バイク）に乗る対象者のケースは、以下の通りである。

J21「自動車と二輪車を持っているが、普段はバイクに乗って買い物をする。遠い所に行く時には自動車を運転する。少しタイの運転スタイルが分かってきた。時々タイ人のように運転しなければならない。例えば、歩道者が横断歩道の信号を押したら、車を止めないといけないが、誰も止めないので、自分もそのまま運転した」

J23「よくアルコールを飲む。自動車を持つと飲酒運転になって事故につながり、また日本にいる妻と飲酒運転しないと約束したので、二輪車だけ購入した。二輪車なら飲酒運転しても自分が怪我するか物にぶつかって壊れるくらいだ」

J29「日本にいた時に自動車もバイクも乗ったことがないため、チェンマイに来てからバイクの免許証をとり、二輪車に乗ってお寺や蝶などがいる場所に撮影しに行く」

自動車に乗る対象者のケースは、以下の通りである。

J09「国際免許証とタイの免許証を両方持っている。夜は飲酒運転するタイ人がいるので、自分は夜に運転しない」
J19「最初は路線バスを利用したが、ゴルフ場に行く時と買い物する時に、荷物があっていつも友達に頼まなければならないので、自分の自動車を購入した」

公共交通機関の利用者の対象者のケースは、以下の通りである
J24「タイで運転することが怖いので、自動車とバイクを購入しなかった。ロットデーン（赤色で二列席に改造した乗合ピックアップトラック）とトゥクトゥクを使用する。何回も利用するので、電話で呼ぶ」

第三は、言語である。日本人同士なら日本語が通じるが、タイ人とコミュニケーションをするためには、他の外国語も必要になる。調査によると、日本人対象者は日本語、タイ語、英語の 3 つの言葉を主に使っている。言語の使い分けについては、以下のような事例が挙げられる。

（1）日本語を中心にコミュニケーションする対象者
J02「日本語が通じる、または日本語を話せるスタッフを利用する」
J08「タイ語を習ったことがあるが、あまり理解できなかったのでやめた。代わりに、タイ人の配偶者に日本語を勉強してもらうことにした。外に行ったら、日本語が通じる所を利用する。それ以外は、指さしでやりとりする」
J17「ホアヒンで 1 年間タイ語を習ったが、チェンマイに来てからは、ストレスを感じたくないので、タイ語の勉強をやめた。生活の場面では、英語とタイ語の単語でコミュニケーションをする。また、ホテル、銀行などには日本語が話せる者がいるので、困らない」

（2）タイ語を中心にコミュニケーションする対象者
J05「タイ語を勉強して、タイ人とタイ語の単語を並べて会話する。英語は読み書きができるが、話せない。また、タイのテレビを見ているが、あまり日本の番組を見ていない」
J12「タイ語でタイ人と話せる。英語も話せる」
J15「タイ語の看板とメニューが読める。タイ語の会話もできる。タイ人は、最初は、ゆっくり話してくれていた。今は分からない時にタイ人に尋ねる」
J23「タイ人女性の友達を作り、交際するために、自分でタイ語を勉強している。また、料理を注文する時に、タイ語で注文する」
J24「タイ人の友達ができてから、タイ語が話せるようになった。タイ人と話して間違ったタイ語を直してもらう」
J25「チェンマイに来る前から大阪でタイ語コースに参加した。すでに 15 年ほどタイ語を勉強している。タイ人の友達ができたので、時々一緒にゴルフをする」

（3）英語を中心にコミュニケーションする対象者
J14「英語でタイ人とコミュニケーションする。相手があまり英語ができなくても、スマートフォンに話して、アプリで訳してもらう」

また、英語とタイ語の二つの言葉を使用する対象者は、以下の通りである。

J03「タイ人やタイ人の妻と英語で会話しているが、妻はあまり英語ができないため、今私は週に 3 回タイ語を語学学校で学んでいる」

J11「タイ語を習ったことがあるが、実際にコミュニケーションできなかったため、勉強をやめた。タイ人と会話する時に、英語、タイ語の単語とジェスチャーでコミュニケーションする。また、現地の人からセラミックスや織物などを勉強する時は、前日に必要な単語のリストを作って練習しておく」

J19「タイ人のキャディと話す時に、タイ語と英語の単語でコミュニケーションをする。一般のタイ人にタイ語で少し話しかけると、長く返事をされてあまり意味が分からなくなる。でも、もっとタイ人と話したい」

J28「タイ人の配偶者は英語が話せるため、英語でコミュニケーションしている」

第四は、余暇と趣味の活動である。チェンマイ滞在中に行う活動は、次の 6 つに分けられる。

1）スポーツ系の活動

ゴルフ、ソフトボール、卓球、ヨガ、ダンス、ジョギング、フィットネスなどである。このような活動をしているケースは、次のように話した。

J01（妻）「週に 2 回エアロビクス、週に 3 回タイ舞踊をしている」

J05「タイのゴルフ代が安いため、毎日ゴルフをしたい」

J07「ゴルフをしている。毎週日曜日に教会に行く」

J12「ここに来てから、タイ語とゴルフを始めた。ゴルフが週に 3 回、一回で 4 時間かかる。ゴルフは散歩しながら友達と話せる」

J13「暇なので、週に 2 回ゴルフをする。私は日本人グループに参加しない」

J16「週に 2 回ヨガを練習している」

J19「週に 3 回ゴルフをしている」

J20「週に 5 回、一回で 2 時間程度卓球している」

J25「週に 4 回ゴルフをする。タイ人と西洋人と共にプレーする時もある」

2) タイ語、民芸品、茶道などの文化活動

このような活動をしているケースは、次のように話した。

J02「茶道の稽古をしている。また、チェンマイに滞在し始めた時にタイ語を語学学校で習ったことがあるが、途中であきらめた」

J05「タイのゴルフ代が安いため、私は毎日ゴルフをしたい。雨がふったら、自分でタイ語を勉強する」

J11「2 年前にランプーン県で皿、椀、コップの作り方を習った。来年、カレン族の村に織物を習いに行きたい」

J12「ここに来てから、タイ語とゴルフを始めた。タイ語がある日本料理店で知り合った大学生に頼んでタイ語を教えてもらっている」

J16「タイ語のメニューや看板を読みたいので、タイ語を勉強している」

J21「木彫りが好きで、看板やテーブルを作った。また、新しいアイディアを出すため、パーンタワーイというチェンマイ最大の木彫り市場へ見学に行く」

3) ボランティア活動

本棚を作る、日本語を教える、日本人グループの事務の仕事をするなどである。このような活動をしているケースは、次のように話した。

J06「学校でタイ人の先生のアシスタントとして日本語の授業を手伝っている。」

J22「2003 年にチェンマイの山にある学校に日本語などを教えるボランティア活動を続けている。またタイ人の先生から頼まれて、日本人グループと共に日本語を教える手伝いに行っている」

4) 趣味の活動

絵を描くこと、野菜を栽培することなどのような活動をしている対象者は以下のようなケースが挙げられる。

J17「年に 4 回、日本の粘土でできた者形の作り方を教える」

J18「日本人の友達と共に土地を借りて、大根、水菜、オクラ、サツマイモ、ハーブなどの野菜園を作っている」

J29「定年する前からトンボと蝶の写真を撮ることが好きで、バイクで自然のあるところに行ってトンボと蝶を写真に撮る」

5) 夜遊び

バービア、飲み屋などで活動する対象者は以下のようなケースが挙げられる。

J04「夜にバービアや居酒屋で食事することと飲むことが好き。お酒が好き」

J09「私はお酒が好き。バービア、カフェでよくブラブラしている。以前に 40 代の日本人と偶然に会って一緒に飲むこともあった。でも結婚してから夜はあまり外に行かなくなった」

6) グループツアー

グループでツアー旅行をする対象者は以下のようなケースが挙げられる。

J04「OO 会がグループツアーを設定したら参加する」

J06「たまに、日本人グループと共に旅行する」

以上、チェンマイにおける日本人長期滞在者の生活を具体的に記載した。対象者の大方は、日本料理を最もよく消費している。チェンマイには日本の調味料を売っている所がたくさんあって簡単に購入できるため、生活の便利さにつながる。また、交通手段は、二輪車と自動車を対象者の多くが利用している。次いで現地の人とコミュニケーションをする時には、タイ語と英語が話せなくても日本語だけでもコミュニケーションができる。それは、日本人がタイ語を勉強する代わりにタイ人が日本語を勉強して、日本人に日本語で話しかけるからである。最後に余暇と趣味の活動はスポーツ、習い事、ボランティア活動、個人の趣味の 6 タイプに分類できる。

本節では、対象者の個々の状況に焦点を当てた。次節では、日本人長期滞在者のタイ人との交流について論じたい。

4.2.3 日本人長期滞在者と現地の人との交流

日本人長期滞在者が現地のタイ人との交流活動については、以下の 5 つの関係性に分けられる。順に論じていく。

4.2.3.1　言語と文化に関わる活動

この交流をよくしているタイ人は、主に学生・大学生で特に日本語専攻の学生たちである。日本語とタイ語、日本文化とタイ文化の交流活動が活発である。ネイティブの日本人から、日本語、生け花、茶道のような伝統的な日本文化を学びたい学生は多い。同時に、日本人滞在者が、日本語と日本文化をボランティアで教えている。日本人の側からすると、タイ人の学生・大学生から直接タイ語とタイの事情を学ぶことができる。具体的な事例としては、タイの大学生は日本語を学ぶときに分からない単語があると、日本人の教えている教室で日タイ辞書を開いて日本語とタイ語の意味を日本人と共に勉強できることや、日本料理レストランに一緒に行って、料理の材料や作り方を学ぶことなどが挙げられる。また、タイ人からタイ語を教えてもらう人もいる。チェンマイで長期的に生活を送るためには、タイ語が話せれば、タイ人と交流活動ができ、自分で直接的に異文化を楽しめると考えている者もいる。インタビューの対象者は以下のように挙げる。

J01「タイ人の大学教授と連絡をとり、息子に合気道を練習してもらう」

J02「日本人グループの中にタイ人の会員がいる。そして、毎年、それらのタイ人と日本料理を作ってタイ人学生たちに御馳走するというボランティア活動に参加している」

J06「タイ人大学生に日本語を教えるという日本人グループの中での活動と個人での活動をしている」

J11「タイ人達人からセラミックや織物をまた習いたい」

J20「タイ人からタイ語を習っている」

J22「日本人グループと共にタイの学校に日本語のボランティア活動をしている。また個人的で高地にある学校で山岳民族の学生に日本語を教えている」

4.2.3.2 仕事・ビジネス

対象者は、アパートのスタッフ、レストランの店員、ゴルフ場のスタッフ（キャディ）、タイ語教師、スポーツのコーチ、通訳、ガイドなどの仕事を通じて、日本人滞在者の客とやりとりしている。日本人滞在者は、日本語が通じる店や店員にサービスを受けたいという者が多いので、アパートや店に日本語が話せるスタッフが配置されていることが多い。また、仕事の関係の他、個人での依頼と手伝いの関係も少なくない。具体的な事例としては、初めてチェンマイに来て、ツアーで体験した時に知り合った日本語ガイドに、アパートの紹介やビザの手続きやレストランの紹介を仕事時間外に頼んでいたことなどがあるという。常連となったレストランのオーナーと付き合い、現在では親戚のように仲良くなったという事例もある。インタビューの対象者は以下のように挙げる。

J04「チェンマイラッチャパット大学の日本語専攻大学生と共に週に 1 回タイ語をマンツーマンで習っている。時々一緒に食事をする。」

J05「ゴルフ場でキャディとタイ語を話す」

J12「日本料理店で知り合った大学生に頼んでタイ語を教えてもらった。月に一回いいレストランで一緒に食事する。親子のような関係。私のことはダディ（DADDY）と呼ばれた」

J17「チェンマイ市内なら店員や銀行のスタッフは日本語と英語が話せるので、タイ語があまり話せなくても話が通じる」

J19「ゴルフ場でキャディと共に話す」
J21「タイ人ガイドと友人として付き合う。またそのガイドの他の友人 5、6 人とも付き合う。ガイドの住宅に訪問したことがある。また困った時にガイドに相談する」

4.2.3.3 タイ人との関係

タイ人配偶者の親戚または、友人から紹介されたタイ人との関係について、インタビューの対象者は以下のように挙げる。

J03「タイ人配偶者の家族と共にローイクラロン（燈籠流し）という祭りに参加したり、山地民族の対象者に服などの寄付活動をしたりしたことがある。また、タイの学校で日本語の発音やたこ焼きの作り方、浴衣の着方などを教えた」
J08「ソンクラン（タイの旧正月）、お正月、ローイクラロン（燈籠流し）の時にタイ人妻の実家に訪れる」
J09「毎月タイ人の妻と共に、親戚の所を訪問する。また妻に、カレーライス、煮物などの日本料理の作り方を教える」
J11「元夫の友達と息子からタイ人を紹介された。たまに一緒に食事し、現地の人しか分からない場所に観光案内してもらった」
J18「娘の旦那はタイ人と彼の友人しか知らない。タイ人男性は、妻と子供にとても優しく世話をするので感激する」
J24「私はタイ人の彼女が欲しい。結婚まで考えている。30 代、40 代で子供がいる女性でも結婚経験がある女性でも問題がない。現在タイ人の知り合いから紹介してもらった 2 のタイ人彼女と付き合っている」

4.2.3.4 近隣住民との関係

日常生活の中でよく出会うタイ人は、例えば、近隣に住んでいるタイ人、アパートの事務員、屋台の商売人、アパートのメイドなどである。具体的な事例としては、アパートの隣の部屋のタイ人によく会い、簡単な挨拶から、一緒に買い物に行くようになったという事例があった。また、困った時に、手伝ってもらえる者もいた。インタビューの対象者は以下のように挙げる。

J10「住んでいるアパートメントの隣にタイ人のレストランがあってよく食べに行く。その時からチェンマイの長期滞在中に困ったことがあればそのタイ人に手伝ってもらう」
J16「普段タイ人との交流活動をしていないが、日常生活で出会ったタイ人に簡単な挨拶くらいはしている」
J25「ゴルフを練習している時、隣にいたタイ人からゴルフのスイングの仕方を教えて頼まれた」
J26「部屋掃除のタイ人メイドがいる」

4.2.3.5 その他

この関係性は、1 から 4 とは異なり、偶然会う程度の知り合いや一時的には交流活動を行うというようなタイ人との関係である。次のような事例が挙げられる。タイ人がたくさんいる場所、例えば、ローカルなスーパーマーケットやフードコートの所で、買い物をしたり、食事を

したりする時に見かけることである。また、ボランティア活動のように一時的に交流活動することを含む。他には、タイ人異性のパートナー（とくに女性）を探しているという事例もある。インタビューの対象者は以下のように挙げる。

J12「私はタイ語が話せるため、市場やゴルフ場にタイ人に話しかける」

J15「タイ料理の食堂では、タイ語のメニューをある程度は読める。タイ語が読めない時に、チェンマイの人たちに聞くと、丁寧に教えてもらえる」

J16「タイ人に会う時に簡単な挨拶をする。特別にタイ人と活動をしていない」

J23「私は自分でタイ語を勉強して、食堂で料理を注文する時にタイ語で注文する」

タイ社会の中に長期滞在している日本人は、タイ人と関わることが当然かもしれないが、タイ人と関わると困ると述べた事例を以下に挙げる。

J04「タイ人と共に出掛けると、私の方が全部払わせられた。初回はいいんですが、何回後も私はいつも払わないといけない立場になって困った。また、そのタイ人は他の友人を呼んで、その人の分までも私が払わせられた」

J10「タイ人は微笑んでいるが、本音が分からない。タイ人は貧乏でこちらからお金が欲しい。また日本人男性とタイ人女性の恋愛関係は、肉体よりもっと精神的な面も考えてほしい。タイ人は年長者に優しくても私は今でもタイ人が好きではない」

J11「タイ人はあまり時間を守らない。約束を守ってくれなかったら気持ちが悪くなる」

J23「タイ人女性と共に活動することに興味がある。大学のイベントがあれば、女子大学生を見に行く。タイ人男性と活動することに興味がない」

日本人長期滞在者と現地の人との交流は、上述のように、1) 言語と文化に関わる活動、2) 仕事やビジネス、3) タイ人配偶者の親戚または、友人から紹介されたタイ人との関係、4) 近隣及び日常生活の中でよく会う人との関係、5) その他、の 5 つのパターンが挙げられた。交流 1) については、日本人がタイ人に日本語や日本文化を教えるというパターンが多い。交流 2) については、食堂やゴルフ場で出会ったスタッフと顧客として関わるパターンが多い。交流 3) については、タイ人の妻やパートナーができて、彼女らの親戚や友人に紹介してもらうというパターンが多い。交流 4) については、よく利用する食堂や市場で知り合って親しくなり、ビジネス関係以外でも日常生活のサポートや問題解決方法を相談するというパターンが多い。交流 5) については、ネットワークを利用しないで自分で新しい場所や新しい人と活動するというパターンが多い。

加えて、タイに長期滞在する前に日本でタイ語を勉強しておく日本人は多いとは言えなかった。そして、チェンマイでの日常生活では、タイ語を話す日本人は多くない。代わりに、タイ人のスタッフが日本語と英語で対応することが明らかになった。日本人長期滞在者は、ボランティア活動で与える側、サービスの顧客側という関係性が目立つ。友人または対等な立場でタイ人と付き合うことは少ないと言えよう。

4.3　チェンマイにおける日本人長期滞在者

ここまでの分析から、チェンマイのライフスタイル型の移動は一般的な移動パターンに逆行していると結論づけられる。これまでは一般的な人の移動パターンとして、主として発展途上国の対象者が経済活動などのために、高賃金やより良い暮らしを求めて経済発展国へと流入することが多かった。しかしながら、本章で検討してきたように、現在は経済発展国の対象者がより発展途上の国へと流入していくパターンが認められる。それは、彼らは、自身のライフスタイルを敢えて変更する必要はないが、よりよい生活を求めて発展途上国へと生活の場を移動している。チェンマイがその一例である。

この節では、調査の結果をまとめて、4.3.1「チェンマイにおける日本人長期滞在の属性について」と 4.3.2「チェンマイにおける文化的適応及び社会的適応のための社会関係資本の構築と活用」について分析していく。

4.3.1　チェンマイにおける日本人長期滞在の属性

4.3.1 .1　長期滞在者のタイプ

長期滞在者のタイプについては、フィールドワーク調査より、日本人長期滞在者は 4 つのタイプに分類できることが明らかになった。タイプ（1）日本人夫婦、タイプ（2） 単身男性、タイプ（3）単身女性、タイプ（4） タイ人の配偶者を有する、である。以下、各タイプの特徴をまとめる。

（1）　日本人夫婦

このタイプの特徴は、多くの夫婦が日本人グループの活動に参加していることである（表 36 を参照）。現地でスムーズな生活が送れるよう積極的に現地の情報を入手したり、日本人同士で活動したりする行為が顕著である。例えば、ゴルフ、観光、健康診断、ボランティア活動を行う、またタイ人と交流するなどの活動にも参加している。彼らは、概してあまりタイ語ができないため、日本人グループの中のタイ語ができるメンバーに頼り、先に滞在したメンバーに相談したりする。このようにして、チェンマイ社会に適応していくパターンが認められる。

（2）　単身男性

独身、離婚、死別などが原因で一人身もしくは、日本に配偶者を残して単身でチェンマイに滞在する日本人長期滞在者もいる。単身男性は、日本人グループに参加していない割合が最も高い（表 36 を参照）。日本で勤めていた時から日本の社会から逃れたいと考えていた者もいるからであろう。日本は社会規範が厳しく、不自由を感じていたようだ。定年退職後に自由となり、興味がある趣味やレジャーを堪能したいと、チェンマイに渡航した。このように日本の社会規範などから逃れたいと願ってチェンマイに来たため、日本人との接触はなるべく避けたいというのが本音のようである。チェンマイ滞在中はむしろ、余暇活動のゴルフに興じたり、日本語補佐のボランティア活動でアクティブに過ごしたり、また中には何もせずに自由時間を過ごしたいなど、自分の興味関心の赴くまま滞在している者が多い。またこのタイプには、タイ人の女性と交際したり結婚したりする者もいるという特徴が挙げられる。なおこのグループは、タイ人との交流活動に積極的に参加するタイプと全く参加しないタイプの二種類に分けられる。

(3)　単身女性

単身女性の多くは、婚姻歴があるかまたは離別、死別を経験した者である。このタイプの大方は日本人グループに参加している。女性という特性からか安全面や緊急対応などを誰かに依存する傾向がある。また、卓球、手作り、カードゲーム、タイ語、コーラスなど様々なインドア活動を楽しんでいる。彼女らは、同じ興味を持つ者と共に活動する。このタイプは、タイ人男性との結婚や再婚目的を特に持っていない。

(4)　タイ人配偶者

このタイプの特徴として挙げられるのが、日本人男性とタイ人女性の組み合わせが多いことである。このタイプの日本人男性は、離婚や死別など婚姻歴がある。また、チェンマイに生涯滞在する意志を持っている者が多い。そのためこのタイプが日本人グループを設立し、国際結婚に関する情報を発信している。その情報内容は、例えば、配偶者ビザの申請方法や遺族年金の手続き、葬式の手続きなど生活に不可欠なものである。また、滞在中に問題があったら、すぐタイ人配偶者に依頼し手伝ってもらう。

4.3.1.2　滞在のスタイル

滞在のスタイルは、「シーズンステイタイプ」「長期滞在タイプ」「その他」の 3 スタイルに分別できる。

(1)　シーズンステイタイプ

このタイプの日本人長期滞在者の大方は、チェンマイの乾期（11 月～2 月）に日本から避寒を目的としてチェンマイに「特定のシーズン」のみ滞在する。彼らが滞在中に使用するビザの種類は、観光ビザ・ノービザが大方である。観光ビザ（3 ヵ月未満）やノービザ（1 ヶ月未満）は期限が短いため、もしもシーズン中に滞在の延長を希望するならば、ビザが切れる前に数日間、近隣諸国のビルマやラオスなどへ出国し、その後再びチェンマイに戻って生活を続ける。日本の寒さが和らぐ頃、彼らは再び日本へ帰国する。

(2)　長期滞在タイプ

このタイプの長期滞在者は、6 か月以上チェンマイで生活している者のことを指す。彼らは長期滞在ビザを取得もしくは観光ビザを繰り返し延長して滞在している。チェンマイでの生活を主としており、本研究の主な調査対象者である。本調査によると、10 年以上チェンマイに滞在している者は少なくなかった。彼らは、毎年長期滞在ビザまたは年金ビザの期間延長を入国管理局に申請している。

(3)　その他

①及び②に分類されないタイプも存在する。留学タイプ（タイ語、タイ料理、マーサージなど）、ショートステイタイプ（旅行もしくは海外ロングステイの体験）などである。このタイプの合計滞在期間は 1 年未満が多いため、本研究では調査対象者としない。

4.3.1.3 滞在目的

滞在目的については 5 分類できる。

(1)　節約生活

チェンマイの物価は日本より安いため、貯金を使わず年金だけで水準の高い生活を送れる。J02 によれば、日本での生活を送るために月に 150,000 円の年金では暮らせないが、チェンマイでは楽に暮らせる。また、日本より支出が少なくなるので、貯金ができる。

(2) 自由な生活

を送る時間やルールに束縛されず自由な生活を楽しむ

日本より物価の安いチェンマイでは、レジャーやスポーツは年金で楽しめる。アウトドアの野球、ゴルフ、散歩、インドアの読書、ナイトライフのバービアやアルコールをたしなむことができる。また、日本語教師やボランティア活動も個人的にも集団的にもある程度自由にできる。

(3) 海外生活

この項目は様々な意味がある。例えば、日本以外の新たな雰囲気またはコミュニティで滞在体験してみたい人がいる。また、海外では服装やマナーにあまり気をつかわず自由にできるからという人もいる。このように「年金難民」や「日本社会からの脱却」、「ライフスタイル型の移動」という人もいる。

(4) タイやチェンマイ文化の吸収

タイ語やタイおよびチェンマイの歴史・文化の学習することができる。チェンマイは 700 年以上ライン―王国の歴史を持って、寺院や旧市街やお濠の雰囲気を楽しめる。

(5) 健康面

暖かいチェンマイでは、心臓病、リューマチなどの病気が抑えられる。また、健康のために室外での活動や運動をすることができる。

4.3.2 チェンマイにおける文化的適応及び社会的適応のための社会関係資本の構築と活用

第 2 章で論じた秋山剛の議論によれば異文化でのストレスは、文化構造の違い（認知的枠組みの変化）、言語の障害（こころが通じ合わない）、文化的同一性（本国文化の喪失、異文化受容）に関するものである。また、適応能力の高い者は異文化受容を果たしメンタルヘルスの問題は生じないが、能力の低い者ではメンタルヘルスの問題に結びやすいと示唆した。ここでは、今田（1993）、アマラ（2000）、秋山（1998）などを参照し、異文化適応の能力は、異文化でのストレスを生じさせないこと、または異文化でのストレスを解消できることを前提とする。

4.3.2.1 適応している者の特徴

チェンマイに長期滞在し、かつ適応している者の特徴は、主に社会関係資本を持つ者だということである。その社会関係資本を持つ者というのは、チェンマイでの長期滞在の経験が長期間に及ぶこと、日本人のグループに参加していること、タイ語のコミュニケーション能力を有すること、タイ人の知り合いがいること、という 4 要素である。詳細は、以下の通りである。

(1) 長期滞在の長期化

チェンマイでの長期滞在が長期間に及ぶ者は、また、表 38 のように滞在期間が長い方がタイ人との「よくできた」と「まあまあできた」交流の割合が上がる傾向がみられる。また、表 39

のように滞在期間が長い者は、タイ人と交流するためタイ語を勉強することを「よくする」と「ときどきする」傾向がある。このように、チェンマイでのより長期間の長期滞在者は短期間の長期滞在者より、タイ語を勉強することやタイ人と交流の活動を活発化することで、より長期間滞在が可能になると思われる。

さらに、彼らは、タイ・チェンマイの事情、タイ人の知り合いなどを持っているため、長期滞在の経験が新たにタイに来る日本人に交通、病院、ビザ、両替、契約書、タイ人とのやりとり仕方などの情報について紹介することが可能である。彼らは、多くの情報資本を持ち、それを社会関係資本に変えている。社会関係資本の機能を述べたナンによると、情報の流れを促進することと他の人の社会的ネットワークや社会関係を通じて利用できることという社会関係資本の機能効果であると考えられる。

(2)　日本人グループへの参加

グループへの参加とタイ人との交流の関係については表 40 の通りである。これによると、日本人グループに参加している者は日本人グループに参加していない者より、タイ人との交流できる傾向がある。また、表 36 では、日本人の配偶者と共に長期滞在する者がチェンマイに滞在し始めてから今まで日本グループに参加している割合が最も多い。日本人の配偶者と共に長期滞在者は、海外での夫婦生活を送れるようにタイ・チェンマイの情報を手に入れたい。日本人グループに参加すれば、様々な情報や活動が素早く正確に伝わると思われる。一方、最初は日本人グループに参加しなかったが、後で参加するのは、タイ人の配偶者またはタイ人異性と共に長期滞在する者が約半分である。このタイプは、タイでタイ人と生活を送るため、タイの情報をとりわけ法律関係の情報をもっと深く知りたいと考えている。日本人グループに参加すれば、素早く正確な情報やニュースを得られると思われる。彼らは日本人グループに参加し、日本人と情報や活動の交流をする。チェンマイで生活を送るために、ビザ、病院、レストラン、パソコンの修理、不動産など現地の情報が必要となる。日本人グループに入会すると、様々な相談やメンバー内での意見交換ができる。ここでは、結束型社会関係資本が構築されている。また、日本人グループを通してタイ人と交流している者もいる。このように、日本人のグループに参加すること、タイ人と活動をすること、タイ語を習うこと、タイ人のためにボランティア活動をすることなどが重要になる。ここでは、橋渡し型社会関係資本が構築されている。

日本人がグループの活動に参加するかどうかがチェンマイに社会的、文化的に適応するための要件となることがデータより明らかになった。グループに参加している者らは、そうではない者らに比べよく適応し、また頻繁に地元のタイ人と対話することができたと回答しているのである。すなわちグループへの参加は、社会関係資本の構築のためにプラスであったということである。活動後においてもグループのメンバーは、日常生活においてタイ人との相互作用と現地への異文化適応が容易になり、それまでに蓄積された社会関係資本をより活用することができると言えよう。

(3)　タイ人とのコミュニケーション

タイ人とコミュニケーションをするためには、言語運用能力が重要である。日本人はタイ人とコミュニケーションをするときに、日本語、英語、タイ語を利用している。表 42 に示すようにタイ人とコミュニケーションを《「よくする」と「ときどきする」》が、《「あまりしない」と「全くしない」》より、タイ人との交流が《「よくできた」と「まあまあできた」》の割合

が上回っている。このように、日本人長期滞在者は直接タイ人と交流している。しかし、表 21 のように日本人長期滞在者の中には、英語もタイ語も「少ししかできない」レベルの者もいることもわかった。そのため、タイ語が話せない日本人から頼まれてタイ人と連絡を取るなどして、同時にタイ人と日本人の双方の交流ができる者、すなわち、タイ語や英語の言語能力を持つ者もいる。彼らは、言語資本を社会関係資本に変えられる力を持つといえる。一方、外国語が話せなくても、話せる者の能力を通して利用できるということは、社会関係資本の一つの機能が持つ効果であると思われる。

（4） タイ人との関わり

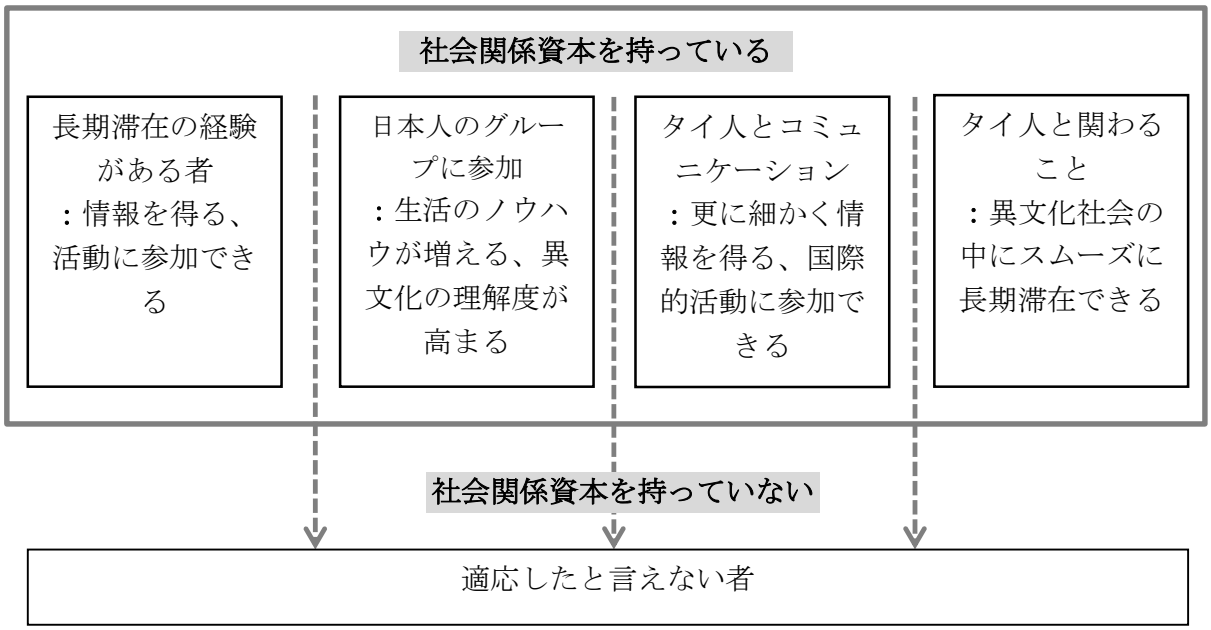
表 43 に示すようにタイ人の配偶者やタイ人異性と共に長期滞在する者はタイ人との交流が、《「よくできた」と「まあまあできた」》と回答した者の割合が他より高く、それに「全くできていない」という者はいないことが明らかになった。この結果から、知り合い、友人、配偶者、パートナーなどのタイ人との関係性がある者は、異文化交流や異文化理解度が高まると言えよう。また、小さな生活の問題から困難な法律の問題まで、タイ社会での適切な方法を以て解決できる可能性が高い。日本人とタイ人の交流することによって、多様な人種、異なる文化をもった対象者と繋がって、多様で最大のネットワークの効用が得られ、橋渡し型社会関係資本の機能を果たしていると考えられる。

上述の要素を生み出す要因について見ると、最初に長期的滞在すれば、日本人グループをはじめ現地での情報を得られる。また、タイ社会に長期滞在しているため、タイ人とコミュニケーションする機会が増え、タイ人と様々なパターンで関わってくる。つまり、要素①チェンマイでの長期滞在が長期間に及ぶこと、要素② 日本人グループに参加すること、要素③タイ人とコミュニケーションをすること、要素④タイ人と関わること、の 4 要素である。

しかしながら、調査の結果によれば、日本人グループに参加しなくても自らでタイ人との交流できるケースもある、男性一人で長期滞在している間にタイ人の配偶者を見つけて一緒に暮らす、長期的に長期滞在することを決めてから日本人グループに参加するなどのケースもある。必ずしも要素①から要素④までの順に限らなくても異文化適応ができると思われる。

このように、何かしら一つの要素を持っていれば、適応していると分析できる。河原（2010）は日本人長期滞在者が現地適応するために日本人グループを構築し、参加することが現地適応戦略の一つであるとしており、本研究の調査からもその戦略の有効性があることが明らかになった。しかしながら、この要素のみでは日本人長期滞在者の異文化適応の戦略の全体像を把握しているとは言い難い。実際には、上述したように要素②がなくとも、要素①、③、④のどれかもしくは複数を有していれば、それもある程度異文化社会に適応する彼らの戦略と言えよう。日本人グループ活動にあまり参加しない者でも現地に良く適応できる者もいたことからも明らかである。図 13 のように、チェンマイの長期滞在に対する適応のプロセスを示す。

図 13　チェンマイの長期滞在に対する適応のプロセス



出典：筆者作成

上述のように、日本人がタイ・チェンマイ県に長期滞在することが可能になる要因は、タイ語、タイの社会と文化を理解できること、現地でタイ人とコミュニケーション面、社会面、文化面で交流できること、グループ（中間支援組織）と関わることであり、それらによって、現地での適応ができることであることが明らかとなった。

また、チェンマイに滞在している日本人は、社会関係資本を自ら構築して適応する場合も多く見られる。アンケート調査の結果から、日本人が普段の生活で「よく／ときどきする」と回答した部分を抜き出し、社会関係資本は「フォーマルな部分」と「インフォーマルな部分」があると論じたパットナムの議論（第 2 章を参照）を参考に、タイ社会に適応するための相互作用を「個人的レベル」と「公的レベル」の二項目に分け、以下の表にまとめた。

表 52　日本人の社会関係資本の構築と異文化の対応

	個人的レベルの相互作用	公的レベル相互作用
多		タイ人と結婚する
	タイ人のパートナーと共に生活する	
社会関係資本の構築と活用	タイ人の友人がいる	
	タイ人の友人からタイ語を学ぶ	学校でタイ語を学ぶ
	タイ人の友人と活動をする	グループ活動を通してタイ人と活動をする
		タイで乗り物に乗る
	タイ人の考え方を理解しようとする	
	タイと現地について勉強する	タイと現地について勉強する
	個人で日本語と日本文化を教える	学校の授業の中で日本語と日本文化を教える
小	レストランでタイ人の友達と食事する	イベントでタイ人と食事する
	タイ人の友達などにタイ式の挨拶する	公式の場で出会ったタイ人とタイ式で挨拶する
		構造的なグループに参加する
	非構造的なグループに参加する	
	レストランなどでチェンマイについての情報を受け取る	在チェンマイ日本国総領事館などチェンマイについての情報を受け取る
	ショッピングモールなどタイ人が多く集まる場所に行く	正式なイベントなどでタイ人が多く集まる場所に行く

出典:　筆者作成

現地で長期滞在の経験が長い者は、「ショッピングモールなどでタイ人が多く集まっている場所に入る」、「正式なイベントなどでタイ人が多く集まっている場所に入る」、「レストランなどでチェンマイについての情報を受け取る」、「日本領事館などチェンマイについての情報を受け取ること」といった行動をする。

日本人のグループに参加することは、「構造的なグループ[12]に参加すること」、「非構造的なグループ[13]に参加すること」である（Duangkaew、2012）。

タイ語のコミュニケーション能力を持つ者は、「タイ人の友達などにタイ式で挨拶する」、「正式場でであったタイ人とタイ式で挨拶する」、「レストランでタイ人の友達と食事する」、「イベントの中でタイ人と食事する」といった行為をする。

タイ人と関わる者は、「個人で日本語と日本文化を教える」、「学校の授業の中で日本語と日本文化を教える」、「タイと現地について勉強する」、「タイ人の考え方を理解しようとする」、「タイで乗り物に乗る」、「タイ人の友達と活動をする」、「グループ活動を通してタイ人と活動をする」、「タイ人の友達とタイ語を習う」、「学校でタイ語を習う」、「タイ人の友達がいる」、「タイ人のパートナーと共に生活する」、「タイ人と結婚する」などである。

以上のように、日本人がチェンマイで適応できるためは、現地での社会関係資本をより多く持っていることが必要であることが明らかとなった。

日本人がタイ人と交流することで社会関係資本が活用でき、異文化への適応度も高まることが明らかになった。以下、適応度の高まりによって得られるメリットをまとめる。

（1）日常生活に有用な情報を得る

レストラン、祭り、携帯電話の購入の方法、乗り物の乗り方、観光などの情報が、一般の観光客より深く情報として得られる。得た情報は詳細で、現地の人の考え方を知り、現地の規範を身につけることにより礼儀正しい行動ができる。例えば、寺の会堂の領域に女性が入れないこと、温泉では裸にならないこと、レストランのスタッフにチップを渡すこと、タイ人の頭に触らないことなどである。このようなタイ社会の慣習が理解できると、現地社会でスムーズな生活を送ることができる。

（2）異文化理解度が高まる

例えば、タイでは、ご飯を誘われた本人以外の人が一緒に行っても問題ない。また、食事代も年長者の負担額が多いという慣習がある。しかしながら、日本ではこれらの慣習がないため、タイの社会を理解していない（または知らない）日本人は、「タイ人はマナーがなっていない。」「タイ人に騙された」と思った者もいることは事実である。そうすると、日本人はタイ人と交流したくなくなり、また日本の慣習を知らないタイ人にとっては、その日本人こそマナー違反であると捉えてしまい、ますます双方の交流が疎遠となってしまう。そのためタイ人と会話をしない日本人がいる。日本人もタイ人も習慣や考え方が異なるため、タイに滞在する日本人は、タイの習慣や考え方を理解する努力が必要である。

（3）草の根の間（個人レベル）の相互信頼が高まる

事例としては、日本人がバイク購入のため、タイ人に手伝いを依頼する。代わりに、タイ人は日本人に日本語や日本文化を教わることを依頼する。このように、頻繁に互いをサポートす

---

[12] グループのベネフィットを保持するために、メンバーの仲間意識を高め、他のグループとの相互作用をし、グループ内の規定やルールを決めるなどフォーマルな構造で組織がある。例えば、チェンマイ日本人ライフクラブである。

[13] 言葉、国籍、文化など同質を持っている対象者をグループである。このグループのメンバーは、仲間意識を持っているが、規定されたルールや他のグループとの相互作用がなく、きちんとした組織ではない。例えば、ゴルフの仲間、飲み会の仲間である。

ればするほど互いに信頼を育み関係性を構築することになり、将来的に良好な関係を築くことができる。

（4）タイ社会との交渉力を持つ

河原雅子（2010）の研究結果によると、日本人のグループはタイの経済、政治、文化、環境及びインフラストラクチャーの面に直接的・間接的なインパクトをもたらす。経済的な事例としては、健康診断の割引、ゴルフ場でより良いサービスを得られることなどが挙げられる。政策的な事例としてある日本人のグループは、滞在ビザの延長や条件を緩和すること（検討中）である。文化的な事例としては、ランナーと日本の文化交流祭り 2013（9 回目）が挙げられる。環境に関わる事例としては、スモッグ問題の緊急対策の要請がある。インフラストラクチャーに関わる事例としては、歩行者が安全に歩ける道の整備の要請がある。

（5）参加の頻度や興味が高まる

事例としては、「定住者の集いの会」の活動が挙げられる。このグループのメンバーはタイ人の配偶者を有する者が半分くらいいる。そのために、日本人同士だけでなく配偶者のタイ人も運転免許の申請、遺族年金の依頼、葬式などについて移住者に必要な話題の情報を提供するなど、相互扶助関係を築いている。

（6）だまされない

タイ人と社会関係資本を構築すると、信頼できる情報が得られる。日本人長期滞在者は、初めてチェンマイに滞在する時に、不動産やサービス料金の情報が少ないため、一般の値段より何倍も高い金額が請求されるケースがあった。

以上のように、チェンマイの長期滞在に適応できる者は、異文化適応のために様々な方法で社会関係資本を構築して活用しているのである。一方、社会関係資本を構築することも活用することもしない者は、チェンマイでスムーズに生活が送れなくなることも明らかとなった。彼らは、孤独で、異文化を理解できず、他の日本人やタイ人との問題が起こってしまい、ついにはチェンマイの長期滞在をあきらめ、日本に帰国するかまたは他のところに移動することになるのである。

しかし、本研究では、チェンマイの長期滞在をあきらめた日本人元長期滞在者は調査対象としていないため、調査当時、チェンマイに長期滞在していた者からの話から、既に帰国した長期滞在者が長期滞在をあきらめるに至った事情を析出する。これによると、調査対象の長期滞在者の知り合いがチェンマイの長期滞在をあきらめた理由は、チェンマイの物価が高くなってより物価が安い国に移動したことなどの構造的理由と病気にかかって日本で治療を受ける、両親の介護をする、などの個人的の理由に分類できる。また、少数回答としては、知り合いがタイ人異性と問題があったこと、自殺したという事例も見られた。この点から彼らは、タイ社会にうまく適応することができなかったことが窺い知れる。

第 5 章

長期滞在に関わる中間支援組織の役割

本章では、チェンマイにおける日本人の長期滞在に対する中間支援組織の役割を分析する。本研究では、日本人の高齢者に関連があるセミナーや活動などで参与観察を行い、また中間支援組織の代表者にインタビュー調査を行った。チェンマイにおける日本人長期滞在者に関わる機関や個人について、以下の 3 レベルに分類する。1）マクロレベル：長期滞在の政策や支援などを策定する、日本政府とタイ政府である。2）ミドルレベル：中央、地方を政府と関連がある組織、個人から構成される日本人のグループとタイ人のグループ、民間企業、という日本側とタイ側の中間支援組織を活躍している。3）ミクロレベル：チェンマイにいる日本人長期滞在者およびタイ人である。表 53 に本研究がマクロレベル、ミドルレベル、ミクロレベルとした組織の全体像を示す。

表 53　マクロレベル、ミドルレベル、ミクロレベル

レベル	内容
マクロレベル	日本政府 タイ政府
ミドルレベル （中間支援組織）	政府と関連がある組織 日本人グループ、タイ人グループ 民間企業
ミクロレベル	チェンマイにいる日本人長期滞在者 チェンマイにいるタイ人

出典：筆者作成

それぞれのレベルについて、マクロレベルである日本政府とタイ政府の支援政策は、第 2 章の「長期滞在」および第 3 章の「日本人の長期滞在の背景」で要約した。ミクロレベルについては、チェンマイに長期滞在する日本人の調査結果を第 4 章で分析した。また、チェンマイ在住のタイ人の調査結果は第 6 章で分析する。そして、本章では、ミドルレベルである政府の組織、グループ、民間企業という中間支援組織について論じていく。第 5 章では、5.1 節でミドルレベルにいる日本人の長期滞在に関わる中間支援組織、5.2 節で中間支援組織への調査、5.3 節でマクロレベル、ミドルレベル、ミクロレベルの関係性、5.4 節中間支援組織の役割、5.5 節中間支援組織と社会関係資本の関連性について論じる。

5.1　日本人の長期滞在に関わる中間支援組織

この節では、政府と関連がある組織、グループ、民間企業というミドルレベルとしての日本人の長期滞在に関わる中間支援組織の背景を論じる。

5.1.1 政府と関連がある組織

ミドルレベルの中間支援組織は、中央政府または地方政府によって設立され、活動する組織である。表 54 に示すようにここでは 6 つの組織を挙げるが、1 番、2 番は日本側の組織、それ以外はタイ側の組織である。2 番、3 番、6 番は中央政府や地方政府の組織そのものが長期滞在を支援する役割も持ち、1 番、4 番、5 番は長期滞在の支援のために設立された組織である。

表 54 ミドルレベルの中間支援組織：政府と関連がある組織

番	組織の名称	ロングステイに関する内容
1	ロングステイ財団	1992 年設立。安全に楽しく有意義にロングステイをするため、現地情報について、相談、情報提供サービス、セミナー、体験プログラムなどを実施。
2	在チェンマイ日本国総領事館	チェンマイ情報、ODA、タイ北部の日本人援護、領事窓口サービス、日本企業支援の役割を果たしている。日本とチェンマイの関係性強化、日タイの交流活動やイベントを主催。
3	タイ国政府観光庁東京事務所（Tourism Authority of Thailand: TAT）	タイ政府は 2001 年にロングステイ支援の方針を策定。タイ国政府観光庁の東京、大阪、福岡支店で情報提供やサポート活動を開始。例：セミナー、ロングステイフェア
4	タイランド・ロングステイ・マネージメント（Thailand Longstay Management: TLM）	2001 年に設立。タイに長期滞在する外国人にプリビリッジ・カードを提供。ワン・ストップ・サービスで、メンバーのみを対象にホテルやゴルフ場などの特別サービスや割引が得られる。
5	タイ・ロングステイ共同センター（Cooperative Center for Long Stay Thailand）	2009 年～5 年間、タイ観光局から委託を受け、ロングステイ調査や支援のための支援プロジェクトを開始。国際水準の宿泊、現地社会への影響を調査。プロモーションやウェブサイトを通じて外国人にタイ・ロングステイを紹介。
6	チェンマイ県観光・スポーツ事務所（Chiangmai Provincial office of Tourism and sports）	チェンマイ県の中にある観光とスポーツを支援する事務所。現在ロングステイ支援のため、チェンマイ商工会議所に資金を支援。

出典：筆者作成

日本側は、通商産業省（現在：経済産業省）の許可を受けて設立され、日本人長期滞在の調査や状況などの年度レポートを提出するロングステイ財団および、タイ北部に滞在している単身赴任、旅行者、留学生、ビジネスマン、長期滞在者の日本人を援護するなど在チェンマイ日本国総領事館がある。

タイ側には観光・スポーツ省の傘下にタイ国政府観光庁があり、チェンマイ県と東京都などに国内と海外の出先機関がある。加えて、政府の観光・スポーツ省が 3 割、民間 7 割の資本で構成するタイランド・ロングステイ・マネージメントがある。また、チェンマイ県の「チェンマイ県の開発戦略」による観光開発を担当しているチェンマイ県観光・スポーツ事務所は、チェンマイ観光の政策策定や予算などを支援している。タイ・ロングステイ共同センターは、政府の観光関連機関から宿泊先などを検討して日本人長期滞在者向けに基準を作成する。

5.1.2　日本人グループ・タイ人グループ

ミドルレベルの中間支援組織のもう一つのタイプは、同じ目的を持つ者の集まりであり、組織として構築される。日本人のグループは、日本語、日本の習慣などの同じ文化を持ち、チェンマイに滞在している日本人で構成される。例えば、ゴルフをする日本人男性といった同質性をもつグループである。こといった共通点があるメンバーを互いに繋ぐことにより、個人の目的も組織の目的も達成される。その結果、各メンバーの間には関係性としての社会関係資本が構築されるのである。ミドルレベルの各組織やグループは、自主・自立的に活動している。イベントによって一時的に連携・交流することもある。

ミドルレベル組織は、メンバーの条件、メンバー代（会費）、集団の目的、役割分担の表 55 に示すように明確な構造的な組織・グループであり、利益追及が主たる目的ではない組織・グループである。日本側には、南国暮らしの会、日タイロングステイ交流協会、チェンマイ・ロングステイ・ライフの会（CLL）、定住者の集いの会、福祉の会があり、タイ側には、チェンマイ商工会議所とチェンマイ国際財団がある。この中で、7 番は成立の基盤が異なり、また 1 番はもともとの設立目的が異なっている。

表 55　ミドルレベルの中間支援組織（日本人グループ・タイ人グループ）

番	組織の名称	ロングステイに関する方針・目的
1	チェンマイ日本人会 (Chiang Mai Japanese Association)	1980 年設立。主旨は、会員相互の健全な親睦と信頼関係を築く出会いの場。文化、スポーツ、日タイ両国の親睦を促進する活動などがある。会員数は、343 人。（2015 年 5 月 18 日現在）
2	南国暮らしの会	1997 年設立。情報交換、友達を作るため、生きがいのため、新しい経験と知識のため、海外で安全で楽しく長期滞在することを促進。NPO で、メンバー会員数は 1300 名。本部は東京。他にも日本各地と海外に支部を持つ（事務所は支部長の自宅）。組織の運営はメンバーのボランティアで成り立っている。主な活動は、情報交換。
3	日タイ・ロングステイ交流協会	2005 年設立。安全・健康で充実したタイ・ロングステイの実現のため、会員相互の情報交換と関連機関・団体・個人との交流を充実。
4	チェンマイ・ロングステイ・ライフの会(CLL)	2002 年設立。チェンマイ滞在を楽しむための生活支援を行う。主な活動は情報交換、タイ語と英語のレッスン、フォトクラブ、手芸クラブなど。月に 1 回例会。会員数は 153 人。（2015 年 5 月 18 日現在）
5	定住者の集いの会	2009 年設立。長期滞在の中での問題や分からないことがあった場合に互いに支援。月に 1 回月例セミナー。70%のメンバーがタイ人女性と結婚。
6	福祉の会	日本における NPO 法人 JT/ASH の予算で 2012 年設立。目的は、息をひきとるまで安全生活、健康で生きがいで楽しく暮らすこと、タイ人のためボランティア活動をすることの 3 つである。また、パソコン、ビザ、健康などの問題があるメンバーを支援する。
7	チェンマイ商工会議所	当地の会員企業を集めて、ビジネスのため情報交換、セミナー、協力、活動などを行う。ロングステイに対して、民間企

		業の代表として中心となって支援をする。
8	チェンマイ国際財団 (CIF)	2012 年に設立され当地に住む北米系、欧州系、日本人のロングステイヤーがメインの客先でサポートを目的に、法律関係、健康管理、通信・交流、緊急時対応、葬式手配、社会貢献、などのワンストップサービス活動・業務を提供している。

出典：筆者作成

5.1.3 民間企業

ミドルレベルの中間支援組織には、長期滞在に関するサービス業（民間企業）もあり、利益のため運営されている。日本側は、たとえば、ロングステイについて相談を受ける会社であり、タイ側は日本語のサービスの民間企業などである。表 56 にその概要を示す。

表 56 民間企業

番	組織の名称	ロングステイに関する方針・目的
1	ロングステイについて相談を受ける会社	チェンマイに住む日本人に、ロングステイビザ、不動産、食品などの商品、ゴルフ、ツアーなどを提供。図書館のように本を貸し出すサービスあり。
2	日本語のサービスの民間企業	日本人にタイ語のスキルを教授。またタイ人に日本語を教授。多くの客は、定年した日本人、工業団地に勤める日本人、日本人に関わるタイ人。

※ ミクロレベルの企業名は、本研究では明示しない。

出典： 筆者作成

5.2 中間支援組織の調査

ここでは、2013 年と 2014 年のミドルレベルの中間支援組織のインタビュー調査に基づき、5.2.1 政府と関連性がある組織、5.2.2 日本人グループ・タイ人グループ、5.2.3 民間企業、の 3 つのグループに分け、それぞれに（1）チェンマイの長期滞在に関する組織の目的と活動、（2）中間支援組織の中での関係・関連性、（3）中間支援組織と個人との関係・交流、について分析する。

5.2.1 政府と関連がある組織

ここでは、表 54 の中からロングステイ財団、タイ国政府観光庁東京事務所、タイ・ロングステイ共同センター、チェンマイ県観光・スポーツ事務所の代表者へのインタビュー結果をまとめて分析し、マレーシアの長期滞在との比較も行う。

5.2.1.1 ロングステイ財団

代表者へのインタビューによれば、当該財団は、アメリカ、ヨーロッパ、アジアといったエリアに専門チームを配置し、海外での滞在を支援している。また、海外の政府機関と情報交換により、長期滞在の支援対策などを作成する。ロングステイ財団は、マレーシアやタイなどの組織とセミナー、体験ツアーなどを長期滞在の送り出す側と受け入れ側としてやりとりする。タイの場合は、観光・スポーツ省が長期滞在促進政策を提案するという役割を担い、TAT（タ

イ国政府観光庁）という組織が市場プロモーションを担う。政策を作るところとプロモーションするところが別にある。マレーシアの場合は一つの組織 MM2H が直接やりとりする。

ロングステイについては、かつては定年退職後のセカンドライフのイメージだったが、2016 年現在、ロングステイ財団の支援は年齢制限がない。最近のトレンドは若い人、特に 30～40 代の人がビジネス、勉強、仕事能力をアップするため、海外で研修する就職するなどしている。シンガポールやマレーシアには、日本人若い女性の移住が少なくない。現在のロングステイ財団は、シニアばかりでなく、今後これからよりいい暮らししたい者も対象にしている。日本では、子供ができたら、女性が仕事を辞めなければならないなどの問題があるため、自分の将来を考えると、海外でのロングステイが成功しやすい一つの選択だと考えている女性が少なくない。

ロングステイ財団は、11 月のロングステイフェアの主催、ロングステイ調査統計の把握、ロングステイについての書籍や資料の発行、ロングステイのセミナーの主催などを行っている。2013 年 11 月にロングステイ財団は、東京でロングステイフェアを主催した。その時、チェンマイからタイ人と日本人が参加した。具体的には、チェンマイ商工会議所に協力しているチェンマイ・ロングステイ・ライフの会の日本人代表者が、チェンマイの長期滞在に関心を持っている者の質問・疑問に対応した。

一方、ロングステイ財団は、個人客にも対応している。東日本大震災が発生した直後の 2011 年～2012 年の間、海外に滞在についての相談が多く、マレーシアの MM2H に参加する者数が最も多かった。その理由は、マレーシアでは不動産に投資でき、また英語が勉強できることである。日本人はお金と英語力の問題があるため、直接にイギリス学校に行けない場合が多いが、マレーシアは英国の元植民地であったため、マレーシアのある学校を卒業するとイギリスの分校に入れるというメリットがある。このように MM2H は、年長者だけでなく、ビジネスマン、若い人、親子も該当者に当てはまる。タイの場合は 50 代に絞られる。タイで英語とタイ語を学ぶチャンスもあるが、充分学ぶためには、長期滞在ビザではなく、教育ビザなどを申請しなければならない。2012 年以降は、東日本大地震の影響が少なくなり、海外に長期滞在する件数は減る傾向にある。タイの長期滞在に興味がある客は、よく不動産の投資について相談してくる。次の問題は、異文化である。現地の人々との問題を避けるため、異文化を理解した上で長期滞在することを勧めた。長期滞在先で問題があったら日本に戻る者が多いからである。

チェンマイの場合、10 数年前には男性が一人でチェンマイに行くことが多かった。タイの長期滞在をプロモーションしてからは、日本人の夫婦が増えてきた。また、タイの長期滞在者を増やすために、ただタイは「いいところだよ」と言うだけではなくて、もっと、具体的に他の活動など紹介することが必要であると思っている（2013 年 3 月 13 日および 2014 年 3 月 13 日のインタビュー）。

5.2.1.2 タイ国政府観光庁東京事務所

タイ国政府観光庁東京事務所の日本人職員によれば、受け入れ国（タイ）の立場でロングステイを支援しているという。2000 年以降タイ国政府観光庁（TAT）は、ロングステイセミナーを実施している。ロングステイ財団にコンタクトをとり、情報を共有しつつ、シニア向けツアーを行っている旅行代理店も共にセミナーを行うようになった。TAT が外部と協力する理由は、日本人の顧客にタイのロングステイ情報を提供した時に、顧客から「タイにどのようにしてい

ったらいいのか」という質問をされた場合に対応するため、旅行代理店と共に日本からタイに行く航空券やホテルの予約を手配しなければならない。このように外部と協力して、関東近郊で一回約 200 人の顧客を集めて年間だと 10 回、2,000 人程をまとめてセミナーを開催した。また、11 月に一日、ロングステイ財団の主催による東京のビッグサイトでのロングステイフェアを開催する。2011 年度にはチェンマイ商工会議所が、ロングステイのプロモーションに来ていた。2012 年度にチェンマイ商工会議所が東京に参加していなかった理由は、大阪でのプロモーション活動がメインだったからだろう。その時にチェンマイ商工会議所は、日本でのプロモーションのためにどういったメディアを利用すればいいかなど、様々な内容を確認した。このように、TAT はだいたい組織と組織の立場で話し合う。今（2013 年度）はだいたい 100 名くらいがタイ長期滞在のセミナーに出席する。日本人客には、ある程度情報が行き渡っているのであろう。タイ国政府観光庁東京支理店、旅行代理店、ロングステイ財団があり、それ以外にもプライベートセクション、例えば、海外サポート（現在無くなった）、日本の南国暮らしの会などがあるので、そこからも情報を発信している。日本人客は、基本的には一ヶ月は二人で 20 万円というのか TAT が理想としている数字である。在東京タイ国大使館に長期滞在ビザを申請する件数は、年間 100 件程度である。この数字は少ないが、実際では、ビザ無し、観光ビザでタイに入国して、ラオスやミャンマーに行って延長する。最近、気候の面、経済的な問題や家族の問題があって、戸惑う者や日本に帰る者も多い（2013 年 2 月 25 日のインタビュー）。

5.2.1.3 チェンマイ県観光・スポーツ事務所

代表者によれば、チェンマイの長期滞在の支援について、以下のように述べている。チェンマイ県観光・スポーツ事務所は、チェンマイ県の長期滞在開発戦略も主要な業務としている。また、政府観光庁の 2012～2016 年観光開発計画に、北部 1 のエリア（責任範囲はチェンマイ県、メーホンソン県、ラムプーン県、ラムパーン県）に対して、観光支援政策の中に日本人長期滞在を促進することが掲げられたため、チェンマイ県の観光促進の担当事務所として、日本人の長期滞在を支援している。また、長期滞在ビザの許可期間は 1 年間から 1～3 年間に延長する法案を起草しようとしている。50 歳以上と 800,000 バーツの条件はそのまま残る。その理由は、ロビンフッドのように帰国するための資金源が不足することを防ぐためである。また、90 日間ごとに入国管理局に報告するという法律は、チェンマイにある日本人の組織を通して報告可能とし、入国管理局だけではなくチェンマイ県庁で日本人を集めて一度に報告させることも可能にすることなどである。日本人の件を事例として、新しい出入国管理の方法を他の外国人にも実施するようという提案を起草することにしている。

チェンマイ県観光・スポーツ事務所は、チェンマイ商工会議所と共に長期滞在開発戦略を策定している。チェンマイ県観光・スポーツ事務所は、3～5 年前から長期滞在の支援を始めた。チェンマイ商工会議所は先にスタートしたが、2 年以前から政府機関と民間が協働を始めた。両方とも県の GDP の向上のため、インフラストラクチャーの問題から解決する必要があると考えている。民間機関は、政府機関が日本でプロモーションを行って長期滞在に関心がある日本人の経営者を呼ぶということを期待している。不動産、フィットネス、温泉、ボーリング、フードコートといった全てのサービスをカバーする施設を期待している。タイ人に与える影響は、日本人ばかりの地域になってしまうと、タイ人が住めなくなってしまうという点が考えられる。

政府機関は、外国人の長期滞在者のため全てのサービスをカバーする施設はまだ難しいと考えている。政府機関は、民間機関に外国人の長期滞在者を任せたほうが適切だと考えている（2013年9月19日のインタビュー）。

5.2.1.4 タイ・ロングステイ共同センター

代表者によると、タイ・ロングステイ共同センターは、観光局（観光・スポーツ省）からの予算で設立されたという。観光局は、タイにおけるアメリカ、スカンジナビア半島の諸国、日本からの長期滞在者を支援するため、大学の教授に委託して研究してもらうことになった。この代表者は、長期滞在の支援プロジェクトのメンバーである。以下は過去 5 年間の経緯である。1年目には、対象者が宿泊施設の選択する要素を検討する。それから、宿泊の国際基準を決定し、その基準をクリアできるように宿泊施設のオーナーに協力してもらうことである。2年目には、外国人の長期滞在は、現地の社会と現地の人に悪い影響を与えているか調べた。結果は、タイ社会に問題がなかったという。必要なことは、インターネットシステムや宿泊施設のレベルを確認して、基準通りに改善することである。3年目には、タイ・ロングステイ共同センターを設立し、外国人の長期滞在の情報を発信する。4年目から長期滞在の情報を発信し、タイ・ロングステイ共同センターのホームページに様々な情報や研究を掲載していた。それから、5年目には観光局からの予算もなくなり、タイ・ロングステイ共同センターも消滅した。このように、タイの長期滞在がブームで終わるかどうかは政府からのサポートが重要である。このプロジェクトには、政府が年に約100万バーツしか投資していない。政府はもっと大きな成果をあげたかったが、投資金額に比して少なかった。また、長期滞在はスロー・マーケットであるため、投資してからすぐ結果が出るわけではない。このマーケットは、定年退職者がターゲットであるため、様々な都合を考えてから決定するため、時間がかかるという特徴がある。一方、チェンマイには、在チェンマイ日本国総領事館、国際空港があるため、チェンマイの民間機関が互いに協力して、中央政府の決定を待たずに、自分たちで日本人長期滞在を促進することができる。しかし、他の地方はこのような協力体制はない（2014年9月11日のインタビュー）。

以上、政府と関連性がある4組織の代表者にインタビューを行った。調査結果によれば、政府の機関からの予算で外国人の長期滞在のプロジェクトを運営しているが、予算がなくなると管理もしなくなるという傾向がある。また、タイ側の政府機関は、長期滞在支援以外の業務やプロジェクト実施しなければならないため、長期滞在の支援のみに集中することはできない。そのため、実際に日本人の長期滞在を支援しているロングステイ財団とのパイプ役を果たす担当者が決まっておらず、問題・疑問に対応するまでに時間がかかるので、効果的な支援方法ではない。また、政府と関連性がある組織は、日本人長期滞在者のため、正確な情報や海外での生活のアドバイスなどを個々人の希望通りに支援するが民間企業のような利益目的ではないことも明らかになった。

次に、タイにおける外国人の長期滞在の条件を明確するために、マレーシアの長期滞在の条件と比較する。マレーシアと比較する理由は、ロングステイ財団によって、2006年から2013

年に連続でマレーシアが世界の第1位「ロングステイ希望滞在国」という調査結果が明らかになったためである。2012年の調査の対象者は30歳未満、30代、40代、50代、60歳以上の5つの年代に分けられるが、50歳を基準として分けると、50歳以下の人数は790人で、50歳以上の人数は2,234人、つまり1:3の割合ということになる。その中で長期滞在の希望国としてはマレーシアが一位である。また、日本人の組織の代表者のインタビューデータ及びマレーシア観光局のサイトに基づいて、同じ東南アジアの中でなぜマレーシアが何年間も続いてナンバーワンになるか検討する。本研究ではマレーシアにフィールドワークを行っていないため、さまざまな視点から表47のようにタイと比べて論じる。マレーシアにはMalaysia My second Home（MM2H）のプログラムがある。タイにはThailand Longstay Management （TLM）という組織が2002年にサービスを提供し始めたが、タイのTLM設立後政府の支援金などのトラブルがあって、2016年現在、TLMはタイの長期滞在に関する役割を担っているわけではない。

マレーシアとタイの長期滞在について事情がさまざまな点で異なることが明らかになった。詳しくは、項目の順に以下で論じる。その概要は表57の通りである。

（1）ロングステイに関する政府の支援方針

日本政府は1986年に定年退職後の生活支援するため支援方針を設立した。2年後、マレーシア政府は、日本人をはじめ海外定年者を受けるために長期滞在に関する方針を設定し、直接支援するプロジェクトも誕生した。一方、タイ側は、2001年にスタートし、マレーシアよりかなり遅れをとった。

（2）ビザの条件

マレーシアでは年齢によって、タイでは申し込みビザの種類によって、長期滞在ビザの条件が変わる。また、マレーシアのビザは1回申請すると、最大10年間であり、タイのビザは最大1年間である。

（3）不動産の私有と相続

マレーシアでは、長期滞在ビザのメリットで住宅などを購入できる。タイでは、コンドミニアムなどの購入は可能だが、タイの法律では外国籍では土地の所有権を持つことができない。

（4） ワンストップサービス

マレーシアのMM2Hですべて対応できる。タイの場合はTLMという会社があるが、効果的な役割がまだ果たせていない状態である。

（5）日本での支援

マレーシア政府観光局はMM2Hを通して直接的な支援をしている。東京、大阪、福岡の支店の提供している情報が共有されている。また日本のロングステイ財団とよく交流・活動を行う。例えば、マレーシアサロン、マレーシアロングステイのセミナーである。一方、日本におけるタイ政府観光局は12時から13時にかけて昼休みで休憩になる。営業時間に関する考え方が日本の考え方と異なることは欠点であると思われる。また、ロングステイフェアで展示する時、タイの観光庁の従業員と日本の観光局支店の従業員の動きがばらばらであり、内容やコストなどが重複している。日本人の客にとって、複雑で理解しにくいと思われる。

（6）対象者

マレーシアは2002年から観光者と留学生とビジネスマンを長期滞在の対象者として受け入れているが、タイは観光者として受け入れている。

（7）就労許可

マレーシアは、週に 20 時間以内という条件でアルバイトすることが可能であるが、タイはアルバイトと就職については一切禁止である。

（8）問合せ先：マレーシアは直接 MM2H に連絡すれば対応する。タイはビザについては連絡先がタイ王国大使館で、観光やレジャーなどだと連絡先が観光局になる。担当分野によって別々に対応している。

（9）その他：他のメリットであるが、たとえば、マレーシアには日本から 1 台無税で車を持ち込める。タイのメリットは預金の金額がより安く、仏教信仰のため特に豚と酒の飲食禁止がないことがある。

上述の資料やインタビューによると、マレーシア政府は経済を活性化するため、観光と経済を結び付けて外国からの投資も取得するという積極的戦略をとる。不動産の所有権や相続の可能性などのインセンティブも日本人に提供する。またマレーシアの MM2H の該当者は、年齢はあまり重要ではなく、観光者、留学生、ビジネスマンも長期滞在ビザの対象者となる。いわゆる、年金の受給者、英国などへの留学やビジネスのために英語の講座を受ける者、不動産投資の外国人ビジネスマンなど、観光と留学と投資という大きな 3 つのタイプの対象者に分けられる。一方で、タイ政府は、長期滞在ビザは観光ビザの一つの種類としてとらえる。長期滞在ビザでは就職はおろかアルバイトも禁止される。ビザの条件外や定年後の観光の目的以外の日本人は、労働ビザまたは留学ビザなどの他のビザが必要になる。このように、マレーシアとタイの長期滞在ビザの対象者は異なっている。日本人のロングステイを支援するためのタイ側の組織は、個々で動いているので、理想的なワンストップサービスがまだ実施できず、日本人の客の要求にまだ応えられていないという状況である。

表 57　マレーシアとタイの長期滞在に関する比較

項目	マレーシア （マレー半島・サバ州）	タイ
ロングステイに関する政府の支援方針	1988 年政府は入国管理の下に “Silver hair”プロジェクトを設立。2002 年に観光局を元にして、“Malaysia My Second Home” (MM2H) プログラムに変更。ビザの条件（戸籍と金額）MM2H では適切に調整。	2001 年 6 月長期滞在方針構築。年金ビザ（non-immigrant visa-O）とロングステイビザ(non-immigrant visa-O-A)を設定。2002 年 1 月ワンストップサービスのためタイロングステイマネジメント(TLM)を設立。
ビザの条件	滞在期間：MM2H ビザ 10 年間 年齢：制限はない 経済的証明：50 歳未満は、50 万 RM（約 1250 万円）以上の財産証明と月額 1 万 RM（約 25 万円）以上の収入証明書。マレーシア入国後 30 万ＲＭ（約 750 万円）をマレーシアの金融機関に定期預金する必要あり。 50 歳以上は、35 万 RM（約 875 万円）以上の財産証明と月額 1 万 RM（約 25 万円）以上の収入証明書または年金証	滞在期間：年金ビザ 90 日間、ロングステイビザ 1 年間 年齢：国の年金受給者または 50 歳以上 経済的証明： 年金ビザは、年金の月額 6.5 万 B（約 19.5 万円）以上の受取証明。ロングステイビザは、次の 3 項目より 1 項目①銀行預金残高証明 80 万 B（約 240 万円）以上②年金証書月額 6.5 万 B（約 19.5 万円）③銀行普通預金通帳と年金

	明。マレーシア入国後 30 万 RM（約 750 万円）をマレーシアの金融機関に定期預金の必要あり。	証書合算で 80 万 B（約 240 万円）以上
ワンストップサービス	MM2H program ですべて対応できる。日本語版サイトがある。	担当部局なし
日本での支援	東京支店のマレーシア政府の観光局は、昼休みの 12 時から 13 時営業。マレーシアのロングステイについて相談者はメンバーあり。東京ではマレーシアサロンを開催。	東京支店のタイ政府の観光局が昼休み。12 時から 13 時まで休憩。タイのロングステイについて相談できるメンバーなし。東京ではときどきセミナー・イベントを開催
対象者	観光者、留学生、ビジネスマン	観光者（旅行の目的以外は他のビザが必要）
仕事の許可	週に 20 時間に限る（医療、技術、教育、銀行などの特殊な能力分野でのみ）	タイ国内での就労禁止
不動産の私有と相続	50 万 RM（約 1360 万円）以上の住宅を購入できる。また子孫に相続可能。	購入可（コンドミニアムの場合、居住者は 51%以上がタイ人、49%以下が外国人であることが必要）。外国人は相続不可。
問合せ先	ロングステイ財団の「ロングステイ調査統計」に、「マレーシア・マイ・セカンド・ホーム・センター（MM2H center）及び、マレーシア政府観光局」を記載。	ロングステイ財団の「ロングステイ調査統計」に、「タイ王国大使館」を記載。
その他	個人で所有している車を 1 台無税でマレーシアへ持ち込める。マレーシア国産車を市場価格より約 4 割安く購入可能。	

出典：ロングステイ財団（2013）、MM2H 取得サポートセンター（2015）を参照し、筆者作成

5.2.2 日本人グループ・タイ人グループ

ここでは、日本人グループ・タイ人グループによる、チェンマイの長期滞在に関するグループの目的と活動、中間支援組織の中での関係・関連性、中間支援組織と個人との関係・交流を論じていく。

本研究では、日本人グループとして定住者の集いの会、福祉の会、日タイロングステイ交流協会、タイ人グループとしてチェンマイ商工会議所、チェンマイ国際財団の代表者にインタビュー調査を実施した。詳細は以下の通りである。

5.2.2.1 定住者の集いの会

代表者によると、2009 年に日本人 3 人とタイ人 1 人（日本人の妻）のメンバーでこのグループを設立したという。このグループの設立はチェンマイ県知事の承認を得ている。このグループの目的は、タイにおいて日本の組織（NGO など）とタイ側の組織とを橋渡しをすることである。例えば、日本のある組織は、山岳民族の学校にパン焼き機を寄付した。学生たちがパンを食べ、残ったパンをまた売ることもできた。しかし、2 年後、機械が壊れて捨てるしかなかっ

た。そこで、タイに修理や保管できる日本人組織が必要だと考えた。また、長期滞在者がタイで亡くなったら葬式を出すのに費用がかかる。そこで、関心がある会員は毎月お金を払って、ある会員が亡くなったら、日本人のお坊さんを呼んで葬式が挙げられるようになった。また、日本政府から遺族年金を受け取るため、タイ政府から死亡届を発行してもらって、日本語に訳して日本の市役所などに送る。こといった複雑な過程と言語の問題があるため、会員は互いに協力して解決する必要がある。当該会はこの 2 つの使命を帯びてスタートした。加えて、定住者の集いの会は、健康を保持するため、ソフトボールやマラソンというスポーツの会も立ち上げ、メンバーと共に運動している。また、生活を送るために不可欠な交通機関も支援する。バイクの運転免許証取得のノウハウを広める。バイクは、自動車より手軽にチェンマイの自然を楽しめるためであるという。他の組織とのコンタクトもある。チェンマイの側は、チェンマイに滞在中に日本人長期滞在者のニーズを聞くため、チェンマイ県知事、チェンマイ商工会議所、タイ国政府観光庁、チェンマイ・ロングステイ・ライフの会、チェンマイ日本人会、定住者の集いの会、福祉の会の代表者の意見交換会議があった。その会議で、長期滞在ビザの問題が最も多く挙げられた。現在、タイのビザ条件は、タイの銀行で 80 万バーツのデポジットと 1 年間の滞在許可であるが、3 年間から 5 年間滞在許可が延長と、100 万バーツ以下のデポジットという要求が出た。その結果、チェンマイ商工会議所はタイの内務省にビザの件を上申したが、結果はまだ公表されていない（2013 年 9 月 4 日のインタビュー）。

5.2.2.2 福祉の会

代表者によると、2012 年に、チェンマイで息をひきとるまで安全な生活が送れること、楽しく健康で生きがいを保つこと、タイ人のためボランティア活動をすること、という 3 つの目的で設立されたという。福祉の会は日本にある NPO 法人 JT/ASH の下位組織である。福祉の会の活動は、無償またはボランティアであるため、会費、支出などを管理するため、JT/ASH 法人から独立できない。福祉の会は、入会金を支払えば永久会員になれる。2016 年現在、会員は 125 人である。チェンマイには、タイ人と結婚し、日本の不動産などを全部売却したといった、タイ・チェンマイにずっと滞在する意志をもつ日本人が増えている。彼らは、長期滞在の観光およびシーズンステイの日本人のタイプとは異なる。観光という形で長期滞在する者は、健康である時に様々な活動を体験するが、病気にかかると日本に戻るという。チェンマイでこれから一生暮らすことを考えている者は、介護、健康保険に関心が高いため、介護施設、日本人老人ホーム、健康保険のプランを考えている。チェンマイに滞在している日本人は年金金額の格差がある。最も少ない年金金額は 3 万円程度、総収入金額は 6 万円程度の人がいる。会員のため、チェンマイに年金でまかなえる日本的サービスの介護や老人ホームを作る計画がある。また、この会は、パソコン、スマートフォン、タブレット、アプリケーションの使い方と修理のサービスも提供している。さらに、日本料理の冷凍食品の販売、ミニ映画館などの活動を継続している。他の組織との繋がりはいくつかある。福祉の会は、在チェンマイ日本国総領事館の傘下にある北部タイ連絡協議会に毎月意見交換のため、2 人の代表者が参加する。チェンマイのイベントで、在チェンマイ日本国総領事館から日本人のパレードへの協力依頼が来た。しかし、在チェンマイ日本国総領事館から直接に福祉の会へという形ではなく、在チェンマイ日本国総領事館はチェンマイ日本人会（別の会）に伝えて、次にチェンマイ日本人会から福祉の会に情

報が来るというパターンであった。また、東京にある JT/ASH 法人は、タイのある財団に人形などの支援物資を日本から送る。その活動を支援するため、福祉の会もサポートしている（2013 年 9 月 11 日のインタビュー）。

5.2.2.3 日タイ・ロングステイ交流協会

代表者と協会のホームページによれば、タイにおけるロングステイヤーのために相談にのったり適切な助言をしたり、また問題があれば迅速に対応するなど、彼らが安全・安心で健康的に過ごせるようサポートを行っている。この会では実際に、（1）日常の相談・照会への対応や関連情報の取集・編集に注力すると共に、会員や外部に対し、適切・正確・有効な情報を迅速に発信すること（例えば、年金、医療、災害、ビザ種類、ワークパミット、IT、地域事情など）、（2）ホームページの充実とタイ情報誌『D－MARK』との連携協力、（3）タイと日本のロングステイ関連機関・団体や個人との交流活動を充実させること、（4）タイ・ロングステイ関連イベント・セミナーの開催と後援・支援活動の実施、といった主に 4 つの活動を行っている。また、日タイロングステイ交流協会は、タイでの日本人のロングステイのための情報発信や相談窓口としてボランティア活動を行っている。日タイロングステイ交流協会は、現在ロングステイを支援する機関として日本のロングステイ財団、タイ国のタイロングマネージメントコーポレーションと正確で迅速な情報やサービスの提供を行っている（日タイロングステイ交流協会、2015）。また、タイの政府機関との具体的な連携について、代表者は次のように説明した。

2014 年現在、タイ政府の関わりとして観光・スポーツ省内部部局観光開発局（Department of Tourism）とタイ国政府観光庁（Tourism Authority of Thailand: TAT）が連携しているが、窓口は定まっていない。そのため、要望や相談などがあった場合などは、両方の機関に出向いているが、煩雑さを感じている。窓口を一本化してほしい。また 2013 年 11 月のロングステイフェア（東京）にも両方のブースが出ていた。役割分担があるのか分からないが、観光開発局は、観光スポットなどの紹介や観光ツアーなどをプロモーションし、在東京タイ国政府観光庁は、日本人長期滞在者の様々な取り組みや支援などの紹介を行った。二つの組織が全く別のことをやっているように見える。（2014 年 3 月 18 日のインタビュー）。

5.2.2.4 チェンマイ商工会議所

チェンマイ商工会議所は、当地の会員企業を集めて、ビジネスの情報交換やセミナーの実施、協力、活動などを行っている。ロングステイ促進支援として、日本人長期滞在者のニーズ調査を行い、日本人長期滞在者を相手としている（もしくは今後ビジネス展開を考えている）会員企業に対してセミナーなどを実施している。同会議所は日本人長期滞在者の声を代弁しつつ、タイ企業にも日本人の顧客を獲得するチャンスを提供しているのである。

また同会議所は、会員企業のみを対象とした活動だけではなく、日本人長期滞在者を増やすためにタイ政府への要望も提出している。タイ政府に対しての主な要望はビザの件である。マレーシアが提供する長期滞在ビザは最大 10 年間の滞在が可能であり、日本から持ち込む自動車には関税をかけないといった日本人はとっては魅力な政策を展開しており、マレーシアで長期滞在を決める日本人も少なくない。同会議所はこのマレーシアの事例を受けて、国会議員にタ

イでも現在の長期滞在ビザを 3 年に延長してほしい旨の案を提出した。またタイの航空会社には東京 - チェンマイ間の直行便の就航を求めている。

なお、同会議所は、チェンマイ県観光・スポーツ事務所ともタイアップして、実際に日本で長期滞在者を呼び込むプロモーション活動も行った。なお、日本でのプロモーション活動の合間には、老人ホームなどにも訪れ、日本の高齢化社会におけるビジネスも見学した。これは、チェンマイにおける近い将来の高齢化社会に対応するためでもある。その際、渡航費などの費用は、チェンマイ県観光・スポーツ事務所が援助した（2013 年 9 月 12 日のインタビュー）。

5.2.2.5 チェンマイ国際財団（CIF）

チェンマイ国際財団（以下、CIF とする）は、日本人をはじめ外国籍の人を対象として、チェンマイの暮らしのサポートを行うことを目的としている。高齢者が不安に思うこと（介護や葬式など）のサービスを提供する。また、CIF のメンバーにも、ロングステイに関連する民間企業が参加している。CIF の代表者によれば、大阪事務所の JTIRO（NPO 日タイ国際交流推進機構）もチェンマイロングステイに関心を持っているようである。JTIRO は高齢化社会になりつつある日本の市場を研究し、様々な企業の商品開発のために統計・分析の情報を提供している。CIF もまたチェンマイに滞在している日本人の背景やニーズに合わせた介護施設などプロフェッショナルなサービスの提供を目指しているため、JTIRO と協力している。また、CIF はチェンマイにいる日本人グループ、チェンマイロングステイライフクラブ（CLL）、福祉の会、チェンマイ日本人会、定住者の集いの会の代表者に声をかけて、実際にどのようなニーズがあるのか直接聞き取りを行った。さらに、2013 年 10 月下旬に福岡本社の ASO GROUP が CIF に介護のトレーニングと介護専用の施設について相談に乗った。CIF の委員によると、日本人を介護するためには、介護の知識と日本文化の理解が両方必要であると語った。そして、CIF はチェンマイにある私立病院と共に MOU（了解覚書）を作成した。CIF の学生が介護士として卒業するとその病院に勤められることになり、タイ人に就職の窓口を与えることができるとしている（2013 年 9 月 12 日のインタビュー）。

以上のように日本人グループ（ケース 5、ケース 6、ケース 7）とタイ人グループ（ケース 8、ケース 9）の代表者にインタビューを行った。日本人グループ・タイ人グループは、グループの目的によって活動内容が異なる。目的によって、2 種類に分類できる。一つ目は、チェンマイでの生活を支援するという目的である。もう一つは、ビジネスチャンスを含めた目的で成立されたグループである。日本人のグループは、生活の支援を第一の目的にしており、ビジネスチャンスは第二の目的である。一方、タイ人のグループは、ビジネスチャンスが第一の目的であり、日本人の生活を支援するのは第二の目的であると本研究の調査から明らかになった。

5.2.3 民間企業

ここでは、民間企業の自営業者・経営者へのインタビュー調査の結果に基づき、民間企業による、チェンマイの長期滞在に関する目的と活動内容、中間支援組織の中における関係・関連性、中間支援組織と個人との関係・交流について論じていく。

5.2.3.1 サービス関連ビジネスの日本人経営者

調査対象とした会社は、2005年にチェンマイ支店として営業を始めたという。チェンマイに会社の支店を設立した理由は、日本人長期滞在者向けに最もよい場所だと思ったためである。特に気候である。12月～2月に北日本が寒くなると、チェンマイに日本人が千人から一万人程増える。この会社は、日本人長期滞在者のために、ゴルフの予約、ツアー、日本料理の食材、様々な情報やサービスを提供し、タイ人のためにも働く場を作れる。日本にも会社の支店を設けているため、チェンマイの支店では、徹底的に利益を得ることは考えていない。また、日本人は帰国する時に本を捨てないため、それらを集めて図書館を作った。メンバーカードを作れば、永久会員として利用できる。このサービスは利益を生まないため、日本人のボランティアが本の管理を担当している。この会社は、他の日本人グループに参加していない。入会すると、また様々なビジネスのチャンスが増えるかもしれないが、チェンマイでの利益には関心がないという。また、日本人グループに入るとその方針に従う必要があるため、世の中の視野が狭くなる恐れがあるからである（2013年9月14日のインタビュー）。

5.2.3.2 語学学校のタイ人自営業者

調査対象者は、語学学校を卒業する前から、喫茶店、ホテルのロビーなどでフリーランスとして日本人にタイ語を教えたという。その後、学生の人数が増えたため、教室を開くことを決意し、語学学校を始めた。日本人の客層は、日本人長期滞在者、ラムプーン工業団地に勤めている日本人、その日本人妻、バックパッカー、留学生などである。日本人のコースはほぼ個人レッスンで、授業の8割はタイ語会話である。かつては日本人男性の学生が多かったが、最近は女性が増えているとのことである。なお、経営者が一番気をつかっているのが、日本人男性がタイ人女性との交際を目的としていないかどうかであるとのことである。アルバイトとして雇っている女子大学生が多数いるため、彼女らはお茶や食事などによく誘われるが、授業以外で二人きりで出かけると、他から学校のイメージが悪く思われかねない。度々そういうことがないよう注意をしているとのことである。また、銀行などアルバイト通訳として勤める際も、銀行員から「恋人関係か」と誤解されたくない。言語学校の経営者は、日本人にもグループもタイ人グループにも入会しないが、本人にとってはそれらのグループに入会してもメリットを感じず、そもそも時間的余裕がないとのことである。この学校は、ホームページと口コミで広がっている。また、学校はチェンマイ市内にあるため、道に迷った日本人に道案内もすることがままある。時間が空いている時には、こといったボランティア活動を行っている。将来は日本人の子供を対象として日本語コースを作りたいと考えていた。なお、2016年現在この語学学校は閉鎖されている。

民間企業の多くは、2パターンに分類できる。第一に、ビジネスを経営しているのが日本人とタイ人のペアである場合である。タイの法律に精通しているタイ人は、書類の作成などを担当し、かつ不動産の所有者について（土地の所有権はタイ国籍のみ）、事業税（会社の事業者はタイ人の名誉だと外国人の名誉より税金が少ない）など、日本人の方は日本人客への対応を担当するというように国際結婚をした夫婦やカップルで協力しあって国際的なビジネスを展開している。第二に、日本語が話せるタイ人が経営している場合である。日本人長期滞在者の多

くは、日本語が通じる店を利用する傾向がある。そのため、日本語が話せる人材かいるかどうかが企業の経営が成功するかの分岐点となる。

5.3　マクロレベル、ミドルレベル、ミクロレベルの関係性

チェンマイで日本人長期滞在者を支援している組織は、日本側にもタイ側にも多数ある。本研究では、マクロレベル、ミドルレベル、ミクロレベルの 3 レベルに分けて、それぞれの役割を明らかにしていく。ここでは、（1）マクロレベルの中の関係性、（2）マクロレベル組織とミドルレベル組織との関係性、（3）ミドルレベルの中の関係性、（4）ミドルレベル組織とミクロレベルの個人の関係性、（5）ミクロレベルの中の関係性、の 5 つの関係性について、フィールドワーク調査の結果および観察した事例を挙げて分析していく。

5.3.1 マクロレベルの中の関係性

マクロレベルの組織は、日本政府とタイ政府である。日本政府は、1986 年から日本人を海外に移住させる政策を打ち出した。1992 年以降から、アジアへの長期滞在を支援する政策が始まった。定年退職後、日本より物価が安い国で、日本よりよい水準の生活が送れるため、海外の生活を支援する政策である。この時期にロングステイ財団を設立して、海外での長期滞在を希望している日本人に情報などをサポートする窓口とした。つまり、日本政府は、ロングステイ財団を通して長期滞在したい個人を支援するもので、日本政府自身は目的地の国々とは直接関わっていない。一方、タイ政府は、外国人の長期的な観光を増やすために、長期滞在型観光推進の政策を実施し、タイ国政府観光庁の管轄で支援政策やプロモーションを行っている。主な外国人長期滞在者の国籍は、アメリカ、スカンジナビア半島諸国、日本である。また、タイ国内のチェンマイ県を含む 5 か所を長期滞在型観光の実験県に選定した。

具体的な事例については、チェンマイでのフィールドワークによって明らかとなった。在チェンマイ日本国総領事館とチェンマイ市役所が協働している様子をかいま見ることができた。例えば、2015 年の第 10 回「ランナー・ジーブン・ラムウォン盆踊り大会」のイベントを共催するなどの事例がある。このイベントは、タイ人と日本人が数多く参加していた。このように、マクロレベルでの支援の場合、個人に対してではなく、公的に誰でも自由に参加できるイベントなどといった形で支援することも考えられる。

日本人は、タイ以外では、マレーシア、ハワイ、オーストラリア、ニュージーランド、フィリピン、シンガポール、アメリカ本土、カナダ、インドネシアなどにも長期滞在している。日本政府は、送り出し国として、ロングステイ財団をはじめ海外長期滞在の支援機関を設立し、目的地の国々の気候、不動産、物価、食べ物、観光、治安、医療、交通などの生活情報を提供している。個々の日本人は、自らで関心を持っている所の情報を集めて体験ツアーに参加するなどし、最後に目的地を決定するというステップである。一方、タイは、日本人長期滞在者にとって魅力的な目的地の一つである。タイ政府は、タイの観光産業振興のため、日本人を長期滞在型観光客として受け入れようとする。かつての観光パターンは、有名な観光地に短期間滞在するスタイルであり、その場合、食べ物とお土産代しか金を落とさない。滞在期間が長くなれば、長期的な観光収入が得られると見込んで日本人の長期滞在を支援する政策を始めた。日本人がタイへの長期滞在を希望するので、タイ政府は受け入れようとするのだと考えられる。

このように、日本とタイの関係は、送り出す国と受け入れ国の関係性だと考えられるが、国レベルすなわちマクロレベルの社会関係資本の機能を果たしていると考えられる。

5.3.2 マクロレベル組織とミドルレベル組織との関係性

政府のようなマクロレベルは、ミドルレベルの専門的な外郭団体を設立し、政府の代わりにサービスの実務を担当させるケースが多い。この場合、政府が予算や支援金を提供して、その組織の事業を始め、ある程度、事業の成績や人数などが安定したら、その後政府は少しずつ手を引いていく。ただし、政府に実施報告書を提出する業務がある。日本政府の場合は、ロングステイ財団、タイ政府の場合は、タイ国政府観光庁の事例が挙げられる。ここでは、ロングステイ財団やタイ国政府観光庁などといった組織をミドルレベルの組織と位置づける。前述したように、日本ロングステイ財団は長期滞在を支援するために設立され、またタイ国政府観光庁は業務の一部を拡大して長期滞在の支援を行っている。

5.3.3 ミドルレベルの中の関係性

ここでは、日本側同士、タイ側同士、日本とタイというミドルレベルの 3 つの関係性について論ずる。まず、日本側の組織の間での関係性は、イベントでの協力、情報の提供、相談窓口になるといった形でチェンマイでの長期滞在生活を支援している。以下といった事例が挙げられる。

5.3.3.1 在チェンマイ日本国総領事館と日本人のグループ

在チェンマイ日本国総領事館の「第 9 回ランナー・ジーブン・ラムウォン盆踊り大会のご案内」（2012 年 11 月 13 日）によると、在チェンマイ日本国総領事館は、チェンマイ日本人会、チェンマイ・ロングステイ・ライフの会（CLL）との共催によって、イベントを開催した。

5.3.3.2 ロングステイ財団と CLL 会

ロングステイ財団の代表者によれば、東日本大震災（2011 年 3 月 11 日発生）の影響で 2011～2012 年の間の相談が多かった。2013 年 11 月にロングステイフェアが行われた際に、チェンマイから私的に参加した医者グループとミーティングをした。そのミーティングでは日本人の長期滞在者に対する医療は重要な課題だとの意見が交換された。タイのロングステイの中では、チェンマイ県が人気のある代表的な目的地である。CLL 会からのメンバーもこのイベントに参加していた。また、日本の団塊世代の人々は上の世代の人々との相違点が多く、自分のために時間を使いたい、勉強したい、趣味力、野球、ジョギング、タイの歴史・お寺などといった個人的趣味への関心が増えているという。しかし、タイについては「いい場所だよ」というアピールだけではなく、具体的にタイでできるレジャーや活動を紹介することが必要である。また、日本人からもクレームを言われたことがあるという。よくあるパターンとしては資金を集めてコンドミニアム設立の計画に投資したがなかなか立ち上がらず、そのまま返金もないという問題が挙げられた。

次に、タイ側の組織の間での関係性は、日本人の長期滞在を支援し、経済的利益を得るためという共通目的がある。以下といった事例が挙げられる。

5.3.3.3 チェンマイ県観光・スポーツ事務所とチェンマイ商工会議所

チェンマイ県観光・スポーツ事務所は、チェンマイ商工会議所に対し日本人の長期滞在を促進するための予算を提供している。チェンマイ商工会議所は、様々な活動やプロモーションをするためには自らの力では十分ではない。そこで、日本人の長期滞在を支援することはチェンマイの経済成長にも関わるという理由で、チェンマイ県観光・スポーツ事務所は、チェンマイ商工会議所の支援活動を支えている。

最後に、日本側とタイ側双方のミドルレベル組織との関係性は、ビジネスの需給（経済の面）、文化的交流活動（交流の面）という 2 つがあることが明らかになった。以下といった事例が挙げられる。

5.3.3.4 チェンマイ商工会議所と CLL 会

チェンマイ商工会議所は、日本人の長期滞在を促進するために、日本人長期滞在者のチェンマイでの生活様式、不動産のニーズ、チェンマイに長期滞在している間に遭った問題などを理解するため、CLL 会などの日本人長期滞在者グループと意見交換の会議を行い、日本人長期滞在者はビザの滞在許可期間への不満が一番多いということが明らかになった。また、チェンマイ商工会議所と（チェンマイにある）メージョー大学の教授とが協力し、CLL 会の会員を誘って、タイ人と共に無農薬野菜の栽培体験をするというプログラムを主催した。また、チェンマイ大学と共に、タイ料理やタイ舞踊などのタイ文化を体験するという活動も主催した。

5.3.3.5 在チェンマイ日本国総領事館と大学：

在チェンマイ日本国総領事館とチェンマイ・ラチャパット大学の共催により、チェンマイ・ラチャパット大学の日本語コース学生を中心として「第 17 回日本祭（2014 年 7 月 18 日～20 日）」を開催した。日本に関するグッズの販売、コスプレや浴衣の着付け、パフォーマンスが行われた（チェンマイ・ロングステイ・ライフの会、2014; 5）（本研究では、「大学」はミドルレベル組織として含める。）

事例のように、ミドルレベル組織の中での関係性は、予算の配置、情報交換、情報発信・受信という形で繋がっていることが多い。ミドルレベルの組織の中でも関係性かつ最も社会関係資本の構築と利用が多い。各組織は単独に日本人長期滞在の支援をすると、手間や資金がかかる。逆に他のミドルレベルの組織と情報交換や協力をすれば、全体的に管理するより効果的だからであると思われる。

5.3.4 ミドルレベル組織とミクロレベルの個人の関係性

ここでは、ミドルレベルの組織である政府と関連性がある組織、日本人グループ、タイ人グループ、民間企業とミクロレベルである個々の日本人およびタイ人の関係性を論じる。ミドルレベル組織が、ミクロレベルにある個人と関わる目的は様々である。例えば、情報発信・受信、サービスの提供、ビジネスでの協力などである。次といった事例が挙げられる。

5.3.4.1　タイ国政府観光庁東京支局と日本人の長期滞在者

タイ国政府観光庁東京支局の日本人のマネージャーによれば、セミナーを主催時に、個々の日本人に接触する。それ以外は、東京支局のオフィスに来た人に情報を提供する。日本にいるタイ長期滞在希望者向けのセミナーの内容は、まずタイの紹介をし、タイでのビザの話、どんなところに住むかなどの衣食住の話をした上で、実際かかる予算の話をする。セミナーを行う場所は、東京、仙台、横浜、札幌などである。セミナーの成果としては、大使館が発行したロングステイビザは東京では 2012 年に 100 件くらいであり、少ない。やはり、ビザ無しの滞在（30 日間まで）や観光ビザを選択する者が多いと考えられる。

5.3.4.2　日タイ・ロングステイ交流協会と個々の日本人

日タイ・ロングステイ交流協会の代表者は、「父親がタイにある日系のゴム製造企業で働いていたので、小さい頃からタイに滞在していた。成人後、タイの日系企業の社長として、タイの 77 県を全て回った。50 年間タイと付き合って、タイの事情をいろいろ知っている」という人物である。彼は、日本国内にタイでのロングステイについての情報を発信し、希望者の相談にのるボランティアとして活躍している。実際にアドバイスした 2 つの例を以下に挙げる。一つ目のケースは、日本語教師の資格を取ってロングステイに行くつもりだった事例である。しかし、現地で働きたい場合はロングステイビザではなくて、ビジネスビザで行くようにアドバイスした。もう一つのケースは、北海道の医師である。彼は、既にタイでロングステイを始めていたが、それまで全く海外に行った経験がなかったので、チェンマイでの生活にいろいろ困っていた。そこで、無償でアドバイスを提供したとのことだ。

5.3.4.3　福祉の会と個々の日本人

福祉の会は、個々の日本人にパソコンやスマートフォンの相談や修理サービス、日本語の本や小説を貸し出すサービス、ミニ映画館、冷凍料理を提供している。しかし、サービスによっては会員にならないと利用できない場合がある。

5.3.4.4　定住者の集いの会とタイ人

定住者の集いの会は、チェンマイにずっと滞在する意向を持つ少数の日本人が始めた。会員の多くは、タイ人の配偶者やパートナーがいる。彼らは、観光客といったチェンマイ滞在ではなく、地元の人と共存することを希望している。そのため、グループを作ってお互いに生活の不安を解消する活動を行っている。非会員でも簡単な相談はできるが、様々な手助けが必要な場合、入会してから対応してもらうパターンが多い。

5.3.4.5　チェンマイ商工会議所と個々のタイ人

チェンマイ商工会議所の代表者は、チェンマイ商工会議所の委員として、約 10 年間ロングステイのビジネスを支援してきたが、大方のプロジェクトが失敗したと語った。不成功の原因は、現実の市場を理解できずに個々が勝手な思い込みで作ったためである。調査当時、ターゲットの背景とニーズの情報を収集し、会員メンバー及び関心がある者に広報していた。

ミドルレベル組織とミクロレベルの個人の関係性の特徴については、以下の 2 つの点が明らかになった。第一は、異なるレベルでも同質に固まる傾向があることで、とりわけ日本人同士

もしくは、タイ人同士に見られる。日本人同士の場合は、チェンマイにいかなる生活活動や異文化適応について互いに頼んだりする。タイ人同士の場合は、長期滞在のビジネスを起こすか、ビジネスグループを設立しようとしている。この同質化は結束型社会関係資本の機能性質をもつ。第二は、日本側とタイ側をクロスする関係性である。それは、ミドルレベルのタイ側の組織とミクロレベルの日本人、またはミドルレベルの日本側の組織とミクロレベルのタイ人という場合である。タイ側の組織は日本人個人が長期滞在の顧客となり、長期滞在の必要な情報や長期滞在体験のプランを提供している。日本側の組織はタイ人個人が現地の人として現地の情報を得たり仲間の関係ができたりすれば、現地での問題が起こったとしても解決される。この異文化の関係性の構築には、橋渡し型社会関係資本の性質をもち、日本人同士またはタイ人同士が解決できない問題や長期滞在の支援の効果に役に立つと言えよう。

5.2.4.6 ミクロレベルの中の関係性

個人の関係性は、様々である。ここでは、日本人同士の関係性と日本人とタイ人の関係性について論じる。まず、日本人同士の関係性のきっかけは、同じ日本人グループに参加することから始まることが多い。生活の中で偶然に何回か会う、同じ趣味を持つなどで互いに友達になることもある。チェンマイで生活を送る際に、他の日本人に会う機会が多い。日本人の多くは、チェンマイ市内のアパートメントやコンドミニアムに住んでいる。また、チェンマイの中に日本食材や調味料を販売している場所はいくつかあるが、ほぼ大型デパートやスーパーマーケットである。ゴルフ場やフィットネスに行くと日本人利用者が多い。チェンマイには、インフラストラクチャーやレジャー施設などが整っているが、街の規模が小さいので、このように偶然に日本人に会う機会が多いのである。ある者は、同じレストラン、同じゴルフ場で出会って友人になる者もいる。

一方、日本人は、チェンマイで生活を送る際に、タイ人と接触する機会が多い。特に、レストラン、レジ、受付といった所である。しかし、交流活動ができるタイ人は、日本語が話せる学生、日本文化に興味がある社会人などである。個人の関係としては様々な交流があるが、多くのパターンは、日本人が日本語や日本文化などを教える側で、タイ人が日本語や日本文化を習得する側である。交流するうちに、意見交換などの新たな交流が生まれる。このように、ミクロレベルの中の関係性においても、結束型社会関係資本と橋渡し型社会関係資本が構築する場面がみられる。

以上のように、インタビュー調査と公表されているホームページにより、マクロレベル、ミドルレベル、ミクロレベルの組織・グループの間の相互交流の例を挙げた。中間支援組織の中で異なるレベルの組織との連携・協力があることが明らかになった。例えば、マクロレベルとミドルレベルの連携の事例として、日本側の在チェンマイ日本国総領事館は、ビザやタイ・チェンマイの事情や情報を知らせるために CLL 会、定住者の集いの会、福祉の会にメールを送る。タイ側のチェンマイ県観光・スポーツ事務所はチェンマイ商工会議所のロングステイ支援プロジェクトに資金を提供する。ミドルレベルとミクロレベルの連携の事例は CLL 会のメンバーの場合、病院やスパやゴルフなどで割引や優待を受けられるというものである。さらに、中間支援組織は直接個人とも繋がる。また、中間支援組織の中にある相互関係がある。中間支援組織レベルを見ると、異なる国籍のメンバー、目的、活動などさまざま特徴をもつものが集められ

ている。社会関係資本の概念によれば、ネットワークといった社会的な関係が構築されている。組織が互いに協力し、支援すれば、それらの関係を保つことができると考える。それは自組織・グループの中により関心や協力を高めるという結束型 社会関係資本、異なる文化をもつタイ人と日本人を集めり他の組織・グループと協力や連携をするという橋渡し型社会関係資本の役割を果たす。

相互関係で最も深く結びついているのは経済面である。互いに経済的な利益があれば、協力する傾向が見られる。先行研究や本研究のアンケート調査により、タイ人のフレンドリーな国民性がチェンマイのプル要因となっており、人間関係、文化や考え方、つまり、社会的な関係の視点が見逃せない。また、現地の資源を経済的なメリットばかりではなく、現地の社会、文化、環境を守りながら、まちづくりや発展につなげていけると考えられる。

5.4 中間支援組織の役割

本研究の調査によってチェンマイでは、マクロレベル、ミドルレベル、ミクロレベルで長期滞在のネットワークが構築されていること、そして海外事務所として設置された日本側とタイ側の組織の数が増え、活動が顕著なものになっていることが明らかになった。チェンマイの日本人長期滞在者に対するミドルレベルもしくは中間支援組織の役割は様々あるため、以下からは、社会関係資本の視点から中間支援組織の役割を分析していく。

5.4.1 マクロレベルとミクロレベルの繋がりを構築

中間支援組織は、ミドルレベルとしてマクロレベルとミクロレベルを仲介し、チェンマイに日本人長期滞在者の支援するための支援や情報のフローに影響を与えている。支援の方法は、例えば、在チェンマイ日本国総領事館は、日本からの生け花、茶道など日本文化の先生を招待し、タイ人に日本文化を体験できるイベントや交流活動を主催する。そこでは、タイ人と日本人が互いにコミュニケーションや文化交流ができると考えられる。次に、新たな情報があった場合は、発信者から受信者に素早く正確に情報を提供することができる。例えば、タイのビザの条件が変更になった時、在チェンマイ日本国総領事館が、タイ北部に滞在している日本人に個々に知らせることが難しいため、日本人のグループを通してそのメンバーに知らせることがある。このようにマクロレベルの支援や情報を、ミクロレベルに素早く正確に届けることができるのである。

一方、ミクロレベルは、ミドルレベルの組織を通してマクロレベルの組織に要請する。日本人個人では、何か要求があってもマクロレベルからの支援などを受けられない可能性がある。しかし、ミドルレベルからの集団的な要求があれば、マクロレベルの組織はその要求に対応する可能性が高くなる。例えば、タイに滞在する期間の延長については、1年間ごとにタイの入国管理局から滞在延長許可を申請しなければならず、マレーシアをはじめ人気のある長期滞在の目的地を比較すると、不便過ぎると言われている。マレーシア政府は、1回の更新で最大10年間まで滞在許可を発行する。タイに長期滞在している日本人は、チェンマイ県商工会議所を通してタイ政府に滞在期間の延長の見直しを要求した。このように、橋渡し型社会関係資本の機能を果たしている。

5.4.2 マクロレベルとミクロレベルの関係性の活性化

このことは、一番目の役割と繋がっていると思われる。中間支援組織というミドルレベルの支援があれば、マクロレベルとミクロレベルのさらなる機能的効果をもたらす。マクロレベルの組織に対して、日本人長期滞在の支援をするため、宿泊やゴルフなどのセールプロモーションをするため、タイ政府が直接管理すると、対象者に情報が届かないなど時間がかかり、予算は莫大になる。しかし、中間支援組織の代表者に伝えると、組織のメンバーに広がり、予算の減少、スピード、規模など活性化をもたらす。ミクロレベルの場合、不動産、病院、ゴルフ、ショッピングセンター、温泉、スパ、言語学校などが別々に存在するため、日本人相手の商売のライバルとして値下げ競争になると、どちらも損をすることになる。チェンマイ国際財団（CIF）は、日本人長期滞在に対象するビジネスをグループ化しようとしている。ビジネスグループのメンバーになれば、グループ内で情報の交換やプロモーション活動の交流ができる。そうすると、日本語、日本人長期滞在者の特徴を知らなくても、互いの得意分野で苦手分野を補える。それで、予算の減少と時間の短縮になり、より効果的に運営できる。このように、中間支援組織は、結束型社会関係資本を利用しメンバーを集めることができる。また、他の組織に繋がって、橋渡し型社会関係資本の機能を利用されている。

5.4.3 マクロレベルとミクロレベルの双方への影響

チェンマイに滞在している日本人長期滞在者を集めて組織化することは、中間支援組織の交渉力を高める意味でもある。日本人長期滞在者の組織は、組織の要求をマクロレベルとミクロレベルに伝える力がある。マクロレベルに関してては、日本人長期滞在者の組織がタイ政府にビザの滞在期間の延長、ビザの更新の過程、野良犬の増加問題などを要望、請求している。ミクロレベルに関しては、例えば、CLL 会のメンバーになれば、CLL カードで割引や特別なサービスを受けられる。日本人グループは、タイ政府やビジネスなどに対して様々な交渉力を持つことができる。このように、日本人長期滞在者は、結束型社会関係資本を通して、マクロレベルとミクロレベル間の交渉を橋渡し型社会関係資本に変換することで関係を促進している。

5.4.4 日本人長期滞在者の異文化への適応を促進

初めてチェンマイに滞在する際、日本人の半分以上は、日本人グループのメンバーになっている。日本人長期滞在者は、日本人のグループに入会すると、ビザ、交通、携帯や自動車の購入、病院、買い物など日常生活について必要な情報を手に入れることができる。彼らは、日本にいる親戚や友達から離れて、チェンマイで新しい知り合いや友達を作る必要がある。グループに入れば、他の日本人と友達になることができ、日本語で会話し、共にゴルフをすることなどができる。また、日本人のグループを通してタイ人と交流活動の機会を増やすことができる。会員の中に、タイ語や英語が話せる者、タイ事情に詳しい者、タイ人と結婚している者がいるため、そのメンバーの社会的のネットワークを通して他のタイ人と交流や活動ができる。さらに、他の会員の知り合いにタイ人を紹介してもらうこともある。例えば、A 会員はタイ人の大学生たちに日本語を教えている。A 会員は B 会員を誘って共に日本語教師のボランティアをする。その結果、B 会員は新しいタイ人の知り合いが作ることができ、タイ人と直接コミュニケーションができる。このように、日本人長期滞在者は、橋渡し型社会関係資本を通して他のメ

ンバーの社会的ネットワークを利用でき、他のタイ人と交流できるという橋渡し型社会関係資本を構築している。それは、異文化社会の適応戦略になると言えよう。

5.4.5 横の関係性の構築

マクロレベルとミクロレベルの関係性、マクロレベルとミドルレベルの関係性、ミドルレベルとミクロレベルの関係は、上下関係である。マクロレベルの長期滞在の方針と法律によって、ミクロレベルの個人は基本的には従う必要がある。ミドルレベルの組織を設立することによって、マクロレベルとミクロレベルの差が縮まるのである。また、ミドルレベルの中で、横の関係を構築することによって、同じ目的を達成することができる。例えば、CLL 会とチェンマイ商工会議所の関係性である。チェンマイ商工会議所は、日本人長期滞在者のニーズを満たすために、CLL 会の代表者と直接意見交換し、チェンマイのビジネスグループは、日本人長期滞在者のニーズに合わせて商品やサービスを改善・開発して提供する。一方、日本人長期滞在者は、自分のニーズに従って商品やサービスを消費してチェンマイの長期滞在を充実させる。さらに、事例といった関係性は、タイと日本の国際的な横の関係性を構築する可能性も示唆する。ここでも、橋渡し型社会関係資本は、横の関係性の構築を促進することができると考えられる。

以上、中間支援組織の役割を論じてきた。しかし、チェンマイ商工会議所の代表者によると、長期滞在に関するサービス業（民間企業）は自らで各々勝手に動き、消費者の希望に応じられていないという結果になっている。また、タイのマクロレベルの組織は、長期滞在のサポートのための支援や他の組織との問題がある。例えば、役割は近いが互いに協力しない、成果のない組織を残したままなどである。この状況は、一律の管理やサービスを提供できない、対応が遅れる、重複してコストがかかるなど問題を発生させるであろう。それらの問題の解決のためには、他の機関と連携することである。その際に、社会関係資本が構築されると考えられる。

5.5 中間支援組織と社会関係資本の関連性

次に、中間支援組織と社会関係資本の関係性を分析する。

組織の中では、均質的な人々がグループの機能を強化し、集団的目的を達成することになる。ここでは、定住者の集いの会の事例が挙げられる。チェンマイに移住する目的を持つ人々（タイ人の配偶者、セカンドライフの生活を送る志向がある者など）がグループを設立した。このグループでは、タイの運転免許、配偶者ビザ、葬式、遺族年金などの情報がメンバーに伝わるが、シーズンステイ（主には 11 月～2 月の間）、留学、旅行などの目的を持つ人には必要ない情報であるため、彼らはグループ活動に参加しなくなる。このようにグループが異質性を排除し、グループのメンバーのみの相互作用が強化される。これは、結束型社会関係資本の理論で分析することができる。

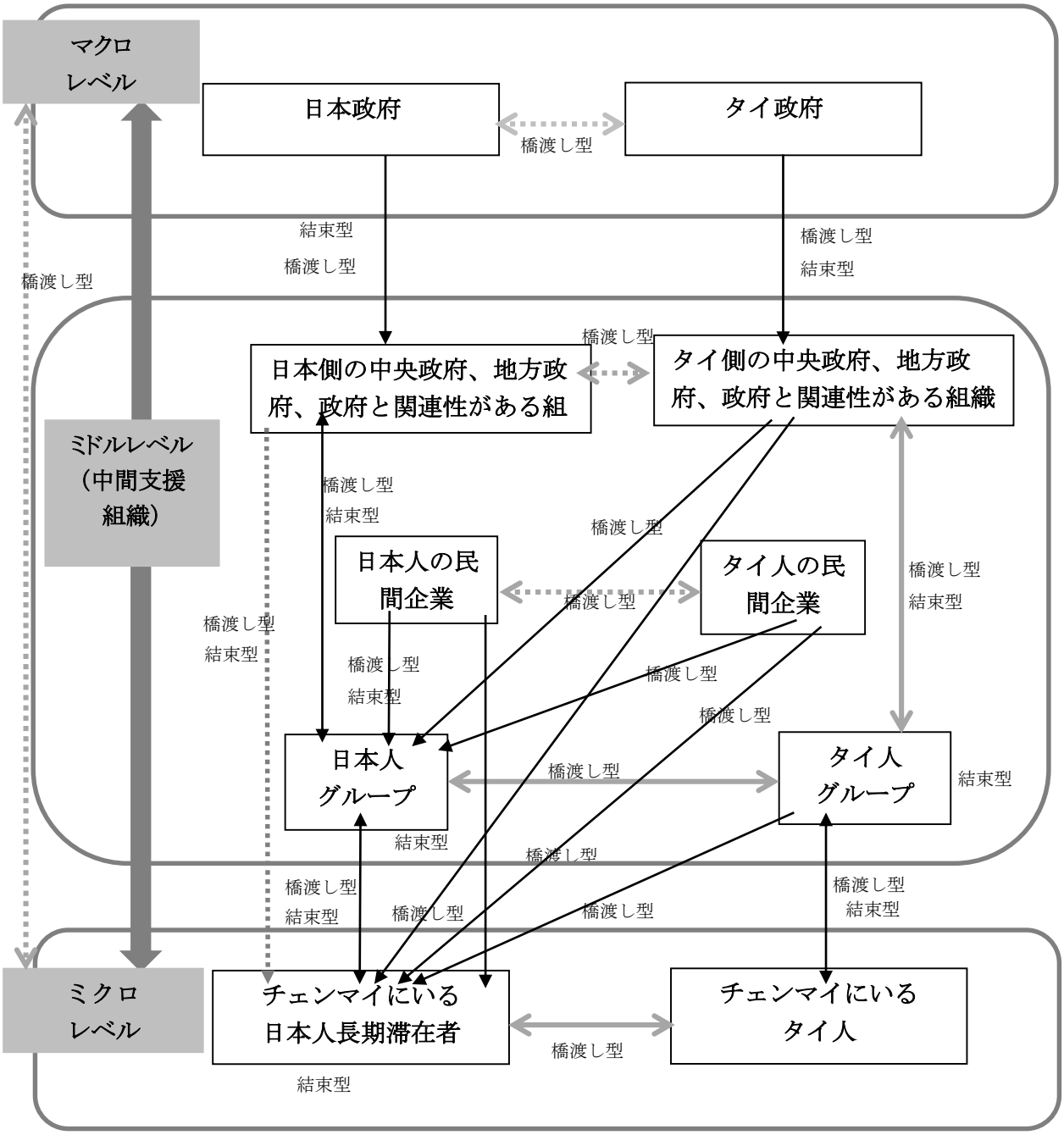
一つ以上のグループのメンバーであれば、そのグループを通して自分の社会関係資本を増やせる。他のメンバーが持っている社会的ネットワークや能力を、直接・間接的に利用できる。事例としては、宿泊先の賃貸契約の問題などがある。グループの中にタイ語が話せる者がいると、その日本人のタイ語と日本語の能力を利用して問題が解決できる。これは、橋渡し型社会関係資本の機能を果たしていると言える。

次に日本人長期滞在者のグループと他の組織との関わりについて論じる。日本人長期滞在者のグループは、タイの組織と交流活動において協力することがある。例えば、CLL 会とメージョ大学の交流活動である。この活動の主たる組織は、チェンマイ商工会議所である。チェンマイ商工会議所は CLL 会と大学を仲介して日本人とタイ人の交流活動が立ち上げ、日本人長期滞在者はタイ人の教授の実践する無農薬野菜を栽培コースを体験できた。この事例は、タイ人も日本人も個々では交流が難しいが、グループであれば交流活動ができる機会があることを示している。これは、橋渡し型社会関係資本の役割が果たされていると言える。

このように、ミドルレベルは、マクロレベルの組織とミクロレベルの組織より、社会関係資本を構築できる。日本人がチェンマイでスムーズな生活を送るために最も大切なのは、ミドルレベルの組織である。ミドルレベルの組織は、日本人同士の関係性、タイ人との関係性を構築する。ミドルレベルとの関係性を持っているかどうかで、日本人長期滞在者の実際に長期滞在できるかどうかが半分決まると言っても過言ではない。その理由は、ミドルレベルの組織が社会関係資本を最も多く持っているためである。社会関係資本は、組織のメンバーの間の信頼性、協力性、関係性などを強める役割がある。さらに、ミクロレベルの組織が持つ社会関係資本でマクロ組織とミクロ組織の繋がりが構築される。そうなれば、日本側の組織とタイ側の組織の間に信頼性が生まれて、より関係性が深まり、各組織レベルと人々が、ウィンウィンの関係性を構築できるようになるのである。

本研究の第 1 章の図 4 に基づいて、最後に各レベルとの関係を社会関係資本の視点から図 14 に図解した。図 14 では、マクロレベル、ミドルレベル、ミクロレベルの各組織やグループの関係性を示している。また、その関係性は結束型社会関係資本と橋渡し型社会関係資本の構築と活用として位置付られ、このように、本章では本研究の仮説 3「政府に関する組織、NPO・NGO、日本人のグループ、長期滞在に関わるサービス業者（民間企業）という中間支援組織の支援やサービスは、ライフスタイル型の移動による日本人長期滞在者の滞在する期間・頻度と関係がある」ことが明らかになった。

図 14　社会関係資本の視点でのマクロレベルとミクロレベルとの関



※ ←→　社会関係資本の構築と活用が非常に多い
※ ⟷　社会関係資本の構築と活用がまあまあ多い
※ ⟷　社会関係資本の構築と活用があまり多くない
※　結束型　結束型社会関係資本の省略
※　橋渡し型　橋渡し型社会関係資本の省略

出典：筆者作成

第 6 章

日本人の長期滞在がタイ社会に与えるインパクト

第 4 章では日本人の長期滞在について個人の属性、タイ人との交流、日本人のグループなどについて論じた。本章では、フィールドワークの調査の結果を分析しつつ、現地タイ人の対象者の背景と、日本人との交流をについて論じる。さらに、ジャパナイゼーションが浸透しているタイ社会における新たなジャパナイゼーションのインパクトについて言及し、改めて、日本人の長期滞在が現地に与えるインパクトを総括する。

本章では、アンケート調査、インタビュー調査の結果の順に分析する。双方の調査とも以下の 4 つの項目について尋ねた。

Ⅰ　タイ人の対象者の属性などの基本的項目について
Ⅱ　外国人、特に日本人長期滞在者との交流活動
Ⅲ　日本文化の認知及び消費
Ⅳ　タイ・チェンマイの長期滞在者の支援とそのインパクト

この章は、6.1 節、6.2 節、6.3 節の 3 つの節に分け、6.1 節でアンケート調査の結果、6.2 節でインタビュー調査の結果を分析し、6.3 節でタイ社会に対する日本人の長期滞在のインパクトについて論じていく。

6.1　アンケート調査の結果

本研究では、アンケート調査を 2013 年 8～9 月に実施した。タイ人へのアンケートは 129 部である（調査方法について、第 1 章の対象者を参照のこと）。まず、タイ人の対象者の属性などの基本的項目について整理する。

6.1.1　日本人との交流するタイ人について

まず、アンケート調査の結果を以下のように示す（N=129 だが欠損値あり）。

タイ人対象者の属性などの基本的項目は、性別、年齢、出身地、チェンマイに住んでいる期間、学歴、職業、収入、言語能力などである。

6.1.1.1 性別

性別は表 58 の通り、男性 26.4%（34 人）、女性 73.6%（95 人）である。

表 58　性別

	実数（人）	比率（%）
男性	34	26.4
女性	95	73.6
合計	129	100

6.1.1.2 年齢

調査対象者の年齢については、表 59 の通り、最高齢は 63 歳で、最年少は 18 歳である。20 代が最も多く 67%（85 人）、次いで、30 代で 13.3%（17 人）、40 代 7.1%（9 人）、10 代と 50 代はいずれも 5.6%（7 人）、60 代の者々が 1.6%（2 人）である。

表 59　年齢（2013）

年代	実数（人）	比率（%）
18〜19歳	7	5.5
20〜29代	85	67
30〜39代	17	13.3
40〜49代	9	7.1
50〜59代	7	5.5
60〜69代	2	1.6
合計	127	100

6.1.1.3 出身地

出身地については、表60の通りである。地方別では、多い順から、北部78.1%（100人）、中部12.5%（16人）、東北部5.5%（7人）、西部2.3%（3人）、東部1.6%（2人）である。

表 60　出身地域

	実数（人）	比率（%）
北部	100	78.1
中部	16	12.5
東北部	7	5.5
西部	3	2.3
東部	2	1.6
南部	-	-
合計	128	100

表 61　出身県

	実数（人）	比率（%）
チェンマイ県	65	50.8
チェンライ県	11	8.6
ランプーン県	10	7.8
バンコク首都	7	5.5
ランパーン県	6	4.7
その他	29	22.6
合計	128	100

県別に見ると、表 61 の通り、チェンマイ 50.8%（65 人）、チェンライ 8.6%（11 人）、ランプーン 7.8%（10 人）、バンコク（中部）5.5%（7 人）、ランパーン 4.7%（6 人）、その他の県 22.6%（29 人）であり、北部が多い。また、チェンマイ県の中でチェンマイ市内に住んでいる人は 24.2%（31 人）、ドイサケット郡（6 人）、サンサーイ郡とサンパートーン郡（5 人）、サンカムペーン郡とメーテーン郡（4 人）である。

6.1.1.4 チェンマイ滞在期間

チェンマイ滞在期間は表 62 の通りである。10 年未満の者が 41.1%（51 人）、10 年から 20 年未満が 8.9%（11 人）、20 年から 30 年未満が 35.5%（44 人）、30 年から 40 年未満が 9.7%（12 人）、40 年から 50 年未満が 2.4%（3 人）、50 年以上が 2.4%（3 人）である。

表62　滞在期間

滞在期間	実数（人）	比率（%）
10年未満	51	41.1
10～20年未満	11	8.9
20～30年未満	44	35.5
30～40年未満	12	9.7
40～50年未満	3	2.4
50年以上	3	2.4
合計	124	100

6.1.1.5 学歴

調査対象者の学歴は表 63 の通りである。大学 74.2%（95 人）、高校・専門学校 10.9%（14 人）、大学院 4.7%（6 人）、短期大学 4.7%（6 人）、小学校・小学校以下 3.9%（5 人）、中学校 1.6%（2 人）である。

表 63　最終学歴（在学中を含む）

	実数（人）	比率（%）
大学院	6	4.7
大学	95	74.2
短期大学	6	4.7
高校・専門学校	14	10.9
中学	2	1.6
小学校以下	5	3.9
合計	128	100

6.1.1.6　職業

調査対象者の職業は表 64 の通りである。学生 57.8%（74 人）、会社員 16.4%（21 人）、自営業 16.4%（21 人）、主婦 5.5%（7 人）、公務員・半官半民 2.3%（3 人）、パート・フリーランス 1.6%（2 人）である。

表 64　職業

	実数（人）	比率（%）
学生	74	57.8
会社員	21	16.4
自営業	21	16.4
主婦	7	5.5
公務員・半官半民	3	2.3
パート・フリーランス	2	1.6
合計	128	100

6.1.1.7 収入

調査対象者の収入は表65の通りである。5,000バーツ未満/月45.6%（57人）、10,000-14,999バーツ/月20.0%（25人）、5,000-9,999 バーツ/月18.4%（23人）、35,000 バーツ以上/月6.4%（8人）、20,000-24,999 バーツ/月5.6%（7人）、15,000-19,999 バーツ/月1.6%（2人）、25,000-29,999 バーツ/月1.6%（2人）、30,000-34,999 バーツ/月0.8%（1人）である。

表65　収入

	実数（人）	比率（%）
5,000バーツ未満/月	57	45.6
5,000-9,999 バーツ/月	23	18.4
10,000-14,999 バーツ/月	25	20.0
15,000-19,999 バーツ/月	2	1.6
20,000-24,999 バーツ/月	7	5.6
25,000-29,999 バーツ/月	2	1.6
30,000-34,999 バーツ/月	1	0.8
35,000 バーツ以上/月	8	6.4
合計	125	100

6.1.1.8　言語能力

調査対象者のタイ人の言語能力は表 66 通りである。英語を話すことが「とてもよくできる」「よくできる」「まあまあできる」85%（108 人）、「日本語を話す」の項目では、79.6%(101人)である。

表 66　タイ人の「英語を話す」「日本語を話す」言語能力

NO	外国語	とても よく できる	よく できる	まあまあ できる	少ししか できない	全く できない	合計
1	英語を話す	1.6% (2 人)	11.0% (14 人)	72.4% (92 人)	13.4% (17 人)	1.6% (2 人)	100% (127 人)
2	日本語を話す	0.8% (1 人)	26.0% (33 人)	52.8% (67 人)	12.6% (16 人)	7.9% (10 人)	100% (127 人)

また、タイ人対象者を「学生」と「学生以外」の職業に分けてみると、表 67 のように、「英語を話す」は、「学生以外」の方ができる（「とてもよくできる」「よくできる」「まあまあできる」の 96.2%（50 人））。「日本語を話す」は、「学生」の方ができる（「とてもよくできる」「よくできる」「まあまあできる」の 93.24%（69 人））である。

表 67　「学生」と「学生以外」の「英語を話す」「日本語を話す」言語能力

外国語	レベル	職業	実数（人）	比率（%）
英語を話す	とてもよくできる	学生	1	1.4
		学生以外	1	1.9
	よくできる	学生	6	8.1
		学生以外	8	15.4
	まあまあできる	学生	51	68.9
		学生以外	41	78.9
	少ししかできない	学生	14	18.9
		学生以外	2	3.8
	全くできない	学生	2	2.7
		学生以外	0	0
日本語を話す	とてもよくできる	学生	1	1.4
		学生以外	0	0
	よくできる	学生	22	29.7
		学生以外	11	21.2
	まあまあできる	学生	46	62.2
		学生以外	21	40.4
	少ししかできない	学生	4	5.4
		学生以外	11	21.2
	全くできない	学生	1	1.4
		学生以外	9	17.2

※ 学生　N＝74、学生以外　N＝52。

なお、タイ人回答者の多くは、日本語専攻学生である。そのため、サンプルに偏りがある。日本語専攻学生は、ある程度日本語が話せて、日本文化などに興味を持っているので、チェンマイに滞在している日本人と交流する志向が強い。一方、日本人長期滞在者は、大学生等、若者に日本語や日本文化などを教えたいと回答している者も少なくない。学生以外では、大方は、ビジネス関係者である。

上述のように、対象者の多くの共通点は、女性、20 代、チェンマイ県出身、学生である。学生が多いため、月に 5,000 バーツ程度の収入である。また、対象者の多くは、英語と日本語が話せる。しかし、学生と学生以外の対象者を分けると、学生以外より学生の方が日本語が堪能である。一方、学生より学生以外の方が英語を話せると答えた。

次に、タイ人の日本人との交流の実態について論じていく。

6.1.2 タイ人の日本人との交流の実態

まず、アンケート調査の結果を用いてタイ人の日本人との交流の実態を示す。アンケート調査では、第Ⅲ項目で「外国人、特に日本人長期滞在者との交流について」を尋ねた。結果は以下のようであった。

6.1.2.1 どのような日本人と関わりがあるか

仕事関係や日常生活の中で日本人と関わりがあると回答した対象者は 109 人であり、関わりがないと回答した対象者は、17 人である。仕事の関係や日常生活の中で日本人の学生、日本人長期滞在者、日本人の社会人と関わっている。日本人の学生とのみ関わりがある者が 17.4%（19 人）、日本人の社会人とのみ関わりがある者が 12.8%（14 人）、日本人長期滞在者とのみ関わりがある者が 16.5%（18 人）、日本人の学生と社会人と関わりがある者が 6.4%（7 人）、日本人の学生と長期滞在者と関わりがあるのが 2.8%（3 人）、日本人の社会人と長期滞在者と関わりがある者が 4.6%（5 人）、日本人の学生と社会人と長期滞在者と関わりがある者が 10.1%（11 人）、関係性はあるが、どのような日本人と関わるかを特定しなかった人は 29.4%（32 人）である。また、約半数の対象者は日本人の友人がいると回答した。また、表 68 に示すように学生と学生以外と比べると、日本人と関わる学生は、73 人中 60 人（82.2%）、日本人と関わる学生以外は、53 人中 49 人（92.5%）である。

表 68　どのような日本人と関わりがあるか（単数回答）（人）

	学生	学生以外	合計
日本人の学生のみ	89.5%（17）	10.5%（2）	100%（19）
日本人の社会人のみ	85.7%（12）	14.3%（2）	100%（14）
日本人長期滞在者のみ	27.8%（5）	72.2%（13）	100%（18）
日本人の学生と社会人	100%（7）	-	100%（7）
日本人の社会人と長期滞在者	20.0%（1）	80.0%（4）	100%（5）
日本人の学生と長期滞在者	100%（3）	-	100%（3）
日本人の学生と社会人と長期滞在者	36.4%（4）	63.6%（7）	100%（11）
関係性はあるが特定なし	34.4%（11）	65.6%（21）	100%（32）
関わりなし	76.5%（13）	23.5%（4）	100%（17）
合計	100%（73）	100%（53）	100%（126）

6.1.2.2　日本人長期滞在者のサポートの有無

調査対象者で日本人長期滞在者のサポートをしたことがあるかという問いに対する回答は以下の通りである。手伝ったことがない 72.9%（94 人）、手伝ったことがある 26.4%（34 人）である。日本人長期滞在者を手伝ったことの内容は、「道を教える」、「タイ語を教える」、「一緒に買い物する」、「病院・クリニックに連れて行く」、「事故の手続き」、「通訳」、「引越し・物を運ぶ」、「一緒にご飯を食べる」などである。

また、タイ人対象者の中には、「生け花」や「CLL 会」などの日本人と交流するグループに入っている人がわずかに 7%（9 人）存在する。

なお、日本人と文化交流する活動に興味があるタイ人は、約 90%（112 人）である。また、日本人と共に活動することがある人は、33.9%（40 人）である。「日タイ交流活動に対して、自分の支援はその活動の力になる」に対して、「そうだと思っている」は 62.7%であり、「どちらも言えない」は 32.5%（42 人）、「そうだと思っていない」は 4.8%（6 人）である。

6.1.2.3　日本人長期滞在者と共に活動する理由

日本人長期滞在者と共に活動する理由についての問いに対する回答の上位は表 69 の通りである。「勉強または仕事に役に立つから」66.9%（83 人）、「面白いテーマ及び活動だから」64.5%（80 人）、「時間があるから」56.5%（70 人）が主である。「手当てがあるから」15.3%（19 人）、「組織からの支援があるから」17.1%（22 人）、「日本人はお金を持っているから」18.5%（23 人）、「日本人長期滞在者から誘われるから」26.6%（33 人）という理由は主ではないことが明らかになった。

表 69　日本人長期滞在者と共に活動する理由（複数回答可）

順位	理由	回答者数（%）
1	勉強または仕事に役に立つから	83　（66.9%）
2	面白いテーマ及び活動だから	80　（64.5%）
3	時間があるから	70　（56.5%）

一方、活動に参加しない理由の上位は表 70 の通りである。最も多かったのは、「時間がないから」64.5%（80 人）、「活動があることを知らなかったから」50.8%（63 人）である。以下、「言葉の問題があるから」39.5%（49 人）、「お金がかかりすぎるから」33.9%（42 人）、「面白くないテーマだから」33.1%（41 人）、「年齢の差があるから」21.6%（27 人）、「お年寄りに興味がないから」5.6%（7 人）の順となっている。

表 70　日本人長期滞在者と共に活動に参加しない理由（複数回答可）

順位	理由
1	時間がないから
2	活動があることを知らなかったから
3	言葉の問題があるから
4	お金がかかりすぎるから
5	面白くないテーマだから
6	年齢の差があるから
7	お年寄りに興味がないから

タイ人対象者の多くが、日本人と関わる機会を求めており、日本人と文化交流する活動に興味があることがわかる。少なくとも 3 分の 1 の対象者が日本人長期滞在者と交流したことがある。実際に関わった内容は、例えば、日本文化を習うこと、タイ語を教えること、共に買い物することなどである。日本人と交流したい理由は、「勉強または仕事に役に立つから」との回答が最も多かった。また、日本人長期滞在者と共に活動に参加しない理由は、「時間がないから」と答えた者がおり、在学中または在職中の対象者であると思われる。

6.1.3　ジャパナイゼーションのインパクト

日本人対象者の調査結果によれば、日本人長期滞在者が、タイ・チェンマイを長期滞在の目的地として決定した要因として、物価、気候、生活の便利さといった生活環境要因、及びタイ人の性格、外国人にフレンドリーであるという国民性の要因が挙げられた。タイ人は、一般的に日本製品を使用し、日本料理を食べ、日本語で仕事をする者もいるというように多様な場面でジャパナイゼーションの影響が現われている。そこで、まずタイ人対象者の日本製品の消費と日本文化の認知についての調査結果を論じ、次に、日本人そのものを受け入れようとするというタイ社会に起こった新たなジャパナイゼーションの実態を論じていく。

まず、アンケート調査の結果を論じる。アンケート調査のⅡ項目「日本文化の認知及ぶ消費について」の結果は、以下の通りである。

日本文化の認知及び消費の項目では、日本の文化、製品、消費、認知についての項目である。以下のように調査の結果を論じていく。

6.1.3.1　日本の文化に触れる年代

日本の文化に触れる調査対象者を年代別に見ると、10 代（56.3%）が最も多い、次いで 20 代（23.4%）である。

6.1.3.2 日本の好きなもの

表 71 は、日本の好きなものについて（「日本についてどんなもの・ことが好きですか」という問いに対する回答結果である。「好き」と半分以上が回答したのは、「和食・和菓子」89.9%（115 人）、「日本製品」62.5%（80 人）、「漫画・アニメ」57%（73 人）、「ドラマ・シリーズ」57.0%（73 人）、「日本の観光および観光についての本」53.1%（68 人）である。実際に消費しているのは、「和食・和菓子」90.6%（116 人）、「日本製品」60.2%（77 人）、「漫画・アニメ」50.4%（65 人）である。

表 71 日本の好きなものについて（複数回答可）（N=128）

	実数（回答数）	比率（%）
和食・和菓子	115	28.1
日本製品	80	19.6
漫画・アニメ	73	17.8
ドラマ・シリーズ	73	17.8
日本の観光および観光に関する書籍	68	16.7
合計	409	100

6.1.3.3 日本の製品の一ヶ月あたりの消費

日本の製品の一ヶ月あたりの消費額については表 72 の通りである。月に 1,000 バーツ以下が 76.8%（96 人）、月に 1,000～1,999 バーツ 12.8%（16 人）、月に 2,000～2,999 バーツ 6.4%（8 人）、月に 3,000～3,999 バーツ 2.4%（3 人）、月に 5,000 バーツ以上 1.6%（2 人）である。

表 72 日本製品の一ヶ月あたりの消費額

	実数（人）	比率（%）
月に1,000バーツ以下	96	76.8
月に1,000～1,999バーツ	16	12.8
月に2,000～2,999バーツ	8	6.4
月に3,000～3,999バーツ	3	2.4
5,000バーツ以上	2	1.6
合計	125	100

6.1.3.4 日本への訪問の経験

対象者の中で、日本への訪問経験がある者は 32.0%(40 人)である。その中で最も多い回答者の訪問回数は 20 回に上っていた。

6.1.3.5　タイ人対象者の日本及び日本人に対する印象

タイ人対象者の日本及び日本人に対する印象について、コミュニケーション面、消費面、社会・文化面、認知面の 4 項目に分類した。コミュニケーション面は、「日本語が好きだ」、「日本人と日本語で話したい」、「日本人の知り合い・友人[14]がほしい」の 3 項目で測定する。消費面は、「日本製を消費することが好きだ」、「日本料理を食べることが好きだ」、「日本の漫画やアニメが好きだ」、「日本の漫画やアニメが好きだ」、「日本人の歌手や俳優が好きだ」、「日本に旅行したいまたはまた行きたい」の 6 項目で測定する。社会・文化面は、「日本の社会と文化が好きだ」、「日本の社会と文化を習いたい」、「日本人と活動したい」、「日本人の友人または知り合いを喜んで手伝う」、「チェンマイにある日本人のグループに参加したい」の 5 項目で測定する。認知面は、「日本人が好きだ」、「日本人長期滞在者は、タイ経済に良い影響をもたらす」、「もっと日本人長期滞在者の数が増えてほしい」、「日本人長期滞在者はタイ社会に問題を起こさないと思う」、「日本人長期滞在者がチェンマイにいい影響を与えていると思う」の 5 項目を含んでいる。その 4 点に対して、「大いに賛成する」、「賛成する」、「あまり賛成しない」、「賛成しない」の 4 レベルに分けた。大方の項目は、「賛成する」が多かった。また、「賛成しない」に大方選ばれなかった項目は、コミュニケーション面の「日本人と日本語で話したい」、消費の面の「日本に旅行したい、またはまた行きたい」、社会・文化面の「日本人の友人または知り合いを喜んで手伝う」、認知面の「日本人が好きだ」である。タイ人対象者の日本及び日本人に対しての考えについての詳細は次の、表 73、表 74、表 75、表 76 のように「賛成」（「大いに賛成する」及び「賛成する」）と「賛成しない」（「あまり賛成しない」及び「賛成しない」）の割合と回答数で示す。

表 73　タイ人対象者の日本及び日本人に対する印象：コミュニケーション面

コミュニケーション面	賛成（%）（回答数）	賛成しない（%）（回答数）	合計
日本語が好きだ	94.4%（118）	5.6%（7）	100%（125）
日本人と日本語で話したい	96.0%（121）	4.0%（5）	100%（126）
日本人の知り合い・友人がほしい	95.2%（118）	4.8%（6）	100%（124）

[14]本研究での「顔見知り」、「知り合い」、「友人」の定義は以下の通りである。「顔見知り」は、日常生活の中でよく会うが、名前は知らず、関係性が特にない人を指す。「知り合い」は、日常生活の中でよく会う人で、名前や連絡先などある程度個人情報を知っている。また、ある場面で互いに関係性が構築されているという関係である。「友人」は、日常生活の中でよく会う人で、名前や連絡先などの個人情報をある程度知っている。互いに関係性が構築されており、友人としての認識がある、一緒によく活動をする、困った時に手伝いを求める、相談に乗れるといった人を指す。

表 74　タイ人対象者の日本及び日本人に対する印象：消費面

消費面	賛成% （回答数）	賛成しない（%） （回答数）	合計
日本製品を消費することが好きだ	87.2%（109）	12.8%（16）	100%（125）
日本料理を食べることが好きだ	93.5%（116）	6.5%（8）	100%（124）
日本の漫画やアニメが好きだ	81.0%（98）	19.0%（23）	100%（121）
日本人の歌手や俳優が好きだ	60.3%（76）	39.7%（50）	100%（126）
日本に旅行したい（行きたい）	98.4%（123）	1.6%（2）	100%（125）

表 75　タイ人対象者の日本及び日本人に対する印象：社会・文化面

社会・文化面	賛成（%） （回答数）	賛成しない（%） （回答数）	合計
日本の社会と文化が好きだ	88.9%（112）	11.1%（14）	100%（126）
日本の社会と文化を習いたい	96.8%（122）	3.2%（4）	100%（126）
日本人と活動したい	92.7%（115）	7.3%（9）	100%（124）
日本人の友人または知り合いを喜んで手伝う	97.6%（124）	2.4%（3）	100%（127）
チェンマイにある日本人のグループに参加したい	82.4%（103）	17.6%（22）	100%（125）

表 76　タイ人対象者の日本及び日本人に対する印象：認知面

認知面	賛成（%） （回答数）	賛成しない（%） （回答数）	合計
日本人が好きだ	94.4%（118）	5.6%（7）	100%（125）
日本人長期滞在者は経済面的に恵まれている	76.6%（98）	23.4%（30）	100%（128）
日本人長期滞在者から利益を得ることができる	45.6%（57）	54.4%（68）	100%（125）
もっと日本人長期滞在者の数が増えてほしい	71.9%（92）	28.1%（36）	100%（128）
日本人長期滞在者はタイ社会に問題を起こさないと思う	78.6%（99）	21.4%（27）	100%（126）
日本人長期滞在者がチェンマイにいい影響を与えていると思う	84.4%（108）	15.6%（20）	100%（128）

以上の結果から、タイ人対象者の日本文化の認知及び消費について次のように論じられる。対象者の約半数は 10 代で、2 割は 20 代、1 割は 10 代以下から日本文化に触れ始めた。和食・和菓子、日本製の商品、日本の漫画・アニメなどをよく消費している。日本の製品を消費する金額は、約 80%の対象者は月に 1,000 バーツ以下である。アンケート調査のタイ人対象者は、約 60%が学生で、約 50%が月に 5,000 バーツ以下の収入であることから、この結果は合理的だと考えられる。彼らは、日本風の料理、日本語が表記されているお菓子、日本製の電気製品を消費している。また、漫画のレンタルショップの大方に日本の漫画が置かれている。購入する 10 分の 1 の金額で借りられるため、レンタルショップや無料動画ウェブサイトでアニメを消費している者が少なくない。また、日本人と日本語で話したい（コミュニケーション面）、日本に旅行したい・また行きたい（消費の面）、日本人の知り合い又は友人を喜んで手伝う（社会・文化面）、日本人長期滞在者が好きだ（認知面）という結果から、タイ人は日本製品、日本文化だけでなく日本人にも興味があることが明らかとなった。日本人と共に活動をしたいという希望があり、日本人の友人または知り合いが困ったら、手伝ってあげたいという気持ちがあることも明らかになった。

6.1.4 現地に対する日本人の長期滞在のインパクト

本節では、タイ人対象者に対して、Ⅳのタイ・チェンマイの長期滞在者の支援とそのインパクトを尋ね、日本人長期滞在者からタイ社会及び自分自身がどのような影響を受けているかを分析する。

6.1.4.1 日本人長期滞在者との文化交流及びその活動に対する支援

「日本人長期滞在者との文化交流及びその活動を支援するのは誰の役割だと思いますか」の回答は、「チェンマイの人たち」27.0%（34 人）、「政府」19.0%（24 人）、「NPO」18.3%（23 人）の順であった。

また、日本人長期滞在者にもっと支援しなければならないと考える理由についての回答結果は表 77 の通りである。複数回答を点数化（1 位は 3 点、2 位は 2 点、3 位は 1 点）すると、1 位「日本語を学ぶ、及び日タイ両語で交流できる」（93 回答、202 点）、2 位「文化を学ぶ、及び交流できる」（85 回答、167 点）、3 位「経済的利益」（72 回答、166 点）の順になる。

表 77　日本人長期滞在者にもっと支援しなければならないと考える理由（複数回答可）

順位	理由
1	日本語を学ぶ、及び日タイ両語で交流できる
2	文化を学ぶ、及び交流できる
3	経済的利益

さらに、日本の長期滞在者に支援しない方がいいと考える 3 つの理由についての回答結果は表 78 の通りである。複数回答を点数化（1 位は 3 点、2 位は 2 点、3 位は 1 点）すると、1 位「日本人長期滞在者に限らない方がいい」（78 回答、174 点）、2 位「女性が売春するように

誘惑される及び麻薬の問題が増えること」（60 回答、138 点）、3 位「チェンマイの物価が上がるから」（61 回答、122 点）の順になる。

表 78　日本の長期滞在者に支援しない方がいいと考える理由（複数回答可）

順位	理由
1	日本人長期滞在者に限らない方がいい
2	女性が売春するように誘惑される、及び麻薬の問題が増えるから
3	チェンマイの物価が上がるから

調査の結果から、タイ人対象者の大方は、日本人の長期滞在を支援するべきだと思っていることが明らかとなった。日本人長期滞在者のチェンマイ長期滞在を支援する役割は、チェンマイの人たちにあると考えており、その理由は、「文化を学ぶ、及び交流できる」、「日本語を学ぶ、及び日タイ両語で交流できる」、「経済的利益」である。一方、日本の長期滞在者に支援しない方がいいと考える理由は、「日本人長期滞在者に限らない方がいい」、「女性が売春するように誘惑される、及び麻薬の問題が増えるから」のような社会問題の発生への危惧、「物価が上がる」といったものである。

以上のようにアンケート調査の結果をまとめた。本研究のタイ人の対象者の多くは、女性、20 代、学生である。対象者の多くは、小さい頃から日本文化に触れあう機会があった。また、学生などの収入が少ない人でも、安く日本料理を食べていること、インターネットを通して日本のポップカルチャーを消費しているということが明らかになった。また、タイ人は、日本人長期滞在者と交流すると無料で日本語や日本文化を学ぶことができ、ビジネスの売り上げや、チェンマイの経済、特に観光産業が成長するなど、個人や集団のメリットに繋がると考えている。さらに、将来的なビジネスチャンス、就職のチャンスにも繋がってくるため、日本人長期滞在者の支援政策に賛成するタイ人が多いと考えられる。

6.2　インタビュー調査の結果

次に、インタビュー調査の結果を論じていく。タイ人対象者の者数は、合計で 51 名である。

6.2.1　日本人との交流するタイ人の属性

タイ人対象者の属性などの基本的項目は、性別、年齢、出身地、チェンマイに住んでいる期間、学歴、職業、収入、言語能力である。

6.2.1.1　性別

対象者の性別は、表 79 の通りである。男性 33.3%（17 人）、女性 66.7%（34 人）である。

表 79　性別

	実数（人）	比率（%）
男性	17	33.3
女性	34	66.7
合計	51	100.0

6.2.1.2　年齢

対象者の年齢については表 80 の通りである。10 代 5.9%（3 人）、20 代 27.5%（14 人）、30 代 23.5%（12 人）、40 代 25.5%（13 人）、50 代 15.7%（8 人）、60 代 1.9%（1 人）である。

表 80 年齢

	実数（人）	比率（%）
10代	3	5.9
20代	14	27.5
30代	12	23.5
40代	13	25.5
50代	8	15.7
60代	1	1.9
合計	51	100

6.2.1.3　出身地

対象者の出身地の詳細は表 81 の通りである。チェンマイ県 68.6%（35 人）、チェンマイ県以外　31.4%（16 人）である。チェンマイ県外出身の者は、少なくとも調査時点で 2 年間以上チェンマイに住んでいると回答した。

表 81　出身県

県	実数（人）	比率（%）
チェンマイ県	35	68.6
チェンマイ県以外	16	31.4
合計	51	100

6.2.1.4　学歴

対象者の学歴については表 82 の通りである。大学学位以下 45.1%（23 人）、大学の在学と大学学位以上 54.9%（28 人）である。

表 82　学歴

学歴	実数（人）	比率（%）
大学学位以下	23	45.1
大学の在学及び大学学位以上	28	54.9
合計	51	100

6.2.1.5　職業

対象者の職業については表 83 の通りである。学生 9.8%（5 人）、自業者 35.3%（18 人）、会社員 37.3%（19 人）、非常勤 13.7%（7 人）、公務員 3.9%（2 人）である。

表 83　職業

	実数（人）	比率（%）
学生	5	9.8
自営業	18	35.3
会社員	19	37.3
パート・フリーランス	7	13.7
公務員	2	3.9
合計	51	100

6.2.1.6　外国語運用能力

対象者の英語と日本語の運用能力については表 84 の通りである。仕事などである程度コミュニケーションを取れるレベルから流暢に話せるレベルまでを「話せる」、全く話せないレベルから仕事などで積極的には使えないレベルまでを「話せない」と定義すると、英語を話せる人は 88.2%（45 人）、英語を話せない人は 11.8%（6 人）である。日本語を話せる人は 39.2%（20 人）、日本語を話せない人は 60.8%（31 人）である。

表 84　外国語運用能力

	実数（人）	比率（%）
英語が話せる	45	88.2
英語は話せない	6	11.8
合計	51	100
日本語が話せる	20	39.3
日本語は話せない	31	60.8
合計	51	100

タイ人対象者の多くは、女性、20代、チェンマイ県出身、大学に在学中及び大卒程度、会社員、英語で会話できることが明らかになった。

次には、タイ人の日本人との交流の実態について、論じていく。

6.2.2 タイ人の日本人との交流の実態

タイ人のインタビュー対象者は、日本人と直接関わる者と直接には関わらない者という2つのグループに分けられる。「日本人と直接関わる」とは、ビジネス、仕事、勉強、交流活動、隣人、その他という6つの関係性である。比較の意味で、日本人と直接には関わらない人も対象にした。2010年から2015年にかけてインタビュー調査を行ったタイ人対象者のうち、日本人と直接関わるとした者は表85の39人、日本人と直接には関わらないとした者は表80の12人である。タイ人対象者のリストを以下の表で示す。

表 85　日本人と直接関係がある対象者

ケース名	性	年代	日本人との関係性	インタビュー日（年・月・日）
T01	女	40代	交流活動	2014・09・06
T02	女	30代	ビジネス	2014・09・17
T03	女	40代	ビジネス	2014・09・19
T04	女	20代	交流活動	2014・09・20
T05	女	10代	交流活動、勉強	2014・09・20
T06	女	10代	交流活動、勉強	2014・09・23
T07	女	30代	ビジネス、隣人	2014・09・24
T08	女	20代	交流活動、その他	2014・09・25
T09	男	50代	仕事	2015・02・17
T10	女	50代	ビジネス、隣人	2015・02・21
T11	女	30代	仕事	2015・02・23
T12	男	20代	勉強、その他	2015・02・25
T13	女	40代	交流活動	2010・12・04
T14	女	30代	ビジネス	2010・12・07
T15	女	40代	ビジネス、その他	2010・12・07
T16	女	50代	ビジネス、その他	2011・01・06
T17	女	30代	ビジネス、その他	2011・01・11
T18	男	30代	ビジネス、その他	2011・01・11
T19	女	10代	交流活動、勉強	2011・01・13
T20	男	50代	その他	2011・01・13
T21	男	20代	仕事	2011・01・18
T22	男	40代	仕事	2011・02・14
T23	男	20代	ビジネス	2011・02・24
T24	女	20代	ビジネス	2011・03・01
T25	男	20代	ビジネス	2011・03・04

T26	女	40 代	仕事	2011・03・04
T27	女	30 代	仕事	2011・03・04
T28	女	20 代	仕事	2011・03・04
T29	男	60 代	ビジネス	2011・03・04
T30	男	30 代	仕事、ビジネス	2011・03・06
T31	女	30 代	仕事	2011・03・18
T32	女	20 代	仕事	2011・03・18
T33	男	40 代	ビジネス	2011・03・20
T34	男	30 代	ビジネス	2011・03・20
T35	男	40 代	仕事	2011・03・21
T36	女	40 代	ビジネス	2011・03・21
T37	女	30 代	仕事	2011・03・25
T38	女	20 代	交流活動、勉強、仕事	2011・03・25
T39	女	30 代	仕事	2011・03・25

表 86 日本人と直接に関係がない対象者

ケース名	性	年代	日本人との関係性	インタビュー日 （年・月・日）
T40	女	50 代	直接関係がない	2014・09・16
T41	男	50 代	直接関係がない	2014・09・19
T42	男	40 代	直接関係がない	2014・09・19
T43	男	40 代	直接関係がない	2014・09・20
T44	女	50 代	直接関係がない	2014・09・22
T45	女	20 代	直接関係がない	2014・09・22
T46	女	40 代	直接関係がない	2014・09・23
T47	女	20 代	直接関係がない	2014・09・23
T48	女	40 代	直接関係がない	2014・09・23
T49	女	50 代	直接関係がない	2015・02・17
T50	男	20 代	直接関係がない	2015・02・20
T51	女	20 代	直接関係がない	2015・02・20

6.2.2.1 直接関係がある対象者

直接関係がある者とは、ビジネス、仕事、勉強、交流活動、隣人、という 5 つの関係性がある対象者である。以下のように関係性の種類によって 39 人のタイ人対象者をまとめて論じる。

（1）ビジネス

関係性が「ビジネス」のケースでは、次のような事例が挙げられる。

T03（40 代の女性）観光会社の経営者で、10 年間チェンマイの日本人長期滞在を対象とするビジネスを経営している。この会社は、ビザの更新サービス、航空券やホテルの予約、車検や自動車税の手続き、引っ越し、葬式の手続きなどを様々なサービスを提供する。サービス代は適切に設定する。顧客の 95%は日本人で、内 75%はチェンマイに長期滞在している日本人であ

る。ビジネスを開始した動機は、日本に留学した時に、日本人から世話になったことである。チェンマイにおいて日本人長期滞在者が、特に不動産の件でだまされることがよくあると聞いていた。例えば、コンドミニアムを 10 倍高い金額で販売するなどである。ビジネスで日本人長期滞在者に関わることで、T03 は次のようなことが分かった。日本人長期滞在者は、夫婦、一人、日本人の妻と離婚してチェンマイに来る人、というパターンが多い。一人で長期滞在する人の中には、タイ人の女性と仲良くなりたいという者もいる。彼らは、無職または低賃金で働く学歴の低い女性と深い関係になり、お金を要求される。そして、お金をあげられなくなると振られるというのである。日本人がチェンマイでの長期滞在をやめる理由は、健康保険である。チェンマイの病院でも、癌、肺気腫などの大病を治療できるが、治療代が高く、支払えなければ退院させられてしまう。日本では健康保険が利用できるので、大病になったら帰国する傾向がある。将来的には、日本人向けの家庭的な老人ホームを事業として立ち上げたいと考えている。

T23（20 代男性）日本料理店を営業している。毎日必ず日本人が 2，3 テーブルほどを占める。時々、10～20 人程度の日本人グループが日本料理やビールを飲み食いしながら話している。グループの中に一人くらいタイ語が話せる人がいる。この店は、日本語のフリーペーパーやウェブサイトに掲載されたことから日本人の客が増えている。日本人の多くは、50 歳以上、T23 の店に来る客の 10%を占めると思われる。日本人ともっとコミュニケーションを取りたいが、彼は日本語が話せないため、日本人の客が何を欲しているかは分からない。

T25（20 代男性）料理店を経営している。ここでは、日本人長期滞在者が 7 人くらいよく通ってきている。日本人に人気のメニューは、オムライス、カレーライス、かつ丼、アメリカチャーハン（ケチャップ味）などである。彼は、英語と日本語が話せるため、西洋人と日本人の客が増えている。日本人と西洋人を比べると、日本人は日本にあるものを注文をする傾向が強い。例えば、焼うどん、焼きそばなどである。一方、西洋人は、一般的なタイ料理を注文する。西洋の国々にタイ料理が普及しているため、自国にいた時から普通に消費しているからである。日本人と交流する活動をしたい。特に料理教室がいいと考えている。料理を作るためなら、言語の壁があまりなく、指さしでもコミュニケーションができるからである。最終的な目的は、日本人とタイ人が一緒に料理を作って、一緒に座って食べるというワークショップから始めて、その後自分たちで交流できるようにすることである。

T33（40 代男性）ニマンヘミン通りの近くの日本料理のオーナーである。この店は、日本人が住んでいる場所から近いので、日本人がよく歩いて通る。この店は、有名なレストランの味に近く値段が安い。大学生などタイ人でも日本料理が食べられるというコンセプトである。日本人長期滞在者は、例えば、飲み物を注文しないなど、とても節約する人がいる。日本人長期滞在者は、タイ人と同じように食べ物を選ぶ。定食で 59 バーツ、大学生でも食べられる値段である。11 月から 2 月まで日本人の客が多い。日本人長期滞在者の 80%は、夕食が 18 時から 20 時の間である。夜 20 時になったらタイ人の客が来る。ある日本人は毎日ここでご飯を食べている。日本人長期滞在者は、一日 50～60 人ほど利用する。チェンマイでは、運動公園、喫茶店、

無農薬市場などによく日本人長期滞在者の姿が見られる。日本人長期滞在者は、長く滞在している人だと、新しいコンドミニアムがあったらすぐ見に行って、気に入ったら引っ越す。さらにもっと安い所に引っ越す人もいる。日本人長期滞在者は、年金が多い人も少ない人もいる。日本人長期滞在者の 80%は男性である。日本に帰らない人もおり、その理由は、日本の住宅を売った、日本人妻と死別したなどである。女性は、昼ご飯はエアコンがある店を利用する。日本人長期滞在者は、様々な活動をしている。例えば、言語を勉強すること、ボランティア活動をすること、新しい所で食事をすること、デパートで買い物をすることなどである。夫婦で来店する場合はあまり問題がないが、一人で来店すると、タイの注文のマナーを無視する人もいる。例えば、タイでは水と氷を注文しないといけないのに、ある日本人は理解できなかった。

T34（30 代男性）日本人と結婚している。長期滞在についてのサービス業を経営している。この会社を始めるきっかけは、日本人長期滞在者がよくロングステイビザ、観光案内などを相談しにきたことだ。日本人長期滞在者向けのサービス業を始めて現在 3 年目になった。T34 の妻は日本人であり、日本人の客とは彼女がやりとりしている。この会社の客は 100%日本人で 55 歳以上である。宣伝のためフリーペーパーに掲載した。客の多くは、日本から来たばかりであり、観光ツアー、ゴルフ、航空券の購入、レストランの予約などを依頼してくる。チェンマイに長く滞在している日本人は、自分でやりとりするようになる。この会社と同じような営業しているのは、5〜6 箇所ある。10 月から 12 月まで最も客が多い。T34 は、日本人を対象者するサービス業をしているため、日本人グループには参加しない。ビジネスと個人の関係を分けるためである。

ビジネス関係のグループは、日本料理店やサービスを専門とする店が多い。この関係性で、日本人の客とある程度接触しているので、日本人の考え方や行動が分かってくる。筆者は、日本人長期滞在者向けのビジネスを続けるためには日本語能力が必要と考える。

（2）仕事

関係性が「仕事」のケースでは、次のような事例が挙げられる。

T09 （50 代の男性）マッサージ店のスタッフである。英語は簡単な単語が分かるが日本語は全然話せない。この店の客は、中国人、西洋人、タイ人が 2 割ずつで、日本人が 4 割である。日本人の年長者は夫婦でよくマッサージ店を利用する。日本人の客は、靴を脱ぐ時にいつも外向きに靴を並べる。西洋人は靴を履いたままで入り込む。

T11 （30 代の女性）デパートの化粧品ブースの店員である。日本人の年長者は、カネボウというブランドのトリートメントと化粧品をよく買いにくる。一日 4、5 人の日本人女性が店を訪れる。彼らは店員と話す時に、英語とジェスチャーでコミュニケーションをする。日本人の客が互いに話すのを横で聞いて日本語を覚えておくようにしている。

T14（30 代女性）日本語を専門とするフリーランスである。日本人長期滞在者にタイ語を教えることや生け花の通訳をしている。日本人長期滞在者からの収入は、約 10%の割合である。仕事をしながら文化交流ができることが面白い。日本人にタイ語を教えると、タイ文化をまだ理解できていない人が多いと感じる。彼らは、寂しく、友達を作りたいと感じている。日本人

長期滞在者から、個人の部屋でタイ語を教えてほしいと依頼されることもあるが、プライベートな質問をする人からの仕事は断る場合もある。タイで、日本のルールのままでいると、いろいろ不満が発生する。例えば、時間についての考え方、料理の注文の仕方である。T14 は、日本人と付き合うため、タイ人がやらないことをする。例えば、お正月にお祝いカードを送ること、食事代を払ってもらったら一般的には次回にもお礼を言うことである。

T15（40 代女性）服を作る職人である。ニマンヘミン通りの辺りの日本人がよく歩いて通っている。彼らは、ニマンヘミン通りやホイケオ通りのアパートメントに住んでいると思う。多くの日本人は定年退職した世代である。50〜60 代の日本人が、ダンス衣装を注文しに来たことがある。最初は値段を聞いてから注文していた。そして、他の日本人に伝わって、新しい日本人の顧客が増えてきた。彼らは、チェンマイに 3 か月くらい滞在して、その後帰国するパターンが多い。

T17（30 代の女性）ランドリーの店員である。ランドリーサービスを使う人の多くは、ニマンヘミン通りとホイケオ通りに住んでいる外国人である。日本人長期滞在者の多くは、夫婦または男性一人である。彼らは、3 か月、6 か月ごとに来たり戻ったりしている。ニマンヘミンの辺りではよく日本語を耳にする。彼らは、お金があるため、チェンマイに旅行に来てリラックスしている。長くいるのは、チェンマイの物価が安く、生活や食べ物の面も便利であるからである。西洋人と日本人の客は、ランドリーの約束時間通りに来る。タイ人は忙しいと言って、服を取りにくるのがいつも遅れる。日本人の客と時間や値段について英語で話している。タイ語で話しかけてくる人もいる。

T21（20 代の男性）語学学校の教師として働いている。日本人の多くは英語が話せないため、日本人に日本語でタイ語を教える。タイ語を教える日本人教師もいる。この語学学校は、85％が外国人の生徒で、そのうち日本人が 25％である。12 月ごろには日本人長期滞在者の学生が最も多くなる。機会があれば、個人的に日本人長期滞在者と交流したい。なぜなら日本語が勉強できるからだ。年長者の日本語は聞きとりにくいが、やさしい人が多い。

T22（40 代男性）ニマンヘミンにある宿泊施設のマネジャーとして働いている。この宿泊施設の客の 20％は日本人である。日本企業の駐在員の家族や 60 歳以上の長期滞在者の夫婦が多い。日本人客が最も多い時は、10 月から 4 月までである。この宿泊施設はグループ企業であり、工業団地や観光地の近く、例えば、アユタヤ県、チョンブリ―県、プーケット県、チェンマイ県に宿泊施設を建てている。20 年前から全ての看板やメニューに日本語が掲載されている。日本人の客のため、どのようなサービスがあれば、リピーターになってもらえるかいつも考えている。特に安全面が重要である。

T24（20 代女性）語学学校の教師で、週に 5 日間日本人にタイ語を教える。現在、日本人の学生は女性 4 人、男性 5 人、合計 9 人いる。その中で 60 代は 4 人いる。最も長く教えたのは、1 年 3 ヵ月である。日本人長期滞在者がタイ語を勉強する目的は、生活を送るためである。日本人長期滞在者の中に、さびしいチェンマイ生活を送っている人がいたため、日本人グループ

を紹介したことがある。タイ語の授業の中で日本人学生といろいろ意見を交換したが、その中に、失礼な男性長期滞在者がいて、夜遊んだ際にタイ人の女性が金で買えると話したことがある。

T26（40 代女性）ゴルフ場の受付の仕事をしている。そこでは、朝 5 時半から 7 時まで外国人の客が多く、11～12 時頃までプレーする。タイ人の場合は、仕事の後にゴルフをする。現在、外国人のメンバーは 1000 人以上で、キャディは 500 人いる。日本人客はいつも同じキャディを選ぶ。ある時、キャディからその日本人が亡くなったという話を聞いた。客の多くは男性で、女性は 2%くらいである。12 月から 2 月までの間、一日 200～300 人程の利用者がいるが、少ない時には 100～200 人程である。

T27（30 代女性）アパートメントの受付として務めている。このアパートメントの 20%は、日本人客が滞在している。一年間単位でずっと泊まる人もいる。日本人は現在、5 人いて、最も多い時には 10 人いた。女性より男性の者数の方が多い。日本人の客は、ルールを守って宿泊するので、全く問題がない。たまに日本人長期滞在者からナンパされることがあるが、そのような雰囲気で会話したくはない。最近日本人の客が増えたので、日本語の看板を作り始めた。日本人についての印象は、時間を守らないことが許せないことなどである。

T28（20 代女性）日本人長期滞在者に人気のコンドミニアムの受付として働いている。日本人客にゆっくり話してもらったら意味が分かる。このコンドミニアムは、タイ人 40%、外国人 60%という割合である。外国人の数は、日本人、オーストラリア人、アメリカ人、ノルウェー人、カナダ人の順に多い。日本人は、外国人の 3 分の 1 くらいいる。彼らは 45 歳以上の者である。夫婦もしくは男性一人暮らしのタイプが多い。このコンドミニアムは、24 時間受付をしている。日本語が話せる受付サービスがある。11 月から 2 月までは日本人の客が多い。3 月から 9 月までは少なくなる。日本人長期滞在者は、ゴルフをすることが好きで、朝にはコンドミニアムの前にロットデン（乗合の赤い車）やミニバンが待っていて、メンバーが集まってからゴルフ場まで一緒に移動する。日本人は、経済力によって家賃の金額と乗り物が異なっている。また、コンドミニアムのロビーがよく集合場所として利用されている。小さな日本人コミュニティのような場所と言えるだろう。

T29（60 代男性）フリーランスの日本語ガイドである。約 50 人の日本人顧客がいる。多くは男性で、結婚している人も独身の者もいる。仕事時間以外にも日本人長期滞在者の友達と出かけることがある。日本人長期滞在者と会う時には、経済や政治についての意見も交換する。最も不思議なのは、戦争に負けた国なのに、どうやって生活や経済を復興させたかということだ。また、日本人の生き方にも興味がある。日本人長期滞在者は定年後年金をもらっている。ある知り合いは 200,000 円を毎月受給していてチェンマイでは楽に生活が送れる。

T30（30 代男性）ツアー会社で働いている。10 年前からチェンマイは日本人に人気がある。多くの日本人長期滞在者は、日本の冬の季節にチェンマイに来る。タイ政府観光庁が、日本でタイ旅行のプロモーションをした結果、タイに旅行する人が増えた。日本人は長期滞在をする

前に、一週間の長期滞在体験パッケージを購入して、市場、病院、デパート、住宅などを見て回り、その後、また自分で来る人もいる。日本人から見ると、チェンマイは住みやすく、人々がフレンドリーである。日本人の中年以上の男性客が多い。日本人長期滞在者は、マナーがよくあまり問題が起こらない。T30 は仕事が暇な時に、日本人長期滞在者を誘って一緒に食事しながら話しをすることがある。チェンマイで長期滞在するために最も問題になるのは、相手とコミュニケーションができないことだ。日本人長期滞在者はタイ語を習うが話せるところまでなかなかいかない。タイ人の方も日本語が話せない。英語の場合は日本人もタイ人も上手ではない。

T32（20 代の女性）無農薬農作物ショップの販売スタッフである。この店は、日本人、韓国人、中国人、西洋人などの外国人がよく利用する。50 歳以上の日本人長期滞在者は、水曜日と土曜日に卵、サラダ、トマト、オクラ、人参、大根、白菜、パクチー、ネギなどの野菜とパパイヤ、バナナなどの果物を買う。日本人長期滞在者は、選ぶのがタイ人より早く、値段をあまり気にせずに品質のいいものを購入する。このショップの無農薬野菜の値段は、スーパーマーケットより安い。日本人長期滞在者の多くは、近くに住んでいるので、歩いて買い物に来る。50 代の日本人だと、200～400 バーツくらいの買い物をする。日本人は、3 月になると、人数が少なくなる。12 月と 1 月には、日本人が多くなる。時々ツアーで 10～20 人の日本人がバスを降りてタイ人ガイドが案内する。ショップには、日本語が書かれていないが、日本人の口コミ情報で広まった。

T35（40 代男性）アパートメントの管理人である。日本で 13 年間働いたことがあって、日本語がある程度話せる。このアパートメントは日本人向けに作られているため、部屋の中に家具、NHK の映るテレビ、台所、エアコン、バスタブが整っている。現在、日本人長期滞在者 20 名（10 室）が住んでいる。このアパートメントは、日本語のフリーペーパーに掲載されたことがある。また、日本のテレビが取材に来たことがある。タイ語と英語のウェブサイトがある。このアパートメントが人気になった理由は、建物が新しく、交通が便利なうえ、値段が合理的であるためである。日本人長期滞在者向けのビジネスは、日本語が話せる人が必要になる。地元の企業は日本語が話せる人がいないため、観光会社に日本人の客を紹介してもらう。その場合は、実際の家賃より高くなる。

T37（30 代女性）観光会社のスタッフである。この観光会社には、3 つの支店がある。その中のホイケオ支店では、日本人長期滞在者を主な顧客としている。客の年齢は大方 60～70 歳である。この支店は、5 年間営業していて、航空券の予約、ロングステイビザの申請・更新、ホテルの予約、ゴルフ、旅行ツアー、長期滞在向けの案内などのサービスを行っている。

T39（30 代女性）日本人長期滞在者に人気のコンドミニアムの受付を務めている。このコンドミニアムは、外国人が多く住んでおり。日本人は 15％程度いる。11 月から 2 月の間は日本人が 20-30％になる。日本人の多くは 60 歳以上である。ある日本人長期滞在者は、英語が話せないのでコミュニケーションの問題があり、英語とタイ語が話せる日本人に頼んでコミュニケーションを取ってもらったことがあった。T39 は受付の仕事をするため、日本語の単語を覚えよ

うとしている。また、スマートフォンのアプリケーションの翻訳機能を使ってコミュニケーションをとっている。

以上のように、仕事で日本人長期滞在者と連絡をとりあうタイ人対象者は、最もインタビュー調査を行いやすい。本研究では、チェンマイにおいて受付やサービスなどの仕事をしているタイ人を中心に対象者としてインタビューを実施したところ、タイ人対象者が、仕事の関係で日本人の考え方、行動、欲求をよく観察していて、サービスの質を改善することや言語能力を高める努力をしていることが明らかになった。また、仕事以外時間でも日本人と言葉や文化の交流をしたい人も少なくない。それは、日本人の考え方についての知識と日本語能力を高めるためであると考えられる。

（3）勉強

関係性が「勉強」のケースでは、次のような事例が挙げられる。

T04（20代女性）大学生である。父は日本人だが、自分は日本語が話せない。長期滞在という言葉は聞いたことがあり、定年退職したら、チェンマイに暮らすという意味だと知っている。チェンマイに滞在する理由としては、日本より物価が安いし、ゆっくり生活できてストレスがたまらないという話を父から聞いたことがある。卒業論文を書くために、日本人と共に活動することが必要となった。

T05（10代の女性）大学生である。日常会話程度の日本語が話せ、日本語検定N4を持っている。今回初めて日本人の長期滞在者と共に活動した。生け花、書道、茶道などの日本の文化を習いたい。チェンマイ市内の日本料理店で食事する時に、日本人の年長者が大勢食事しているのをよく見る。

T12（20代男性）大学生である。日本語検定N2を持っている。日本祭では、日本人の年長者が多数参加している。日本人参加者は日本料理を買い、パフォーマンスを見る。日本人の多くは男性である。T12は、クーポン売り場の担当をしていた。大学の授業で、先生から日本人の年長者を紹介してもらい、日本語と日本文化を教えてもらった。

T19（10代女性）日本語を専門とする大学生である。大学の先生を通して、日本人長期滞在者に茶道、生け花、書道などの先生になってもらい、日本文化を習う。毎年日本祭という日本語学科のイベントを行うため、T19は、日本人長期滞在者の先生の自宅に毎週書道を習いに行っている。書道の授業が終わると、日本料理を食べながらタイの事情を質問される。日本語の問題があったら、直接に日本人から聞けていろいろ勉強になった。

以上のように、日本人長期滞在者と「勉強」で関わるタイ人対象者の多くは大学生で、特に日本語を専門とする学生である。学生は、日本語能力を高めることと日本文化の習得のため、大学の先生や先輩などから日本人長期滞在者を紹介してもらう場合が多い。勉強の目的だと、学生はあまり年齢を気にしないが、友達のように交流する場合ならば、年長者より同じ世代の日本人や日本人留学生と交流したいと考えているようだ。

（4）活動

関係性が「活動」のケースでは、次のような事例が挙げられる。

T13（40代女性）友達に誘われて2年前から生け花の活動に参加している。T13は西洋スタイルとタイスタイルの生花を自分の店に飾ることが好きである。日本スタイルの生け花は、哲学の考え方が含まれていると感じている。日本に関わるイベントや展覧会にもよく参加する。例えば、在チェンマイ日本国総領事のイベントの際には、生け花の稽古に出席して先生から花の生け方を教えてもらった。生け花を稽古する時には、日本人の生き方を学び、集中力を高めていく。そして、新しい友達ができ、日本とタイの文化の交流ができた。日本人の先生とコミュニケーションする場合には、日本語を勉強することまではしたくないので、英語で話したいと考えている。

T38（20代女性）大学生の時に、無料で日本人から書道を毎週、3年間習った。習う時にはずっと日本語で会話した。また、日本料理を教えてもらった。無償で教えてくれたのは、何も活動しないと、チェンマイの生活が寂しいからだと思う。この夫婦は、行動的である。日本祭のために、茶道、剣道、生け花、書道、日本料理などの日本文化を習わなければならなかった。途中ではやめられなかった。日本祭の日には日本人長期滞在者が多数参加していた。

以上のように、日本人と活動するタイ人対象者の事例が少ないように見えるが、実際には最も多いと筆者は考える。日本人と「活動」の関係性を作るタイ人は、大方が日本人長期滞在者より年下で学生や就職している会社員や自営業者、公務員などである。彼らは、日本語、日本文化、日本人についての理解度を高めるため、日本人そのものと直接に交流する必要に迫られる。日本人との接触によって、彼らにとっては勉強の成績、仕事のチャンス、給料や地位の上昇、ビジネスのチャンスに繋がると考えられる。

（5）隣人

関係性が「隣人」のケースでは、次のような事例が挙げられる。

T10（50代の女性）日本人年長者をデパート、歩道で見たことがある。また、隣の部屋は日本人に貸してあげたことがある。部屋を貸してあげた日本人は、60～70歳、年に1，2回来て何カ月か滞在する。彼はタイ語が少し話せるが、時々携帯の翻訳機能を使って、道やアパートについて情報を尋ねてきた。彼は、寒い日本から逃れてきていると考えられる。タイ人女性が時々彼の部屋に来ている。メードのようなサービスではなくて世話をしてくれる人のような感じだ。時々日本人の友達が訪れる。隣人としては静かに生活していので問題ない。

T20（50代男性）ニマンヘミン通りの職場に勤めている。ニマンヘミンの辺りには、年長者の日本人がよく通ってきている。彼らは日本語を話している。きっと、この辺りに泊まっているのだろう。3年前、ある年長者の日本人は、よくお酒を買いに来たが、急にいなくなったので、帰国したのかもしれない。日本人長期滞在者は、ある程度経済的に余裕があるときちんとした服装をしている。日本人の若者はあまり見られない。

以上のように、日本人長期滞在者の多くは、アパートメントやコンドミニアムに住んでいるため、筆者は直接部屋を尋ねられなかった。この問題を解決するため、アパートメントやコンドミニアムの受付や管理人にインタビュー調査を行った。さらに、日本人長期滞在者が多数住んでいる辺りに住んでいるタイ人にインタビュー調査を行った。一般の住宅に居住している人も、インタビューすることが難しいため、代わりに店や販売店のオーナー、スタッフなどに尋ねた。彼らは、日本人長期滞在者の姿をよく観察しているようであった。

6.2.2.2 直接には関係がない対象者

直接には関係がない対象者とは、ビジネス、職業、勉強、活動、隣人などで直接関係をもつ人とは異なり、日本人長期滞在者に直接は接していない者である。直接関係があるタイ人のみのインタビュー調査ではデータが偏る可能性があるので、直接には関係がない者にもインタビュー調査を行った。日本人長期滞在者と直接には関係がないタイ人対象者は、12 人にインタビュー調査を行った。以下のような事例が挙げられる。

T40（50 代女性）日本語が話せない。娘を通して 3 人くらいの日本人と顔見知りになった。日本人長期滞在者は、就職せずに、チェンマイで長期的に生活を送っていることを知った。彼らは、市内で生活コストの高いエリアに住んでいるので、ある程度経済的に余裕があると思っている。日本に関する消費については、日本料理はきれいだと思うが、食べたことがない。2011 年の大津波の際に、日本人が緊急援助物資を受けとるため、列に並んでいる風景をテレビで見て、日本人は本当に礼儀正しいと感じた。日本人の友達を作りたいが、日本語が話せない。日本人との交流活動、特に料理や民芸品などの手芸を教わりたい。

T41（ 50 代男性）タイ料理店の経営者である。外国人の年長者をみたことがある。自営業のため、日本人長期滞在者とやりとりする時間がない。チェンマイは治安がよく、独特な文化をもつ観光の街なので、いろいろ旅行者が遊びにくる。

T42（40 代男性）屋台の営業者である。商売のため、英語で外国人と話さなければならない。日本語と中国語は話せない。日本人の長期滞在について話を聞いたことがある。彼らは、定年退職後自分自身で決めてチェンマイに来る。旅行者だけでなく彼らの親戚がタイに訪問することで、チェンマイは経済的にベネフィットを得るだろう。日本人は、声が大きい中国人と違って、丁寧な人たちである。

T43（ 40 代男性）電気製品の修理士である。日本語も英語も話せない。長期滞在について聞いたことがあるが、どのようなことかよく知らない。チェンマイ市内では、時々日本人の年長者が歩いているのを見たことがある。日本人が長期滞在することで直接メリットはないが、間接的にはあるかもしれない。例えば、部屋主やホテル、レストンのエアコンや電気基盤の修理、チェックのために呼ばれるかもしれない。日本人の年長者は、定年退職後、ゆっくり生活を送りたいのだろう。彼らは、そんなにお金を持っていないと思うが、タイでは物価が安いので裕福に暮らせる。また、チェンマイの長所は、観光地が多くて、人々がフレンドリーである。ただし、言語の問題があるかもしれない。

T44（50 代女性）主婦だが、土日には市場で土産物を販売する。英語が話せる。長期滞在またはロングステイという言葉は聞いたことがない。日本人年長者は、セントラルデパートの裏側のコンドミニアムに多く泊まっている。また、日本人留学生や定年退職者がデパートで買い物をしたり、バスに乗ったりするのをよく見る。彼らは、日本語とタイ語をミックスして話している。

T45（20 代女性）会社員である。長期滞在という言葉は、本で読んだことがある。年長者の日本人がチェンマイ市内をよく歩いている。彼らは、英語もタイ語も話せないようだ。

T48 （40 代女性）自営業者である。長期滞在という言葉はかなり前から聞いている。それは、西洋人をはじめとする外国人がタイに長期滞在するということだ。チェンマイでは、インフラストラクチャー、文化、エンターテイメント、市場などが整備されているので、あまり困らずに生活を送れる。また、タイに滞在し、世話をしてくれる人またはタイ人妻ができる西洋人が多く見られる。西洋人も日本人も生活を送るために金を支出するので、それがチェンマイの収入になる。T48 はもし日本人と付き合うならば、ビジネス関係の日本人向けサービスを作りたい。現在のビジネスは直接には日本人と関係がないが、日本語を勉強するため日本人と付き合いたい。でも、チェンマイにいる日本人は内向的なので、日本人の社会に入り込みにくいと感じる。西洋人の方が、フレンドリーで話しやすい。

T49 （50 代女性）保険会社の代理店を営んでいる代理人である。長期滞在という言葉は聞いたことがない。T49 の友人は、日本語の観光ガイドとして働いていて、現在日本人の年長者と交際している。友人とその日本人パートナーと共にデパートで食事をすることや旅行することがある。その日本人は、少しタイ語が分かる。日本語が話せないため、日本人と活動する場合は、一人では行かない。日本人は、礼儀正しく綺麗好きで、中国人の観光客は汚なく、唾を吐きだすので来てほしくない。日本人がチェンマイに来ると、経済面にいい影響がある。

T50 （20 代男性）英語が話せる。長期滞在という言葉を、テレビ、雑誌、インターネットから聞いたことがある。定年退職後、長期的に滞在することで、外国人、特に日本人が多い。日本人グループを、日本料理店などで見ることがある。年齢は 40 代以上の者が多い。服装のスタイルで日本人だと分かる。日本人と話す時には、英語で会話する。彼らは、あまりタイ語が話せない。

直接には関係がないタイ人対象者の多くは、生活の中で、チェンマイ市内を歩く、デパートで買い物するなどしている日本人長期滞在者を認識しており、服装やマナー、日本語の会話などから彼らが日本人であって、中国人ではないということを知っている。このタイプのタイ人対象者は、自分には直接利益はないが、日本人長期滞在者がチェンマイに滞在することを歓迎している。理由としては、チェンマイ全体の利益につながると考えているからであり、特に経済面、言語と文化の習得の面などで利益があると考えていることが明らかとなった。

以上のように、タイ人対象者の日本人との交流についてのインタビュー結果を示した。以前の先行研究では、主に日本人長期滞在者の視点しかないが、本研究の第 6 章の 6.2 節と第 4 章の 4.4 節で論じた交流活動についての項目では、タイ人と日本人の両者の視点から異文化交流について分析した。

日本人対象者から見たタイ人との関係は、①学生・大学生との言語や文化の関係、②サービスの利用者としてのタイ人自営業者との関係、③タイ人配偶者の親戚または、友人から紹介されたタイ人との関係、④近隣及び日常生活の中でアパートの事務員、屋台の商売人などのよく会う人との関係、⑤偶然会う程度の知り合いとしての関係、という主な 5 つの関係性に分けられる。

一方、タイ人対象者からみた日本人との関係は、①日本人長期滞在者の客とタイ人自営業者というビジネスを通した関係、②日本人長期滞在者の客と会社員・スタッフのタイ人という仕事を通した関係、③日本語と日本文化の知識を持っている側としての日本人長期滞在者とタイ人学生という勉強を通した関係、④日本語と日本文化の知識を持っている側としての日本人長期滞在者と学生以外のタイ人という活動を通した関係、⑤日本人長期滞在者と隣人関係にあるタイ人、という 5 つの関係があると明らかになった。

6.2.3　ジャパナイゼーションのインパクト

次に、インタビュー調査の結果から以下のように日本の製品や文化商品を消費している事例を挙げる。

T02（30 代女性）チェンマイ人は日本人が好きである。日本人は礼儀正しくて、正直である。日本の漫画、アニメは見ないが、日本のドラマが好きである。また、日本の文化、茶道、着物などに興味がある。

T03（40 代の女性）日本に留学していた時に、日本人にたくさん世話になったので、いつか日本人の世話をしたいと思う。

T04（20 代女性）生け花や茶道など日本の文化に興味がある。日本のアニメ、ドラマ、日本料理が好きだ。時々、自分でてんぷら、カレーライスを作る。チェンマイの観光、文化交流のために日本人の長期滞在について支援するべきだと思う。しかし、互いに交流できる場がない。

T05（10 代女性）日本語能力試験 N4 を持っている。生け花、書道、茶道などの日本の文化を習いたい。日本の漫画、ドラマをよく見る。たまにアメリカのドラマを見る。タイのドラマと韓国のドラマは大方見ない。卒業後、自分は通訳など日本語関係の仕事に就職できるだろう。

T08（20 代の女性）日本の文化、アニメ、音楽に興味があるが、最近は、日本以外に興味が移ってきた。

T10 （50 代の女性）アニメ、ドラマ、茶道、生け花など文化的なものには興味がないが、日本人の生活の仕方、静かに自然を愛する暮らしという考え方が好きだ。

T11（30代女性）日本のドラマ、アニメ、日本料理、化粧品を消費している。品質管理が良くて日本の製品は信頼できる。日本人の友達も作りたい。言語と文化を習得できれば、日本人年長者とも交流したい。

T12（20代男性）日本語能力試験N2を持っている。日本のアニメ、声優、J-POP、料理に興味がある。日本に留学したい。

T28（20代女性）機会があれば、折り紙、リボンの結び方、茶道などの日本文化を習うことで日本人と交流したい。

T33（40代男性）20代前半から日本料理の作り方を勉強している。当時はチェンマイの日本料理店は4か所しかなかったが、その後増えていった。

T42（40代男性）小さい時、ドラえもんなど日本のアニメやドラマをよく見た。日本料理は味が薄くてあまり好きではない。

T43（40代男性）日本のアニメなどは見ていない。日本料理は味が薄くてまずい。日本の文化にも特に興味はない。日本に行きたいが旅費が高い。日本人がタイ人と付き合わないのはよくないと思う。タイに滞在している時には、タイ人と付き合うべきである。

T45（20代女性）中学生の時から日本の歌、料理、アニメ、ファッションが好きである。最近では、日本スタイルの化粧の仕方のトレンドをつねに追いかけている。

T46（40代女性）タイは、料理、ファッション、化粧品などの日本の文化を吸収している。

T50（20代男性）日本のアニメ、ゲーム機、歌手が好き。10年前から日本料理を食べる。

T51（20代女性）幼少時から日本のアニメを見ていた。日本料理をたまに食べる。

以上のように、タイ人対象者の多くは、日本商品、日本料理、日本文化をよく知り、日常生活の中でも消費している。さらに、日本人長期滞在者と共に言語や文化の交流をしたい人が多数派であるということも明らかになった。

第2章で論じたように、これまでのタイでのジャパナイゼーションは、モノ、カネ、文化の順でタイ社会に影響を与えている。次の段階としてタイ社会に発生している新たなジャパナイゼーションは、「日本人」そのものを受け入れることだと考えられる。現在タイ社会は、ビジネス、観光、国境を越えた家族をつくることを目的に日本人そのものを受け入れようとしている。日本人を受け入れると、タイ経済の成長がさらに促される。文化交流面について見れば、日本語を学ぶことによって将来日本企業または日本語に関わる仕事を得ることができる。タイにおいては、日本語に関わる仕事の給料は、平均的な給料より高いのが一般的である。日本文化の理解・習得により、社会的な地位が高くなるのである。その根拠として、物価が高い日本に行くこと、日本人の知人がいること、日本文化の理解が、タイ人にとって社会階層を表す一

つの基準となっていると考えられる。ジャパナイゼーションによって、タイと日本の文化、タイ人と日本人の関係にも中心ー周辺のような関係性が生じ、人々の考え方にも影響を及ぼしている。言い換えると、ジャパナイゼーションは、タイ人と日本人の間をリンクさせる役割を果たしている。そして、タイ人と日本人が長期滞在を通して繋がることで中心―周辺の関係性はあっても新たな社会関係資本が生み出されつつあると分析できる。

6.2.4 現地に対する日本人長期滞在者のインパクト

インタビュー調査によると、タイ・チェンマイの長期滞在者の支援とそのインパクトについての意見は、以下のような事例が挙げられる。

T01（40代女性）日本人がタイ社会に調和せずに、タイの資源を消費することはよくない関係性が生じると考えている。また、イベントなどでも日本人が主催するイベントだから、タイ人とは関係ない日本人グループのイベントだからといって日本人同士で固まるのではなく、もっとタイ人に関わってほしい。値段が安いということで、日本人がタイ人を見下げることがあるのはいいことではない。最後に、タイ人は日本人長期滞在者について知識が欠如しているので、チェンマイで日本人長期滞在者を支援するなら公的機関、チェンマイの者々、観光やビジネスに関わる人が理解度を高めなければならない。

T02（30代女性）チェンマイの日本人長期滞在の支援方針に対して賛成である。コンドミニアム、レストラン、ゴルフ場の事業で経済面のベネフィットを獲得できる。チェンマイに長期滞在している日本人からのデメリットは全然ないと思っている。チェンマイの者々は日本人が好きである。日本人は礼儀正しくて、正直である。部屋の中のものを壊したら、日本人は自分が壊したと正直に認めるが、他の国の者ならば、壊しても言わずにそのまま帰る。日本の漫画、アニメを見ないが、日本のドラマは好きである。また、日本の文化、茶道、着物などに興味がある。チェンマイの長期滞在の支援について、タイ政府観光庁などのウェブサイトが立ち上がったが、インターネットを使用できる年長者は少ない。それよりも、多くの日本人の年長者がメンバーになっている日本の観光会社と協力して日本人のターゲットを狙った方がより効果があると日本の観光会社は示唆している。様々な問題を予防するため、利益を主な目的としないサポート機関があれば、チェンマイの長期滞在がもっと増えるだろう。

T04（10代女性）長期滞在者はチェンマイに問題を起こしていないが、もしあるとしたら、チェンマイの人口が増えて密度が高くなることだと思う。

T05（10代女性）チェンマイにとっては収入が増え、卒業後、自分は通訳など日本語関係の仕事に就職できる。デメリットは、チェンマイの人口が増えて、祭りなどの時に人があまりにも多くなることだ。チェンマイにおいて日本人が長期滞在するための支援は、在チェンマイ日本総領事、日本語が話せる人、長期滞在者の知り合いの者々の役割だと思っている。

T06 （10 代女性）日本語能力試験 N3 を持っている。チェンマイにとってのデメリットはない。日本人の年長者と共に日本語や日本文化の交流をすることには問題がない。日本人と付き合うときにお金がかかるので、日本人に時々払ってもらった。

T08（20 代女性）日本とチェンマイの間にウインウインの関係を作るためには、職業の増加など経済面だけではなく、文化の交流活動を行って、チェンマイにいいインパクトを与える必要がある。しかし、日本人長期滞在者の者数がまだ少なくて、大きなインパクトになっていない。

T09 （50 代男性）日本人が増えれば、散髪、マッサージ、旅行、食事などのサービス利用するので、チェンマイにはメリットがある。日本料理は食べない。仕事のため、あまり活動に参加していない。

T10（50 代女性）日本人の長期滞在者の増加の方針に賛成である。収入も増え、いい隣人もできる。自然と暮らすような日本のシンプルな文化が好きである。チェンマイに対してデメリットはないと思う。タイ政府は、日本人とタイ人のコミュニケーションのチャンネルをつくるような支援を考える必要がある。

T11（30 代女性）品質管理が良くて日本の製品は信頼できる。日本人の友達も作りたい。年長者でも問題がない。それは、言語と文化を習得できるからである。

T12（20 代男性）もっと日本人長期滞在者が増加すれば、タイ人と日本人はさらに良い関係が構築できる。チェンマイに来た日本人を、我々が良く世話すればタイのイメージが良くなるし、逆に日本に行く時に世話になるかもしれない。また、日本人長期滞在者は問題を起こさないし、ルールや法律を守っている。

T13（40 代女性）日本人がチェンマイに渡航すると、文化交流ができる。また、日本から親戚や友達を呼んできてくれれば、タイの収入になる。しかし、法律違反の行為やタイ人労働者をだます恐れもある。

T14（30 代女性）日本人長期滞在者の数が増えると、チェンマイに影響を与える。彼らがタイ語に興味があれば交流活動に繋がるし、彼らの支出は、チェンマイの収入となる。チェンマイの欠点は、日本人を大切にしすぎることである。例えば、チェンマイの歩道がでこぼこの状態で日本人の長期滞在者にとって問題となるため、歩道面を平らにするプロジェクトが立案された。このプロジェクトには賛成だが、日本人長期滞在者のためより地元の者のために計画を立ててほしい。日本人長期滞在者の数が増えることは、自分にとってはプラスでもマイナスでもない。今は十分日本人の友達がいるからである。ただし、日本人の中には、日本でできないことがタイでは何でも自由にできると思っている人がいる。特に、女性と遊ぶことはイメージがよくない。女性に対して尊敬する気持ちがないように感じる。

T15（40代女性）チェンマイに長期滞在している日本人は、タイの社会や文化的に適応しようとしているように見えるが、やはり生活のための考え方が異なっている。例えば、タイ人は野良犬は怖くないが、日本人は野良犬を撲滅したい。チェンマイの日本人長期滞在者の増加には賛成している。日本人長期滞在者の数が増えても、チェンマイにとって損はないと思う。特に年長者の者は、金を持っている。彼らは旅行し、アパートの購入もする。ニマンヘミン辺りに住んでいるチェンマイの者は、朝から晩までずっと日本人や観光客が歩いているため、日常生活があまり落ち着かなくなり、他の所に移動する。T15は、日本人とコミュニケーションができないため、日本人の友達がいない。もしタイ語が話せる日本人なら、友達になりたい。

T16（50代女性）日本人長期滞在者が増えるすぎることに反対である。ある外国人は、タイで偽クレジットカードを使用する。また、日本人長期滞在者が増えたため、チェンマイの景気がいいと思われて、アパートメントなどを建ててもタイ人も外国人も購入する人がいなくなってしまった。それが問題なのは、これが一時的な景気で、チェンマイの実体経済ではないからである。ニマンヘミン通りの辺りを訪問する人が多くて、あまり落ち着いて住めないため、土地を売って他の所に移動した地元の者が少なくない。日本人長期滞在者がチェンマイに来る理由は、日本より物価が安いからだろう。T16は、外で他の者と付き合うことにあまり興味がないので、静かに暮らしたいと考えている。

T18（30代男性）ニマンヘミンでは、日本語の看板やメニューが増えている。日本人の数も顕著に増えている。特に、年長者の日本人である。日本人の長期滞在者が増え、宿泊料、料理代、エンターテイメント代などで経済的にいい影響を受けている。一方、悪い影響ははっきり見えない。今の日本人の数に対して、チェンマイのもつ資源はまだ余裕があるためである。チェンマイの企業は、日本人長期滞在者のニーズに合わせるため、商品の品質やサービスの水準を高くしている。

T19（10代女性）高齢の日本人より若い日本人の方と友達になりたい。年齢差があると、関心のある話題が異なるからである。しかし、最近、高齢の日本人がタイ人の感覚を持ちながら近づいてくるので、問題がなくなっている。また、日本人と直接にやりとりすると、日本語と日本文化の勉強になる。タイ人と活動をする日本人ならば知り合えるが、タイ人と全然関わらない日本人だと交流ができない。また、日本人と話す時には日本語で話さなければならない。彼らは、英語もタイ語も話さない。彼らは、周りの者々を気にせず自分のために生きているので、タイ社会で問題を起こさないと思う。

T20（50代の男性）ニマンヘミンの住民。日本人長期滞在者が増えると、商店の売り上げが良くなると思う。バイクに乗って買い物をする人もいる。自分には直接に利益はないが、日本人とはチェンマイで一緒に暮らせると思う。それは、年長者はあまり問題を起こさないためである。

T21（20代の男性）チェンマイの観光収入がよくなるので、日本人長期滞在者の数を増やしてほしい。チェンマイに長期滞在をするためには、ある程度タイ語が話せなければならない。

日本は物価が高く、冬が寒いのでタイより暮らしにくいと思う。タイ社会にとって悪い影響はないと思う。日本人長期滞在者の者数が減ったら少し影響を受けると思う。

T22（40代男性）日本人長期滞在者で長く住んでいる人は、どんどん安い家賃の住宅を探すかもしれない。日本人長期滞在者は、ほぼ自分で自分の世話をし、健康保険に入っているので、必要な時だけ手伝う。日本人長期滞在者は、ホテルに泊まらず、旅行やゴルフなどの活動をし、どこに行っても日本人同士が集まるという特徴がある。チェンマイ県商工会議所は、10,000人の長期滞在者を目指しているが、その者数は少ないと思う。チェンマイのホテルなどは、30,000室があるため、長期滞在者をもっと増やすべきである。日本人長期滞在者は、日本政府からの年金を受給している。タイは長期滞在をもっと支援するべきである。例えば、歩道の真ん中の電柱をなくすことである。マレーシアは、観光客に対する犯罪には厳しい法律や罰があるがタイではマレーシアのように厳しくないため、タイの観光客を守るために法律をもっと厳しく実行すべきである。

T23（20代男性）自分自身の面倒を自分でみれるなら、たくさんの日本人長期滞在者に滞在してほしい。チェンマイ経済の成長を促進するからである。チェンマイの物価が安いため、生活を送るのは楽だと思う。日本人長期滞在者の服装は一般の旅行者と異なり、また自分の乗り物、バイク、自動車を持っている。もし彼らが、息を引きとるまで滞在すれば、それがチェンマイが住みやすいという証拠になる。11月から3月までは日本人が多く、5月から7月までは雨季のため、人数が少なくなる。日本人長期滞在者の者数が増えると、チェンマイに経済面でいい影響を与える。日本人は、気を付けて金を使うので、料理のビジネスにはあまり影響がない。また、年長者ならば、犯罪行為をあまり起こさないので、タイ社会に対して問題はないと思う。チェンマイが解決しなければならない問題は、スモッグ、排気ガスなどである。日本人はもっとタイ文化を理解し適応してほしい。

T24（20代女性）日本人長期滞在者の者数が、直接に仕事に影響を与える。また、日本人は日本人同士で付き合い、タイ人とあまり関わらないので、問題を起こさない。ただ、タイ人の給料が安いためにタイ人は自分より下だと思っている日本人もおり、頭が悪いなどと思っている人もいる。

T25（20代男性）日本人長期滞在者がチェンマイに滞在することを支援するべきである。日本人は、無償でタイ人に日本語を教え、チェンマイで生活費を使うので、チェンマイの経済に貢献している。また、将来的に介護や高齢者のケアをする労働者が必要となる。日本人長期滞在者の数が増えても、彼らは日本政府の年金を受給しているので、タイ社会にとっては問題がないと思う。

T28（20代女性）日本人長期滞在者の数が増えると、観光するためにいろいろ支出するのでチェンマイの経済成長を促進する。もし問題があるとしたら、ゴミが増えることだと思う。でも、日本人はゴミを捨てる時に種類によって分けるので、深刻な問題にはならないと考える。

T29（60代男性）旅行ガイドである。日本人長期滞在者の数が増えると、経済面にいい影響がある。しかし、長期的に滞在する日本人は、タイの事情に詳しくなって、今後新しい日本人滞在者が訪れても、タイ人ガイドに頼まず日本人同士で金銭の授受をする恐れがある。タイ人の仕事を守るため厳しい法律をつくってほしい。

T30（30代男性）日本人長期滞在者の数が増えると、タイ人ガイドに影響を与える。日本人長期滞在者は、いろいろ情報を持っているので、今後自分の会社をつくればライバルになる。会社をつくる日本人の多くは、タイ人の妻がいて妻の名で会社を作る。同じビジネスをすると、今後値段の競争になる。それでは、タイ人ガイドが困る。一方、タイの経済にいい影響を与える面もある。最近、日本の景気がよくないため、日本人長期滞在者は贅沢なものをあまり購入せず節約した生活を送っている。また、日本人はいつも自分たちのグループで固まるため、グループメンバー以外の者と交流できない。

T34（30代男性）日本人長期滞在者の滞在期間が長くなると、タイ人と交際して、いろいろな事情が分かってくる。そうなると、私たちタイ人はビジネスができない。キャディやカラオケで出会った女性と結婚し、住宅を購入し、毎月お金を要求されている人もいる。彼はあまりお金がないため、彼女は、エアコンをまず売り、最後は家を売ることになった。

T35（40代男性）日本人長期滞在者は自動車とバイクを持っているが、時々ロットデン（乗合の赤いピックアップタクシー）に乗ったり歩いたりする人もいる。このアパートメントに滞在する日本人で最も長い人は7年滞在している。土・日の朝には運動のため近くまで歩く。セントラル、リムピン、トップスなどで食材などの買い物をする。11月から3月まではチェンマイでは日本人長期滞在者が多い。日本人長期滞在者は、食事をする時に、ニマンヘミン通りなどにタイ料理や日本料理を食べに行く。ゴルフ場に行く時には、個人の乗用車やロットデンで移動する。友達と集まるときは、自動車ではなくてたくさん乗れるロットデンで一緒に移動する。フィットネスやカラオケをしに行く人もいる。日本人長期滞在者は、タイに長期滞在すると日本にあまり戻らない。日本人は、時間を守る、正月にお菓子を配るのが特徴である。タイと日本の交流イベントもある。日本人と交流したい。チェンマイの11月から2月までは日本人の客は全体の30%になる。次に多いのは、韓国人である。韓国人は、大方ビジネスで通っている。タイ人と韓国人は互いに入国ビザが必要ないため、いろいろやりやすい。このアパートメントに住んでいる日本人長期滞在者同士が喧嘩することがあった。彼らは互いに口をきかないため、管理人として話を聞きに行った。日本人のことが分かりにくいことが時々ある。一方、タイ人と日本人の間ではあまり問題が発生しない。最も困るのは、タイ人の異性に連絡してほしいと頼まれることだ。この依頼には、アパートメントの管理人として応じられないので、断った。その者は日本人の妻がいるのに、変なことを頼むなと思った。日本人長期滞在者は、漬物をよく食べる。誕生日だと赤飯を食べる。日本人長期滞在者の80%は入れ歯を使っている。日本で入れ歯をつくると高いため、タイで歯を治療する。タイ語で困る時には、時々大学生にチェックしてもらっている。

T37（30代女性）日本人長期滞在者は、滞在初期の頃は主に日本料理を食べ、あまりタイ料理を食べない。しかし、長く滞在したら、タイ料理を食べるようになる。日本人長期滞在者は、タイ語や英語ではなく日本語でコミュニケーションをとりたい。また、タイ人とコミュニケーションするより日本人同士と日本語で話したいように見える。

T38（20代女性）長期滞在を支援するか否かは、その目的によると思う。個室で女性の先生にタイ語を教わりたいと要求をすることや、タイにいるのに日本的考え方を持ったままでいることは不適切だと主張した。日本人は、もっと積極的にタイ人と交流してほしい。異性との交際を目的とするだけではなく、文化交流などのよい目的で来てほしい。

T39（30代女性）日本人の考え方は厳しい。日本人は、無礼ではないが、短気すぎる人もいる。例えば、受付に電球交換の依頼が来て、受付は修理士に連絡したが、素早く対応できなかったため文句を言われたことがある。彼らに説明したいが、言葉の問題で直接説明できなかった。怒って他の所に引っ越した人、タイ語を勉強している人、タイ人と結婚する人もいる。

T40（50代女性）最近、実家の近くに外国人の長期滞在のプロジェクトができると聞いたことがある。それは、直接自分にメリットがないかもしれないが、コミュニティにとっては、仕事が増え、言語の習得や商品の売り上げなどに好影響を及ぼすだろう。

T42（40代男性）チェンマイでは日本人長期滞在者からの悪い影響はないと思う。チェンマイでの日本人長期滞在を支援することに賛成である。チェンマイの収入が増加するからである。チェンマイはインフラストラクチャーが整備され、日本人の長期滞在者にとって十分暮らせる都市である。コミュニケーションの問題があるかもしれないが、彼らが困ったらできることで何か手伝いたい。

T43（40代男性）日本人の長期滞在を支援することに賛成である。チェンマイの観光事業を促進する。不動産、商品の販売、レストランなどのビジネスでは売り上げに直接繋がる。チェンマイにとってデメリットはない。タイ人と日本人は互いにコミュニケーションできないため、顔を見て相づちするくらいのやりとりで問題が起きない。暮らす場所も仕事でも日本人と関わらないため、日本人の長期滞在者と活動する機会はないと思っている。

T44（50代女性）日本人年長者は、ゆっくりリラックスすることと2011年の災害を避けることを目的にチェンマイに来ている。長期滞在者が増えると、自分は土日の夜市場でお土産を売っているので、売り上げがよくなり、チェンマイの収入も上がる。悪い影響はない。日本人はタイ人より買い物する時に順番を守って支払う。日本人の年長者はタイ人の妻を探す目的を持っている人もいる。友達が日本人と付き合っていて、誘われて3、4回一緒に食事することがあった。日本人と付き合うと、いいことしかない。外国人の中では、日本人が最もいいと思うので、日本人の長期滞在を支援することを認めている。

T45（20代女性）日本人長期滞在者はチェンマイの経済を促進する。デメリットはない。日本人は礼儀正しくてチェンマイで問題を起こさないので、もっと人数を増加させるような支援

があった方がいい。日本語が話せないため、日本人と活動できない。もし、日本人がタイ語を話せれば、一緒に活動したい。日本人長期滞在者を増やすため、歩道、路線バスなどの交通機関の整備をしなければならない。

T46（40代女性）日本人の長期滞在者を支援すべきである。他の外国人労働者より日本人の年長者は問題を起こさなさそうので、日本人の滞在を支援した方がいい。しかし、人数が増えすぎると、問題が発生する可能性がある。

T49（50代女性）ビジネスや経済面のため、チェンマイの日本人長期滞在を支援することを主張している。

T50（20代男性）日本人の年長者がチェンマイに長期滞在することに賛成している。自分に直接に利益はないが、チェンマイの経済がよくなる。日本人は年金を受給しているため、チェンマイで金を落とすことができる。タイの支援政策があると思うが、タイ人は日本人の長期滞在について知識があまりない。日本人長期滞在者が増えると病院や介護施設を揃えなければならない。チェンマイにとってのデメリットは、病院と医師の数が不足することである。現在タイ人を治療するためでさえ不十分なのに、外国人を治療する医師や施設がふえたら、タイ人はさらに困るだろう。また、チェンマイ市内の英語の看板を増やさないといけない。

T51（20代女性）日本人長期滞在者がタイに来れば、人口が増えて問題が起こるので、長期滞在の支援をしない方がいい。メリットは、観光面かもしれない。タイ社会に問題を起こさないことが望む。

以上のように、タイ人対象者は、タイ・チェンマイの日本人長期滞在者の支援とそのインパクトについて語った。タイ人対象者の大方は、日本人の長期滞在は、タイ・チェンマイにとって、悪い影響より良い影響をもたらしているとしている。

良い影響については、日本人の長期滞在の生活費は、チェンマイの収入となり、タイ・チェンマイの経済を潤すという考えが最も多い。日本人長期滞在者を客として直接接した対象者は、主に自営業の売り上げアップや就職のチャンスの増加に繋がるとしている。日本語と日本文化を習得に関しては学生が最も多く、日本語の能力を高め、留学のチャンスや将来の就職に繋がるとしている。日本人長期滞在者と直接には関わらない人も、日本人長期滞在者はタイ・チェンマイの経済を全体的に潤すことになると考え、また日本人に商品・サービスを提供するために、商品・サービスの改善や向上につながると考えていることが明らかとなった。

悪い影響については、タイ人対象者の多くは、日本人のチェンマイでの長期滞在について、さほど問題ないと考えていることが明らかとなった。日本人年長者は年金収入があること、日本人はルールを守り、マナーがいいことなどがあり、タイ人・チェンマイ人にとって、あまり負担になるとは感じていない。しかし、一人で滞在する男性（独身、死別、離婚、日本人妻が日本にいる）が、タイ人異性と交際（パートナー、世話人、タイ人妻）して、自殺するなど失敗した事例が発生した。また、日本人長期滞在者の者数が増加していることと、ゴミの量の増加、物価の上昇、交通渋滞、人口密度の高まり、違法行為の増加などの問題が生じ、タイ人の

仕事（特にガイド）を奪って、将来のビジネスのライバルなどに繋がると考えている対象者もいた。

6.3　タイ社会に対する日本人の長期滞在のインパクト

上述したように、チェンマイにおける日本人長期滞在者は、タイの政策、経済、社会、文化、教育、生活そして環境等様々な場面において影響をもたらしていることが明らかとなった。以下、各項目の分析を行う。

まず、政策面である。受け入れ国としてのタイは、2001 年以降日本人長期滞在者を対象者の一つとして外国人の長期滞在政策を策定し支援を推進した。長期滞在者のため、特別なロングステイビザ、年金ビザを提供している。また、タイの観光収入を促進する戦略として、タイ政府観光庁は、日本人対象者と接触するため、東京や大阪、福岡などにおいてタイ・長期滞在についてのセミナーを頻繁に行っている。

経済面においては、チェンマイの事例のように人気観光地の一つとして旅行者が増加すると、観光産業収入も増加する。経済の動向は、国レベル、県レベル、個人レベルなどの全てのレベルにおいて最もインパクトが見受けられる。また、日本人長期滞在者はタイ市場の中の新たな顧客として特定の商品やサービスを生み出す。例えば、インスタント日本料理調味料、病院での日本語通訳サービス、長期滞在体験ツアーなどである。アンケート及びインタビュー結果からも明らかなように、日本人長期滞在者の増加による好影響はチェンマイの経済活性化にもダイレクトに繋がるため、各レベルにおいても、日本人長期滞在者の増加を図りたい（増加の支援策）との考えを示している。一方で、日本人長期滞在者が増加することにより、商品やサービス料など相対的に生活物価指数が上がり、現地のタイ人にとっては住環境が厳しくなるという意見も、少数ではあるが存在する。また、居住人口が増加することで、交通渋滞の悪化やゴミ問題は避けては通れない問題である。

次に社会面である。タイ人は日本人と交流活動に参加する機会が増える。交流活動の多くは、政府と関係のある組織が主催して開催されるイベントなどである。例えば、在チェンマイ日本国総領事館やチェンマイ市役所の主催で「ランナー・ジーブン・ラムウォン盆踊り大会」が行われる。しかしながら、現在のチェンマイにおいて、他にタイ人と日本人との間で着目すべきめぼしい交流活動はない。また、日本人長期滞在者は、タイの HIV を患った子どもや、山岳民族などのためのボランティア活動や寄付といった社会貢献活動も行っている。タイ社会にとっては、良い影響と言えるだろう。また、タイ社会の人口構造への影響もある。ある日本人回答者はタイ人と結婚し、ハイブリッドの子供が生まれている家庭もある。

次に文化面を見てみよう。あるタイ人は、日本人の特有の考え方や習慣などが理解できるようになったという。タイ人経営者は、日本人長期滞在者の顧客のため、サービスの質や対応の仕方を見直したという事例を挙げていた。日本人は規律を守り、約束事はかならず守るといった傾向があるが、時として、そういった日本人の行動はタイ人にとっては、日本人は柔軟性があまりないと受け取られる。また、現在日本の伝統文化やポップカルチャーに興味をもつ人が増えている。チェンマイには、デパート、コンビニ、市場など日本料理や日本製品を販売している店がよく見られる。さらに、チェンマイ在住の日本人長期滞在者の存在により、かつてのようにメディアのみを通して知るだけではなく、直接彼らと接する（交流する）ことで日本語

や日本文化などを直に習得することができるようになった。つまり、商品や文化だけではなく、グローバル化の中で国際的な人間の関係性に繋がるという新たなジャパナイゼーションになりつつある。

教育においては、現在チェンマイでは日本語学習者は増加傾向にある。高度な日本語会話などを習得したいと希望するタイ人が増え、日本語を母語とする日本人の人気が高まっている。ある学校では、日本人の日本語講師がいないため、タイ人の日本語教師の補佐として、日本文化や日本語を教えている長期滞在者もいる。

生活の面においては、料理、乗り物、就職、隣人という面に焦点があてられよう。まず料理の多様化が生じ、チェンマイでの自動車等の乗り物の台数が増える。また、日本人長期滞在者を相手とする職業（日本語の話せる病院スタッフや通訳、専門ガイド等）に就くと、給料や福祉の条件は良くなり、タイ人の生活の質も向上する。さらに、日本人は隣人に対して、静かで迷惑をかけないため、一緒に生活しても問題がないということも明らかになった。

最後に、環境の面についてまとめる。チェンマイ市内を観察すると、日本語の看板や日本語のメニューを載せているサービス店舗数は、以前に比べて増えていることが確認された。また、日本人長期滞在者は、加齢による健康面での不安があることから、チェンマイの政府機関に対して、スモッグ問題、野良犬の放置、歩きにくい歩道を改善することなど緊急対応するよう要求している。タイ政府は、日本人長期滞在者の受け入れ数増加を政策の一つとして実行しているため、それらの問題に対応する検討をしている。

また、フィールドワーク調査によれば、タイ人回答者の大方は、全体的に日本人長期滞在者に対して好印象を持っており、チェンマイ滞在を歓迎すると語った。チェンマイにおいて日本人長期滞在者の大方は、ニマンヘミン通りやホイケオ通りといったチェンマイ経済の中心地に滞在している。彼らは生活を送るための安定収入（年金）があり、市場よりスーパーマーケットなど高額でも品質管理の行き届いた食材を購入すること、ゴルフやボランティアや旅行など余暇活動にお金をかけること、自家用車を購入し乗ること、子供に頼らず夫婦または一人で暮らしており自立的であることなどから、現地人より生活水準が比較的高く、チェンマイ社会で問題を起こしにくい（第 4 章を参照）と見なされている。このことからも、日本人長期滞在者がチェンマイ社会で受け入れられていることが明らかであろう。

また、ジャパナイゼーションの影響による電化製品、飲食物（菓子類含め）、乗り物などの普及で日本製品を消費しているタイ人は、次に日本文化（伝統的文化とポップカルチャー）に興味を持つ人が多い。日本語学習者人口と日本文化の交流事業に興味を持つ者は、徐々に増えている。日本語が流暢であれば、ビジネスや就職に対して大いに役立つためであると思われる。例えば、日本人に対するゴルフのサービス、病院での治療、不動産、日本料理店、日本料理食材の物流企業など、新たなビジネスを起業もしくは企業できる可能性がある。また、先述したが、病院の通訳やガイド、言語教師、日本語を専門とするフリーランスなどの就職の幅が広がる。さらに、近年テレビなどのメディアでは日本の観光地や文化を紹介する番組が増えている。今後、タイ人の経済状況が更によくなることで、日本などに海外旅行へ行くタイ人がますます増加するだろう。実際、経済状況の豊かなタイ人は、何度も日本に旅行している。

本研究が対象としたタイ人回答者の多くが学生のため自分で日本への旅行費は負担できないが、いつかは行ってみたいという希望を持っている人が多かった。チェンマイでは日本人長期

滞在者が他地域よりも多いため、実際に日本へ行けなくても日本人と直に交流ができる。タイ人は日本人と言語や文化などの面で情報交換をしたいと希望している。タイ人の学生、自営業者、被雇用者、日本文化に興味がある者などが日本に関する祭りとイベントに積極的に参加している状況があちこちで見られる。日本人と共に活動し、交流をする際には、タイ人側はその費用を負担と感じるのは否めない。例えば、活動するための材料、学習のための教材、食事代、交通費など実費を担わなければならず、ある程度金銭的余裕と時間的余裕がなければ交流活動を続けるのは難しくなるであろう。このように、消費者の階層などによって消費行動が差異である。そのため、日本人長期滞在者と交流ができるのはタイ社会の中でも中間層レベル以上と考えられる。

以上のタイ人回答者の社会階層と彼らの日本との関わりについては、以下の表 87 のようにまとめられよう。

表 87　タイ人の職業と日本についての関わり

関わりの目的	職業（必要な条件）	社会階層
日本人の友人との交流	自営業者、学生（カネ・言語力・異文化理解度）	より高い
日本への旅行	自営業者（カネ）	
日本人に関わる仕事に就業	被雇用者（言語力・異文化理解度・カネ）	
日本文化の理解	学生、被雇用者（言語力・異文化理解度・カネ）	
日本語会話	学生（言語力、カネ）	
日本製品・日本料理を消費	全部（カネ）	より低い

出典：筆者作成

表 87 のように、日本との関わり方によって、タイ人の社会的階層の違いがあることが分かる。日本の商品、文化、旅行に関わるために就職先、いわゆる経済力が必要条件の一つとなる。全ての関わりは金銭活動を伴う。日本人の友人・知り合いがいる場合、交流活動が長期的かつ継続できるタイ人社会層は、主に経済力と時間的余裕のある自営業者である。その他では、言語能力や文化理解度の高い学生である。また、日本人の友人・知り合いを作れば、社会関係資本の構築と利用に繋がる。言語力や異文化理解度を利用し、社会的関係という資本を生み出す。そこで、言語力や異文化理解度を通して、日本人とコミュニケーション、言語教師のアルバイト、情報交換、困難なことへの相談に乗るなどができ、日本人との信頼感や関係性を構築するといった社会関係資本の役割を果たす。そして、タイ人の側は、日本製品や日本文化に関心があるだけではなく、日本人と直に付き合うことにより同地に現地に滞在することまで認めるようになったと言えよう。

最後に、最も日本人と共存していること、すなわち日本人と交際・結婚することである。日本人と結婚することで、生活の水準が大幅に上がるという事例がある。例えば、元々農家のシングルマザーだったタイ人女性はある日本人男性と結婚した。この結婚により、彼女は農業を辞め、専業主婦となり、子供の学費や生活費なども日本人男性に出してもらえたという事例が挙げられる。

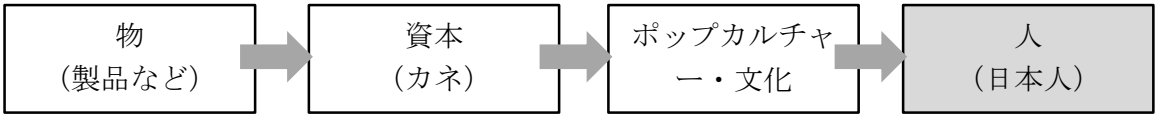
上述してきたように、これまでのジャパナイゼーションによって、タイ人は、日本のハード面（電化製品や日本食、日系企業等）とソフト面（伝統文化やポップカルチャーなど）の両面を受容してきた。

本章では、日本人長期滞在者とタイ人との実際の交流活動の分析により、現在のタイ社会ではタイ人が「日本人そのもの」も認める（＝受容）ようになったことが明らかになった。タイ人は日本人と考え方が異なっていても、積極的に日本語を学習し、日本人の考え方や要求を理解しようと試みており、このことは日本人がタイ社会に適応が難しかったとしても、タイ社会は日本人に合わせようとするポテンシャルを持っていると言ってもおかしくはないだろう。タイ人は日本人長期滞在者と共存することに対して、抵抗しないばかりか、むしろ歓迎していることからも、この傾向はタイ社会における「21 世紀の新たなジャパナイゼーション」と言える。

本研究では、アタチャック（2005）および鈴木（2011）が指摘したジャパナイゼーションとは異なる部分が明らかとなった。アタチャック（2005）は、経済大国の日本がタイをはじめ、アセアンの中で成長力が高い市場において工場を建築し、他のアセアン諸国に部品や製品を流通するとしており、教育や研究の支援を支えるようになったとしている。その結果、タイ人は日本を受け入れることに抵抗がなくなり、仲間意識を持つようになるとしている。つまり、「物（部品・製品）」、「資本（工場の資本金）、「文化（日本語や日本文化の教育）」を中心にジャパナイゼーションの影響を指摘しているのである。また鈴木（2011）は、1960 年代以降の日本の製品が浸透し、次第にタイでの現地生産に変わって、1980 年後半から日本のポップカルチャの影響が強まってきたとしており、物質的側面から非物質的側面へと、若者を中心にジャパナイゼーションの影響が強まってきたとしている。つまり「物（製品）」、「資本（現地生産ための資本）」、「文化（ポップカルチャー）」までのジャパナイゼーションの現象を示唆したのである。本研究の調査では、上述の先行研究の指摘に加え、ジャパナイゼーションが深化しつつあるタイ社会では「人（日本人）」の影響が多大であることが明らかとなった。

本章の結論としては、タイ社会では、第二次世界大戦から日本の電化製品などモノの受け入れが始まり、1960 年代以降には、日本の好景気と日本政府の海外進出の政策等が後押しし、日系企業のタイ進出が増加して資本（カネ）が流入してきたと言えよう。1980 年代に入ると、アニメや漫画、日本のトレンディードラマやポップカルチャーなどがブームとなり、特に若者の日本文化の受容が始まった。タイ社会では、このように日本のモノ・カネ・カルチャーと三段階で日本を受容する素地ができていたのである。さらに、ジャパナイゼーションが深化しつつあるタイ社会におけるタイ人対象者は、日本製品の消費、日本人との関わる仕事、日本文化・日本語の学習等、日常的に日本に関する活動をしているため、「人」という次のジャパナイゼーションの影響が顕著になってきたと言えよう。新たなジャパナイゼーションの傾向は、図 15 のように示される。

図 15　新たなジャパナイゼーションの傾向



出典：筆者作成

タイ人が次の受容のステップとして、年長の日本人長期滞在者を受け入れる（＝受容）という現象は、やはり「21 世紀の新たなジャパナイゼーション」と位置付けることができよう。

第 7 章

結論と課題

7.1 結論

本研究では、日本人長期滞在者の経験、現地のタイ人の経験、長期滞在を支援する様々な組織の代表者の視点から、チェンマイにおける日本人長期滞在の事例から長期滞在の現象の実態、送り出し側の人々と受け入れ側の人々との様々な関係性と影響を論じてきた。以下では、異文化社会の中で適応できる日本人長期滞在者の特徴、日本人長期滞在者に対する中間支援組織の役割、チェンマイ社会に対する日本人長期滞在者のインパクトという 3 点について本研究の結論と課題を提示する。

7.1.1 異文化社会の中で適応できる日本人長期滞在者の特徴

第 4 章で論じたように、20 世紀末以降から、日本などの経済先進国から経済発展途上国へ渡航するという現象が顕著になった。彼らが定年退職後に海外長期滞在を決定する要因としては、物価の安さ、温暖な気候、異なる社会や文化の考え方、新しい環境・住まいなどが挙げられる。日本人長期滞在者にとってのタイ・チェンマイ県は、定年退職後の残りの時間を過ごすための選択肢の一つとなっている。2000 年から 2015 年までの統計では、2012 年を除いて、90 日間以上タイ北部を中心に滞在する日本人が増加しており、在チェンマイ日本国総領事館に登録した人数は右肩上りで増えている。2015 年現在、チェンマイでは 3,000 人近くの日本人長期滞在者がいる。日本の冬に当たる 12 月～2 月になると、ピーク時で 10,000 人程度になると言われている。異文化社会で長期的に健康で楽しい生活が送れるかどうかは、現地の人々と交流できるかにかかっている。言い換えれば、異文化社会に適応できる長期滞在者は、社会関係資本を構築できた人であると言えよう。

適応できる長期滞在者は、①現地で長期滞在の経験が長いこと、②日本人のグループに参加していること、③タイ語のコミュニケーション能力を持つこと、④タイ人と関わることといった 4 つの要素の中で、少なくとも 1 つの要素を持っている者である。彼らは、社会関係資本を構築し、また活用している。現地における長期滞在の経験が長ければ長いほど、チェンマイに滞在するためのノウハウを他の日本人に発信し、社会的関係を構築できるようになるといえる。日本人のグループに参加していると、他のメンバーと同時に一斉に交流活動が行われる。また、他のメンバーが持っている社会的ネットワークや資本（例えば、言語能力、長期滞在のノウハウ）を利用することが可能となる。また、タイ語のコミュニケーション能力を持つと、その言語能力を活用して直接、社会関係資本を構築することができる。ただし、タイ語運用能力がなくても、タイ語が話せる日本人の手助けを受け、間接的に社会関係資本を構築していると考えられる。なかでも、最も社会関係資本が構築されるのは、4 番目の「タイ人と関わること」である。タイ人と様々な活動で関わることで、関わっていない者より、現地の有用な日常生活情報を得ることができ、また異文化理解度は高まる。タイ社会との交渉力を持つことやだまされ

ないことなどの利点が挙げられた。以上のように、第 4 章では異文化社会の適応と社会関係資本理論の関連性について分析した。

4 章での分析の結果、本研究の仮説 1）（日本人がタイ・チェンマイ県に長期滞在することが可能になる要因は、タイ語、タイの社会と文化を理解できること、現地でタイ人とコミュニケーション面、社会面、文化面で交流できること、中間支援組織と関わることであり、それらによって、現地での適応ができることである）および仮説 2）（日本人がチェンマイで適応できるためは、現地での社会関係資本をより多く持っていることが必要である）ことが実証された。第 4 章の調査結果によると、現地で長期滞在の経験が長くなれば現地の人との交流する機会が増える、フォーマルまたはインフォーマルな日本人のグループに参加しタイ人と活動することができる、タイ語が堪能な日本人が架橋的社会関係資本として役割を果たす、タイ人の友達ができるといったようにタイ人とコミュニケーション面、社会面、文化面での交流ができる日本人長期滞在者は、タイ人の行動や考え方を徐々に理解し、タイ人との交流活動などを通じて互いに関係性が構築され、日本人長期滞在者は異文化社会の中でスムーズに生活が送れることが明らかになり、仮説 1）の通りであることが実証された。また上述した 4 要素を通して社会関係資本を構築し、また活用することによって自らスムーズに理想通りのチェンマイ生活を送れることが明らかになり、仮説 2）も実証されたと言えよう。

7.1.2 日本人長期滞在者に対して中間支援組織の役割

第 5 章では、長期滞在者をとりまくマクロレベルとミクロレベルそしてミドルレベルの関係性を明らかにした。すなわち、マクロレベル（日本政府・タイ政府）、ミドルレベル（政府機関と関連がある組織・個人グループ・民間企業）、ミクロレベル（日本人個人・タイ人個人）の存在である。なかでも、タイ社会における退職後の日本人の長期滞在が可能になったのは、中間支援組織の存在が重要な役割を果たしたことを指摘した。

その中間支援組織は、次の 3 つのレベルに分類できる。①政府と関係がある組織、②日本人グループ・タイ人グループ、③民間企業である。まず、①政府と関係がある組織は、政府の予算や政策のもとに設立された組織である。この組織は、予算作成、セミナーやイベントの主催、政策計画など多岐にわたる支援をしている。次に、②日本人グループ・タイ人グループは個人が寄り集まって結成されたグループである。日本人を中心とするグループは、主に二つの目的を持っており、第一が日本人同士の生活支援情報の共有（チェンマイに長期滞在する際、情報交換、交流活動、生活のサポートなど）、もう一つがタイ社会への要求行為（＝タイ社会への交渉；ビザの交渉、野良犬の問題、特別なサービスを得る等）である。第二の目的には、日本人がタイ社会にて自ら快適な生活圏をつくりたいという考えが根底にある。タイ人グループのほとんどが、主に経済的協力を目的として結成されている。日本人対象者はビジネスの対象者として連携的な協力をする。最後の民間企業は、タイ人、日本人またはタイ人と日本人の両方の経営者として日本人長期滞在者向けの商品やサービスを提供している企業である。

このようにミドルレベルにある中間支援組織は、マクロレベルとミクロレベルの間に位置することで、政策が個人レベルに行きわたることが容易となり、また個人も政府への要求がしやすくなる。それこそが、橋渡し型社会関係資本の構築を可能とし、各レベルがそれぞれの目的を達成しやすくなるのである。

上述のように日本側とタイ側の各レベルの組織の支援は、チェンマイでの日本人長期滞在者の生活に直接的もしくは間接的に関わる。このような調査結果から本研究の仮説 3）（政府に関する組織、NPO・NGO、日本人のグループ、長期滞在に関わるサービス業者（民間企業）という中間支援組織の支援やサービスは、ライフスタイル型の移動による日本人長期滞在者の滞在する期間・頻度と関係がある）ことが実証された。

7.1.3 チェンマイ社会における日本人長期滞在者のインパクト

先行研究では、チェンマイ社会における日本人長期滞在者のインパクトに関する研究は少なく、先行研究があったとしても、日本人長期滞在者のタイ社会やタイ人における悪影響に関する分析は見受けられないことを論じた。本研究のフィールドワーク調査の結果においても、悪影響よりも現地の経済や観光を促進するなど良い影響を受けていることが確認された。本研究では、タイ社会やタイ人に対する影響については、経済面、社会面、文化面、教育面、生活面のなどの項目に分けて論じた。経済面は、日本人長期滞在者の生活費（不動産の家賃、食費、交通費など）が、逆にチェンマイの収入になるため、彼らが長く滞在すればするほど、落とす金額も増える。経済活性化の一背景となるのである。社会面では、タイと日本の両国のイベントが行われ交流活動が活発化する。文化面では、タイ人が日本人長期滞在者と交流することで、日本文化や日本人の考え方などの理解が深まり、日本製品や日本文化だけでなく日本人そのものの印象が良くなる。教育面では、タイ人学生などが直接日本人そのものと日本語と日本文化を習得できる。生活面では、タイ人の生活の中において、料理の多様化、就職の多様化などが生じる。

これらの現象は、進行しているタイ社会のジャパナイゼーションをますます加速させていると考えられる。タイ人回答者のほとんどが、日常生活で日本製品を消費し、日本文化に関心を持ち、日本そのものに対して良い印象を持っている。また、日本語の能力や日本文化の理解度が深まれば、将来の就職や給料アップなどタイ人自身の生活基盤の向上にも繋がる。このようにタイ人は日本語や日本文化という資本を持っている自分とは年代のかけ離れた年長者の日本人を抵抗なく受け入れる傾向があり、新たなジャパナイゼーションとしてタイ社会やタイ人に影響を与えているであろうと考えられる。

上述のように本研究の結果から仮説 4）（ライフスタイル移住による日本人長期滞在者によって、タイの経済面、社会面、文化面、教育面、生活面に良い影響と悪い影響が与えられる）について、良い影響が顕著に現れたが、悪い影響については少ないとの意見が多かった。悪い影響が目立たない原因としては、仮説 5）（タイ人のジャパナイゼーションの影響による日本製品・日本文化の消費と日本人長期滞在者との交流にはなんらかの関係がある。日本人長期滞在者の受容にも関わる）との関連性が高いと言えよう。

以上のように本研究では、タイ・チェンマイにおける日本人の長期滞在の様々な実態を明らかにした。かつての「観光」と「移住」は、はっきり線引きがあったが、グローバリゼーションの進行によって「観光」と「移住」の線引きが薄くなり、新たな移動パターンが生み出されている。このような長期滞在の現象は、「現地の人と社会関係資本を構築する観光」という新たな観光、「異文化社会の中に生活体験をするための移住」という新たな観光と移住が混交した移動と言えよう。

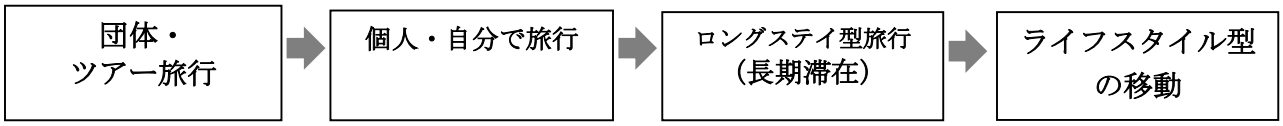
7.1.4　新たな移動：長期滞在からライフスタイル型の移動へ

日本人の長期滞在を見ると、彼らは、定年退職後に新たなライフスタイルを追求するためにタイ・チェンマイをはじめ海外に渡航した。彼らにとっての新たなライフスタイルは、例えば、元の社会規範から自由になること、年金のみでより良い生活水準を送ること、自分が関心のある趣味やレジャーに時間を掛けること、観光より異文化を実際に体験することなどのような個人的な好みのことだけを実行することである。このような移動は、主として経済先進国の人々が、より経済的に発展途上な国へ移動するパターンの一つである。

21 世紀以前の「旅行」は、有名な観光地で記念写真を撮影し、土産を購入するだけといった短期旅行、言い換えれば、一般的な旅行であったが、1980 年後半からは海外に長期的に滞在する現象が生じつつある。送り出し国も受け入れ国も、海外へ長期滞在することは、観光の一つのパターンとして長期滞在者に様々な支援をしている。長期滞在は一般的な旅行と異なり、その特徴は、長期的にその現地に深く関心を持ち、現地の人々と交流をし、異文化社会の人々と共存することである。これまでの旅行では現地の人と関わっていなかったが、長期滞在型は比較的、現地の社会や現地の人に関わり、とりわけ目的地により多大な影響を与えると思われる。

日本のロングステイ財団の定義によると、ロングステイまたは長期滞在とは、旅行の一種として「移住が目的ではなくいつか日本に帰国すること」を前提としている。本研究の調査対象者である日本人長期滞在者もこの定義に含まれる者として考えられるが、調査結果からも明らかなように、調査対象者の 30%は日本帰国の意志がなく、50%は将来日本に帰国するかまたは何年先に帰国するのか未定だとしている。このように、彼らのような長期滞在者は旅行の枠組みを超えており、ライフスタイル型の移動の現象が生じているのである。（図 16 参照）

図 16　旅行からライフスタイル型の移動への変化



出典：筆者作成

7.1.5　チェンマイにおけるライフスタイルの満足度：その理由

日本人長期滞在者が滞在目的地としてチェンマイを選ぶ理由は、次の 5 つが主なものである。

（1）日本社会の規範からの解放

日本社会は一般的に厳格な規範が根底にある。そのため、自分の所属する組織が何かしら社会的活動をするとなれば、個人は関心があろうがなかろうか、また忙しかろうが活動に協力しなければならない。このような厳格な社会的接触は、誰かの協力なしには、その社会またはグループから弾き出される可能性がある。日本人同士での交際は日本的なマナーを理解しなければ、社会から外される恐れがある。しかし、チェンマイに滞在することにより、厳格な接触からは自由となり、逃がれることができる。さらに、チェンマイでは興味のある活動にだけに集中でき、周りの視線を考えなくても自由な服装や行動ができる。そのため、タイ社会の柔軟さが日本社会でのストレスを解消させる。その理由から、一部の日本人は、チェンマイでも他の日本人と深く接触しないことを選択する。このように、彼らはタイ・チェンマイで自由な生活を満喫でき、また「人生のリセット」「リスタート」ができる。

（2）安価な生活費

チェンマイの食費や宿泊費及びサービス料は日本より安価なため、消耗品・製品の消費やサービスの選択肢が増え、価格的に満足度が高い。また、日本人長期滞在者の多くは、年齢と共に病気や体調に不安があるため、できるだけ貯金を使わずに年金のみで水準的な生活を送ることを希望している。このようにチェンマイの安価な生活費は、彼らの限られた資金で最大限の満足度を生み出すことができる。

（3）日本的な生活

チェンマイに滞在していても、日本人長期滞在者は、日本的な生活を送ることを希望している。つまり、異文化社会の中でも、日本の生活や習慣をあまり変更せずにチェンマイで十分暮らしていけると言える。必要な日本食材や物品は揃っており、チェンマイでも日本での生活水準をある程度継続できる。例えば、日本料理の調味料が購入でき、日本の番組を視聴し、日本にいる友人や家族といつでも連絡ができ、日本語がある程度通じ、日本語や日本文化を資本としてタイ人と交流できるなど、日本で生活しているのとほとんど同様の生活をチェンマイで送ることができる。一方で、タイ社会独特の習慣もまた、日本人長期滞在者にとって慣れやすい側面がある。事例として、タイ人は一般的に年長者を尊敬しているため、日本人年長者が困ったことがあればタイ人の若者が助けてくれることがままあり、日本人年長者にとっては暮らしやすい大きな要因の一つとなっている。また、タイ人の若者は日本語や日本料理、日本文化に関心が高く日本人との交流を望んでいるため、日本人長期滞在者が、積極的にタイ人と接触しようと思わなくても、交流することができることも明らかとなった。

（4）充実した生活と自然環境

チェンマイ中心部には、濠と約 50 か所の寺院などランナー独特の文化景観も見られる一方、基本的なインフラストラクチャーが揃っている宿泊、日本食材を取り扱うスーパーマーケット、日本語通訳サービスのある病院、日本語が通じるサービス業などがあり、充分な生活が送れる。チェンマイ市内でも緑が多いが、タイ北部にあるチェンマイは約 8 割の面積が森林や山々に囲まれており、市内を少し離れると、滝や温泉などの自然も楽しめる。日本人にとって、チェンマイは都市と田舎がほどよく融合しており、街のサイズもコンパクトで便利で暮らしやすい街といえる。

（5）日本人グループの存在；滞在に必要な情報の入手

チェンマイでは日本人のグループがあるため、チェンマイで生活を送るための手続きや必要な情報や物が手に入りやすい。ある程度情報があれば、安心感がある。2002 年チェンマイにおける初めて日本人グループが設立され、日本人長期滞在者や将来チェンマイに長期滞在したいと考えている人に情報支援を行っている。グループでもゴルフ大会、観光ツアー、タイ語サークル、ソフトボール、手工芸など様々な活動を行っている。加えて、タイ人と直接交流できない人々（言語能力の問題など）にとって便利な媒体であると考えられる。

7.1.6 ライフスタイル型の移動の再定義

タイ政府は将来的な国内収入の増加を重点においた観光モデルの一部として、長期滞在を促進するための方針を 2001 年に打ち出し、この方針を元に 1 年間長期滞在を許可するというロングステイビザと年金ビザを設定した。しかし、実態としては、チェンマイにおける長期滞在者

の多くが既にそれぞれの希望（滞在期間やビザの種類）に応じて生活していることが分かった。長期滞在の実態をまとめると、一年中滞在する者、タイと日本で半年ずつ滞在する者、季節に合わせて滞在する者に分けられる。人によっては通算 18 年間滞在している者もいた。このように、長期滞在者が求めるライフスタイルを提供できるのがチェンマイである。日本人長期滞在者のほとんどが、まずは観光目的でチェンマイを訪れ、次に短期間のチェンマイ生活を体験し、気に入れば実際に何年も現地の人と触れ合いながら滞在している。したがって、ライフスタイルの移動も段階的である。以上のようにチェンマイにおける日本人の事例を元にライフスタイル型の移動を論じた。

次に、本研究の成果をもとにライフスタイル型の移動を再検討する。

（1）グローバル化は、ロングステイという新たな人的移動に大きな影響を与えた。特に挙げられるのが、情報と運搬技術である。具体的には、長期滞在予定の日本人は事前にインターネット等を活用して情報を収集し、また運搬技術の発達によって飛行機で日本からタイまで 6 時間という短時間で移動することが可能になった。つまり、グローバリゼーションは個人のライフスタイルに様々な選択肢を与えたといえるだろう。

（2）ライフスタイルの流れは、より経済規模の大きい国から、より経済規模の小さい国へと移動する傾向が見られる。このような移動は、かつてのように発展途上国の人々がよりよい生活を求めて先進国へと流入する目的とは異なる。なお、受け入れ国は方針として、ロングステイ滞在者に対し魅力のある環境や特別なビザも発行するなど受け入れ体制も整えてきている。

（3）タイやマレーシア、フィリピンなどをはじめとして、長期滞在者用のビザ申請制度が確立された。タイで長期滞在を目的とする日本人の場合、国籍、年齢、経済面などの条件が確認されたうえで、長期滞在ビザが申請できる。申請資格は、日本国籍かどうか、50 歳以上であるかどうか、また現地の銀行に 80 万バーツの預金を預けているかなどである。また、長期滞在ビザ取得後も、タイ国内においての就労は禁止されている。ビザの条件が満たせない場合、長期滞在ビザの申請、滞在期間の延長はできず、滞在中であっても強制送還となる。

（4）ライフスタイル型の移動は、直接的な生命の危機（環境や社会条件が困難な場合；干ばつや内戦など）を理由とせず、個人の意思によって移動することである。その場合、人によってはストレス社会からの脱却や、寒さがこたえる年齢を鑑みて移動するなど、すぐには生命に関わるほどではないが、より充実した生活を送るという選択を以て移動する。

（5）ライフスタイル型の移動目的は、主に、物理面および精神面の両面においてより良い生活を送ることである。チェンマイを選択した理由としては、他の地域に比べてより自由なライフスタイルが選択できること、質の高い商品やサービスを受けることができること、自らが関心を持つ活動に専念できることなどが挙げられる。

（6）ライフスタイル型の移動の傾向としては、始めに短期的な観光から始まり、次に長期的な観光という形で目的地での滞在経験を重ねていくうちに、ライフスタイル型の移動を決定するという傾向が見られる。タイ人と結婚し配偶者や子を持っている人であっても、チェンマイを最終の地と心決めている人であっても、ほとんどの日本人はタイ国籍を取得するまでの意向はない。つまり、彼らは異国の地タイで、自らのルーツは捨てず、日本で生活したように生活し、様々な選択肢のある生活をすることを求めていると推測できる。

7.2 今後の課題：世界の新たな共存・生き方の方法

本研究によって、日本人長期滞在者は個人の選択でチェンマイ居住を決めていることが明らかとなった。チェンマイ以外にも、日本人長期滞在者の受け入れを政策の一つとして打ち出している東南アジア諸国や都市はあるが、自らの生きがいを実現するのにふさわしい場所の一つがチェンマイであることは明らかである。受入側のチェンマイでも、日本人長期滞在者から様々な影響を受けている。その影響は、チェンマイ社会、経済、環境などをも変化させている。その変化が日本人長期滞在者にとって「暮らしやすい環境」であるうちは、今後も日本人長期滞在者は増えるであろうが、例えばその環境が彼らの望む場所でなくなると、今後は近場のラオスやカンボジア、ミャンマーなどに流れる可能性がある。そして、その国々でもまた個人の条件、特に経済面によってチェンマイより良い水準生活が送れる環境を作り出すだろう。そうすると、ますます長期滞在がグローバルな広がりを見せるだろう。今後、長期滞在者の受け入れをしているタイ以外の諸国（ラオス、カンボジア、ミャンマーなど）で、長期滞在者へライフスタイル型の移動に関する調査を行う必要があろう。

また、本研究の調査範囲では、退職した日本人長期滞在者のみに焦点を当ててライフスタイル型の移動を論じてきたが、タイ社会には 2015 年現在 7 万人の日本人が居住しており、タイ社会にとって大きな影響を与えている。退職者以外の年齢層にも目を向けると、また異なるパターンの日本人のライフスタイル型の移動現象も見られるだろう。

参考文献

Ⅰ．日本語文献

青木孝弘、2015、「ソーシャルビジネスの基盤強化に向けて―中間支援組織による 2 つのアプローチの考察」『会津大学短期大学部研究年報』72 号、21-41 頁。

秋山剛、1998、「異文化間メンタルヘルスの現在」『こころの科学(Human mind)』77 号 14-22 頁。

一般財団法人ロングステイ財団、2013a、『ロングステイ調査統計 2013』一般財団法人ロングステイ財団。

――――――――――――――――、2013b、『ロングステイのすすめ』 一般財団法人ロングステイ財団。

アルジュン, アパデュライ、2007、門田健一訳『さまよえる近代　グローバル化の文化研究』平凡社。

稲葉陽二、2011、『ソーシャル・キャピタル入門』中央公論新社。

井上英夫、1995、「健康権と高齢者の医療保障」井上英夫、上村政彦、脇田滋編『高齢者医療保障―日本と先進諸国』労働旬報社、18-49 頁。

今田高俊、1993、「適応」森岡清美、塩原勉、本間康平編集代表『新社会学辞典』有斐閣、1033 頁。

――――、2000、「支援型の社会システムへ」支援基礎論研究会編『支援学―管理社会をこえて』東方出版、9-28 頁。

岩田隆一、2002、『タイ観光論』くんぷる。

遠藤元、2009、「チェンマイ」日本タイ学会編『タイ事典』めこん、244-245 頁。

大野哲也、2012、『旅を生きる人びと―バックパッカーの人類学』世界思想社。

大澤正治、2008、「旅と長期滞在―観光立国戦略の基礎として」『経済論集』178 号、125-159 頁。

王柳蘭、2012、『越境を生きる雲南系ムスリム―北タイにおける共生とネットワーク』昭和堂。

大竹のり子、2013、『老後に破産しないお金の話』成美堂出版。

カックレイン,アレンとキャシー,ペイン、2006、「グローバル化する社会」デヴィッド・ヘルド編／中谷義和監訳『グローバル化とは何かー文化・経済・政治－』法律文化社、7-50 頁。

金光淳、2006、『社会ネットワーク分析の基礎―社会的関係資本論にむけて』勁草書房。

神崎宣武、2011、「序にかえて―旅と観光の外史」旅の文化研究所編『旅と観光の年表』河出書房新社、5-14 頁。

川崎賢一、2006、『文化政策のフロンティア 2 トランスフォーマティブ・カルチャー―新しいグローバルな文化システムの可能性―』勁草書房。

――――、2009、「文化的グローバルゼーション」佐々木雅幸、川崎賢一、河島伸子編著『文化政策のフロンティア 1 グローバル化する文化政策』勁草書房、1-38 頁。

河原雅子、2010、「タイ・チェンマイにおける日本人ロングステイヤーの適応戦略と現地社会の対応」『タイ研究』10 号、35-55 頁。

川村千鶴子、2009、「トランスナショナルな文化の流動化」川村千鶴子、近藤敦、中本博皓編

著『移民政策へのアプローチ：ライフサイクルと多文化共生』明石書店、12-19 頁。
君塚大学、1997、「組織からネットワークへ」宮本孝二、森下伸也、君塚大学編『組織とネットワークの社会学』新曜社、3-15 頁。
キング、ラッセル他、2010、竹沢尚一郎／稲葉奈々子／高畑幸共訳、2011、『 移住・移民の世界地図』丸善出版。
近藤敦、2009、「移民と移民政策」川村千鶴子、近藤敦、中本博皓編著『移民政策へのアプローチ　ライフサイクルと多文化共生』明石書店、20-23 頁。
グラハム、トンプソン、2006、「経済のグローバル化」デヴィッド・ヘルド編／中谷義和監訳『グローバル化とは何かー文化・経済・政治ー』法律文化社、95-139 頁。
コーヘン, ロビンとケネディ, ポール、2003、佐藤茂訳『グローバル・ソシオロジー I 』平凡社。
齋藤尚之、1996、『だれにでもできる　海外ロング・ステイ』東洋経済新報社。
嵯峨座晴夫 、1999、『 高齢者のライフスタイル』早稲田大学出版部。
佐藤雅明、2009、「参勤交代のプロジェクトマネジメント―加賀藩の旅程管理とリスク・マネジメント」『プロジェクトマネジメント学会研究発表大会予稿集』（春季）、371-373 頁。
篠崎美鶴、2006、「日本人の国際引退移動―ニュージーランドの事例」早稲田大学アジア太平洋研究科修士課程修了＜第 45 回研究会・第 2 報告＞ 11 月 18 日, 75-81 頁。
白井義男、2012、「長期滞在型旅行における誘因の考察ー快楽消費の視点から」『地域政策研究』（高崎経済大学地域政策学会）15 巻 1 号、65-79 頁。
鈴木規之、2011、「グローバル化の中でのタイ社会の変動と文化変容―市民社会化とジャパナイゼーションの視点から」鈴木規之／稲村務編『越境するタイ・ラオス・カンボジア・琉球』彩流社、15-47 頁。
曽文星、1996、「移住と精神保健」江畑敬介、曽文星、箕口雅博編著『移住と適応―中国帰国者の適応過程と援助体制に関する研究』日本評論社、9-19 頁。
高橋由典、2008、「タイにおけるロングステイ日本人」日本タイ協会編『現代タイ動向 2006-2008』めこん、281-302 頁。
高田昭彦、1990、「ライフスタイル」見田宗介、栗原彬、田中義久編『社会学事典』弘文堂、899-900 頁。
トムリンソン,ジョン、1993、片岡信訳『文化帝国主義』青土社。
中本博皓、2009、「人口減少社会と移民（外国人労働者）受け入れ」川村千鶴子、近藤敦、中本博皓編著『移民政策へのアプローチ　ライフサイクルと多文化共生』明石書店、28-39 頁。
長友淳、2007、「90 年代日本社会における社会変動とオーストラリアへの日本人移民ーライフスタイル価値観の変化と移住のつながり」『オーストラリア研究紀要』33 号、177-200 頁。
―――、2013、『日本人社会を「逃れる」オーストラリアへのライフスタイル移住』株式会社彩流社。
猫旅 Wanwan・Nyanya 著、2013、『チェンマイロングステイのリアル』不明。

野沢慎司、2009、『ネットワーク論に何ができるか「家族・コミュニティ問題」を解く』勁草書房。
野尻哲史、2010、『老後難民 50 代夫婦の生き残り術』講談社＋α新書。
パットナム D.,ロバート、2006、柴内康文訳『孤独なボウリング―米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房。
藤崎宏子、1998、『現代家族問題シリーズ 4：高齢者・家族・社会的ネットワーク』培風館。
水上徹男、1996、『異文化社会適応の理論－グローバル・マイグレーション時代に向けて』ハーベスト社。
三矢勝司、吉村輝彦、秀島栄三、2014、「まち学習プログラムによる多次元的ネットワーク形成における中間支援組織の役割―岡崎まち育てセンター・りたの「なごみん横丁」を事例に」『日本建築学会計画系論文集』79 巻き、699 号、1155-1162。
箕口雅博、江畑敬介、曽文星、山田寛、益子茂、増井寛治、斎藤正彦、梅津寛、原田誠一、原裕視、丹羽郁夫、江川緑、浦田優子 1996「節研究の概要」江畑敬介、曽文星と箕口雅博編著『移住と適応―中国帰国者の適応過程と援助体制に関する研究』日本評論社、35-44 頁。
マッカイ, ヒュー、2006、「文化のグローバル化」デヴィッド・ヘルド編／中谷義和監訳『グローバル化とは何か－文化・経済・政治－』法律文化社、51-93 頁。
森岡清志、1993、「ライフスタイル」森岡清美、塩原勉、本間康平編集代表『新社会学辞典』有斐閣、1475 頁。
安田雪、2013、『パーソナルネットワーク―人のつながりがもたらすもの』新曜社。
山下晋司、2009、『観光人類学の挑戦『新しい地球』の生き方』講談社選書メチエ。
リン, ナン、2008、筒井純也／石田光規／桜井政成／三輪哲／土岐智賀子訳『ソーシャル・キャピタル―社会構造と行為の理論（Social Capital: A Theory of Social Structure and Action）』ミネルヴァ書房。
ロングステイクラブ、2010、『Long Stay Life 設立 20 周年記念』ロングステイクラブ。

Ⅱ． 英語文献

Benson, Michaela Caroline and O'Reilly Karen, 2009, "Migration and the search for a better way of life: a critical exploration of lifestyle migration," *The Sociology Review*, 57(4): 608-625.
Benson, Michaela Caroline, 2010, "The Context and Trajectory of Lifestyle Migration-The case of the British residents of Southwest France," *European Societies*, 12(1): 45-64.
Buakhao, Suwanna and Weerakit, Naree, 2013, "The Impact of Longstay Tourist on Local Community: A Comparative Study Between Tambon Rawai and Tambon Cherngtalay, Phuket, Thailand," *Review of Management Innovation & Creativity*, 6(19): 51-66.
Dietlind, Stolle , 2001, "'Getting to trust': an analysis of the importance of institutions, families, personal experiences and group membership," In Dekker, Paul and Uslaner, Eric M. (eds.). *Social Capital and Participation in Everyday Life*. London and New York: Routledge.
Douglas, Massey S. and Maria, Aysa, 2005, "Social capital and international migration from Latin American," In *Expert group meeting on international migration and development in Latin America and the Caribbean*. Population Division, Department of Economic and Social Affairs, United Nations Secretariat Mexico City, November20-December2.

Giddens, Anthony, 2012, *Sociology*, Cambridge: Polity Press.
Gustafson, Per, 2002, "Tourism and Seasonal Retirement Migration," *Annals of Tourism Research*, 29(4): 899-918.
Hongsranagon, Praturng, 2005, "Activities Arrangement in Chiangmai Province for Long Stay Japnaese Pensioner Tourists," *Journal of Demography*, 21(2): 85-98.
Honig, Meredith I., 2004, "The New Middle Management: Intermediary Organization in Education Policy Implementation" *Educational Evaluation and Policy Analysis*, 26(1): 65-87.
Howard, Robert W., 2009, "The Migration of Westerners to Thailand An Unusual Flow From Developed to Developing World," *International Migration*, 47 (2): 193-225.
Jennissen ,Roel , 2007, "Causality chains in the international migration systems approach," *Popul Res Policy Rev* 26: 411-436.
Nimmonratana, Taksina. 2000. "Impacts of Tourism on a Local Community: A Case Study of Chiang Mai," in K.S. (Kaye), Chon. eds., *Tourism in Southeast Asia*. New York: The Haworth Hospitality Press.
Ono, Mayumi, 2008, "Long-stay Tourism and International Retirement Migration: Japanese Retirees in Malaysia," *Yamashita et al., Transnational Migration in East Asia Senri Ethnologica Report*, 77: 151-162.
————— ,2009, "Japanese Lifestyle Migration/Tourism in Southeast Asia," *Japanese review of Cultural Anthropology*, 10: 43-52.
————— ,2010, "Long-stay Tourism: Elderly Japanese Tourists in the Cameron Highlands, Malaysia," *Senri Ethnological Studies*, 79: 95-110.
O'Reilly, Karen and Benson, Michaela Caroline, 2009, "Lifestyle migration: escaping to the good life? ," Benson, M. and O'Reilly, K. (eds) *Lifestyle Migrations: Expectations, Aspirations and Experiences*, London: Ashgate, 1-13.
Phanseub, Weerachai, 2011, "An Analysis of Push and Pull Factors in the Migration of Koreans to Thailand:A Case Study of Members of the Korean Association in Chiang Mai Province," *Veridian E-Journal SU*, 4(1): 394-409.
Siti Hamin Stapa, Talaibek Musaev, Natsue Hieda and Normalis Amzah, 2013, "Issues of language choice, ethics and equity: Japanese retirees living in Malaysia as their second home," *Language and Intercultural Communication*, 13(1): 60-77.
Terlecky, Sunisa W. and Bryce Philip, 2007, *Retiring in Thailand*, California: Paiboon.
Williams, Allan M., King, Russell and Warnes, Tony, 1997, "A Place in the Sun: International Retirement Migration from Northern to Southern Europe," *European Urban and Regional Studies*, 4(2): 115-134.
Williams, Allan M., King, Russell, Warnes, Tony and Patterson, Guy, 2000, "Tourism and international retirement migration: new forms of an old relationship in Southern Europe," *Tourism Geographies*, 2(1): 5-27.

Ⅲ. タイ語文献

National Statistical Office (Thailand), 2011, "Statistical Yearbook Thailand 2011," Statistical Forecasting Bureau and National Statistical Office.
กระทรวงการท่องเที่ยวและกีฬา กรมการท่องเที่ยว (Ministry of Tourism and Sport, Department of Tourism), 2557

(2014), สรุปสถานการณ์นักท่องเที่ยว เมษายน 2557（＝2014 年 4 月の観光客状況のまとめ）

จีรพร ศรีวัฒนานุกูลกิจ และเศกสิน ศรีวัฒนานุกูลกิจ (Cheeraporn Srivatananukulkit and Seksin Srivatananukulkit), 2547 (2004), ความต้องการและความพึงพอใจของชาวต่างชาติในการพำนักระยะยาวในจังหวัดเชียงใหม่. รายงานการวิจัย.（＝チェンマイにおける長期滞在に対する外国人の要求と満足度）

ดวงใจ หล่อธนวณิชย์ (Duangjai Lortanavanit)., 2547 (2004), *การส่งเสริมการพำนักระยะยาวของญี่ปุ่น*. วารสารศิลปะศาสตร์, 4 (1): 134-143.（＝日本の長期滞在の促進）

ประเทือง หงสรานากร (Prathurng Hongsranagon)., 2549 (2006), *ความต้องการและความพร้อมในการสนองตอบความต้องการเรื่องการท่องเที่ยวแบบพำนักนานเพื่อการแลกเปลี่ยนทางวัฒนธรรมโดยชุมชนไทย กรณีศึกษากลุ่มลูกค้าเป้าหมายคนญี่ปุ่นวัยเกษียณ*. วิทยานิพนธ์ปริญญาดุษฎีบัณฑิต, มหาวิทยาลัยธรรมศาสตร์, คณะสหวิทยาการ.（＝文化交流の長期滞在型の観光に対するタイ側のニーズおよび準備―日本人定年退職者の事例）

พัฒน์นรี ศรีศุภโอฬาร และณัฐพล อัสสะรัตน์ (Patnaree Srisuphaolarn and Nattapol Assarat)., 2555 (2012), *พฤติกรรมและทัศนคติที่มีต่อคนไทยและประเทศไทยของผู้สูงอายุชาวญี่ปุ่นที่พำนักระยะยาวในประเทศไทย: การศึกษาเชิงคุณภาพ*. เอกสารหลังการประชุมวิชาการระดับชาติ เครือข่ายญี่ปุ่นศึกษาครั้งที่ 5 วันที่ 20-21 ตุลาคม 2554:153-163（＝タイに長期滞在している年長者日本人のタイ人とタイ国に対しての行動と意識：質的な研究調査）

มานิตย์ คณะโต (Manit Kanato)., 2536 (1993), *การตั้งถิ่นฐานของชาวอินเดียในเมืองเชียงใหม่*. วิทยานิพนธ์ปริญญามหาบัณฑิต, มหาวิทยาลัยเชียงใหม่, บัณฑิตวิทยาลัย.（＝チェンマイ市内におけるインド人の移住）

มูลนิธิเชียงใหม่นานาชาติ และการท่องเที่ยวแห่งประเทศไทย (Chiang Mai International Foundation and Tourism Authority of Thailand), 2557 (2014), ยุทธศาสตร์ใหม่เจาะตลาดลองสเตย์ญี่ปุ่น, เอกสารการประชุม วันที่ 28 สิงหาคม 2557（＝日本人ロングステイ市場向けの新たな戦略）

รัตนา บุญมัธยะ (Ratana Boonmathya)., 2548 (2005), *ภรรยาฝรั่ง: ผู้หญิงอีสานกับการแต่งงานข้ามวัฒนธรรม*, *วารสารสังคมลุ่มน้ำโขง*, 1(2): 1-45.（＝西洋人の妻：タイ東北地方の女性と国際結婚）

วารัชต์ มัธยมบุรุษ (Warach Madhyamapurush), 2556 (2013), การตลาดการท่องเที่ยวสำหรับนักท่องเที่ยวชาวญี่ปุ่นที่พำนักระยะยาวในจังหวัดเชียงใหม่. *วารสารการบริการและการท่องเที่ยวไทย*, 8(2): 48-61.（＝チェンマイにおける日本人長期滞在者への観光マーケティング）

วลัยพร กาญจนการุณ และธีรัช ปัญโญ (Walaiporn Kanjanakaroon and Teerat Panyo)., 2557 (2014), ปัจจัยที่มีอิทธิพลต่อการตัดสินใจขยายเวลาพำนักอยู่ของผู้พำนักระยะยาวของชาวญี่ปุ่นในจังหวัดเชียงใหม่.*วารสารมนุษยศาสตร์สาร*,15 (1): 179-212.（＝日本人長期滞在者のチェンマイに長期滞在する期間

に関する要因）

วรวุฒิ โรมรัตนพันธุ์ (Worawut Romratanapun)., 2548 (2005), *ทุนทางสังคม*. กรุงเทพฯ: โครงการเสริมสร้างการเรียนรู้เพื่อชุมชนเป็นสุข(สรส.). （＝社会関係資本）

สถาบันวิจัยและให้คำปรึกษามหาวิทยาลัยธรรมศาสตร์ (Thammsat University Research and Consultancy Institute), 2545 (2002), *แนวทางการส่งเสริมและพัฒนาการท่องเที่ยวพำนักระยะยาว กรณีศึกษาเฉพาะนักท่องเที่ยวอายุ 50 ปีขึ้นไปที่เดินทางมาเพื่อพักผ่อน*. รายงานการวิจัย.（＝長期滞在型観光の振興開発―リラックスの目的で訪れた 50 歳以上の観光客の事例）

สุทิตย์ อาภากโร (Sutid Apakaro)., 2548 (2004), *เครือข่าย: ธรรมชาติ ความรู้ และการจัดการ*. โครงการเสริมสร้างการเรียนรู้เพื่อชุมชนเป็นสุข (สรส.).（＝ネットワーク：自然、知識、管理）

สุภางค์ จันทวานิช (Supang Chantavanich)., 2555 (2012), *ทฤษฎีสังคมวิทยา*. พิมพ์ครั้งที่ 5 กรุงเทพฯ: บริษัทวี.พริ้นท์ (1991).（＝社会学の理論）

สุดปรารถนา ดวงแก้ว (Sutpratana Duangkaew)., 2555 (2012), *การตั้งชุมชนและการปรับตัวของคนญี่ปุ่นวัยหลังเกษียณที่พำนักระยะยาวในเมืองเชียงใหม่*. เอกสารหลังการประชุมวิชาการระดับชาติ เครือข่ายญี่ปุ่นศึกษาครั้งที่ 5 วันที่ 20-21 ตุลาคม 2554 : 263-277.（＝チェンマイ市における長期滞在の定年した日本人のコミュニティ）

————————————————, 2555 (2012), *การท่องเที่ยวแบบพำนักระยะยาวในอำเภอเมือง จังหวัดเชียงใหม่ กรณีศึกษาการตั้งชุมชน และการปรับตัวของชาวญี่ปุ่นวัยเกษียณ*. วิทยานิพนธ์ปริญญามหาบัณฑิต , มหาวิทยาลัยธรรมศาสตร์, คณะศิลปศาสตร์.（＝チェンマイ県ムアン市における長期滞在的観光―定年退職した日本人のコミュニティの設立および適応の事例）

————————————————, 2557 (2014), การปรับตัวทางสังคมและวัฒนธรรมของคนญี่ปุ่นวัยหลังเกษียณที่พำนักระยะยาวในจังหวัดเชียงใหม่ ประเทศไทย. *วารสารญี่ปุ่นศึกษา*, 31(2): 57-75.（＝タイ・チェンマイ県における長期滞在している定年退職した日本人の社会的と文化的の適応）

หอการค้าจังหวัดเชียงใหม่ (The Chiangmai Chamber of Commerce)., 2550 (2007), *โอกาสการท่องเที่ยวพำนักระยะยาวของชาวญี่ปุ่น*. เอกสารหลังประชุม. （＝日本人の長期滞在型観光の機会）

อรรถจักร สัตยานุวัตร (Attachak Satayanurak)., 2548 (2005), *Japanization*. กรุงเทพฯ: openbooks.（＝ジャパナイゼーション）

อมรา พงศาพิชญ์ (Amara Pongsapich)., 2543 (2000), *ความหลากหลายทางวัฒนธรรม (วิธีวิทยาและบทบาทในประชาสังคม)*. พิมพ์ครั้งที่ 2 กรุงเทพฯ: โรงพิมพ์แห่งจุฬาลงกรณ์มหาวิทยาลัย. (＝文化の多様性（市民社会における方法と役割）)

Ⅳ. その他（電子メディア、ハンドアウト、ニュース）

一般財団法人ロングステイ財団、2015、「ロングステイとは」一般財団法人ロングステイ財団ホームページ（2015 年 7 月 20 日取得、http://www.longstay.or.jp/）。

外務省、2014、「総領事館ほっとライン第 29 回チェンマイ変貌するチェンマイと在留邦人の急増」外務省のホームページ（2015 年 12 月 26 日取得、www.mofa.go.jp/mofaj/press/iken/06/souryouji/29.html）。

近畿日本ツーリスト、2015、「ロングステイとは」近畿日本ツーリストホームページ（2015 年 9 月 19 日取得 http://www.knt.co.jp/longstay/longstay/）。

在タイ日本国大使館 、2015、「平成 26 年のタイ国内在留邦人数調査統計」在タイ日本国大使館ホームページ（2015 年 11 月 4 日取得、www.th.emb-japan.go.jp/jp/consular/zairyuto.htm）。

在チェンマイ日本国総領事館、2015、「チェンマイ情報」在チェンマイ日本国総領事館ホームページ（2015 年 9 月 28 日取得、www.chiangmai.th.emb-japan.go.jp）。

総務庁統計局、2013、「平成 23 年社会生活基本調査　生活時間に関する結果」総務省統計局ホームページ（2016 年 1 月 5 日取得、http://www.stat.go.jp/data/shakai/2011/pdf/houdou2.pdf）。

――――――、2014、「人口推計（平成 26 年 10 月 1 日現在）」総務省統計局ホームページ（2015 年 9 月 18 日取得、http://www.stat.go.jp/data/jinsui/2014np/）。

タイ国政府観光庁、2011、「2012-2016 年度観光開発計画」タイ政府観光庁ホームページ（2015 年 10 月 13 日取得、www.tica.or.th/）。

――――――――、2015、「ロングステイ」（2015 年 9 月 19 日取得、www.trailandtravel.or.jp）。

タイ国政府観光庁のハンドブック（n.d.）『タイ　ゴールデン・ワンダーランド』タイ国政府観光庁。

――――――――――――――――（n.d.）『タイ王国の概要－タイ・ロングステイ』タイ国政府観光庁。

タイ国家統計局、2000、「人口と世帯センサス」タイ国家統計局ホームページ（2015 年 9 月 29 日取得、www.popcensus.nso.go.th）。

チェンマイ県庁、2015、「チェンマイ県の基本データ」チェンマイ県庁ホームページ（2015 年 9 月 25 日取得、http://www.chiangmai.go.th/stategy/str2/1_3.docx）。

チェンマイ日本人会、2015、「チェンマイ日本人会の主旨」チェンマイ日本人会ホームページ（2015 年 10 月 7 日取得、http://www.cmjpa.org ）。

チェンマイ・ムスリム、2010、「チェンマイ県に移民のバングラデシュ・スパジーランド系インド人」（2014 年 6 月 6 日取得、http://muslimchiangmai.net/）。

チェンマイ・ロングステイ・ライフの会、2014、「チェンマイ・ロングステイ・ライフの会」チェンマイ・ロングステイ・ライフの会ホームページ（2014 年 6 月 20 日取得、http://cll-thaijp.net/index.html）。

――――――――――――――――――――――、2014、「CLL クラブ会報 7 月号（2014 年 7 月 1 日）」チェンマイ・ロングステイ・ライフの会ホームページ（2015 年 10 月 7 日取得、http://cll-thaijp.net/backnumber/2014/2014-07.pdf）。

特定非営利活動法人日タイ国際交流推進機構、2014、「気になる国際データ」(2014 年 11 月 25 日取得、 http://blog.goo.ne.jp/jtirojapan)。
内閣府、2011、「新しい公共支援事業の実施に関するガイドライ」（2015 年 9 月 19 日取得、www5.cao.go.jp）。
日タイ・ロングステイ＆ビジネス・ネットワーク、2015、「ロングステイ」（2015 年 9 月 19 日取得、http://thai-longstay.jp/）。
日タイロングステイ交流協会、2015、「活動方針」日タイロングステイ交流協会ホームページ (2015 年 7 月 20 日取得、http://longstay-tj.com/)。
ニュージーランドロングステイ情報センター、2005、「ロングステイとは」（2015 年 10 月 28 日取得、http://www.newzealand-longstay.co.nz）。
福祉の会、2015、「チェンマイ福祉の会」（2015 年 11 月 24 日取得、http://cwa.jtash.org/）。
法務省、2014、「国（地域）別在留邦人数上位 50 位推移」（2015 年 11 月 4 日取得、http://www.e-stat.go.jp/）
———、2015、「国籍・地域別　在留資格（在留目的）別　在留外国人」（2015 年 11 月 4 日取得、http://www.e-stat.go.jp/）
マレーシア政府観光局、2015、「ロングステイ in Malaysia」マレーシア政府観光局ホームページ（2015 年 9 月 28 日取得、http://www.tourismmalaysia.or.jp）。
Chiangmai Provincial Office of Tourism and Sports、 2015、 (2015 年 11 月 4 日取得、www.cm-mots.com)。
City Research Unit, Faculty of Architecture and planning, Thammasat university、2011、 「เชียงใหม่: บ้านหลังสุดท้ายของชาวต่างชาติ（＝チェンマイ：外国人の最後の家」(2014 年 6 月 5 日取得、http://www.cityresearchunit.org/）。
Industrial Estate Authority of Thailand、2015、「Investment」（2015 年 11 月 26 日取得、http://www.ieat.go.th/）。
JTB 総合研究所、2012、「観光用語彙『長期滞在』」（2015 年 10 月 28 日取得、http://www.tourism.jp）。
Lifeevents.org「Chaing Mai . Thailand」（2015 年 11 月 24 日取得、http://www.lifeevents.org/）。
Manager Online、2015、「ดันเชียงใหม่ผุดศูนย์เฮลท์จับนักท่องเที่ยววัยเกษียณ（＝定年退職した観光客を対象としてチェンマイでのヘルプセンターを促進）」（2015 年 11 月 28 日取得、http://www.manager.co.th/iBizchannel/ViewNews.aspx?NewsID=9550000100895）。
Map of Thailand.org,、2013、「Chaing Mai Provinec, City Map」（2015 年 11 月 4 日取得、http://www.map ofthailand.org）。
Ministry of External Affairs of India、 2004、「The Indian Diaspora」（2015 年 10 月 12 日取得、www.indiandiaspora.nic.in）。
Ministry of Foreign Affairs of Japan、2015、「Japan-Thailand Relations (Basic Data)」（2015 年 12 月 21 日所得、http://www.mofa.go.jp/region/asia-paci/thailand/data.html）。
Ministry of Internal Affairs and Communications、2010、「Summary of the Results of Population Census of Japan 2010」（2014 年 11 月 25 日取得,

http://www.stat.go.jp/english/data/kokusei/2010/final_en/pdf/summary.pdf）。
MM2H 取得サポートセンター、2015、「MM2H ビザとは」MM2H 取得サポートセンターホームページ（2015 年 9 月 28 日取得、http://www.mm2h-sc.com）。
NordNordWest、2009、「Chiang Mai Province, Thailand」（2015 年 11 月 24 日取得、http://en.m.wikipedia.org/wiki/Chiang_Mai_Province#/media/File%3AThailand_Chiang_Mai_locator_map.svg）。
Prachachat turakij newspaper online、2012、（2012 年 12 月取得、http://www.prachachat.net/news_detail.php?newsid=1401110978）。
Thaismile.jp、2015、「タイはどこ？」（2015 年 11 月 24 日取得、http://www.thaismile.jp/index1.html）。
The Chiangmai Chamber of Commerce、2011、「ททท. แนะปลดล็อกสิทธิประโยชน์ บุกตลาดลองสเตย์สู้มาเลย์（＝タイ国政府観光庁の進め：ロングステイベネフィットの解除でマレーシアと争う）」12 号 10 月、1、13 頁。
The Tourism Authority of Thailand (TAT)、「Longstay definition 」（2013 年 6 月 18 日取得、http://www2.tat.or.th/longstay/thai/）。
Tourism Authority of Thailand Newsroom、2015、「History」（2015 年 11 月 26 日取得、http://www.tatnews.org/history/）。
United Nations, Department of Economic and Social Affairs、2013、「International Migration Report 2013」（2015 年 9 月 18 日取得、http://www.un.org/en/development/desa/population/publications/migration/migration-report-2013.shtml）。

付記

本研究は、タイ・チェンマイにおける日本人長期滞在の日常生活、グループ活動、異文化社会の相互作用、中間組織の役割、タイ社会への影響に焦点を当てたものであり、2010 年から 2015 年にかけて日本側とタイ側の双方について調査研究してきた成果をまとめたものである。

グローバル化やジャパナイゼーションが進行しつつあるタイ社会においては、様々な国際的自由移動、異文化の人々と相互作用、異文化共存、社会変化が見られ、それは国家レベルを超えてきている。本論文で取り上げた日本人長期滞在はその事例の一つである。今後は、ますますテクノロジーが発展し、それと共に、国際的な人の移動が年々増加している。今や、移住者らは、自らが理想とする生活先を自由に選択できる時代が到来したのである。

しかしながら、それに伴って、不平等、文化的へのゲモニー、人の差別、人件の問題など新たな問題が生じており、これは次に目を向けるべき国際問題となってきていることも否めない。

本研究の意義は、タイ人と日本人が互いの理解度を高め、タイと日本の間に橋渡しになり、より良い関係性すなわち、両国のウィンウィン関係を構築するための一助となることである。

本論文を完成するに至るまで、筆者は、チェンマイ大学の日本語学科、タマサート大学大学院日本研究科、琉球大学大学院人文社会学研究科で学んできた。これらの大学や大学院で筆者が師事してきた先生方には、心からの尊敬と感謝の気持ちを表明したい。本論文が完成したのは、ひとえに指導教員の先生方、日本人とタイ人の協力者、家族の支援のおかげである。この場をお借りして、感謝を申し上げたい。まず、琉球大学人文社会学研究科比較地域文化専攻博士後期課程における指導教員である鈴木規之教授（国際社会学やタイ研究）にご尽力いただき、日本で国費留学生として博士課程に進学できたことを感謝したい。また、副査を務めてくださった池田榮史教授（考古学）、同副査の稲村務教授（人文学）にも感謝申し上げたい。先生方の専門知識、指導、議論は、本論文の執筆に多大なる示唆となった。また、本論文の日本語表現に関しては、琉球大学留学生センターの葦原恭子准教授を始めとして、琉球大学の非常勤かよ講師や日本人の友人に貴重な時間を割いていただいたことにも感謝したい。チェンマイの日本人長期滞在者である T ご夫婦との出会いは、チェンマイにおける日本人長期滞在者に関する研究の発端であり、様々なアドバイスをしていただいたことに感謝申し上げる。チェンマイ長期滞在の事情と長期滞在者を紹介してくださった Y 氏、日本人長期滞在者、チェンマイ在住のタイ人、組織の代表者のご協力にもお礼を申し上げたい。さらに、沖縄で出会った日本人と留学生の諸氏については、筆者と生活や活動を共に楽しく過ごしてくれたことに感謝したい。最後になるが、この 30 年間、無条件で常に精神的な支えとなってくれたタイの両親には感謝の気持ちが絶えることはない。

2016 年 3 月

スットプラータナー・ドゥアンケーオ

備考

No_____

2013SEP　; 2013SEP

アンケート調査

私は、琉球大学大学院生のスットプラータナー・ドゥアンケーオと申します。このアンケートのテーマは「タイ・チェンマイにおける日本人定年退職者の長期滞在」で、人文社会科学研究科比較地域文化専攻の博士論文のための調査です。私の連絡先は xx-xxxx-xxxx（タイ）、メールは xxxxx@hotmail.com です。指導教員は鈴木規之教授です。連絡先は、xxxxx@ll.u-ryukyu.ac.jp です。

研究の結果は統計的に処理され、学術的な目的のみに使われます。具体的には、博士論文ですが、この研究を通して日本とタイが、相互に理解しあい、よりよい関係を築きあげることに貢献できればと考えています。

Ⅰあなたご自身についてお尋ねします。（該当する番号の（　）の中に○印を付けてください）

問 1. あなたの性別は何ですか。　　1（　）男性　　2（　）女性

問 2.　2013 年現在、あなたはおいくつですか。　　満_____歳、出身地_____都道府県

問 3. のべで、チェンマイにはどれくらい滞在していますか。_____年間_____ヶ月

問 4. 現在どんなビザで長期滞在していますか。

1（　）ロングステイビザ　　2（　）年金ビザ
3（　）観光ビザ　　4（　）タイ人の配偶者のビザ
5（　）留学ビザ　　6（　）ビザ無し
7（　）その他_____ビザ

問 5. あなたには配偶者はいますか。

1（　）配偶者がいる　　2（　）離別した
3（　）死別した　　4（　）未婚

問 6. 日本に家族及び住居はありますか。

1（　）日本には家族も住居もある
2（　）日本には家族はいるが、住居がない
3（　）日本には家族はいないが、住居がある
4（　）日本には家族も住居もない

問 7. 最終学歴は何ですか。

1（　）中学校　　2（　）高校・専門学校
3（　）短期大学・大学　　4（　）大学院

問 8. タイに来る前の最後の仕事は何ですか。

1（　）公務員　　2（　）会社員
3（　）自営業　　4（　）派遣・パート・フリーランス
5（　）主婦　　6（　）その他_____

問 9. 年金の種類は何ですか。（複数回答可）

1（　）共済年金　　2（　）厚生年金
3（　）国民年金　　4（　）もらっていない

問 10. 外国語はどのくらいできますか。(○ を付けてください)

NO	外国語	とても よくできる	よくできる	まあまあ できる	少ししかでき ない	全くできない
1	英語を話す					
2	英語を読む					
3	タイ語を話す					
4	タイ語を読む					

問 11. タイに長期滞在する以前に海外に渡航した経験はありますか。

1( )ある (5カ国以下・6－10カ国・10カ国以上)(○を付けてください)

2( )ない

問 12. 現在、日本での収入源は以下のどれですか。(複数回答可)

1( )年金　　2( )利子収入

3( )自営業などからの収入　　4( )家族からの援助

5( )その他_____

問 13. 収入(一人当たり)はどのくらいですか。

1( )100,000 円以下/月　　2( )100,001 円－149,999 円/月

3( )150,000 円－199,999 円/月　　4( )200,000 円－249,999 円/月

5( )250,000 円－299,999 円/月　　6( )300,000 円以上/月

問 14. 現在チェンマイのどこに住んでいますか。

チェンマイ市内:　1( )ホイケオ通り　　2( )ニマンヘミン通り

3( )チャンクラーン通り　　4( )チャンプアック通り

5( )その他_____

チェンマイ市内以外　6( )_____郡(例:サンサイ郡、ハーンドン郡等)

問 15. どんな住宅に住んでいますか。(住んでいるコンドミニアム/マンション/アパートメントの名前を入れてください)

1( )一軒家　　2( )_____コンドミニアム

3( )_____マンション　　4( )_____アパートメント

5( )その他_____

問 16. 現地における毎月の支出(一人当たり)はいくらですか。

1( )10,000 バーツ以下/月　　2( )10,001－19,999 バーツ /月

3( )20,000－29,999 バーツ /月　　4( )30,000－39,999 バーツ /月

5( )40,000－49,999 バーツ /月　　6( )50,000 バーツ以上 /月

Ⅱあなたの長期滞在の背景についてお尋ねします。

問 17. タイに長期滞在する前に他の国に長期滞在したことがありますか。

1( )ある　国名_____

2( )ない

問 18. 現在誰と一緒に長期滞在していますか。

1(　)日本人の配偶者と一緒に長期滞在
2(　)タイ人の配偶者と一緒に長期滞在
3(　)タイ人異性の方と一緒に長期滞在
4(　)一人で長期滞在
5(　)その他_____

問 19. 定年後チェンマイに長期滞在することに決めた日本側の理由は何ですか。(複数回答可)

1(　)日本は物価が高い　　2(　)日本には家族がいない
3(　)寂しい　　4(　)日本は寒すぎる
5(　)健康のため　　6(　)日本は医療費・介護費が高い
7(　)日本のわずらわしさから逃れたい　　8(　)年金が少ない
9(　)他の文化に興味がある　　10(　)その他_____

問 20. チェンマイに長期滞在を決めたのはどんなきっかけですか。(複数回答可)

1(　)チェンマイに旅行して
2(　)テレビ、本、パンフレット
3(　)友達から誘われた
4(　)インターネット
5(　)旅行会社・航空会社のキャンペーン
6(　)ロングステイについて支援している日本にある組織からの情報
7(　)ロングステイについて支援しているタイ・チェンマイにある組織からの情報
8(　)その他_____

問 21. タイ・チェンマイに長期滞在している理由は何ですか。以下の選択肢の中から重要な順に 5 つまであげてください。

1(　)　　2(　)　　3(　)　　4(　)　　5(　)

1 物価が安い　　2 気候がいい
3 料理が美味しい　　4 住まいの環境が良い
5 海外に長期滞在してみたい　　6 医療設備・技術
7 スポーツ・レジャー施設が充実している　　8 スパ・マッサージが充実している
9 カラオケ・居酒屋が充実している　　10 夜遊びする施設が充実している
11 家族や配偶者の希望　　12 日本から近くて便利
13 日本の情報や製品が得やすい　　14 現地の人と付き合いたい
15 タイ・チェンマイの文化に興味がある　　16 タイ人がフレンドリーである
17 日本語で生活できる　　18 その他_____

Ⅲ長期滞在するためあなたの適応についてお尋ねします。

問 22. あなたはこれからどのくらいチェンマイに長期滞在するつもりですか。

1(　)_____年間　　2(　)生涯
3(　)健康状態による　　4(　)経済状態による
5(　)まだ決めていない

問 23. チェンマイに来て、カルチャーショックがありますか。ある場合は下の欄に項目別に簡単に記入ください。

問 24. あなたは日本とチェンマイのどちらの生活に満足していますか。

1(　)日本の方に満足している　　2(　)チェンマイの方に満足している

3(　)両方とも同じくらい　　4(　)両方とも不満

問 25. タイ・チェンマイにスムーズに長期滞在するため、あなたは適応のためにどんな工夫をしていますか。以下の項目に○ を付けてください。

NO	項目	適応の度合い			
		よくする	ときどきする	あまりしない	全くしない
コミュニケーション面					
1	タイ・チェンマイの事情が載っているフリーペーパー、インターネットを読む				
2	日本人のグループに入って情報を得る				
3	タイ人と話すため英語を勉強する				
4	タイ人と話すためタイ語を勉強する				
5	タイ語の番組を見る				
6	タイ・チェンマイの事情をメールやブログ自分でも発信する				
社会面					
7	タイ人の友達を作る				
8	タイと日本との交流イベントに参加する				
9	タイ語が話せる日本人がいるグループに参加する				
10	タイ人がいるグループに参加する				
11	タイ人の生活の仕方をマネする				
12	タイで自動車やオートバイの運転をする				
文化面					
13	タイ式の挨拶をする				
14	家でタイ料理を作る、食べる				
15	タイの服装をする				
16	タイのスポーツをする				
17	スプーンとフォークまたは直接、手でタイ料理を食べる				
18	タイ人の性格と考え方を理解する				

問 26. 現地に適応できない場合はなぜだと思いますか。(複数回答可)

1(　)気候の差　　2(　)言葉の障壁
3(　)生活するための情報が足りない　　4(　)タイの法律が分からない
5(　)実際に暮らしてみたら予想と違った　6(　)タイと日本の文化が違いすぎる
7(　)タイ人との交流の仕方が分からない　8(　)友達ができない
9(　)健康の問題　　10(　)その他_____

問 27. あなたは困ったときに誰に頼りますか。

1(　)日本人の友達　　2(　)タイ人の友達
3(　)配偶者　　4(　)自分で解決する
5(　)日本総領事　　6(　)その他_____

問 28. はじめてチェンマイに長期滞在したとき、日本人のグループに参加しましたか。

1(　)参加した。そして今も参加している
2(　)参加したが、今はもう参加していない
3(　)参加しなかったが、後で参加した
4(　)参加しなかった。そして今も参加していない
5(　)日本人のグループがあることを知らなかった

問 29. 現在あなたは日本人のグループに参加していますか。

1(　)はい　はいの場合は**Ⅲ-1(問 30－問 32)**を回答してください
2(　)いいえ　いいえの場合は**Ⅲ-2(問 33)**を回答してください

Ⅲ-1　日本人のグループに参加していると答えた方にお尋ねます。

問 30. 日本人のグループに参加している理由は何ですか。(複数回答可)

1(　)さびしいから
2(　)友達を作りたいから
3(　)現地の情報を手に入れたいから
4(　)生きがいを求めて
5(　)困ったときに手伝ってほしいから
6(　)誘われたから
7(　)一緒に活動・レジャーをしたいから
8(　)現地の人と交流できるから
9(　)グループに参加すると割引などの特典があるから
10(　)グループのために貢献したいから
11(　)何かのグループに参加しないと不安だから
12(　)その他_____

問 31. いくつの日本人のグループに参加していますか。_____グループ
参加している重要な3つのグループのそれぞれについて、以下の表にお答えください。

No	グループ名	1年間の参加回数	タイ人のメンバー有無	立場
1		回	有・無	1運営に関わる 2活動に参加しないメンバー 3活動に参加するメンバー 4その他_____
2		回	有・無	1運営に関わる 2活動に参加しないメンバー 3活動に参加するメンバー 4その他_____
3		回	有・無	1運営に関わる 2活動に参加しないメンバー 3活動に参加するメンバー 4その他_____

問 32. 日本人のグループに参加してから、タイ人との交流のチャンスは増えていますか。
1(　)はい　　2(　)いいえ

Ⅲ-2 日本人のグループに参加していないと答えた方にお尋ねします。

問 33. 日本人のグループに参加していない理由は何ですか。(複数回答可)
1(　)自力でやりたいから　　2(　)知らない、または誘われたことがないから
3(　)経済面で余裕がないから　　4(　)日本人のグループに参加したくない から
5(　)会費がもったいないから　　6(　)タイ人のグループに参加しているから
7(　)タイ人の友達がいるから　　8(　)プライベートでの日本人の仲間がいるから
9(　)健康に問題があるから　　10(　)活動が大変だった・大変そうだから
11(　)その他_____

問 34 からは皆様にお尋ねします。

Ⅳ あなたの現地の人との交流についてお尋ねします。

問 34. 長期滞在してから、あなた自身はタイ人と交流することができましたか。
1(　)よくできた　　2(　)まあまあできた
3(　)あまりできなかった　　4(　)全くできていない

問 35.　あなたは現地の人とどのくらい交流していますか。(○　を付けてください)

NO	項目	よくする	ときどきする	あまりしない	全くしない
コミュニケーション面					
1	タイ人と日本語で話す				
2	タイ人と英語で話す				
3	タイ人とタイ語で話す				
4	タイ人と交流したいので英語を勉強する				
5	タイ人と交流したいのでタイ語を勉強する				
6	タイ人に日本語を紹介したり教えたりする				
社会面					
7	タイ人がたくさんいるお店に行く				
8	タイ人がたくさんいる住宅に住む				
9	困ったときにタイ人に手助けを頼む				
10	タイ人に手伝ってもらったことがある				
11	タイ人とトラブルになったことがある				
12	タイ人のためにボランティアの活動をする				
文化面					
13	タイ人と食事する				
14	タイ人の家に行く				
15	タイ人の知り合いの家族と会う				
16	タイ人とスポーツをする				
17	タイ人にタイ料理、踊りなどタイの文化を習う				
18	タイ人に茶道、生け花、剣道など日本の文化を紹介したり教えたりする				

問 36.　今まであなたの知り合いで、かつてチェンマイに長期滞在していて、その後チェンマイを離れた人はいますか。人数と理由を教えてください。

1(　)いる、_____人　　理由_____
理由_____
理由_____

2(　)いない

問 37.　今まで、タイ人の行為やふるまいで理解できなかったことはありますか。ある場合は下の欄に項目別に簡単にご記入ください。

問 38. タイ人ともっと交流したいのに、なかなかうまくできない場合があります。それはなぜだと思いますか。(複数回答可)

1(　)言葉の問題があるから　　2(　)日本人の友達がいるから
3(　)タイ人は日本語が話せないから　　4(　)興味がないから
5(　)一人または夫婦で過ごしたいから　　6(　)タイ人は信頼できないから
7(　)お金がかかりすぎるから　　8(　)健康に問題があるから
9(　)その他_____

問 39. タイ人とうまく交流できる場合、それはなぜだと思いますか。(複数回答可)

1(　)タイ語が話せるから　　2(　)英語が話せるから
3(　)タイ人が日本語を話せるから　　4(　)夜遊びで知り合ったから
5(　)タイ人がたくさんいるところに行くから　　6(　)健康に問題がないから
7(　)日本人のグループに参加するから　　8(　)経済的に余裕があるから
9(　)タイ人とのグループに参加するから　　10(　)タイ人が日本人によくしてくれるから
11(　)その他_____

問 40. タイ人に問題を起こされたことがありますか。ある場合は下の欄に項目別に簡単にご記入ください。

問 41. タイ人に何か手伝ってもらったことがありますか。ある場合は下の欄に項目別に簡単にご記入ください。

Ⅳ 現地の設備・環境と満足度についてお尋ねします

問 42. 日本人の長期滞在者にとって、タイ・チェンマイにおいて設備・環境がよく整備されているところはありますか。ある場合は下の欄に項目別に簡単にご記入ください。

問 43.　日本人の長期滞在者にとって、タイ・チェンマイにおいて設備・環境がまだ整備されていないところはありますか。ある場合は下の欄に項目別に簡単にご記入ください。

問 44.　以下の項目でタイと日本のどちらのほうが満足ですか。（○ を付けてください）

NO	項目	タイの方	どちらも言えない	日本の方
生活面				
1	住宅			
2	気候			
3	食事			
4	交通			
設備面				
5	病院・医療			
6	余暇の活動やスポーツ			
7	観光地			
8	公共的設備			
社会面				
9	コミュニケーション			
10	自由さ			
11	人柄			
12	友達			
環境面				
13	衛生面			
14	学習の環境			
15	治安			
16	生涯住みたい所			

問 45.　タイ・チェンマイに長期滞在をするにあたって、改善してほしいことは何ですか。（複数回答可）

1（　）日本語のサービス　　2（　）3－4月のスモッグの問題
3（　）チェンマイ市内の渋滞問題　　4（　）歩道や信号機
5（　）街の環境　　6（　）ビザの関係の問題
7（　）タイ人との交流の機会を増やしてほしい　　8（　）ごみの問題
9（　）治安の問題　　10（　）医療の問題
11（　）介護の問題　　12（　）その他＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

ご協力、ありがとうございました。

No_____

2013SEP ; 2013SEP

แบบสอบถาม

ดิฉัน นางสาวสุดปรารถนา ดวงแก้ว นักศึกษาปริญญาเอก บัณฑิตวิทยาลัย สาขามนุษยศาสตร์และสังคมศาสตร์ มหาวิทยาลัยริวกิว ประเทศญี่ปุ่น เบอร์โทรติดต่อ 08-3473-3550 เมล xxxxx@hotmail.com โดยมีศาสตราจารย์ ดร.ซูซูกิ โนริยูกิ เป็นอาจารย์ที่ปรึกษา และประธานกรรมการสอบวิทยานิพนธ์ เมล xxxxx@ll.u-ryukyu.ac.jp

แบบสอบถามครั้งนี้ศึกษาเรื่องการพำนักระยะยาวของคนญี่ปุ่นวัยหลังเกษียณอายุการทำงานในจังหวัดเชียงใหม่ โดยมีวัตถุประสงค์เพื่อการศึกษาและงานวิจัยระดับดุษฎีบัณฑิต

ข้อมูลที่ได้จากแบบสอบถามฉบับนี้ใช้สำหรับงานวิทยานิพนธ์ทางวิชาการเท่านั้น

นอกจากนี้ยังมีจุดประสงค์ที่จะสร้างความเข้าใจและความสัมพันธ์ระหว่างไทยกับญี่ปุ่นให้ยั่งยืน

กรุณาใส่เครื่องหมาย / ลงในวงเล็บข้อคำตอบของท่าน

ส่วนที่ 1 คำถามเกี่ยวกับประวัติส่วนตัว

ข้อ 1. เพศ 1( ) ชาย 2( ) หญิง 3( ) อื่น ๆ

ข้อ 2. ปัจจุบัน (ตามปีพ.ศ.2556) ท่านอายุเท่าไหร่ อายุ.....ปี

ข้อ 3. บ้านเกิดของท่านอยู่ที่จังหวัดอะไร จังหวัด.....

ข้อ 4. ตามทะเบียนบ้าน ท่านพักอยู่ที่ใด อำเภอ.....จังหวัด.....

ข้อ 5. ปัจจุบันพักอยู่ที่ (ถนน/อาคาร/หมู่บ้าน).....อำเภอ.....

ข้อ 6. ระยะเวลาในการอาศัยอยู่ที่เชียงใหม่ รวม.....ปี

ข้อ 7. ระดับการศึกษาสูงสุดของท่าน คือระดับใด

1( ) ต่ำกว่า หรือเทียบเท่าประถมศึกษา 2( ) มัธยมศึกษาตอนต้น

3( ) ปวช. หรือมัธยมศึกษาตอนปลาย 4( ) ปวส. หรืออนุปริญญา

5( ) ปริญญาตรี 6( ) ปริญญาโท และปริญญาเอก

ข้อ 8. อาชีพปัจจุบันของท่านคืออะไร

1( ) แม่บ้าน หรือพ่อบ้าน 2( ) นักศึกษา

3( ) ข้าราชการ และรัฐวิสาหกิจ 4( ) พนักงานบริษัทเอกชน

5( ) ประกอบอาชีพส่วนตัว 6( ) พนักงานแบบไม่ประจำ และฟรีแลนด์

ข้อ 9. ท่านได้รับรายได้ (ก่อนหักภาษีรายได้) แต่ละเดือน ๆ ละเท่าไหร่

1( ) ต่ำกว่า 5,000 บาทต่อเดือน 2( ) 5,000 – 9,999 บาทต่อเดือน

3( ) 10,000 – 14,999 บาทต่อเดือน 4( ) 15,000 – 19,999 บาทต่อเดือน

5( ) 20,000 – 24,999 บาทต่อเดือน 6( ) 25,000 – 29,999 บาทต่อเดือน

7( ) 30,000 – 34,999 บาทต่อเดือน 8( ) มากกว่า 35,000 บาทต่อเดือน

ข้อ 10. ความสามารถทางภาษาของท่านอยู่ในระดับใด (กรุณา / ลงในตารางข้างล่างต่อไปนี้)

ความสามารถทางภาษา	ดีมาก	ดี	พอใช้	แย่	แย่มาก
การพูดภาษาอังกฤษ					

การพูดภาษาญี่ปุ่น					

ส่วนที่ 2 การรับรู้ และการบริโภควัฒนธรรมญี่ปุ่น

ข้อ 11. คุณรู้จักและได้สัมผัสกับความเป็นญี่ปุ่น หรือวัฒนธรรมญี่ปุ่นตั้งแต่เมื่อไหร่

1( ) ตั้งแต่อายุน้อยกว่า 10 ปี 2( ) ช่วงระหว่างอายุ 10 – 19 ปี

3( ) ช่วงระหว่างอายุ 20 – 29 ปี 4( ) ช่วงระหว่างอายุ 30 – 39 ปี

5( ) ช่วงระหว่างอายุ 40 – 49 ปี 6( ) ช่วงระหว่างอายุ 50 – 59 ปี

7 ( ) อายุมากกว่า 60 ปีขึ้นไป 8( ) ไม่เคย

ข้อ 12. คุณชอบอะไรเกี่ยวกับญี่ปุ่นบ้าง (ตอบได้มากกว่า 1 คำตอบ)

1( ) หนังสือการ์ตูนญี่ปุ่น และหนังการ์ตูนญี่ปุ่น 2( ) อาหารญี่ปุ่น และขนมญี่ปุ่น

3( ) สินค้าญี่ปุ่น เช่น เครื่องใช้ไฟฟ้า เครื่องสำอางค์ 4( ) นักร้อง ดาราญี่ปุ่น แฟชั่นญี่ปุ่น

5( ) หนัง และซีรี่ย์ญี่ปุ่น 6( ) หนังสือภาษาและวัฒนธรรมญี่ปุ่น

7( ) รายการโทรทัศน์เกี่ยวกับญี่ปุ่น 8( ) วัฒนธรรมดั้งเดิม เช่น ชงชา เขียนพู่กัน

9( ) สถาปัตยกรรมและงานศิลปะแบบญี่ปุ่น 10( ) หนังสือท่องเที่ยวและท่องเที่ยวญี่ปุ่น

11( ) นักกีฬา และกีฬา เช่น เบสบอล ยูโด 12( ) อื่น ๆ ระบุ.....

ข้อ 13. คุณบริโภคสินค้า และบริการที่เกี่ยวข้องกับญี่ปุ่นอะไรบ้าง (ตอบได้มากกว่า 1 คำตอบ)

1( ) หนังสือการ์ตูนญี่ปุ่น และหนังการ์ตูนญี่ปุ่น 2( ) อาหารญี่ปุ่น และขนมญี่ปุ่น

3( ) สินค้าญี่ปุ่น เช่น เครื่องใช้ไฟฟ้า เครื่องสำอางค์ 4( ) นักร้อง ดาราญี่ปุ่น แฟชั่นญี่ปุ่น

5( ) หนัง และซีรี่ย์ญี่ปุ่น 6( ) หนังสือภาษาและวัฒนธรรมญี่ปุ่น

7( ) รายการโทรทัศน์เกี่ยวกับญี่ปุ่น 8( ) วัฒนธรรมดั้งเดิม เช่น ชงชา เขียนพู่กัน

9( ) สถาปัตยกรรมและงานศิลปะแบบญี่ปุ่น 10( ) หนังสือท่องเที่ยวและท่องเที่ยวญี่ปุ่น

11( ) นักกีฬา และกีฬา เช่น เบสบอล ยูโด 12( ) อื่น ๆ ระบุ.....

ข้อ 14. คุณใช้จ่ายในการบริโภคสินค้า และบริการที่เกี่ยวข้องกับญี่ปุ่น เฉลี่ยต่อเดือน ๆ ละเท่าไหร่

1( ) ต่ำกว่า 1,000 บาทต่อเดือน 2( ) 1,000 – 1,999 บาทต่อเดือน

3( ) 2,000 – 2,999 บาทต่อเดือน 4( ) 3,000 – 3,999 บาทต่อเดือน

5( ) 4,000 – 4,999 บาทต่อเดือน 6( ) มากกว่า 5,000 บาทต่อเดือน

ข้อ 15. คุณเคยเดินทางไปญี่ปุ่นหรือไม่

1( ) เคย .....ครั้ง 2( ) ไม่เคย

ข้อ 16. คุณคิดว่าคนญี่ปุ่นเป็นคนอย่างไรเมื่อเทียบกับคนไทย ดังตัวเลือกข้างล่าง (ตอบได้มากกว่า 1 คำตอบ)

1( ) มีฐานะทางเศรษฐกิจดีกว่า 2( ) มีชีวิตความเป็นอยู่ที่ดีกว่า

3( ) สุภาพ 4( ) เข้มงวด

5( ) ชอบเรียนรู้ 6( ) อื่น ๆ ระบุ.....

ข้อ 17. คุณมีความคิดต่อญี่ปุ่นและคนญี่ปุ่นอย่างไร (กรุณา / ลงในตารางข้างล่างต่อไปนี้)

No	หัวข้อ	เห็นด้วยอย่างยิ่ง	เห็นด้วย	ไม่ค่อยเห็นด้วย	ไม่เห็นด้วย
การติดต่อสื่อสาร					
1	คุณชอบภาษาญี่ปุ่น				
2	คุณอยากคุยกับคนญี่ปุ่นด้วยภาษาญี่ปุ่น				
3	คุณต้องการเพื่อนหรือคนรู้จักเป็นคนญี่ปุ่น				
การบริโภค					
4	คุณชอบสินค้าmade in Japan				
5	คุณชอบบริโภคอาหารญี่ปุ่น				
6	คุณชอบการ์ตูนหรืออนิเมชั่นญี่ปุ่น				
7	คุณชอบนักร้องหรือดาราญี่ปุ่น				
8	คุณอยากเที่ยวญี่ปุ่น หรืออยากไปเที่ยวอีก				
9	คุณชอบญี่ปุ่นตามคนรู้จักหรือเพื่อน				
ด้านสังคม และวัฒนธรรม					
10	คุณชอบสังคมและวัฒนธรรมญี่ปุ่น				
11	คุณอยากเรียนรู้สังคมและวัฒนธรรมญี่ปุ่น				
12	คุณสนใจทำกิจกรรมร่วมกับคนญี่ปุ่น				
13	คุณเต็มใจที่จะช่วยเหลือเพื่อนหรือคนรู้จักคนญี่ปุ่น				
14	คุณสนใจเข้ากลุ่มคนญี่ปุ่นในเชียงใหม่				
ด้านทัศนคติ					
15	คุณชอบคนญี่ปุ่น				
16	คุณคิดว่าคนญี่ปุ่นวัยหลังเกษียณมีฐานะดี				
17	คุณมีส่วนได้ประโยชน์จากคนญี่ปุ่นวัยหลังเกษียณ				
18	คุณอยากให้มีคนญี่ปุ่นวัยหลังเกษียณมาอยู่ที่เชียงใหม่เพิ่มขึ้น				
19	คุณคิดว่าคนญี่ปุ่นวัยเกษียณไม่สร้างความวุ่นวายให้กับสังคมไทย				
20	คุณคิดว่าคนญี่ปุ่นวัยเกษียณมาอยู่เชียงใหม่ส่งผลกระทบด้านดีต่อเชียงใหม่				

ส่วนที่ 3 คำถามเกี่ยวกับการติดต่อสัมพันธ์กับชาวต่างประเทศ โดยเฉพาะคนญี่ปุ่นวัยหลังเกษียณ

ข้อ 18. ในชีวิตการทำงาน หรือชีวิตประจำวันของท่านมีส่วนเกี่ยวข้องกับคนต่างประเทศ (นอกจากคนญี่ปุ่น) หรือไม่

1( ) มี ได้แก่ คนประเทศ (หลัก ๆ 3 ประเทศ).....

2( ) ไม่มี

ข้อ 19. ในชีวิตการทำงาน หรือชีวิตประจำวันของท่านมีส่วนเกี่ยวข้องกับคนญี่ปุ่นหรือไม่

1( ) มี (คนญี่ปุ่นวัยเรียน / คนญี่ปุ่นวัยทำงาน / คนญี่ปุ่นวัยหลังเกษียณ) (กรุณาวงเลือกคำตอบ)

2( ) ไม่มี

ข้อ 20. คุณมีเพื่อนคนญี่ปุ่นวัยหลังเกษียณกี่คน

1( ) 1-3 คน 2( ) 4-6 คน

3( ) มากกว่า 7 คน 4( ) ไม่มี

ข้อ 21. คุณคิดว่าข้อแตกต่างระหว่างผู้สูงอายุคนไทยกับผู้สูงอายุคนญี่ปุ่นมีอะไรบ้าง
ยกเว้นความแตกต่างทางภาษาและวัฒนธรรม (ตอบได้มากกว่า 1 คำตอบ)

1( ) ฐานะทางเศรษฐกิจ 2( ) ลักษณะที่อยู่อาศัย

3( ) ประเภทอาหารการกิน 4( ) งานอดิเรก หรือกิจกรรมยามว่าง

5( ) การท่องเที่ยว 6( ) กีฬา

7( ) สถานที่ผ่อนคลายความทุกข์ 8( ) บุคลิกและท่าทาง

9( ) การแต่งกาย 10( ) สุขภาพร่างกาย

11( ) การแพทย์และการดูแล 12( ) ไม่แตกต่างกัน

12( ) อื่น ๆ ระบุ.....

ข้อ 22. ปัจจุบันคุณเข้าร่วมกิจกรรมขององค์กร ชมรม หรือกลุ่ม เช่น องค์กรหอการค้าจังหวัดเชียยงใหม่ ชมรมจัดดอกไม้ กลุ่มรักนิมมานทร์ หรือไม่ ถ้ามีกรุณาระบุกลุ่มที่สำคัญ 3 กลุ่ม ลงในกรอบข้างล่างต่อไปนี้

No	ชื่อกลุ่ม	จำนวนที่เข้าร่วมต่อปี	มีสมาชิกคนญี่ปุ่นหรือไม่	ตำแหน่งในกลุ่ม
1		ครั้ง	มี • ไม่มี	1คณะกรรมการบริหาร 2สมาชิกที่เข้าร่วมทำกิจกรรมประจำ 3สมาชิกที่ไม่เข้าร่วมทำกิจกรรม 4อื่น ๆ ระบุ_____
2		ครั้ง	มี • ไม่มี	1คณะกรรมการบริหาร 2สมาชิกที่เข้าร่วมทำกิจกรรมประจำ 3สมาชิกที่ไม่เข้าร่วมทำกิจกรรม 4อื่น ๆ ระบุ_____
3		ครั้ง	มี • ไม่มี	1คณะกรรมการบริหาร 2สมาชิกที่เข้าร่วมทำกิจกรรมประจำ 3สมาชิกที่ไม่เข้าร่วมทำกิจกรรม 4อื่น ๆ ระบุ_____

ข้อ 23. คุณเคยทำกิจกรรมร่วมกับคนญี่ปุ่นวัยหลังเกษียณหรือไม่ ถ้ามีกรุณาระบุ 5 กิจกรรมหลัก

1( ) เคย ได้แก่ 1) กิจกรรม.....

2) กิจกรรม.....

3) กิจกรรม.....

4) กิจกรรม.....

5) กิจกรรม.....

2( ) ไม่เคย

ข้อ 24. คุณสนใจที่จะแลกเปลี่ยนทางวัฒนธรรม เช่น คุณสอนวัฒนธรรมไทยให้คนญี่ปุ่น ทำกิจกรรมร่วมกับคนญี่ปุ่นหรือไม่

1( ) สนใจ 2( ) ไม่สนใจ

ข้อ 25. คุณเห็นด้วยหรือไม่ว่าคุณมีส่วนร่วมในการส่งเสริมกิจกรรมแลกเปลี่ยนทางวัฒนธรรม
หรือทำกิจกรรมร่วมกับคนญี่ปุ่นวัยหลังเกษียณ

1( ) เห็นด้วยอย่างยิ่ง 2( ) เห็นด้วย

3( ) เฉย ๆ 4( ) ไม่ค่อยเห็นด้วย

5( ) ไม่เห็นด้วย

ข้อ 26. คุณคิดว่าอะไรดังตัวเลือกข้างล่างต่อไปนี้ จะทำให้คุณ<u>เข้าร่วม</u>กิจกรรมแลกเปลี่ยนทางวัฒนธรรม
หรือทำกิจกรรมร่วมกับคนญี่ปุ่นวัยหลังเกษียณ (ตอบได้มากกว่า 1 คำตอบ)

1( ) หัวข้อแลกเปลี่ยนหรือกิจกรรมที่มีความสนใจ 2( ) มีเวลา

3( ) มีกำลังทรัพย์ 4( ) มีประโยชน์ต่อการเรียนและการทำงาน

5( ) ได้ค่าตอบแทน 6( ) มีองค์กรเข้ามาสนับสนุนอย่างเป็นทางการ

7( ) ได้รับการชักชวนจากคนญี่ปุ่นวัยหลังเกษียณ 8( ) อื่น ๆ ระบุ.....

ข้อ 27. คุณเคยช่วยเหลือคนญี่ปุ่นวัยหลังเกษียณหรือไม่ ถ้าเคยกรุณาเขียนอธิบายลงในกรอบข้างล่างต่อไปนี้

ข้อ 28. คุณคิดว่าอะไรดังตัวเลือกข้างล่างต่อไปนี้ เป็นสาเหตุที่ทำให้คุณ**<u>ไม่เข้าร่วม</u>**กิจกรรมแลกเปลี่ยนทางวัฒนธรรม
หรือทำกิจกรรมร่วมกับคนญี่ปุ่นวัยหลังเกษียณ (ตอบได้มากกว่า 1 คำตอบ)

1( ) อายุแตกต่างกันมากเกินไป 2( ) ไม่ชอบผู้สูงอายุ

3( ) กิจกรรมไม่น่าสนใจ 4( ) ไม่มีเวลา

5( ) มีค่าใช้จ่ายเยอะเกินไป 6( ) มีปัญหาทางภาษา

7( ) มีประสบการณ์ไม่ดีกับคนญี่ปุ่นมาก่อน 8( ) ไม่ทราบว่ามีกิจกรรมแลกเปลี่ยน

ส่วนที่ 4 การส่งเสริมคนญี่ปุ่นวัยหลังเกษียณมาพำนักระยะยาวที่ไทย จังหวัดเชียงใหม่

ข้อ 29. คุณคิดว่าใคร ควรเป็นผู้ส่งเสริมกิจกรรมแลกเปลี่ยนทางวัฒนธรรม
หรือทำกิจกรรมร่วมกับคนญี่ปุ่นวัยหลังเกษียณมากที่สุดเพียง 1 ข้อ

1( ) ภาครัฐ 2( ) ภาคธุรกิจเอกชน

3( ) องค์กรไม่แสวงหากำไร (NPO) 4( ) องค์กรเอกชน (NGO)

5( ) ชาวเชียงใหม่ 6( ) อื่น ๆ ระบุ.....

ข้อ 30. คุณคิดว่าอะไรดังตัวเลือกข้างล่างต่อไปนี้
เป็นเหตุผลที่**ควร**ส่งเสริมให้มีคนญี่ปุ่นวัยหลังเกษียณมาพำนักระยะยาวในเชียงใหม่เพิ่มขึ้น
กรุณาเรียงลำดับ 1-3 โดยให้ลำดับ 1 เป็นเหตุผลสำคัญที่สุด โดยเขียนตัวเลขลงใน ( )

1( ) 2( ) 3( )

1ได้ผลประโยชน์ทางเศรษฐกิจ 2เรียนรู้และแลกเปลี่ยนภาษาญี่ปุ่น-ไทย

3เรียนรู้และแลกเปลี่ยนวัฒนธรรม 4ระบบสาธารณูปโภคยกระดับมาตรฐานสูงขึ้น

5 ระบบการคมนาคมยกระดับมาตรฐานสูงขึ้น 6 เชียงใหม่มีความหลากหลายทางวัฒนธรรมมากขึ้น

7คนญี่ปุ่นไม่สร้างปัญหาให้กับสังคมไทย 8 อื่น ๆ ระบุ.....

ข้อ 31. คุณคิดว่าอะไรดังตัวเลือกข้างล่างต่อไปนี้
เป็นเหตุผลที่**ไม่ควร**ส่งเสริมให้มีคนญี่ปุ่นวัยหลังเกษียณมาพำนักระยะยาวในเชียงใหม่เพิ่มขึ้น
กรุณาเรียงลำดับ 1-3 โดยให้ลำดับ 1 เป็นเหตุผลสำคัญที่สุด โดยเขียนตัวเลขลงใน ( )

1( ) 2( ) 3( )

1ไม่ได้ผลประโยชน์ทางเศรษฐกิจ 2ทำให้ค่าครองชีพของเชียงใหม่สูงขึ้น

3สร้างปัญหาสิ่งแวดล้อม 4ไม่ควรเน้นส่งเสริมเฉพาะคนญี่ปุ่นวัยหลังเกษียณ

5 ปัญหาการล่อลวงผู้หญิง และยาเสพติด 6 เชียงใหม่ยังไม่มีศักยภาพเพียงพอ

7เป็นภาระให้กับสังคมไทยมากขึ้น 8 อื่น ๆ ระบุ.....

ขอขอบคุณท่านที่สละเวลาตอบแบบสอบถาม

No_____

2013SEP　; 2013SEP

アンケート調査

私は、琉球大学大学院生のスットプラータナー・ドゥアンケーオと申します。このアンケートのテーマは「タイ・チェンマイにおける日本人長期滞在の実態およびそのインパクト」で、人文社会科学研究科比較地域文化専攻の博士論文のための調査です。私の連絡先は xx-xxxx-xxxx（タイ）、メールは xxxxx@hotmail.com です。指導教員は鈴木規之教授です。連絡先は、xxxxx@ll.u-ryukyu.ac.jp です。

研究の結果は統計的に処理され、学術的な目的のみに使われます。具体的には、博士論文ですが、この研究を通してタイと日本が、相互に理解しあい、よりよい関係を築きあげることに貢献できればと考えています。

回答は（　　）の中に　√　を記入してください。

Ⅰ　あなたご自身についてお尋ねします。

問 1　あなたの性別は何ですか。　1（　　）男性　2（　　）女性　3（　　）その他

問 2　2013 年現在、あなたはおいくつですか。　……歳

問 3　出身地はどこですか。　……県

問 4　住民票の住所はどこですか。　……県……市

問 5　現在の住所はどこですか。　……市……（道路／ビル／村）

問 6　のべで、チェンマイにはどれくらい滞在していますか。　……年間

問 7　最終学歴は何ですか。

1（　　）小学校以下　　2（　　）中学
3（　　）高校　・専門学校　　4（　　）短期大学
5（　　）大学　　6（　　）大学院

問 8　現在、あなたの仕事は何ですか。

1（　　）主婦　　2（　　）学生
3（　　）公務員・半官半民　　4（　　）会社員
5（　　）自営業　　6（　　）パート・フリーランス

問 9 収入（所得税が引かれる前の金額）はどのくらいですか。

1（　　）5,000 バーツ以下／月　　2（　　）5,000～9,999 バーツ／月
3（　　）10,000～14,999 バーツ／月　　4（　　）15,000～19,999 バーツ／月
5（　　）20,000～24,999 バーツ／月　　6（　　）25,000～29,999 バーツ／月
7（　　）30,000～34,999 バーツ／月　　8（　　）35,000 バーツ以上／月

問 10　外国語はどのくらいできますか。（ √ を付けてください）

外国語	とてもよくできる	よくできる	まあまあできる	少ししかできない	全くできない
英語を話す					
日本語を話す					

Ⅱ　日本文化の認識および消費について

問 11　日本の文化に触れる年代はいつですか。

1（　　）10 歳未満　　2（　　）10 歳～19 歳
3（　　）20 歳～29 歳　　4（　　）30 歳～39 歳
5（　　）40 歳～49 歳　　6（　　）50 歳～59 歳
7（　　）60 歳以上　　8（　　）無い

問 12　日本の好きなものは何ですか。（複数回答可）

1（　　）漫画・アニメ　　2（　　）和食・和菓子
3（　　）日本製品（電気製品、化粧品など）　4（　　）歌手・俳優・ファッション
5（　　）映画、ドラマ・シリーズ　　6（　　）日本語や日本文化の本
7（　　）日本についての番組　　8（　　）伝統的な文化（茶道、書道）
9（　　）日本の建築や美術　　10（　　）観光および観光の本
11（　　）スポーツ選手・日本のスポーツ　　12（　　）その他……..

問 13　どれの日本の製品の消費、サービスの利用をしていますか。（複数回答可）

1（　　）漫画・アニメ　　2（　　）和食・和菓子
3（　　）日本製品（電気製品、化粧品など）　4（　　）歌手・俳優・ファッション
5（　　）映画、ドラマ・シリーズ　　6（　　）日本語や日本文化の本
7（　　）日本についての番組　　8（　　）伝統的な文化（茶道、書道）
9（　　）日本の建築や美術　　10（　　）観光および観光の本
11（　　）スポーツ選手・日本のスポーツ　　12（　　）その他……..

問 14　日本の製品の一ヶ月あたりの消費はいくらですか。

1（　　）1,000 バーツ/月　　2（　　）1,000～1,999 バーツ/月
3（　　）2,000～2,999 バーツ/月　　4（　　）3,000～3,999 バーツ/月
5（　　）4,000～4,999 バーツ/月　　6（　　）5,000 バーツ以上/月

問 15　日本に行ったことがありますか。

1（　　）ある（……回）　　2（　　）ない

問 16　タイ人と比較して日本人はどんな人ですか。（複数回答可）

1（　　）より経済力がある　　2（　　）より良い生活
3（　　）礼儀正しい　　4（　　）厳しい
5（　　）勉強が好き　　6（　　）その他……

問 17　日本及び日本人に対しての考え方について（ √ を付けてください）

No	項目	大いに賛成する	賛成する	あまり賛成しない	賛成しない
コミュニケーション面					
1	日本語が好きだ				
2	日本人と日本語で話したい				
3	日本人の知り合い・友人がほしい				
消費面					
4	日本製品を消費することが好きだ				
5	日本料理を食べることが好きだ				
6	日本の漫画やアニメが好きだ				
7	日本人の歌手や俳優が好きだ				
8	日本に旅行したい、またはまた行きたい				
9	友人や知り合いに従って日本が好きだ				
社会・文化面					
10	日本の社会と文化が好きだ				
11	日本の社会と文化を習いたい				
12	日本人と活動したい				
13	日本人の友人またはた知り合いを喜んで手伝う				
14	チェンマイにある日本人のグループに参加したい				
認知面					
15	日本人が好きだ				
16	日本人長期滞在者は経済的に恵まれている				
17	日本人長期滞在者から利益を得ることができる				
18	もっと日本人長期滞在者の数が増えてほしい				
19	日本人長期滞在者はタイ社会に問題を起こさないと思う				
20	日本人長期滞在者がチェンマイにいい影響を与えていると思う				

Ⅲ　外国人、特に日本人長期滞在者との交流の実態

問 18　仕事関係や日常生活の中で外国人（日本人を除く）と関わっていますか。

1（　　）有り。主に（3 つの国）……
2（　　）無し

問 19　仕事関係や日常生活の中で日本人と関わっていますか。

1（　　）有り

（日本人の学生　/　日本人の社会人　/　日本人長期滞在者）（〇をつけてください）

2（　　）無し

問 20　日本人長期滞在者の友人が何人いますか。

1（　　）1〜3 人　　2（　　）4〜6 人

3（　　）7 人以上　　4（　　）無し

問 21　タイ人年長者と日本人年長者はどの項目が違いますか、言葉と文化の違いを除く。（複数回答可）

1（　　）経済面　　2（　　）住宅のスタイル

3（　　）食事の種類　　4（　　）趣味、暇な時の活動

5（　　）観光　　6（　　）スポーツ

7（　　）ストレスを解消する場所　　8（　　）姿勢や態度

9（　　）服装　　10（　　）健康

11（　　）医療や介護　　12（　　）違いが無い

13（　　）その他……

問 22　現在あなたは、組織、クラブ、グループ、例えば、チェンマイ商工会議所、生け花サークル、ラックニマングループなど、の活動に参加していますか。もしあれば、3 つの主なグループを以下の表に記入してください。

号	グループ名	年間の参加回数	日本人のメンバー	位置
1		回	有・無	1　経営委員 2　活動によく参加するメンバー 3　活動しないメンバー 4　その他……
2		回	有・無	1　経営委員 2　活動によく参加するメンバー 3　活動しないメンバー 4　その他……
3		回	有・無	1　経営委員 2　活動によく参加するメンバー 3　活動しないメンバー 4　その他……

問 23　日本人長期滞在者と一緒に活動をしたことがありますか。ある場合は 5 つ活動を記入してください。

1（　　）したことがある　　①……

②……

③.....
④.....
⑤.....

2（　）したことがない

問 24　あなたは、日本人にタイ文化を教える、日本人と活動するなどの日本人との交流をすることに対して関心がありますか。

1（　）関心がある　　2（　）関心がない

問 25　あなたは日本人と文化交流する活動に支援していること、または日本人長期滞在者と一緒に活動していることに対して賛成しますか。

1（　）大いに賛成する　　2（　）賛成する
3（　）どちらとも言えない　　4（　）あまり賛成しない
5（　）賛成しない

問 26　日本人長期滞在と一緒に活動する理由（複数回答可）

1（　）面白いテーマ及び活動だから　　2（　）時間があるから
3（　）経済力があるから　　4（　）勉強または仕事に役に立つから
5（　）手当があるから　　6（　）組織からの支援があるから
7（　）日本人長期滞在者から誘われるから　　8（　）その他.....

問 27　日本人長期滞在者を手伝ったことがありますか。もしあれば教えてください。

問 28　日本人長期滞在者と一緒に活動に参加しない理由（複数回答可）

1（　）年齢の差があるから　　2（　）お年寄りに興味がないから
3（　）面白くないテーマだから　　4（　）時間がないから
5（　）お金がかかりすぎるから　　6（　）言葉の問題があるから
7（　）日本人とよくない経験があったから
8（　）活動があることをしらなかったから

Ⅳ　タイ・チェンマイ県にある日本人長期滞在者の支援について

問 29　日本人長期滞在者との文化交流及びその活動を支援するのは誰の役割だと思いますか。

1（　）政府　　2（　）民間企業
3（　）NPO　　4（　）NGO
5（　）チェンマイの人たち　　6（　）その他.....

問 30　日本人長期滞在者にもっと支援しなければならないと考える理由
3 つの理由を選んで回答番号を記入してください。

1（　　）　　2（　　）　　3（　　）

1（　　）経済的利益
2（　　）日本語を学ぶ、及び日タイ両語で交流できる
3（　　）文化を学ぶ、及び交流できる
4（　　）インフラストラクチャーの水準が上がるから
5（　　）交通機関の水準が上がるから
6（　　）チェンマイが文化的にもっと多様になるから
7（　　）日本人はタイ社会に問題を起こさないから
8（　　）その他……

問 31　日本の長期滞在者に支援しない方がいいと考える理由
3 つの理由を選んで回答番号を記入してください。

1（　　）　　2（　　）　　3（　　）

1（　　）経済的利益がない
2（　　）チェンマイの物価が上がるから
3（　　）環境問題が増加するから
4（　　）日本人長期滞在者に限らない方がいい
5（　　）女性が売春するように誘惑される、及び麻薬の問題が増えるから
6（　　）チェンマイは世話する力が足りないから
7（　　）タイ社会に負担が増えるから
8（　　）その他……

ご協力、ありがとうございました